

御笠地区遺跡

御笠地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

第 15 集

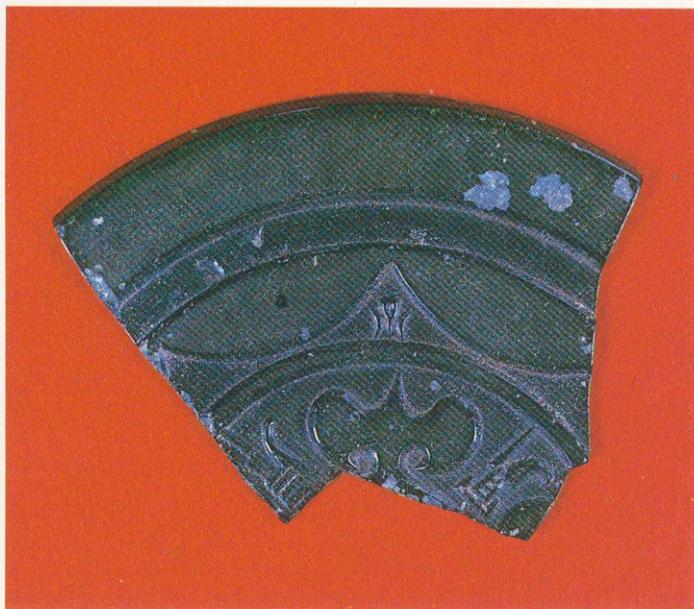
本 文 編

1986

筑紫野市教育委員会

御笠地区遺跡

御笠地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査



序

本市は福岡市の衛星都市として急速に都市化していく反面、在来からの農業が近代化し協同化し、農業基盤整備事業なども進行していくという両面の素顔を持っております。

こうした中で、今回の御笠地区の圃場整備に伴う発掘調査は8ヶ年間の長期にわたる大規模な調査となりましたが、発掘調査のモデルケースをも模索したもので、数多くの遺跡を保存することが出来たことは望外の喜びであります。

御笠地区遺跡は旧石器時代から奈良時代までの各時代にまたがるバラエティーに富んだ調査となり、この地域が古代史上重要な地域であることが立証されました。

最後になりましたが調査に際して御指導、御協力賜りました関係機関や地元の皆さん方々に衷心より御礼申し上げますと共に、今回の調査結果が郷土の文化財に対する関心を深める縁ともなれば幸甚に存ずる次第でございます。

筑紫野市教育委員会
教育長 松田康男

例 言

- 一、本書は福岡県筑紫野市大字吉木、阿志岐、牛島に広がる御笠地区遺跡の県営圃場整備に伴う発掘調査報告書である。
- 二、本事業は筑紫野市教育委員会が、国県の補助を受け実施した。
- 三、現地での調査、実測、写真撮影は「一、調査に至る経過 調査組織」のとおりである。
- 四、出土土器の実測は、浜田信也、橋口達也、奥村俊久、森山栄一、山本由紀子、長野智恵子、山崎順子が主に行なった。
- 五、製図は鶴味加代子が主に行なった。
- 六、表作成は長野智恵子、山本由紀子が主に行なった。
- 七、本書の執筆はⅢを橋口達也、Ⅳ 1～4、およびⅩのA地区分を浜田信也、Ⅴ以降の玉類を山野洋一、鉄器・旧石器を渡辺和子、石器を末永弥義が当り、そのほかを奥村俊久が行なった。
- 八、本書の編集は奥村俊久が担当した。

目 次

I	調査に至る経過	1
II	位置と環境	4
III	予備調査	7
1	はじめに	7
2	調査の内容	11
3	小結	31
IV	A地区の調査	34
1	A-I区の調査	35
2	A地区第1トレンチの調査	53
3	A地区第2トレンチの調査	54
4	A地区第3・第4トレンチの調査	56
5	A-II区の調査	56
6	A-III区の調査	57
7	A地区第5～16トレンチの調査	57
8	A地区出土の製塩土器	61
9	A地区出土の瓦	62
V	B地区の調査	63
1	調査の概要	64
2	遺構	64
3	出土遺物	64
VI	D地区の調査	98
1	調査の概要	99
2	遺構	99
3	出土遺物	104
VII	E地区の調査	113
1	調査の概要	114
2	遺構	114
3	出土遺物	121
4	旧石器時代の遺物	134
VIII	F地区の調査	139
1	調査の概要	140

2 遺構	140
3 出土遺物	143
IX G地区の調査	149
1 調査の概要	150
2 遺構	150
3 出土遺物	171
X まとめ	199
御笠地区小字集成図 解説	201

挿図目次

第1図 御笠地区遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)	5
第2図 御笠地区圃場整備事業地区内の遺跡分布図 (1/20,000)	8
第3図 5号・7号トレンチ (1/60)	12
第4図 A地区出土の土器1 (1/3)	13
第5図 A地区出土の土器2 (1/3)	14
第6図 8号・9号トレンチ (1/60)	15
第7図 21号・22号トレンチ出土土器 (1/3)	17
第8図 28号トレンチ (1/60)	18
第9図 B地区出土土器 (1/3)	18
第10図 39号・40号トレンチ (1/60)	19
第11図 42号・52号トレンチ (1/60)	20
第12図 C地区出土土器 (1/6、1/3)	21
第13図 56号・57号トレンチ (1/60)	22
第14図 58号・59号トレンチ (1/60)	23
第15図 D地区出土土器1 (1/3)	24
第16図 D地区出土土器2 (1/3)	25
第17図 D地区出土土器3 (1/3)	26
第18図 E・F地区出土土器 (1/3)	27
第19図 70号トレンチ (1/60)	28
第20図 F地区出土土器 (1/3)	29
第21図 70号トレンチ3号住居跡出土の鏡 (1/1)	30

第22図	77号トレンチ (1/60).....	32
第23図	G地区出土土器 (1/3).....	33
第24図	A-I区SX01・02実測図 (1/80).....	36
第25図	A-I区SX01出土土器実測図 (1/3).....	37
第26図	A-I区SX02出土須恵器実測図 (1/3).....	37
第27図	A-I区SX02出土土師器実測図 (1/3).....	38
第28図	A-I区SB01実測図 (1/80).....	40
第29図	A-I区SB03・04実測図 (1/80).....	42
第30図	A-I区SB05・07実測図 (1/80).....	43
第31図	A-I区SB06実測図 (1/80).....	44
第32図	A-I区SB08実測図 (1/80).....	46
第33図	A-I区SB09実測図 (1/80).....	47
第34図	A-I区SB10実測図 (1/80).....	48
第35図	A-I区掘立柱建物群柱穴出土土器実測図 (1/3).....	49
第36図	A-I区掘立柱建物群柱穴出土土器実測図 (1/3).....	50
第37図	A-I区SK01・02実測図 (1/60).....	50
第38図	A-I区4層出土土器実測図 (1/3).....	52
第39図	A地区第1トレンチ住居跡出土土器実測図 (1/3).....	54
第40図	A地区第2トレンチ3層出土土器実測図 (1/3).....	55
第41図	A地区1～7・17号トレンチ遺構配置図 (1/200).....	58
第42図	A地区8～12、14～16号トレンチ遺構配置図 (1/200).....	59
第43図	AⅢ区出土土器実測図 (1/4).....	60
第44図	A地区出土製塩土器実測図 (1/4).....	61
第45図	A地区出土の瓦実測図 (1/3).....	62
第46図	B地区SX01～03実測図 (1/80).....	66
第47図	B地区SX04～06実測図 (1/80).....	67
第48図	B地区SX07・08実測図 (1/80).....	68
第49図	B地区SX09～11実測図 (1/80)・SX10かまど実測図 (1/40).....	69
第50図	B地区SX12・13実測図 (1/80).....	70
第51図	B地区SB01～04実測図 (1/80).....	71
第52図	B地区SB05～07実測図 (1/80).....	72
第53図	B地区SB08～10実測図 (1/80).....	73
第54図	B地区SX02出土土器実測図 (1/4).....	74

第55図	B地区SX02出土土器実測図 (1/4)	75
第56図	B地区SX02出土土器実測図 (1/4)	76
第57図	B地区SX02出土土器実測図 (1/4)	77
第58図	B地区SX02出土土器実測図 (1/4)	78
第59図	B地区SX02出土土器実測図 (1/4)	79
第60図	B地区SX02出土土器実測図 (1/4)	80
第61図	B地区SX02出土土器実測図 (1/4)	81
第62図	B地区SX02出土土器実測図 (1/4)	82
第63図	B地区SX02出土土器実測図 (1/4)	83
第64図	B地区SX03～06出土土器実測図 (1/4)	84
第65図	B地区SX07出土土器実測図 (1/4)	85
第66図	B地区SX08・09出土土器実測図 (1/4)	86
第67図	B地区SX10出土土器実測図 (1/4)	87
第68図	B地区SX13出土土器実測図 (1/4)	88
第69図	B地区その他の遺構等出土土器実測図 (1/4)	89
第70図	D地区SX03・05実測図 (1/80)	100
第71図	D地区SX07・08実測図 (1/80)	101
第72図	D地区SX14・15実測図 (1/80)	102
第73図	D地区SX19実測図 (1/80)	103
第74図	D地区SX01・03・05～07出土土器実測図 (1/4)	104
第75図	D地区SX07・08・14～16・18出土土器実測図 (1/4)	105
第76図	D地区SX19・23出土土器実測図 (1/4)	106
第77図	D地区SX23、SB03、SD03・05・10、SM01出土土器実測図 (1/4)	107
第78図	D地区出土土製品実測図 (1/2)	112
第79図	D地区出土玉類実測図 (実大)	112
第80図	E地区SX01～03実測図 (1/80)	115
第81図	E地区SX06・08実測図 (1/80)	116
第82図	E地区SX13・14実測図 (1/80)	117
第83図	E地区SX20～22実測図 (1/80)	118
第84図	E地区SX25・27実測図 (1/80)	119
第85図	E地区SX01・02出土土器実測図 (1/4)	121
第86図	E地区SX06・08出土土器実測図 (1/4)	122
第87図	E地区SX15・18・20出土土器実測図 (1/4)	123

第88図	E地区SX21～23・27・28・33出土土器実測図(1/4)……………	124
第89図	E地区ⅡSD01・ⅠSD01～03出土土器実測図(1/4)……………	125
第90図	E地区SM・SH・ピット出土土器実測図(1/4)……………	126
第91図	E地区出土玉類実測図(1/1)……………	130
第92図	E地区出土鉄器実測図(2/3)……………	132
第93図	E地区出土石器実測図(1/3・1/2)……………	133
第94図	E地区グリッド設定位置図……………	折り込み
第95図	E地区旧石器・石片出土分布図……………	折り込み
第96図	グリッド遺物分布図(1/30)……………	135
第97図	グリッド遺物分布図(1/30)……………	136
第98図	グリッド遺物分布図(1/30)……………	137
第99図	E地区出土旧石器時代遺物実測図(1/1)……………	138
第100図	F地区SX02・04・06・07実測図(1/80)……………	141
第101図	F地区SX11・12実測図(1/80)……………	142
第102図	F地区Ⅱ-SM01出土土器実測図(1/4)……………	143
第103図	F地区SX02・04・12出土土器実測図(1/4)……………	144
第104図	F地区SM・ピット・表土出土土器実測図(1/4)……………	145
第105図	F地区出土鉄器実測図(2/3)……………	147
第106図	F地区出土石器実測図(2/3)……………	148
第107図	G地区SX01・03実測図(1/80)……………	151
第108図	G地区SX08・09実測図(1/80)……………	152
第109図	G地区SX11・16実測図(1/80)……………	153
第110図	G地区SX13・32実測図(1/80)……………	154
第111図	G地区SX20・23・25実測図(1/80)……………	155
第112図	G地区SX26・27実測図(1/80)……………	156
第113図	G地区SX28・30実測図(1/80)……………	157
第114図	G地区SX31・35実測図(1/80)……………	158
第115図	G地区SX36・39実測図(1/80)……………	159
第116図	G地区SX41・43実測図(1/80)……………	160
第117図	G地区SX44～46実測図(1/80)……………	161
第118図	G地区SX47・48実測図(1/80)……………	162
第119図	G地区SX49・50実測図(1/80)……………	163
第120図	G地区SX51・53実測図(1/80)……………	164

第121図	G地区SX54・60実測図 (1/80)	165
第122図	G地区SX61・62実測図 (1/80)	166
第123図	G地区SX71~73実測図 (1/80)	167
第124図	G地区SE01実測図 (1/30)	170
第125図	G地区SX01・03・05・06・09・12・13出土土器実測図 (1/4)	171
第126図	G地区SX17・19~23・25出土土器実測図 (1/4)	172
第127図	G地区SX26・30・34出土土器実測図 (1/4)	173
第128図	G地区SX35出土土器実測図 (1/4)	174
第129図	G地区SX35出土土器実測図 (1/4)	175
第130図	G地区SX35出土土器実測図 (1/4)	176
第131図	G地区SX35出土土器実測図 (1/4)	177
第132図	G地区SX35出土土器実測図 (1/4)	178
第133図	G地区SX35出土土器実測図 (1/4)	179
第134図	G地区SX35出土土器実測図 (1/4)	180
第135図	G地区SX35出土土器実測図 (1/4)	181
第136図	G地区SX36・38~41・44・45出土土器実測図 (1/4)	182
第137図	G地区SX46~50出土土器実測図 (1/4)	183
第138図	G地区SX51・52・54・73・ピット出土土器実測図 (1/4)	184
第139図	G地区SM・SE・表土出土土器実測図	185
第140図	G地区出土紡製鏡実測図 (2/3)	193
第141図	G地区出土玉類実測図 (1/1)	194
第142図	G地区出土石器実測図 (1/3, 1/2)	198
第143図	G地区出土土製品実測図 (1/2)	199
第144図	G地区出土鉄器実測図 (1/3)	199

I 調査に至る経過

御笠地区遺跡発掘調査は、県営圃場整備事業に伴い発掘調査を実施したものである。昭和52年度に圃場整備予定地の試掘調査を実施し、埋蔵文化財の有無や遺構面までの深さなどを確認した。この結果をもとに土地改良区、筑紫野市農林商工課、福岡県農林事務所と協議を重ね、遺跡の保存に力を注いだ。しかし、微高地の縁辺や水路部分はいかんともしがたく発掘調査後、工事が実施された。発掘調査は7年間に及び、昭和53年度はA地区とB地区、同54年度もA地区とB地区、同55年度はA地区、同56年度はG地区、同57年度はF地区、同58年度はD地区、E地区、F地区、同59年度はC地区の発掘を実施し、昭和60年度、昭和52年から同58年までの発掘調査報告書の作成に当たった。

調査組織

昭和52年度

総括	筑紫野市教育委員会	
	教 育 長	二宮 親卯
庶務	筑紫野市教育委員会	
	社会教育課長	松浦 敏春
	社会教育係長	竹田 正治
	社会教育係主事	山野 洋一
調査	福岡県教育委員会	
	管理部 文化課	調査係 主任技師
		技師
		技術主査
		橋口 達也
		副島 邦弘
		芳沢 要

昭和53年度

総括	筑紫野市教育委員会	
	教 育 長	二宮 親卯
庶務	筑紫野市教育委員会	
	社会教育課長	武藤 久雄
	社会教育係長	竹田 征治
	社会教育係主事	山野 洋一
調査	福岡県教育委員会	
	管理部 文化課	調査係 主任技師
		浜田 信也

筑紫野市教育委員会

社会教育課 社会教育係 主事
発掘調査補助員

山村 淳彦
奥村 俊久

昭和54年度

総括 筑紫野市教育委員会

教 育 長

萩尾 利弘

庶務 筑紫野市教育委員会

社会教育課長

武藤 久雄

社会教育係長

豊福 茂美

社会教育係主事

山野 洋一

調査 筑紫野市教育委員会

社会教育課社会教育係 主事

山村 淳彦

発掘調査補助員

奥村 俊久

現場での写真撮影については社会教育係主事山野洋一が行なった。

昭和55年度

総括 筑紫野市教育委員会

教 育 長

萩尾 利弘

庶務 筑紫野市教育委員会

社会教育課長

松浦 敏春

社会教育係長

豊福 茂美

社会教育係主事

山野 洋一

調査 筑紫野市教育委員会

社会教育課 社会教育係 主事

山村 淳彦

主事

奥村 俊久

昭和56年度

総括 筑紫野市教育委員会

教 育 長

松田 康男

庶務 筑紫野市教育委員会

社会教育課長

松浦 敏春

社会教育係長

豊福 茂美

社会教育係主事

山野 洋一

調査 筑紫野市教育委員会

社会教育課 社会教育係 主事

山村 淳彦

昭和57年度

総括 筑紫野市教育委員会

教 育 長

松田 康男

庶務 筑紫野市教育委員会

社会教育課長

松浦 敏春

社会教育係長

豊福 茂美

社会教育係主事

山野 洋一

調査 筑紫野市教育委員会

社会教育課 社会教育係 主事

山村 淳彦

現場での実測、写真撮影に山野洋一、奥村俊久、草場啓一の応援を得た。

昭和58年度

総括 筑紫野市教育委員会

教 育 長

松田 康男

庶務 筑紫野市教育委員会

社会教育課

山村 茂

社会教育係長

豊福 茂美

社会教育係主事

山野 洋一

調査 筑紫野市教育委員会

社会教育課 社会教育係 主事

山野 洋一

主事

奥村 俊久

昭和59年度

総括 筑紫野市教育委員会

教 育 長

松田 康男

庶務 筑紫野市教育委員会

社会教育課長

山村 茂

文化財係長

高原 健

文化財係主事

奥村 俊久

調査 筑紫野市教育委員会

社会教育課 文化財係 主事

山野 洋一

主事

奥村 俊久

Ⅱ 位置と環境

御笠地区遺跡は筑紫野市大字吉木及び阿志岐に所在する。

筑紫野市は西に背振山塊、東に三郡山塊が迫り、その間に狭長な平野がある。この平野部は北に福岡平野、南に筑紫平野を望む。また市の北西には鷲田川が流れ、御笠川と合流して博多湾に注ぐ。東には筑後川と合流して有明海に注ぐ宝満川がある。宝満川は三郡山を源に、その東麓を回り込むように流れた後、吉木・阿志岐の平野を潤し、永岡付近で九千部山に源を発する山口川に合流する。

吉木・阿志岐の平野部は背に宝満山（868m）、東に宮地岳（339m）、西に高雄山（151m）から延びる丘陵に三方を囲まれ、この狭い平野部に御笠地区遺跡は所在する。

宮地岳には現在80基ほどの古墳が確認されているが、実数はその数倍にのぼるものと思われる。これらの古墳は群集し、いくつかの古墳群を形成しており、宮地岳西麓には北から杉の谷古墳群、阿志岐古墳群、脇道古墳群、老松神社古墳群、天山古墳群がある。これまで横穴式石室をもつ杉の谷古墳群1～3号墳^{註1}や竪穴系横口式石室をもつ阿志岐古墳群A群3号墳^{註2}、横穴式石室の同B群21号墳^{註3}、また、低墳丘の方墳である同B群22～26号墳^{註4}が調査されている。

特に阿志岐古墳群B群26号墳は、銅鏃29本をはじめ鉄剣、鉄鏃、鉄斧、鉄鋸などが出土し注目される。宮地岳に宝満川を挟み対面する丘陵上にも北から塚口古墳群^{註5}、六本松古墳群、古ヶ浦古墳群、上の浦古墳群^{註6}などがあるが規模は小さい。また、この丘陵上には吉ヶ浦遺跡をはじめ弥生時代の遺跡も多い。

奈良時代、大宰府から蘆城駅家を通り、米ノ山峠（三郡山東麓）を越え、伏見、綱別、田河の各駅家を経て都へ通じており、蘆城駅家は吉木・阿志岐周辺であると考えられており、万葉集には、大宰府の官人たちが送別の宴をした際に詠まれた歌が9首ほど納められている。

註

註1 「杉の谷古墳群」 筑紫野市埋蔵文化財調査報告書第2集 1979 筑紫野市教育委員会

註2 「阿志岐シメノグチ遺跡」 筑紫野市文化財調査報告書第1集 1972 筑紫野市教育委員会

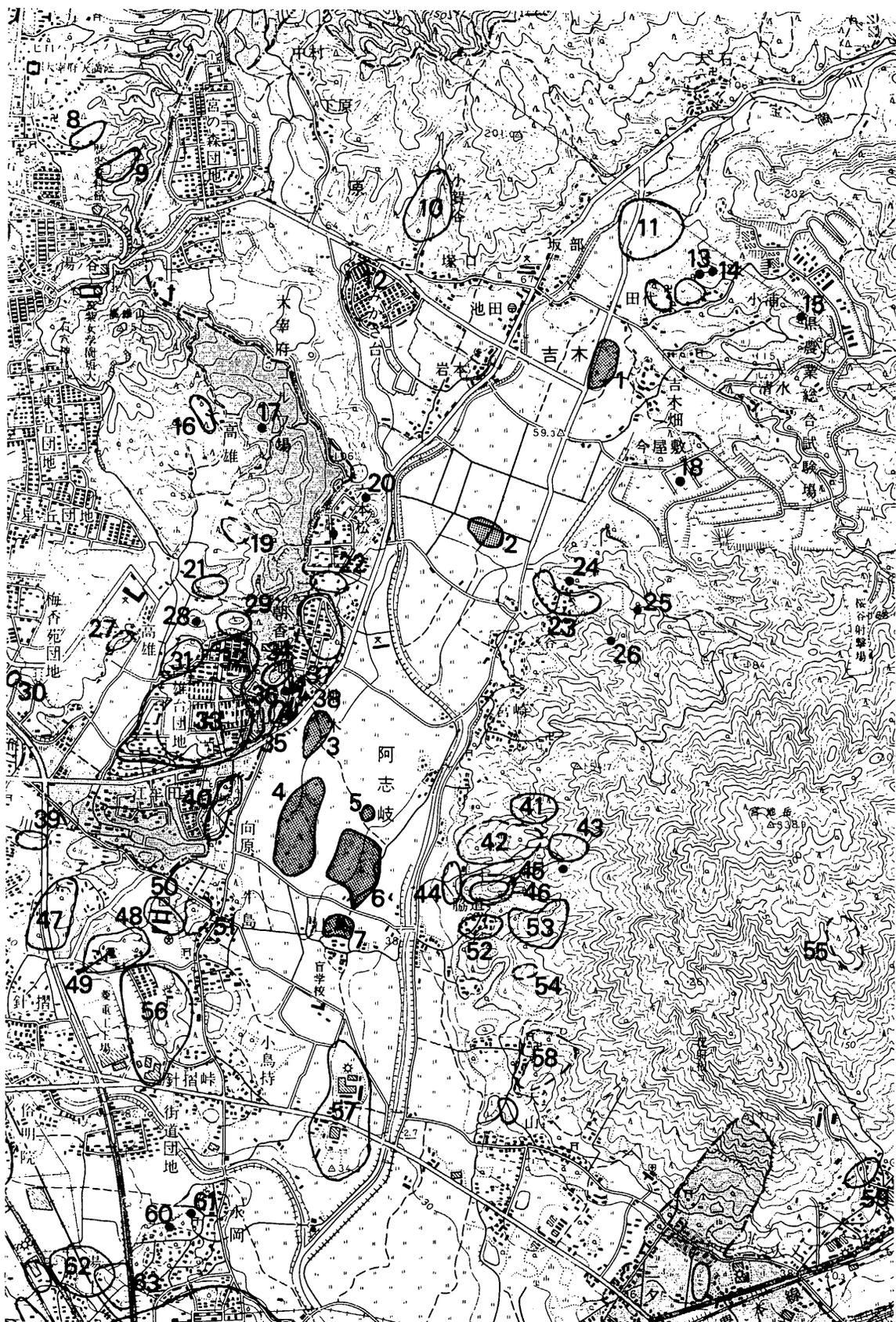
註3 「阿志岐古墳群」 筑紫野市文化財調査報告書第7集 1982 筑紫野市教育委員会

註4 B群22～25号墳 註3と同じ

B群26号墳 「阿志岐古墳群Ⅱ」 筑紫野市文化財調査報告書第12集 1985 筑紫野市教育委員会

註5 昭和48年度に日本竊業史研究所により発掘調査が実施されている。

註6 「上の浦遺跡」 筑紫野市文化財調査報告書第14集 1986 筑紫野市教育委員会



第1図 御笠地区遺跡周辺遺跡分布図 (縮尺1/25,000)

第1図 関係遺跡名一覧

- | | | |
|--------------|--------------|--------------|
| 1. 御笠地区遺跡A地区 | 2. 御笠地区遺跡B地区 | 3. 御笠地区遺跡C地区 |
| 4. 御笠地区遺跡D地区 | 5. 御笠地区遺跡E地区 | 6. 御笠地区遺跡F地区 |
| 7. 御笠地区遺跡G地区 | 8. 浦ノ田B遺跡 | 9. 浦ノ田A遺跡 |
| 10. 小賀谷遺跡 | 11. たか取遺跡 | 12. 塚口古墳群 |
| 13. 田代第2号墳 | 14. 田代第1号墳 | 15. 帽子形古墳 |
| 16. 石穴遺跡 | 17. 松ヶ浦古墳 | 18. 六度古墳 |
| 19. 集り古墳群 | 20. 六本松古墳 | 21. 集り遺跡 |
| 22. 六本松遺跡 | 23. 尺ヶ浦遺跡 | 24. 尺ヶ浦古墳 |
| 25. 大谷古墳 | 26. 星隈古墳 | 27. 菖蒲浦古墳群 |
| 28. 今王第2号墳 | 29. 今王A遺跡 | 30. 結ヶ浦遺跡 |
| 31. 今王第1号墳 | 32. 吉ヶ浦A遺跡 | 33. 吉ヶ浦古墳群 |
| 34. 吉ヶ浦B遺跡 | 35. 吉ヶ浦C遺跡 | 36. 吉ヶ浦第4号墳 |
| 37. 柚ノ木古墳群 | 38. 柚ノ木遺跡 | 39. 大曲川遺跡 |
| 40. 高雄遺跡 | 41. 阿志岐古墳群D群 | 42. 阿志岐古墳群B群 |
| 43. 阿志岐古墳群C群 | 44. 宮崎遺跡 | 45. シメノグチ遺跡 |
| 46. 阿志岐古墳群A群 | 47. 野黒坂遺跡 | 48. イカリノ上遺跡 |
| 49. イカリノ上古墳 | 50. 上ノ浦遺跡 | 51. 上ノ浦古墳群 |
| 52. 脇道遺跡 | 53. 脇道古墳群 | 54. 老松神社古墳群 |
| 55. 殿様塚古墳群 | 56. 峠山遺跡 | 57. 宮崎遺跡 |
| 58. 天山古墳群 | 59. 山家遺跡 | 60. 銭塚古墳 |
| 61. 鳥井元古墳 | 62. 竹敷町遺跡 | 63. 永岡遺跡 |

Ⅲ 予 備 調 査

1 はじめに

県営の御笠地区圃場整備事業が計画された、筑紫野市吉木・阿志岐はかつて「蘆城」とよばれ、後世それから吉木・阿志岐の両地名に分れたものと考えられる。「蘆城」は太宰府から米の山峠を越えて嘉穂郡筑穂町大分へとぬける官道の最初の駅家の所在地であり、たとえば、『大宰師大伴卿被_レ任_二大納言、臨_二入京之時_一、府官人等餞_二卿筑前国蘆城驛家_一—歌四首内防人佐大伴四綱』

月夜よし河おときよしいさここに
ゆくも帰るもあそひてゆかん

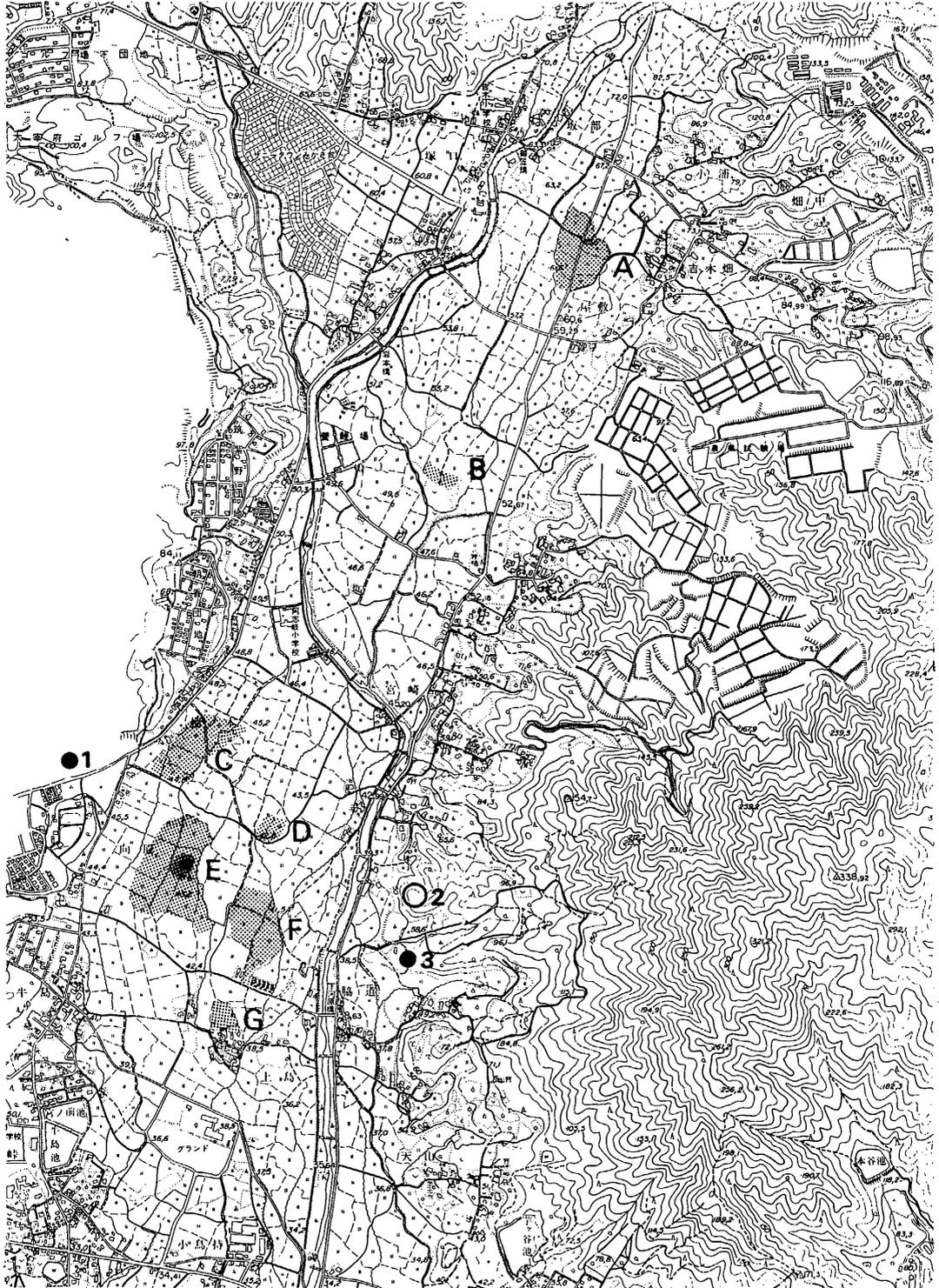
等と詠まれたように、大宰府官人達の憩いの場でもあったようである。

また太宰府市吉ヶ浦遺跡、筑紫野市阿志岐シメノグチ遺跡等周辺遺跡の調査も行なわれており、筑紫野市文化財分布地図には弥生時代、古墳時代の周知の遺跡が多く記載されていた。

福岡県農政部と文化課が御笠地区圃場整備事業地内の文化財の保護について協議を始めた1975年頃、両者間における圃場整備事業地内の文化財についての協議が軌道にのりだしていた。つまり農地計画課から次年度以降の計画地の、農地整備課からは当年度施行地区の埋蔵文化財の分布調査依頼があり、文化課の分布調査および試掘調査の結果を基に、計画変更、発掘調査等の協議がなされるようになった。

御笠地区圃場整備事業計画地内は先にみたように文化財の分布が広範かつ密知られていたため、2度の分布調査を行ないかなり分布地を限定できた。その後数百ヶ所に及ぶ坪掘りを行ない、さらにその精度を高めた。

1977年度には遺跡詳細分布調査費として国庫補助を受け、筑紫野市が事業主体となり県文化課から職員を派遣して、86ヶ所のトレンチ調査を行ない、A～Gの7地区に遺跡が分布することが判明した(第2図)。トレンチ設定の場所は付図1に、遺構の有無、遺構面の深さおよび遺構の種類、時期等は第1表に示している。以上の調査成果を基に、その後農政部との間の設計変更、発掘調査を行なう際の協議の資料とした。



第2図 御笠地区圃場整備事業地区内の遺跡分布図 (1/20,000)

1. 吉ヶ浦遺跡 2. 阿志岐古墳群第22～26号墳 3. 阿志岐シメノグチ遺跡

表1-1 トレンチャー一覧表

トレンチャー 番号	トレンチャー 設定位置	トレンチャー又は 遺構の深さ	遺 構	遺 物	備 考
1	E. 50~65 N. 510	32cm	ナシ		
2	N. 441~456 E. 210	90cm	ナシ	表層より古備前らしき破片、砂層より糸切底坏青磁片等	
3	E. 210~220 N. 430	70cm	ナシ	攪乱層より青磁片、黒燧石、プレート等、砂層より中世遺物	
4	E. 150~156 N. 310	40cm	床土下でとめたため遺構面まで達せず。	ナシ	
5	E. 204, 382~ 210, 382 N. 285	75cm	掘立柱の堀方4個を検出	奈良時代主体、古墳時代後期、弥生中期若干、瓦片あり	
6	N. 245~255 E. 70	45cm	ナシ	ナシ	
7	E. 150~165 N. 205	80~90cm	竪穴住居跡、ピットらしきものを検出、掘立柱建物	P1から土師器3個体分、土器多量、奈良主体、弥生終末若干	
8	E. 190~200 N. 205	40cm	掘立柱の堀方、最大で一辺約90cm。トレンチャー中央にて6個、東側で3個検出	7c末~8c初頃の土器、瓦片、弥生終末も若干	
9	E. 210~220 N. 205	75cm	掘立柱の建物1棟分、堀方多数、ピット多数	奈良時代須恵器、瓦片、弥生終末も若干	
10	E. 25~30 N. 200	60cm	石組遺構を検出したが性格は不明	ナシ	
11	E. 195~200 N. 35	80cm	ナシ	ナシ	
12	N. 4~S. 0 E. 335	60cm	ナシ	青白磁、須恵器、瓦器、土師器、石鍋等平安時代ごろまでの遺物	
13	S. 3~18 E. 360	35cm	ナシ	ナシ	
14	E. 40~50 S. 15	47cm	ナシ	古式土師器、近世土鍋等	
15	E. 330~340 S. 130	30cm	ナシ	黒色土層より青磁・須恵器・瓦器・石鍋など古代から中世にかけての遺物	
16	S. 180~190 E. 100	53cm	ナシ	ナシ	
17	E. 300~310 S. 200	40cm	ナシ	ナシ	
18	S. 210~215 E. 20	30cm	ナシ	ナシ	床土下は礫層
19	E. 20~30 S. 300	50cm	ナシ	ナシ	
20	E. 365~371 S. 330	80cm	ナシ	ナシ	
21	E. 395~400 S. 330	160cm	ナシ	須恵器・土師器	
22	S. 340~350 E. 380	140cm	ナシ	土師器塊、須恵器	
23	S. 360~370 E. 380	100cm	ナシ	ナシ	
24	E. 350~360 S. 380	70cm	ナシ	ナシ	
25	S. 380~390 E. 100	50cm	ナシ	ナシ	
26	S. 392~398 W. 15	35cm	ナシ	ナシ	
27	E. 50~60 S. 440	60cm	ナシ	ナシ	
28	E. 0~8.50 S. 500	35cm	住居跡1棟、柱穴	古式土師器(庄内新~布留古式)	
29	E. 50~60 S. 500	45cm	ナシ	ナシ	
30	S. 570~575 E. 100	55cm	ナシ	表層に若干の遺物を包含	
31	W. 225~235 S. 1400	23cm	ナシ	ナシ	
32	S. 1425~1430 W. 280	40cm	ナシ	ナシ	

表1-2 トレンチ一覧表

33	W.255~260 S.1430	45cm	ナシ	ナシ	
34	S.1455~1460 W.295	34cm	ナシ	ナシ	
35	W.140~150 S.1470	20cm	住居跡か、またはトレンチ中央よりW140側住居跡付近に土質・色の変った部分あり。		
36	E.260~270 S.1500	W.260側 95cm W.270側 35cm	大きな落ち込みもあるも性格不明(池か?)	木片および桃の実等、弥生中・後期、古墳~奈良土師・須恵器	
37	E.25~35 S.500	E.25側 82cm E.35側 42cm	ナシ	ナシ	地山にかなりの傾斜あり
38	W.300~310 S.1540	57cm	ナシ	ナシ	
39	S.1530~1540 W.280	40cm	住居跡、柱穴	弥生後期土器・土師器	
40	S.1470~1480 W.180	40cm	溝2本	石庖丁、弥生後期の土器	
41	W.265~275 S.1600	48cm		黒色土層より弥生後期、古式土師器	黒色土まで掘った時点で湧水がひどく発掘を中断
42	W.240~250 S.1600	20cm	弥生後期のものと思われる住居跡の周溝および掘立柱(?)表土下がすぐ遺構面であるが上部をカットされているもよう。	弥生土器他	
43	W.180~190 S.1600	36cm	ナシ	ナシ	
44	W.140~150 S.1600	35cm	ナシ	ナシ	
45	E.30~40 S.1600	46cm	ナシ	ナシ	
46	E.90~100 S.1600	63cm	ナシ	ナシ	
47	S.1610~1620 W.345	39cm			黒色土を掘りきらぬ内に湧水がひどく発掘を中断
48	S.1620~1630 W.230	S.1620側 20cm S.1630側 30cm	住居跡か、表土下が遺構面	弥生終末、土師器、須恵器	
49	S.1630~1640 W.360	46cm	ナシ	ナシ	
50	S.1660~1670 W.290	57cm		瓦片1個	
51	S.1685~1695 W.320	30cm	住居跡		
52	S.1680~1685 W.225	30~70cm	溝	古式土師器	
53	W.380~390 S.1700	W.380側 31cm W.390側 85cm	W.390側にて落ち込みを検出したが性格不明		
54	W.260~270 S.1700	55cm	ナシ	ナシ	
55	W.180~190 S.1700	46cm	ナシ		
56	E.40~50 S.1700	20cm	弥生終末から古墳時代初頭にかけての住居跡と思われる遺構を検出	弥生中期(丹めりを含む)、弥生終末~土師器初頭	
57	E.60~70 S.1700	20cm	掘立柱建物跡	弥生中期(丹めりを含む)、弥生終末、古式土師器、奈良時代須恵器、瓦片	
58	E.80~90 S.1700	20cm	E.80側に溝状の遺構	溝内黒色土層より須玖式土器(筒形器台を含む)終末期の土器、奈良時代須恵器 紡錘車	
59	E.95~105 S.1700	20cm	住居跡	弥生中期、弥生終末、古式土師器	
60	W.190~200 S.1800	20cm	弥生終末期と思われる住居跡		
61	S.1840~1850 E.100	43cm	ナシ	ナシ	
62	S.1870~1880 E.130	18cm	住居跡		
63	S.1920~1930 W.130	38cm		表土下包含層より弥生中期(筒形器台を含む)終末期の土器、奈良時代須恵器 紡錘車	
64	S.1970~1980 W.130	25cm	弥生時代住居跡	弥生終末土器、奈良時代須恵器	
65	S.1990~2000 E.100	30cm	住居跡	弥生後期、土師器、奈良時代須恵器	

表1-3 トレンチ一覧表

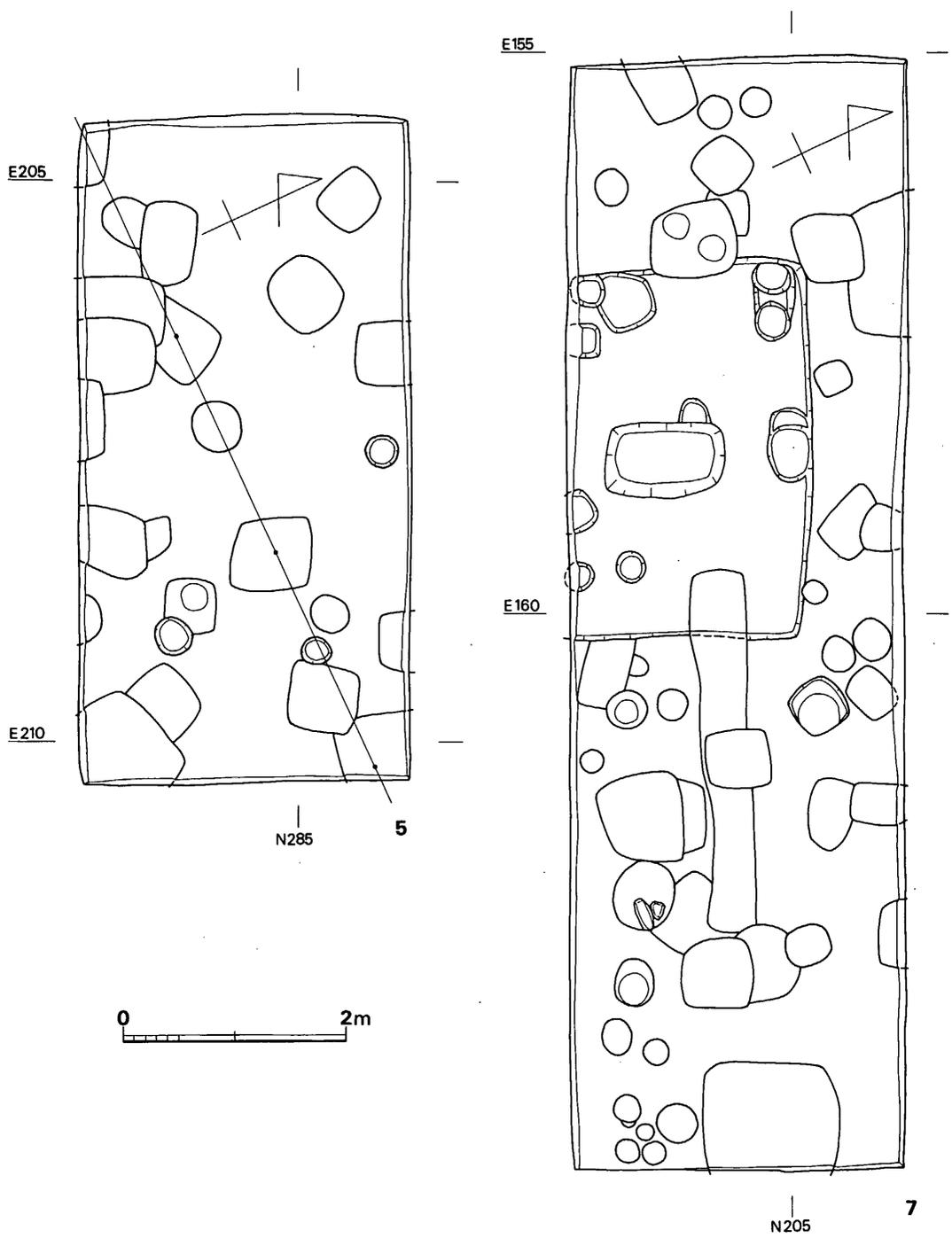
66	S. 2010~2020 W. 130	25cm	住居跡	弥生土器、土師器、須恵器、石甕 丁	
67	W. 70~80 S. 2030	45cm	柱穴らしきもの多数	弥生土器、土師器、須恵器	
68	E 120~130 S. 2040	60cm	弥生後期の焼失住居跡等	弥生後期を主として、中期土器、 古墳末~奈良時代土師器	
69	S. 2060~2070 W. 130	35cm	柱穴他	弥生中期、青磁片	
70	S. 2080~2090 E. 180	30cm	弥生終末の住居跡3、古墳時代末 頃の住居跡1	3号住居跡内より後漢鏡片	
71	S. 2110~2120 W. 130	40cm	ナシ	ナシ	
72	S. 2110~2120 E. W. 0	25cm	方形住居跡		削平され住居跡周溝のみ 残る
73	W. 70~75 S. 2120	35cm	ナシ	ナシ	
74	W. 50~60 S. 2120	40cm	ナシ	ナシ	
75	W. 30~35 S. 2120	35cm	大きな柱穴らしきもの1個	ナシ	
76	S. 2235~2245 E. W. 0	45cm	ナシ	ナシ	
77	E. 165~175 S. 2270	60cm	住居跡4棟を検出	古墳時代後期土師器・須恵器	
78	S. 2290~2300 E. W. 0	40cm	S. 2300側にて住居跡を検出	奈良時代須恵器	
79	S 2347, 624, 2342, 411 E 16, 865・32, 140	45cm E. 32, 140側隅 1×3mは135cm	ナシ	ナシ	
80	S. 2370~2380 E. 105	25cm	ナシ	ナシ	
81	S. 2460~2470 E. 140	23cm	ナシ		
82	E. 242~252 S. 2480	70cm E. 252側1× 1mは108cm	ナシ	青磁片	
83	E. 90~100 S. 2500	55cm	浅い大溝	溝内より青磁片	
84	E. 183~193 S. 2500	25cm	土壇墓か?		
85	S. 2505~2515 E. 202	45cm	ナシ	ナシ	

2 調査の内容

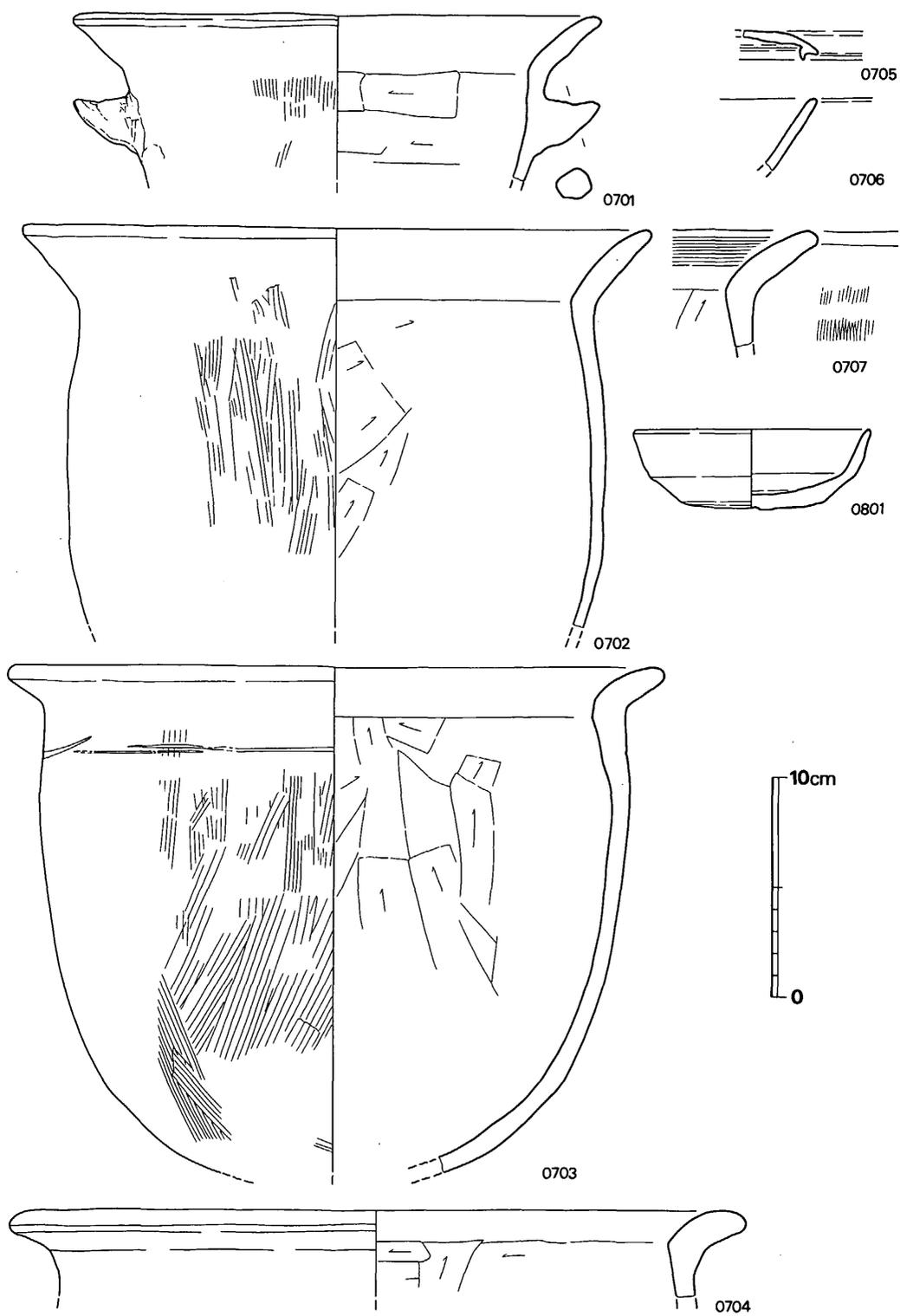
御笠地区圃場整備事業地は400ヘクタールに及ぶ広大な範囲でかつ狭長な盆地状を呈している。この地形に沿った形でN-25°14'50"-Eという任意の中央線を設け、それを基準にして100mの方眼を組み、それを基にしてトレンチの設定を行なった。A~Gの7地区で遺跡の分布を確認したので、順をおって簡単に説明を加えたい。

1) A地区

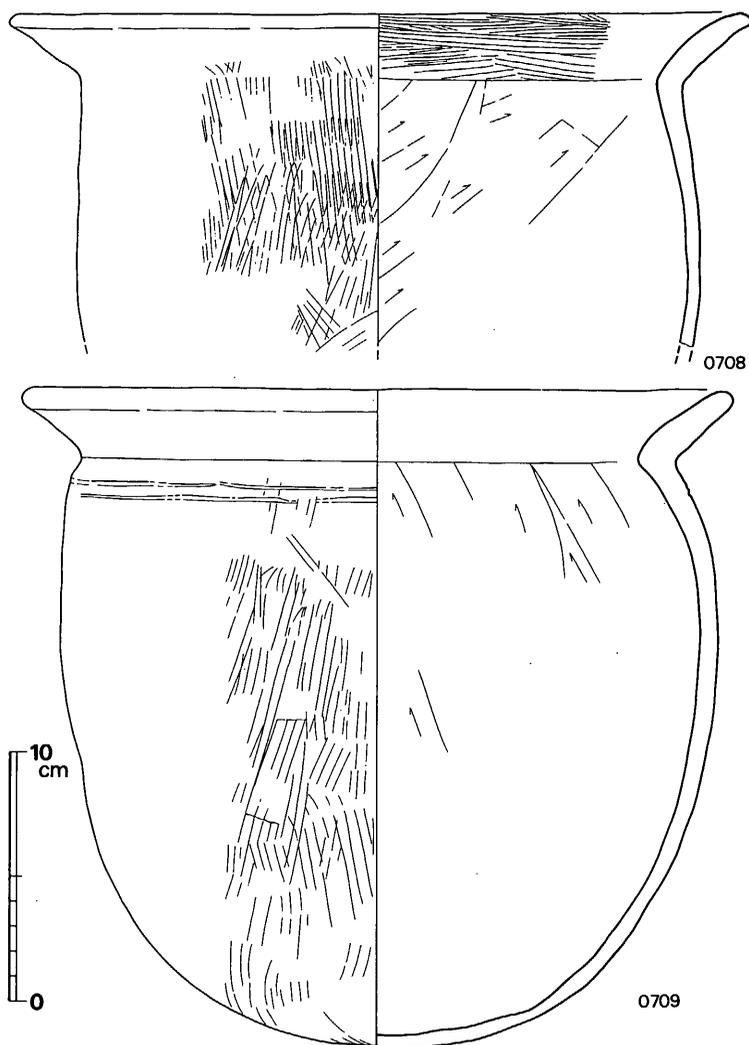
5・7・8・9号トレンチで遺構が確認された。4号トレンチは床土下とめて、遺構面まで達しなかったが、この付近までは遺構の存在は確実であった。それより北は土地所有者の承諾が得られず、この地区の北側の範囲は確認できなかった。



第3図 5号・7号トレンチ (1/60)



第4図 A地区出土の土器1 (1/3)



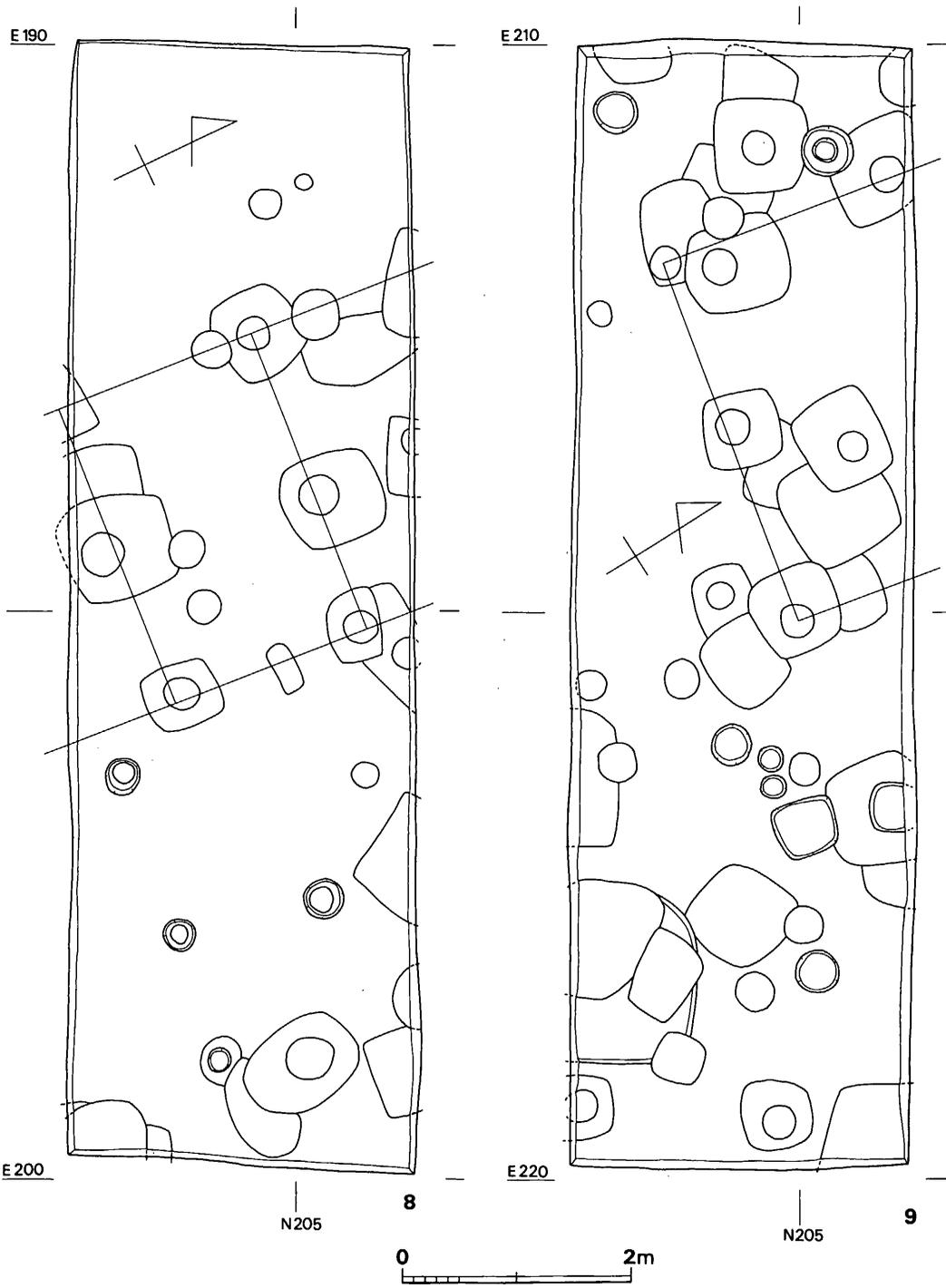
第5図 A地区出土の土器 2 (1/3)

8世紀初頭頃の遺物を主体として、弥生後期終末土器若干を包含している。80～90cmで遺構面に達する。一辺330cm程の小形の方形竪穴住居跡と、掘立柱建物の柱穴と思われる一辺50～80cm程の隅丸方形、隅丸長方形の掘り方多数、東壁付近では一辺120cm程の隅丸方形のピット（P-1）を検出した（第3図）。このピット上面からは土師器甕、把手付甕等の土器が出土した（第4図）。共伴の須恵器片（0705）からすると7世紀末頃に位置付けてよからう。（土器番号は前2ケタをトレンチ番号、後2ケタを遺物番号で示した。）

8号トレンチでは遺構面は地表下約40cmで、黒色包含層はない。主軸をN-4°30'-Eにと

5号トレンチでは表土下40～50cmで黒色土層、75～80cmで遺構面に達する。黒色土層には7世紀末～8世紀初頭頃の土器を主体に、古墳時代後期の土器、弥生中期土器若干、瓦片等を包含していた。遺構は一辺60～70cm、大きいものでは100cmの掘立柱建物の柱穴と思われるものを検出したが、狭い範囲であり、かつ掘り下げていないので詳細はわからない。ただ線で結んだ4個の柱穴は正確に東西に主軸をとり、柱間間隔が210cmであり、東西に長い掘立柱建物の一角であることはまちがいない。

7号トレンチでは表土下65～70cmで黒色土層があり、7世紀末～



第6図 8号・9号トレンチ (1/60)

る掘立柱建物1棟分と東側にも掘立柱建物の一角らしき掘り方を検出した。掘り方は一辺60～90cm程の隅丸方形を呈している。7世紀末～8世紀初頭頃の須恵器、土師器の他、瓦片、弥生終末土器若干、青磁片が出土している。

9号トレンチでは表土下60cmで黒色土層があり、7世紀末～8世紀初頭頃の須恵器、土師器の他、瓦片、弥生終末土器若干を包含している。75～85cmで遺構面に達する。主軸をN-4°30'-Eにとる南北に長い掘立柱建物1棟分を検出した。掘り方は一辺80～90cm程の隅丸方形を呈している。柱根の痕跡は25～30cmと大きい。東西方向の柱間間隔は150～180cm、南北方向の柱間間隔は210cmで5尺、6尺、7尺を基準にしている。

以上A地区では主軸を真北またはほぼそれに近くなる掘立柱建物が各トレンチで検出され、その柱穴もかなり大きくかつ方形を呈しており、また柱の大きさも25～30cmとかなり大きいことが想定された。これらのことから官衙的な性格をもつ遺跡であることは確実である。またこれらの時期は7世紀末～8世紀初頭頃に比定され「蘆城の驛家」はまさにA地区に推定することができた。本調査の結果をまたねばならないが、予備調査の結果からは南北2町、東西1町程の区域に及ぶものと考えられた。

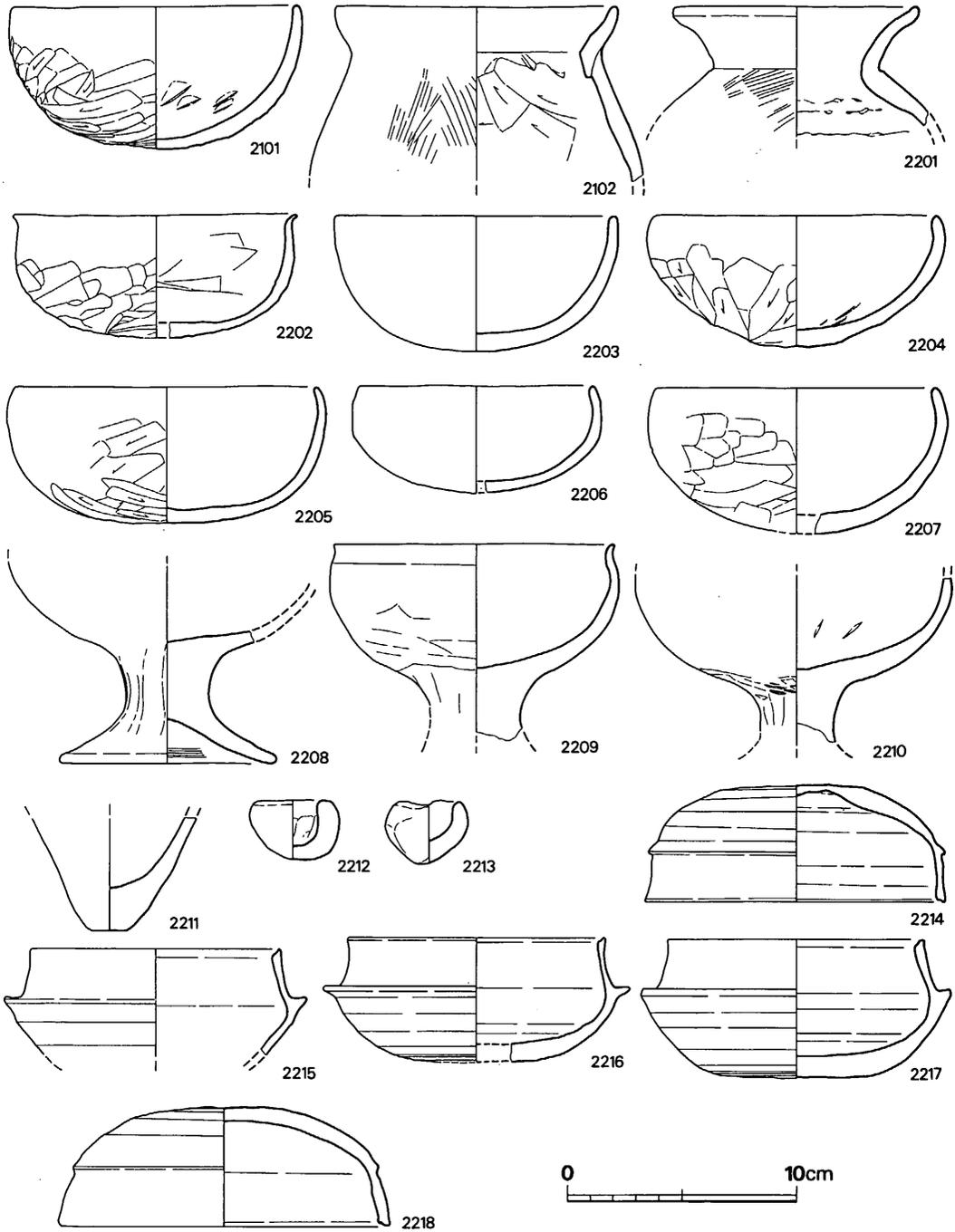
2) 21・22号トレンチ出土の土器(第7図)

この地区は分布調査および坪掘りの時点では遺跡の分布するところとしていた。トレンチ調査した結果は地表下140～160cmの地山の上にある桃色砂層および混礫層に土師器塚、須恵器等を包含していたものである。この層のうえには花崗岩バイラン土がのり、東側丘陵部から流れ落ちて形成された二次堆積であることがわかった。東側丘陵部にこれらの時期の古墳ないしは関連の遺構が存在したものとする。

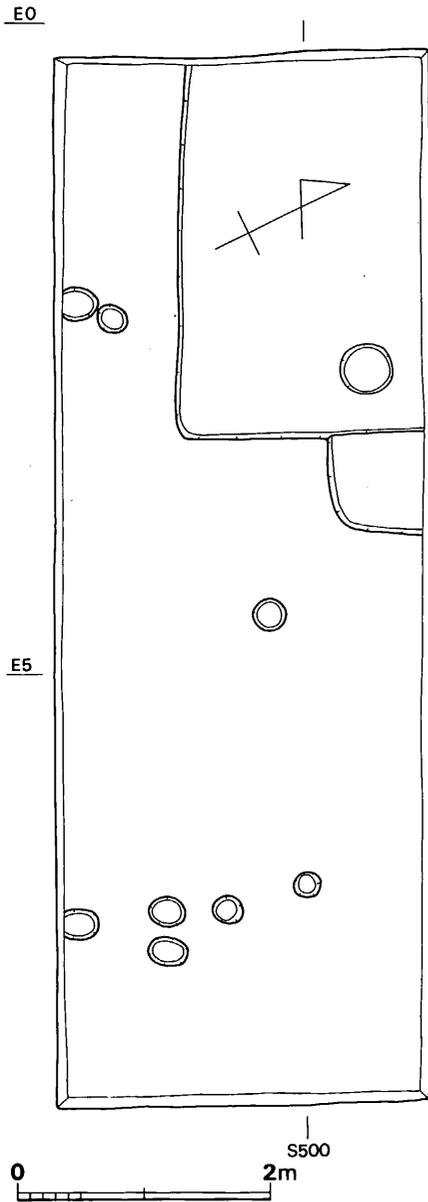
2214～2217の須恵器は坯の口径が11cmと小ぶりであるが、この種の須恵器は陶邑の編年では後出するようである。しかし、北部九州での出土をみるとI型式2・3段階のものに伴出することが多く、おそらくI型式3段階頃のものと考えてよい。土師器塚、脚付塚、手づくね土器もおそらく同時期のものであろう。2102、2201の甕口縁が内弯する特徴も、この種須恵器が下るものではないことを示している。5世紀前半のおそい段階頃に比定できる。2218の須恵器坯蓋はこれらに比べ後出することは明らかで、いわゆる須恵器II式のものである。

3) B地区

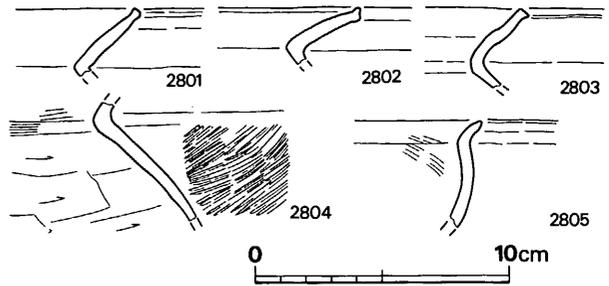
28号トレンチで2本柱の方形住居跡を検出した(第8図)。29号トレンチでは遺構は確認できなかった。B地区は周田より2m程高い舌状にのびる低台地の先端にあたる。29号トレンチはその中央部にあり、28号トレンチは東側の縁辺部に近い。このことから低台地の頂部は既に削平を受け、台地の先端の縁辺部のみに遺構が残るものと判断した。28号トレンチの住居跡から出土した土器は第9図に示したが、庄内式土器の新しい要素をもつものといえる。少量なので断定はできないが、これらは北部九州では布留式土器の古い要素をもったものと伴するこ



第7図 21号・22号トレンチ出土土器 (1/3)



第8図 28号トレンチ (1/60)



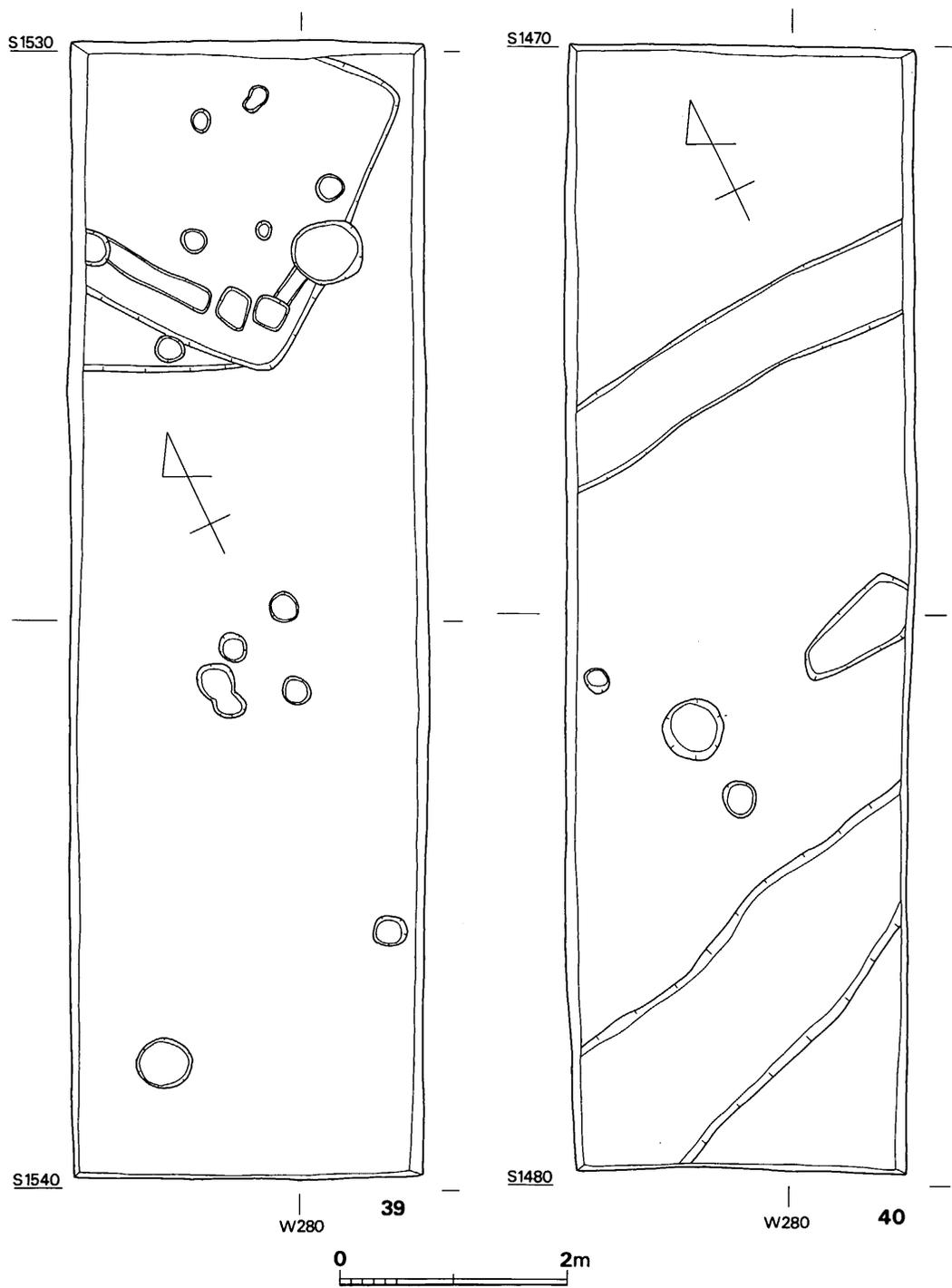
第9図 B地区出土土器 (1/3)

とが多く、ほぼその段階のものと考えてよからう。

4) C地区

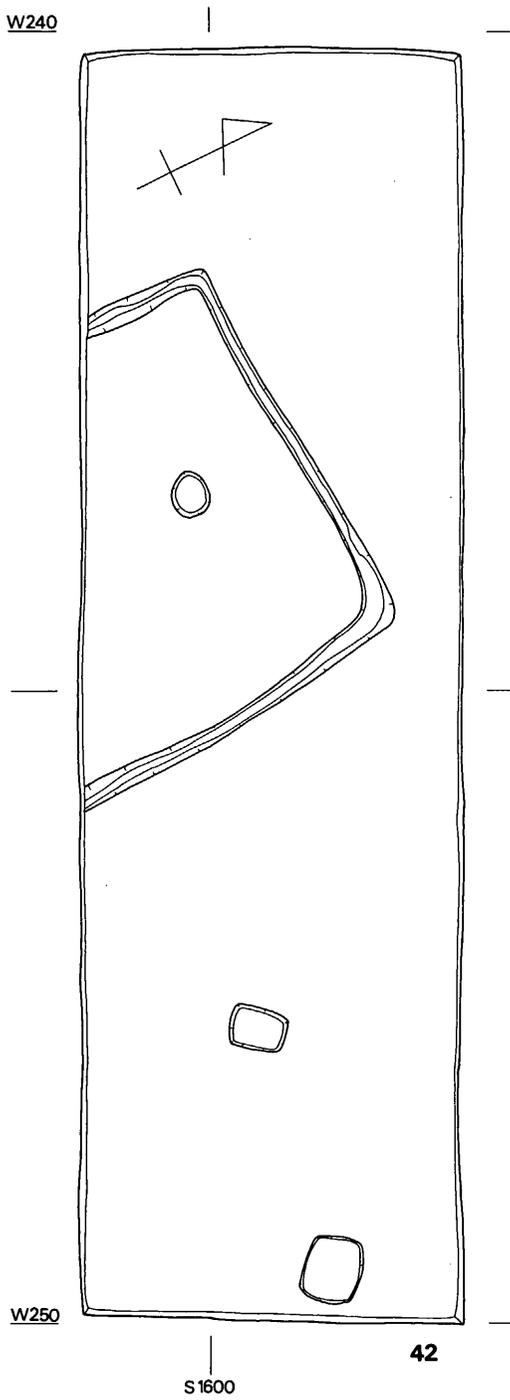
C地区では35・36・39・40・41・42・48・51・52・53号の各トレンチで遺構を検出または遺構の存在が推測された。35号トレンチでは表土下ですぐに住居跡および住居跡と思われる土質の変った部分が認められた。36号トレンチでは大きな落ち込みが検出され、奈良時代の土器を主として、弥生中期、後期、古墳時代後期の遺物を含み、加工痕のある木杭、木片、桃の実等の種子等が出土した。39号トレンチでは表土下40cmで遺構面に達し、方形住居跡2棟分と柱穴を検出した(第10図)。遺構上面には黒色土があり、弥生後期土器および土師器を包含していた。40号トレンチでは東西に走る溝2本と柱穴を検出した(第10図)。南側の溝からは弥生後期の土器および石庖丁等が出土した。41号トレンチでは表土下25cmで黒色土層となり、弥生後期土器、古式土師器等を包含していたが、黒色土を15cm程掘り下げたところで湧水が激しくなり、発掘を中断したが、黒色土下には遺構

の存在が予測された。42号トレンチでは、表土下ですぐに遺構面となり壁を既に削平され周溝と柱穴のみ残る長方形住居跡1棟と掘立柱建物の一部かと思われる柱穴2個を検出した(第11図)。長方形住居跡は2本柱の建物と考えられ、弥生時代後期以後のものであろう。48号トレンチでは表土下が遺構面であり、方形住居跡と思われるもの2棟分を検出した。弥生終末土器、

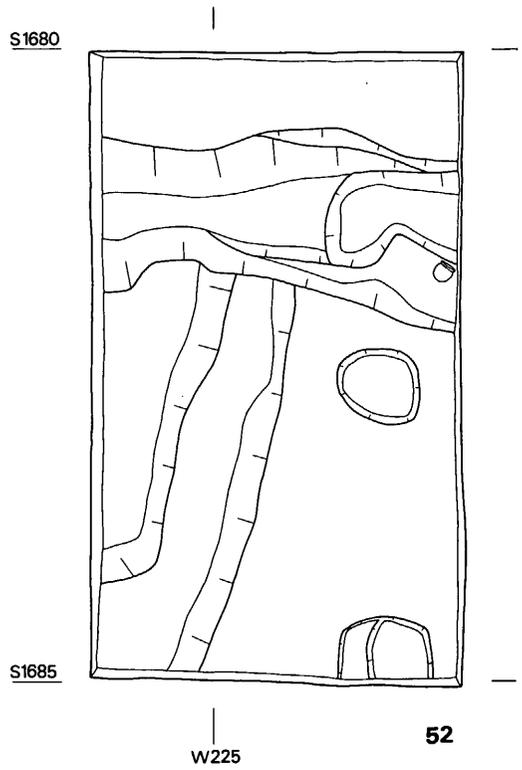


第10図 39号・40号トレンチ (1/60)

W240

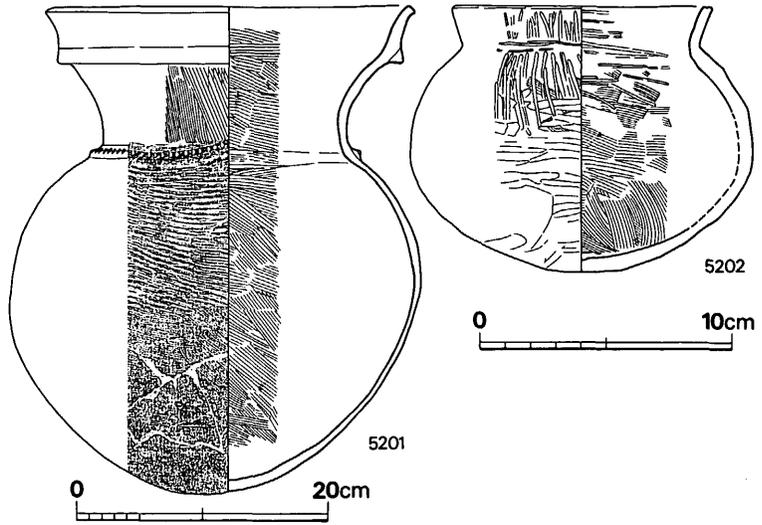


S1680



第11図 42号・52号トレンチ (1/60)

土師器、須恵器若干が出土している。51号トレンチでは床土下に遺構面が出土している。51号トレンチでは床土下に遺構面があり、方形住居跡と思われるもの、既に壁面を削平され床面のみ残った住居跡等を検出した。52号トレンチでは溝が検出され（第11図）、溝内からは口径28.3cm、器高38.1cmの大形の二重



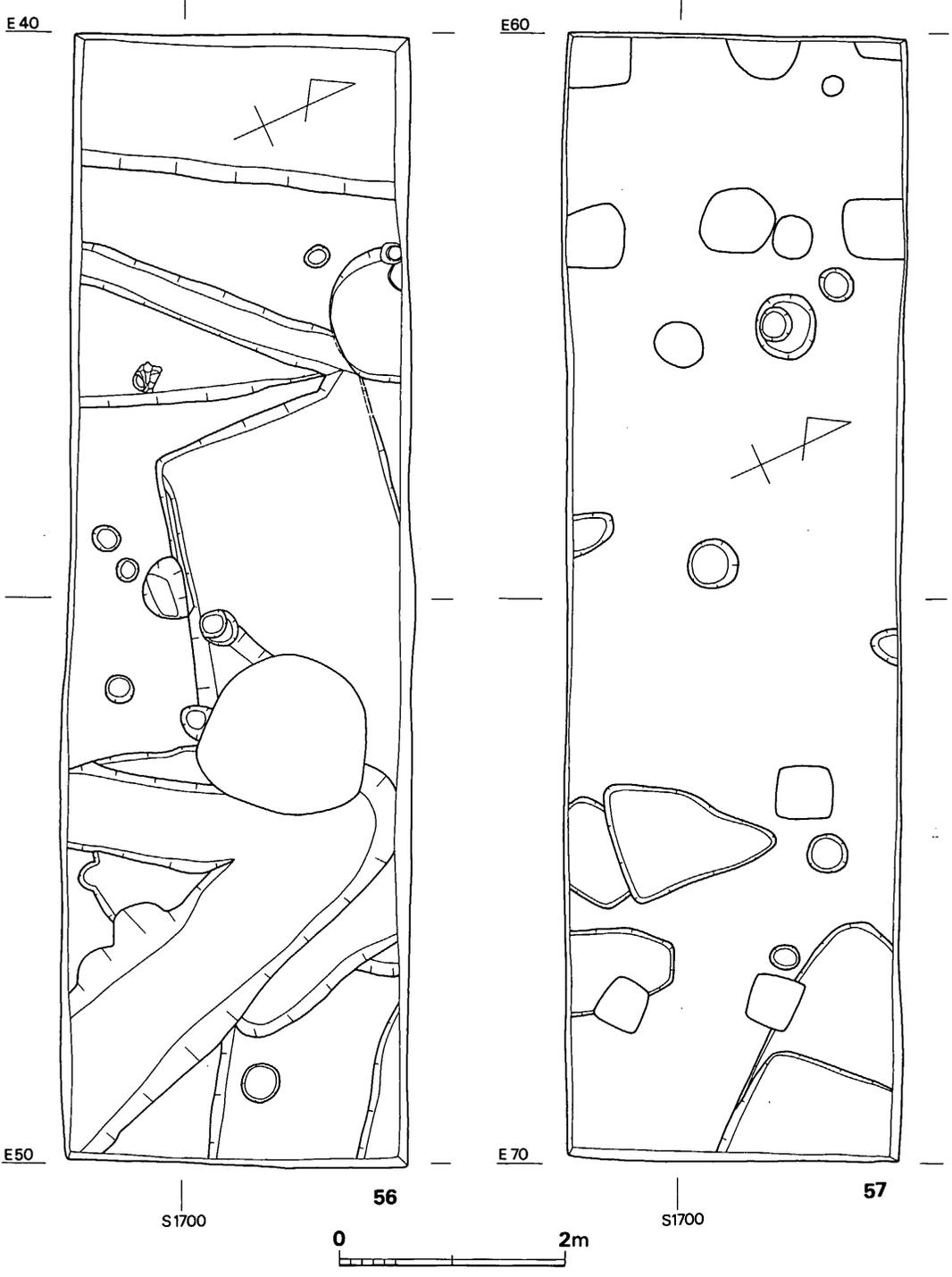
第12図 C地区出土土器（1/6、1/3）

口縁壺と、口径10.4cm、器高10.5cmの器面を磨研した壺が出土した（第12図）。これらの土器は庄内式土器併行期のものかと思われる。

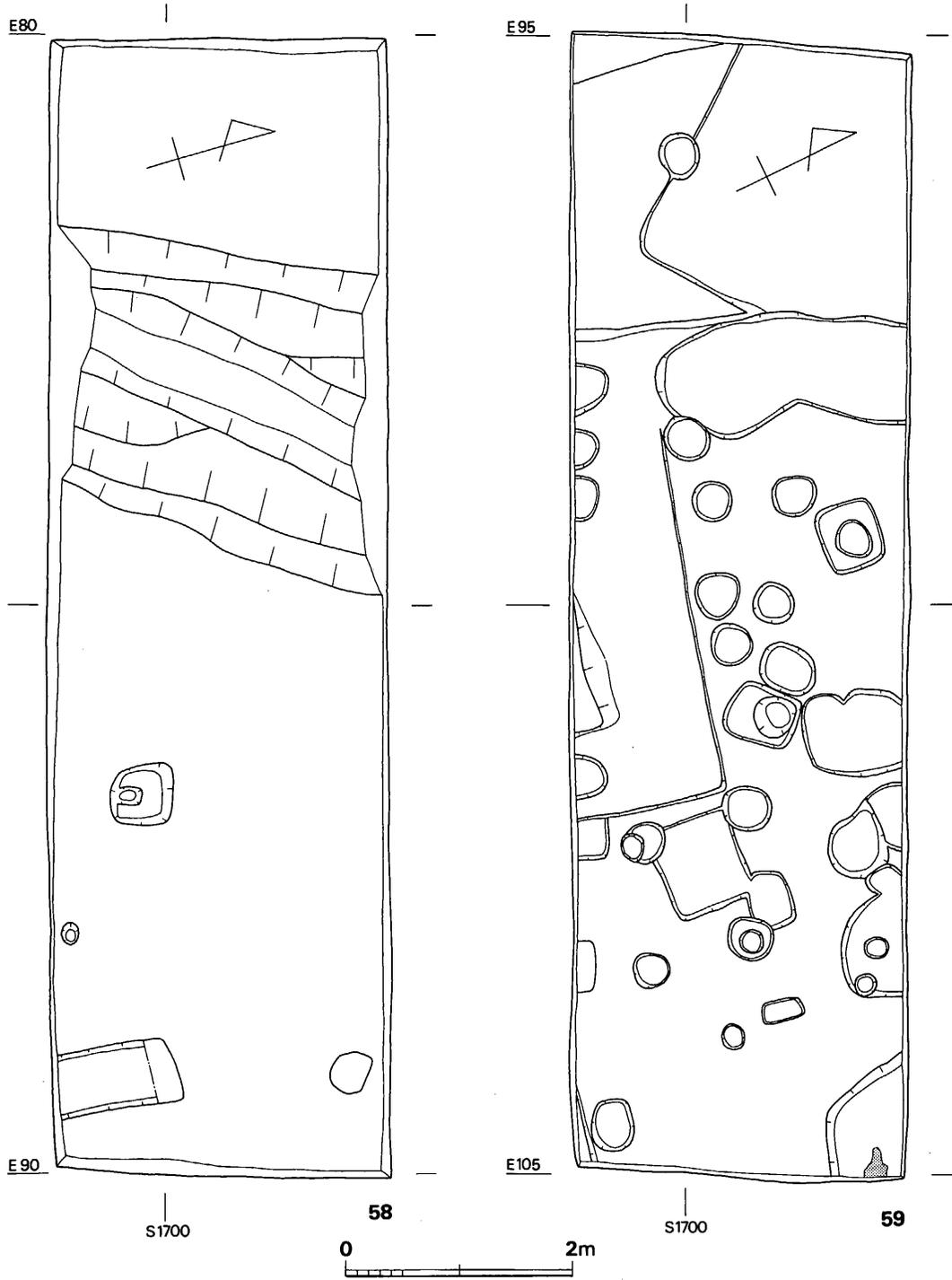
5) D地区

D地区では56・57・58・59号トレンチのすべてで遺構が検出された。56号トレンチでは方形住居跡と溝状遺構が検出された（第13図）。住居跡床面から出土した甕（5613）は庄内式の新しい要素をもつ甕であり、住居跡の時期はほぼこの頃と考えてよからう。他には第15図に示すように、丹塗り磨研土器を含む弥生中期土器、5603、5605～5611等の弥生終末の土器、5612～5615の古墳時代初頭の土器、5616のやや下る土師器等が出土してい

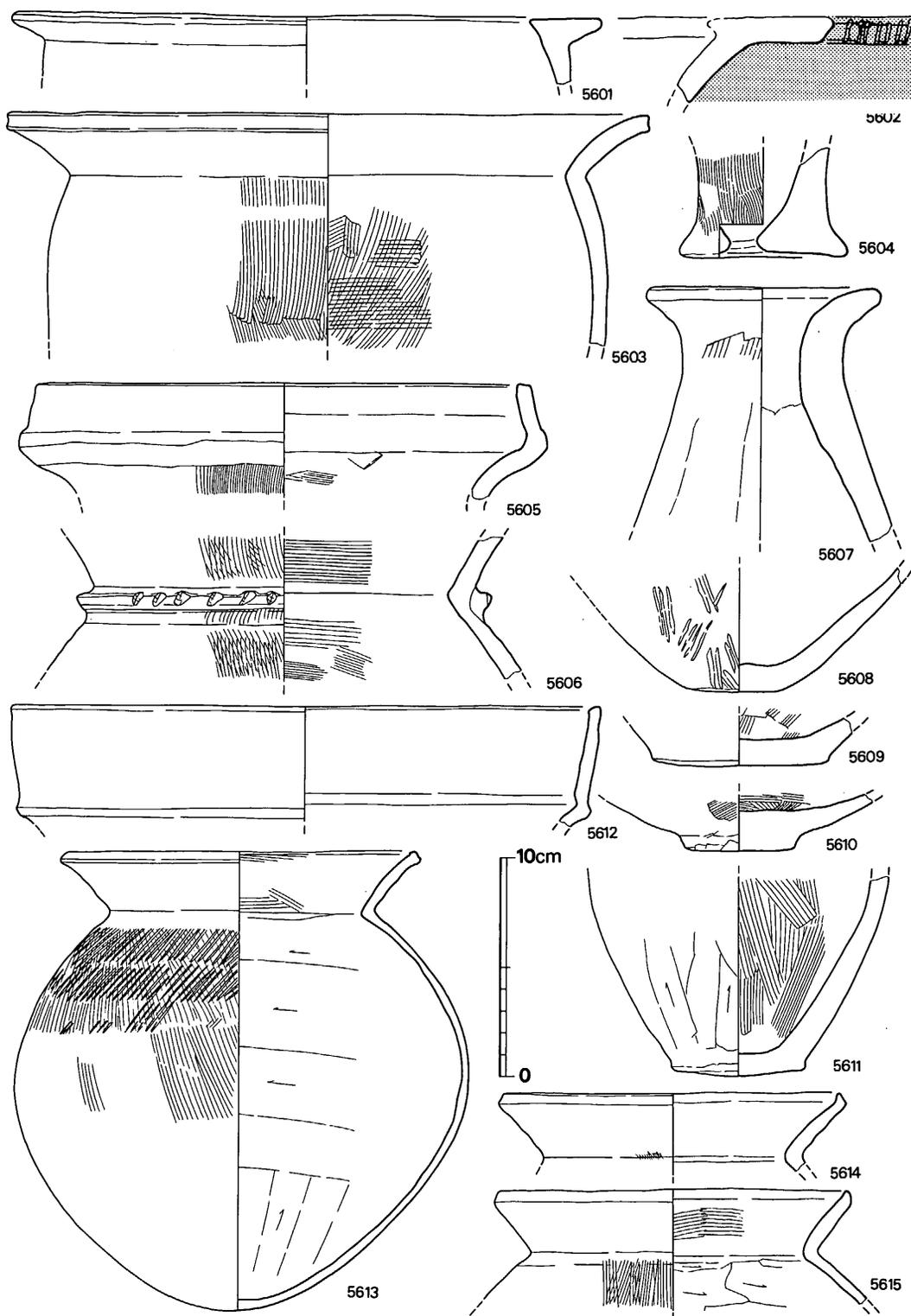
る。5610の底部は畿内V様式系統の土器と思われる。57号トレンチでは、トレンチ東隅で掘立柱建物の一部が、また西隅では方形住居跡の一部と思われるものを検出した。掘立柱建物の柱間間隔は東西、南北共に180cm前後で6尺を基準としたものが考えられるが、建物の主軸は真北にとらず、御笠地区の地形に沿った（つまり我々が設定した基準線にのっている）形をとり、A地区の掘立柱建物と性格が異なるものであろう。丹塗り磨研土器を含む弥生中期土器、弥生終末、古式土師器、奈良時代須恵器、瓦片等が出土している。58号トレンチでは溝を検出した（第14図）。溝の上層からは黑色土、下層は黑色砂質土であり、溝内からは筒形器台を含む丹塗り磨研土器をはじめとする弥生中期土器を主として、弥生後期前半～古墳時代初頭の土師器を包含していた（第16図）。59号トレンチでは4棟分の住居跡と思われるものを検出した（第14図）。出土土器は弥生中期、弥生終末、古式土師器が多い（第16・17図）。5901～5903の土師器は須恵器出現頃のものであり、5世紀前半代のはやい頃に比定されよう。



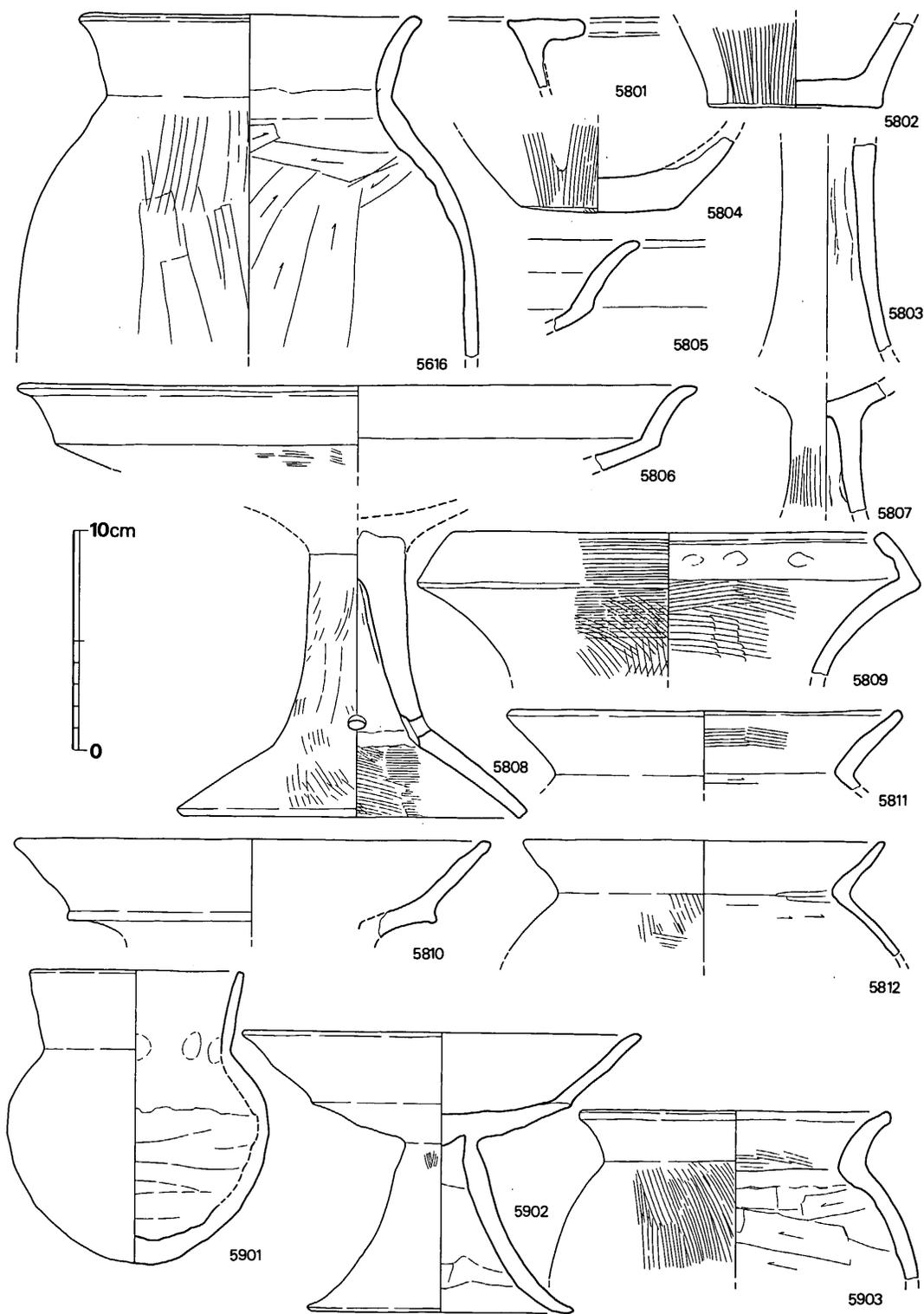
第13図 56号・57号トレンチ (1/60)



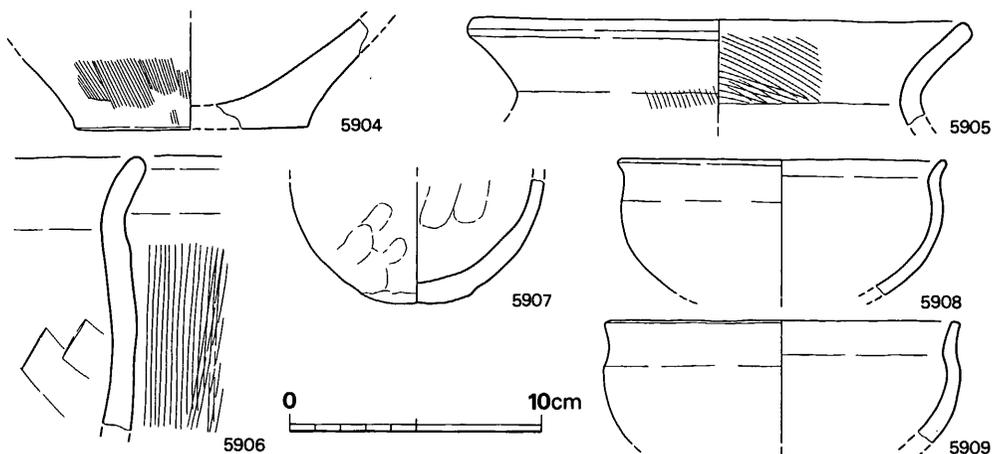
第14図 58号・59号トレンチ (1/60)



第15图 D地区出土土器 1 (1/3)



第16图 D地区出土土器 2 (1/3)



第17図 D地区出土土器 3 (1/3)

D地区ではまず丹塗り磨研土器を含む弥生中期後半頃の土器が多く注目をひいた。これら土器は葬送儀礼等の祭祀に用いられることが多く、付近に甕棺墓地のある可能性が強い。また、弥生終末から古墳時代初頭の遺物が多いことは他地域と同様であり、これが5世紀前半頃までつづくのもまた同じ現象である。また、C、D地区では奈良時代遺物も多くみられたが、A地区のものとは遺構の性格が異なり、これらの地区に驛家の存在を考えるわけにはいかなかった。

6) E地区

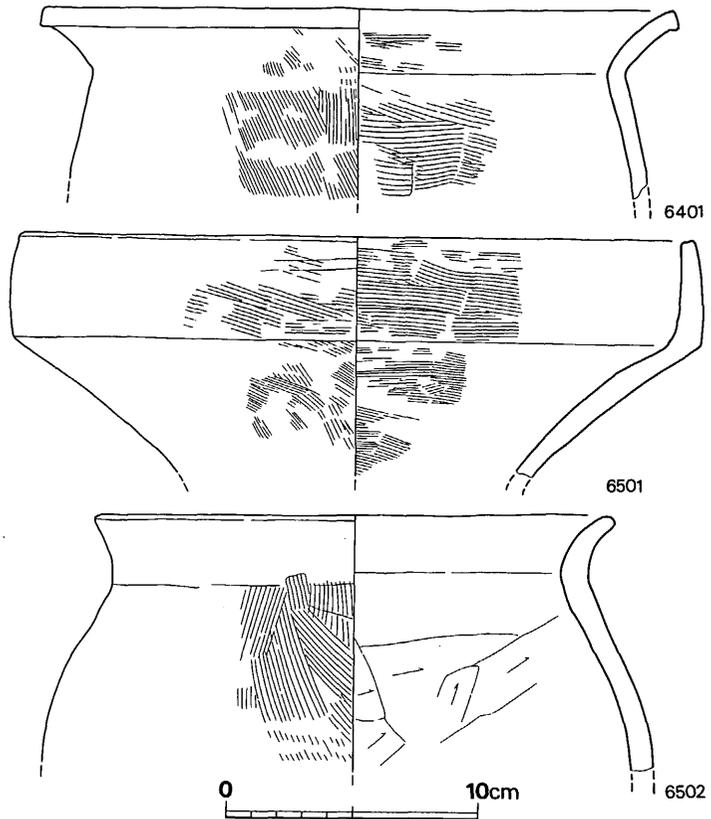
E地区では60・62・63・64・66・67・69・72・75号トレンチで遺構を確認または遺構の存在が予測された。60号では弥生終末期と思われる住居跡、62号では住居跡を、63号では表土下の包含層より筒形器台を含む丹塗り磨研土器をはじめ弥生中期の土器および弥生終末期の土器、奈良時代須恵器、紡錘車等が出土した。64号では弥生終末期と思われる住居跡が検出され、終末期の土器(第18図)、奈良時代須恵器等が出土した。66号でも住居跡が検出され、弥生土器、土師器、須恵器、石庖丁等が出土した。67号では柱穴が多数検出され弥生土器、土師器、須恵器が出土した。69号では柱穴が検出され、弥生中期土器片、青磁片が出土した。72号では既に壁を削平され、周溝のみ残る方形住居跡が検出された。75号では大きな柱穴らしきもの1個を検出した。

7) F地区

F地区では65・68・70号トレンチで遺構が確認された。まず65号トレンチでは住居跡2棟分以上が確認された。出土遺物は第18図に示したものの他、弥生中期中頃のものの、古式土師器、奈良時代須恵器等である。68号トレンチでは住居跡3棟分を確認した。トレンチ東側で検出された住居跡は建材が焼失倒壊した状態で出土したが、本調査をまって発掘するために、それ以上は掘り下げなかった。出土遺物は弥生後期土器を主として中期土器、古墳末～奈良時代頃の

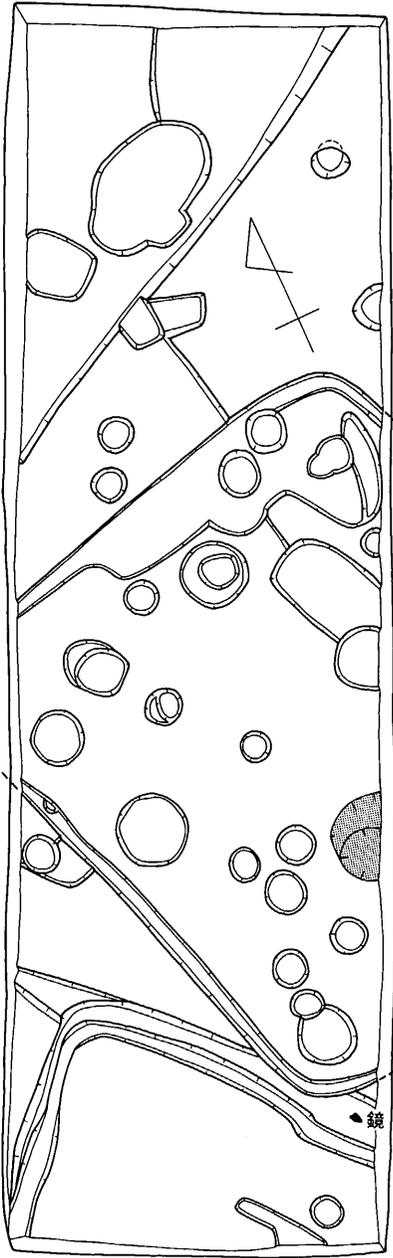
土師器が出土している。70号トレンチでは4棟分の方形住居跡を発掘した(第19図)。切合い関係は1号←4号→2号←3号の順である。1号はトレンチ北西隅でその一部が検出された。出土土器は第20図7002~7009である。7002は須恵器皿、7003~7006は土師器塚で内外ともに漆様のものを塗っている。7007は筆者が赤焼土器を四類に分け擬須恵土師器と分類したもので、形態は須恵器に似せようとし、須恵の手法ももつが、胎土および成形手法等からみて土師器工人によって作られ、土師器と同じ焼成法をも

つとした類^{註1}の坏である。内面には漆様のものを塗っている。7008は甗、7009は甗である。7002は奈良時代の皿であるが、他の土器から1号住居跡は古墳時代後期でもおそい時期のものと考えられる。7001は遺構確認前の黒色土から出土したものでいずれの住居跡に伴うものかわからないが、1号住居跡出土の塚とは趣を異にし、弥生終末~古墳時代初頭頃のもので、2・3・4号のいずれかに伴うものであろう。2号住居跡出土の土器は7010の袋状口縁壺の口縁片、7011の甗の口縁片、7012の脚付塚等である。7011は庄内式甗の口縁片と思われる。7010は弥生後期後半~終末頃に位置付けられるものであり、切合い関係からはこの住居跡の時期は7011の甗の時期、すなわち庄内式併行のものと考えられる。3号住居跡からは7013~7019等の土器とともに蝙蝠座鈕連弧文「長宜子孫」銘鏡の鏡片(第21図)が出土した。7013は内面ナデ、外面タタキを施す甗片で黄橙色を呈し、胎土には細粒の砂をわずかに含み、焼成は良である。この土器は畿内V様式系統のものと思われる。7014は弥生後期後半の高坏口縁片と思われる。7015は高坏坏部で復原口径は29.5cm。内外ともにハケ目の後暗文を施す。黄褐色を呈し、胎土には

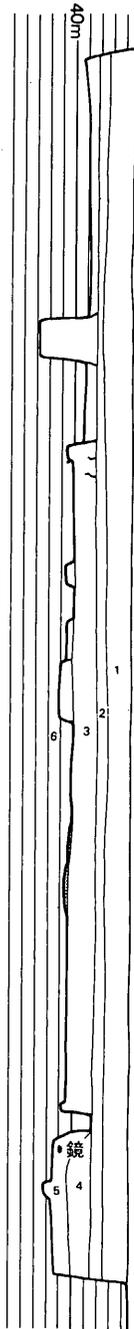


第18図 E・F地区出土土器(1/3)

S2080



1. 表土 2. 床土 3. 黒褐色土 4. 黒色土 (ロームブロック少し含む)
 5. 黒褐色土 (ロームブロックを多く含む) 6. 黄褐色ローム

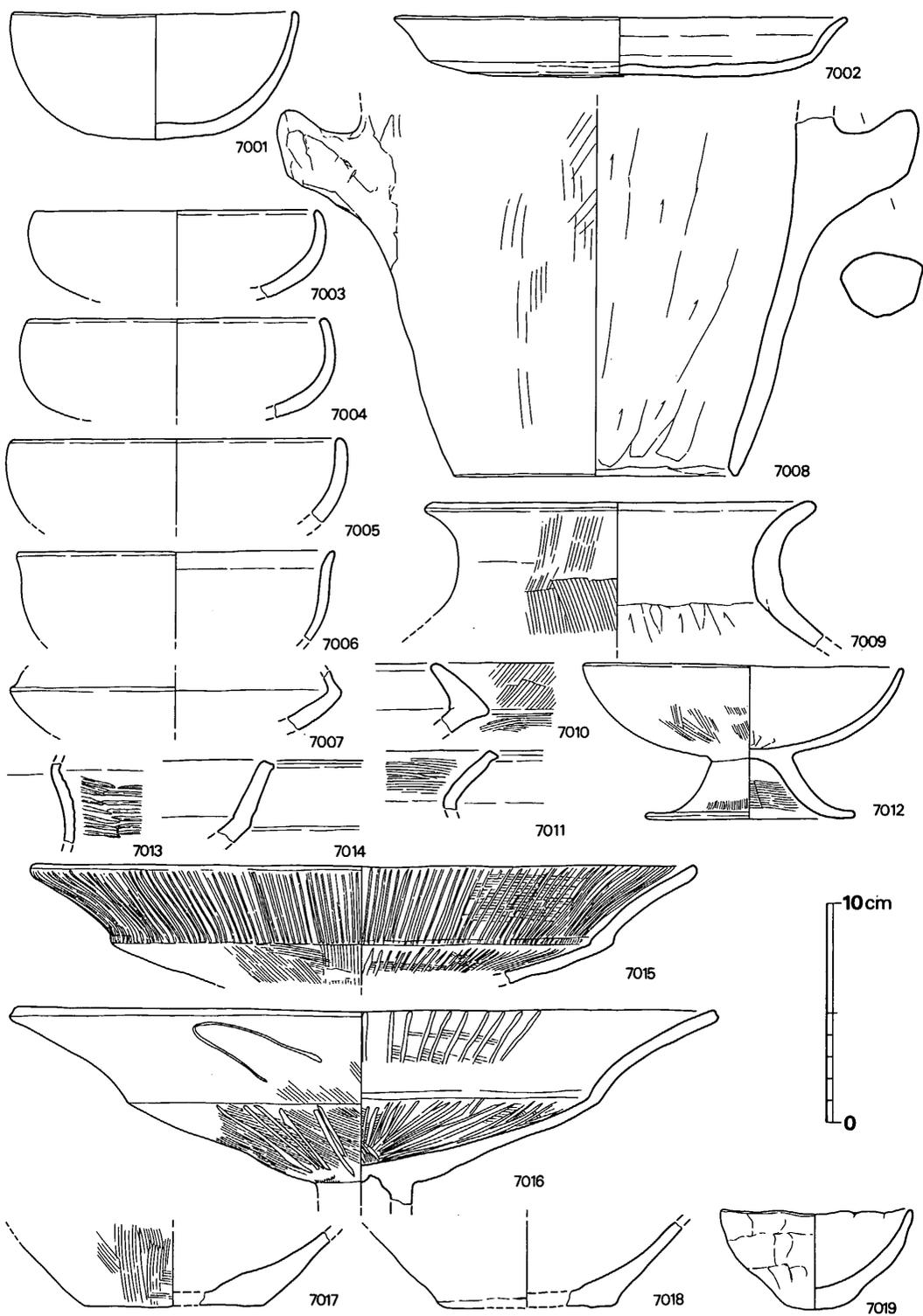


細粒の砂をわずかに含み、
 焼成は良好。7016は高坏坏
 部で復原口径31.2cm。内外
 ともにハケ目の後暗文を施
 している。淡黄褐色を呈し、
 胎土には細粒の砂粒を含み、
 焼成は良好。7017、7018は
 ともに底部で、かなりだら
 けてはいるが未だ平底を呈
 している。7019はかなり丸
 底に近い底部をもった鉢で
 ある。これらのうち、7014、
 7017、7018はやや古く弥生
 後期後半頃に、7015、7016、
 7019は、7016の口縁がやや
 長くなり、屈曲部の稜が
 7015に比しやや不明瞭にな
 りつつある点で後出的な要
 素をもつが弥生後期末に
 位置付けて大過はなからう。
 したがってこの住居跡の時
 期は弥生終末としてよい。
 鏡は復原径13.8cmでいわゆ
 る1寸2.3cmとして6寸鏡
 にあたる。縁の厚さは2.
 8mm、連弧文および鈕座の
 厚さは2.2mm、他の部分は1.
 4mmを測る。「長直子孫」銘
 のうち、長直の部分は残る。
 破損面は研磨を加えている。
 銹質は深緑色の良好なも
 ので銅質のよいことを示して
 おり、鏡面は現在でもまだ

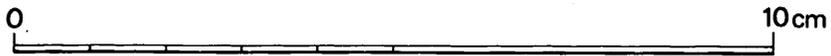
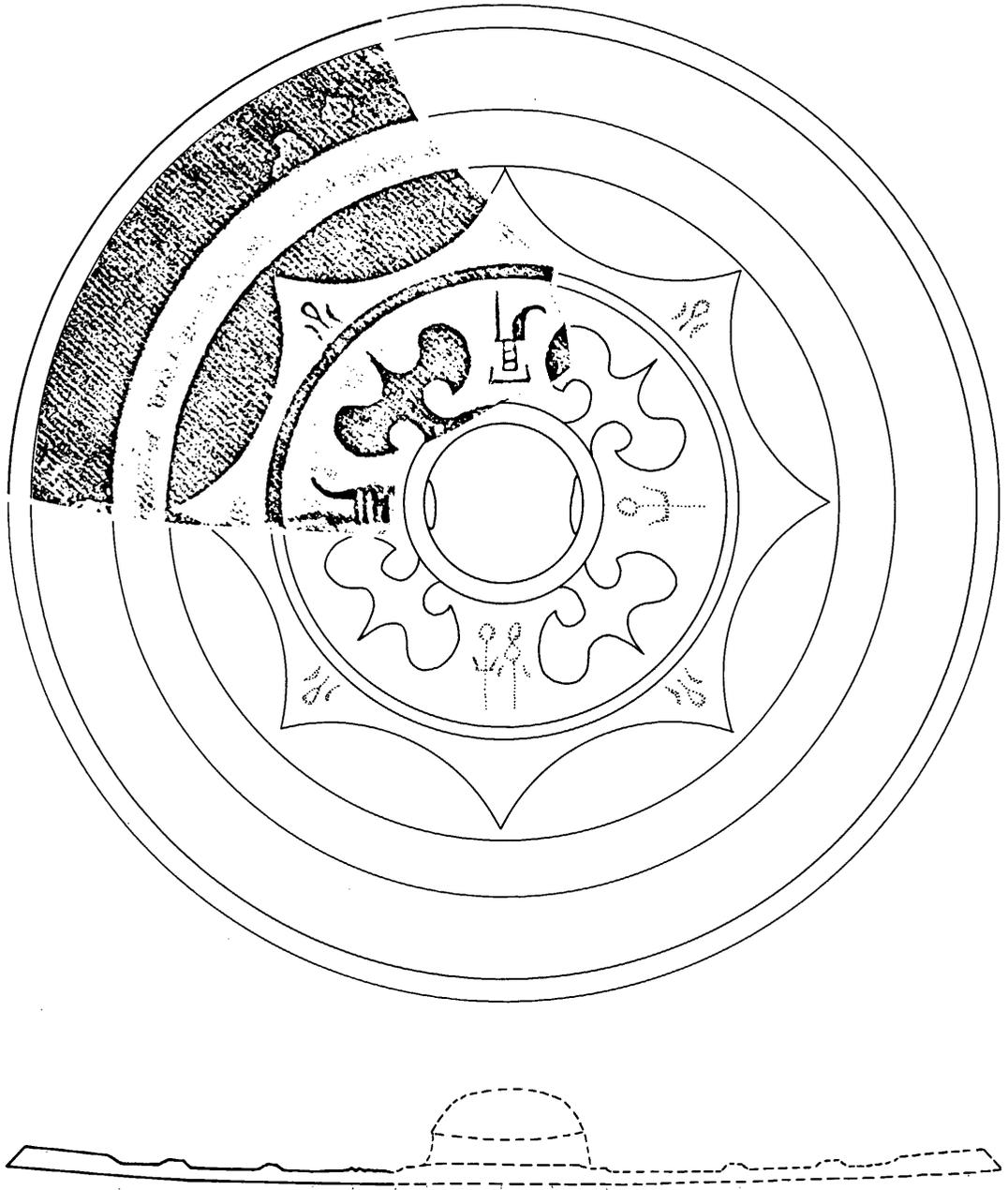
E180

0 2m

第19図 70号トレンチ (1/60)



第20图 F地区出土土器 (1/3)



第21図 70号トレンチ 3号住居跡出土の鏡 (1/1)

写るほどである。鏡背の凹部には赤色顔料を塗彩している。

筆者はかつて弥生時代の年代論の根拠の一つとしてこの鏡と7015、7016の高坏を使用した。^{註2}
この鏡は後漢桓帝～献帝頃に比定される洛陽焼溝漢墓第6期つまりA. D. 146～A. D. 190頃に比定され、当時この高坏をKVd式併行期としてA. D. 200年前後の年代を付与した。^{註2}現在ではKVf式とした久留米市祇園山K-1は布留式の最も古い型式に併行するものと考えており、^{註3}7016の高坏がやや後出してもKVe式併行で、庄内式土器と併行するものと考えられ、祇園山K-1より先行することは確実である。したがってこれらの時期を下げる必要はなく弥生時代の終末を3世紀中頃とした筆者の弥生時代年代論の根拠は大過ないものと考えている。

4号住居跡は切合い関係から弥生後期後半～終末頃のものと考えてよからう。

註1 橋口達也『野間窯跡群出土の「似非土師須恵器」について』福岡県教育委員会『野間窯跡群』岡垣バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集 1982

2 橋口達也「甕棺の編年的研究」福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XXXI-中巻 1979

3 橋口達也「北部九州における陶質土器と初期須恵器——近年の成果を中心にして——」甘木市教育委員会『古寺墳墓群』II 甘木市文化財調査報告第15集 1983

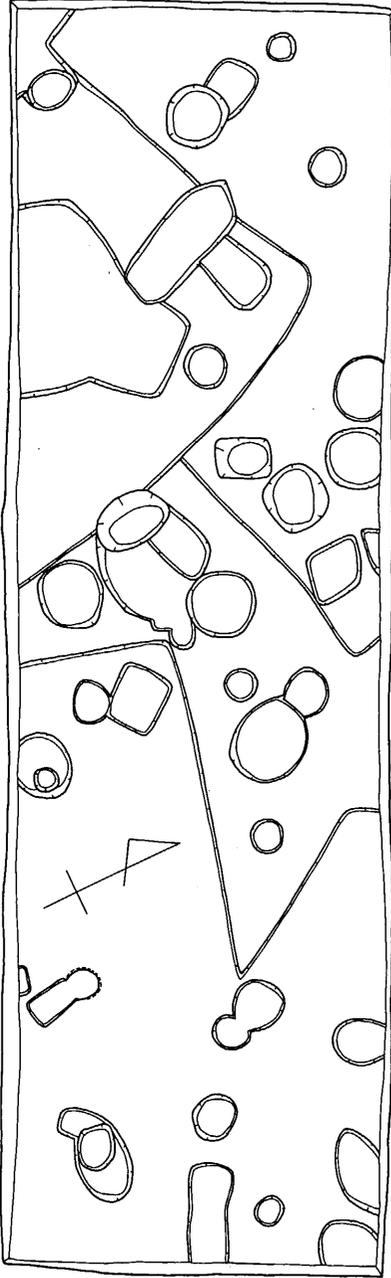
8) G地区

G地区は77トレンチで住居跡4棟分を検出した(第22図)。遺構検出の過程で土師器、須恵器を多く検出したが、いずれの住居跡に伴うかは確定できない。第23図7701～7716は手づくね土器の小塊、7717～7719は塊、7720は浅めの塊、7721は高坏、7722は擬須恵土師器の高坏、7723は甕胴・底部、7724～7726は須恵器坏蓋、坏である。須恵器はIV式のもので6世紀末に比定される。御笠地区圃場整備地内で、予備調査において古墳時代後期の住居跡が検出されたのはF地区、G地区のみであった。

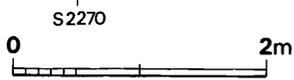
3 小 結

以上簡単に予備調査の結果を紹介したが、全域にわたって弥生中期、後期、古墳時代前期土器、奈良時代須恵器等が検出された。最も目立つものはA地区においては奈良時代、B～F地区においては弥生後期後半～古墳時代初頭、G地区では古墳時代後期の遺構遺物であった。弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての遺構が最も多く分布するのは北部九州では一般的であり、この段階で土地の開発がピークに達したことを示している。その過程で弥生中期以前の遺構はかなりの削平を受けたものと考えられる。同一地域において5世紀前半頃までは遺構

E165



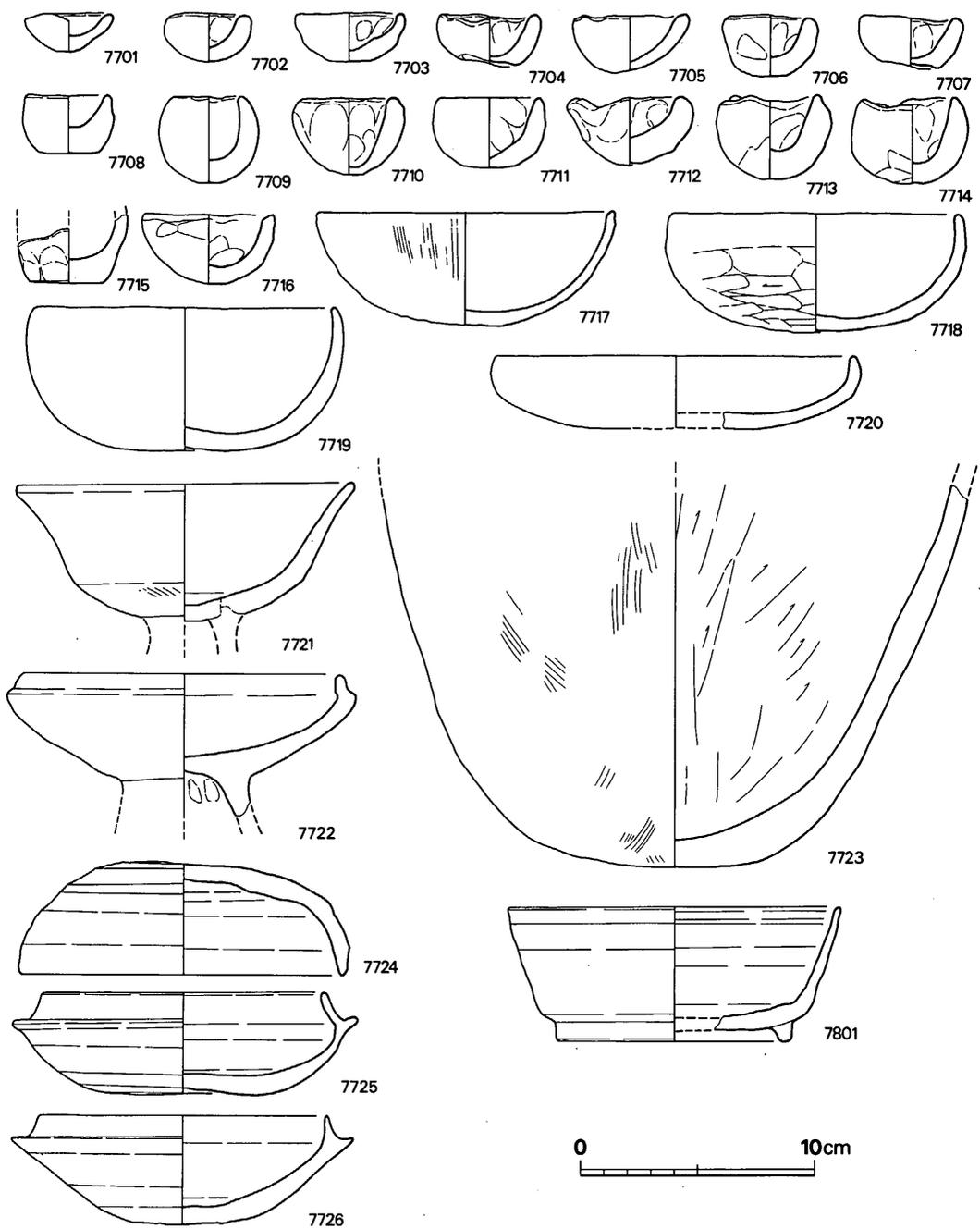
E175



第22図 77号トレンチ (1/60)

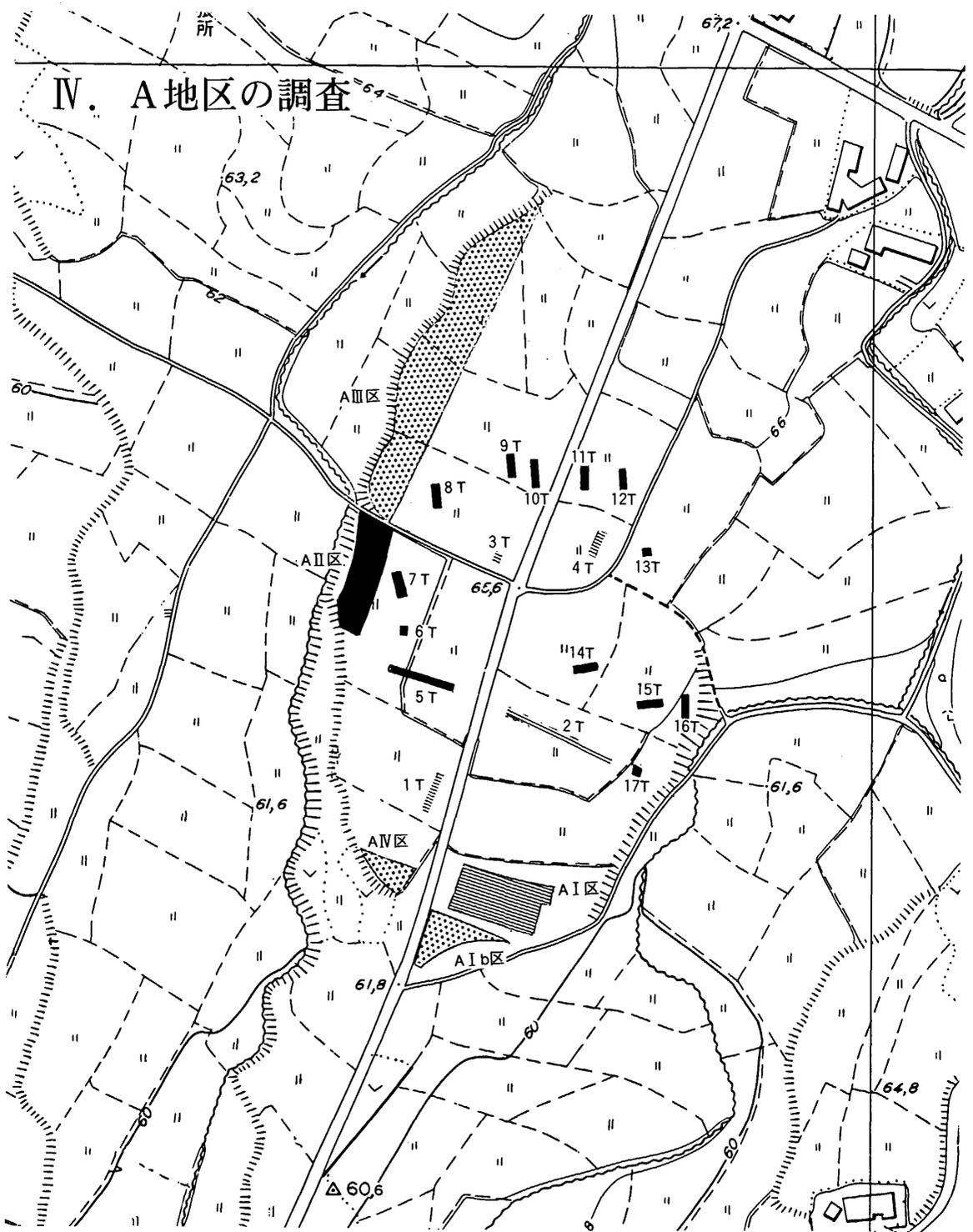
がみられるが、古墳時代後期になると、ここではF、G地区にほぼ限定され、それ以前の聚落は放棄または移転させられているといえよう。吉ヶ浦の甕棺墓地と関連ある聚落は最も近いC地区またはE地区の北部に、阿志岐古墳群を形成した聚落はFおよびG地区に想定でき、F地区周辺が弥生終末～古墳時代前期の、G地区周辺が古墳時代後期の御笠地区の中心的聚落であったものと考えられる。

奈良時代の遺構、遺物も多くみられたが、A地区において「蘆城の驛家」を推定できる掘立柱建物群を検出できたことは予備調査の大きな成果であった。



第23图 G地区出土土器 (1/3)

IV. A地区の調査



-  昭和53年度発掘調査地域
-  昭和54年度発掘調査地域
-  昭和55年度発掘調査地域

(縮尺1/2,500)

A地区の調査

1. A-I区の調査

A地点は舌状に伸びる台地上にあり、I区はこの台地の先端付近の南面する位置にある。標高約62.6mである。他地区はトレンチ掘りによる調査で遺跡の範囲確認に留めたが、I区では遺構の内容、規模等をより明確に把握するために広い範囲で発掘区を設定した。

調査の結果、発掘区の西北側では遺構面は浅く、薄い床土下に遺存し、遺構面は東南側に深くなっている。遺構面は地山となっており、この上には4枚の土層がある。1耕作土、2床土、3灰色土、4暗紫褐色土であり、第4層の暗紫褐色土にわりあい遺物を包含していた。遺物は須恵器や土師器等の小片ばかりで図示できるものは少ない。遺構は全体的にみてよく遺存している。住居跡2、掘立柱建物9、土壇2、溝状遺構3条が検出された。

(1) 住居跡

SX01 (第24図、図版11)

発掘区の西北隅において検出された。SB01掘立柱建物等が重複し、壁の一部が削られている。東西約5.8m、南北約4.9mを測る長方形プランを呈す住居跡である。若干の削平により住居床面はそれほど深くはない。支柱は4本で、柱穴はいずれも大きく、ほぼ円形プランを呈し、径0.7~1.0を測る。柱穴の深さは0.7m前後と深い。

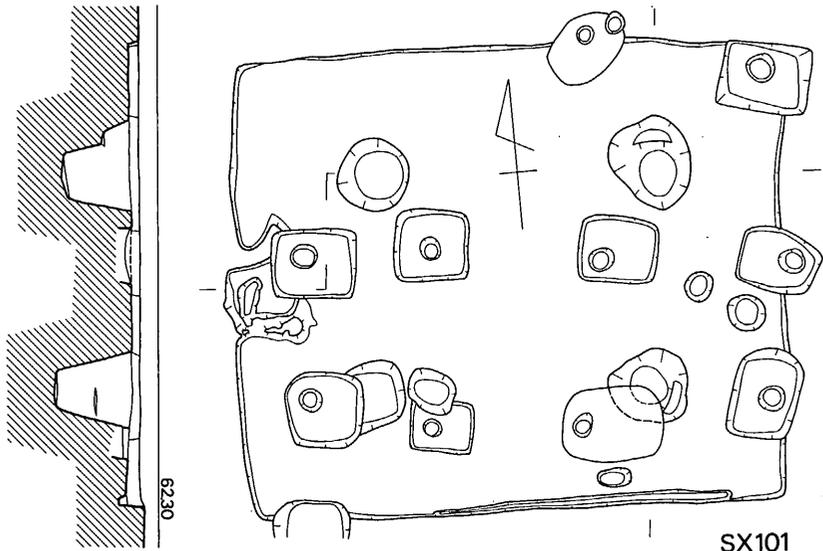
住居内の西側壁沿いのほぼ中央にカマドを施けている。カマドはSB01の柱掘り方により一部損壊している。SB01より古い。

遺物

遺物は須恵器、土師器、鉄器がある。土器はいずれも細片で図示できるものは極めて少ない。鉄器は錆がひどく、鉄塊状になっており、器種の判断もできかねるもので、図示しなかった。

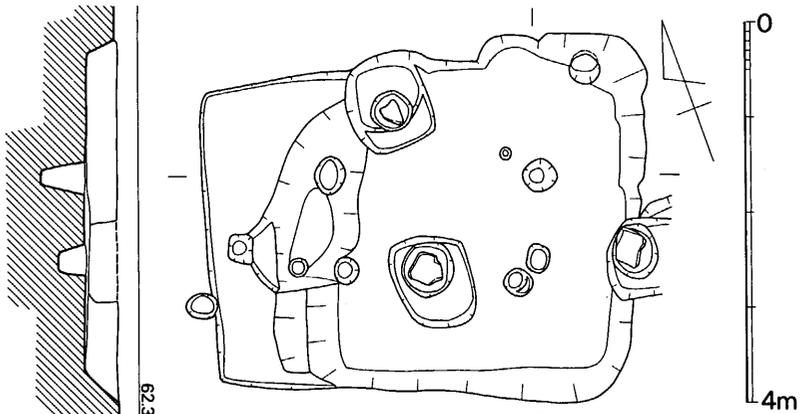
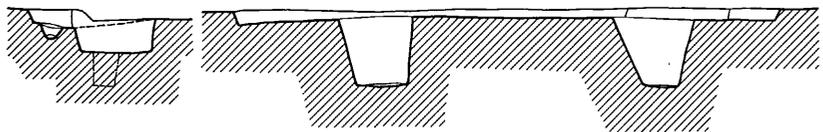
須恵器、土師器は坏、甕、高坏などがあるが、須恵器の坏蓋および土師器の甕が図示できた(第25図)。1、2の坏蓋は、身受け部に返りのあるもので、返り端部は丸味のある断面形である。3は外反する甕の口頸部である。器壁の厚いものであるが、焼成あまく器面の剥落がみられる。土師質の製品である。肩部にはハケ目が観察される。4は如意形口縁の甕である。口頸部から胴部外面はナデ整形で、胴部内面はヘラ削りである。

SX02 (第24図、図版11)



SX101

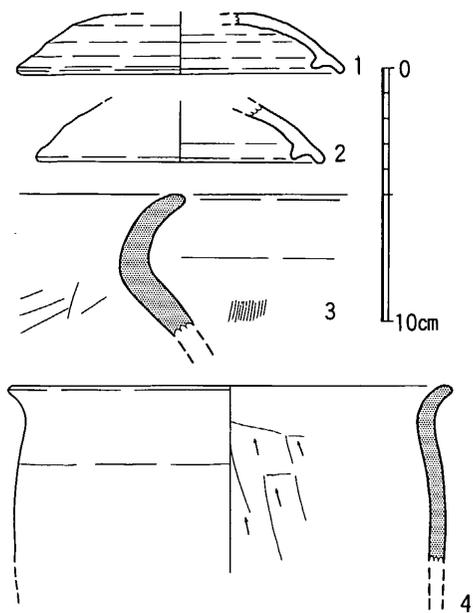
62.30



SX102

62.30

第24図 A-I区 SX01・02実測図 (1/80)



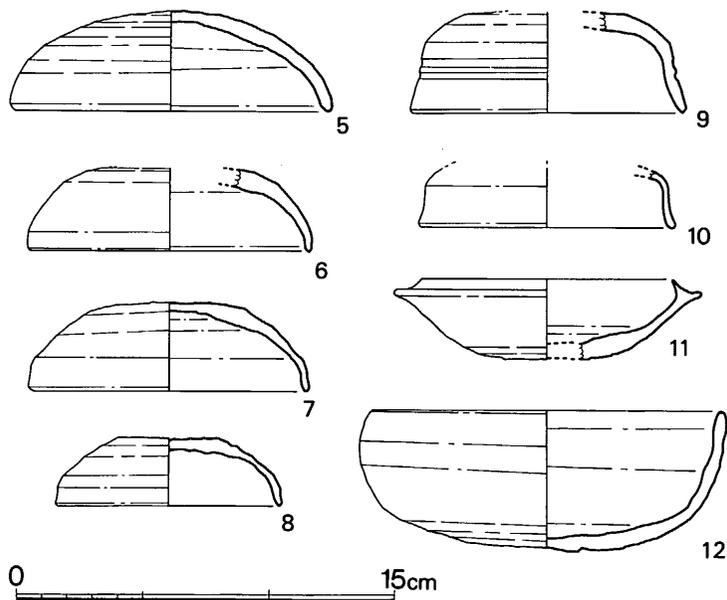
第25図 A-I区 SX01出土土器実測図 (1/3)

坏蓋（5～8）は4点がある。5は器肉が厚いものである。全体に丸味があり、器面の調整は天井部外面が回転ヘラケズリであるほかはナデである。6は身受け部が短く直立する。天井部を欠くが、調整は天井部の外面が回転ヘラケズリであるほかはナデによる整形である。7はや

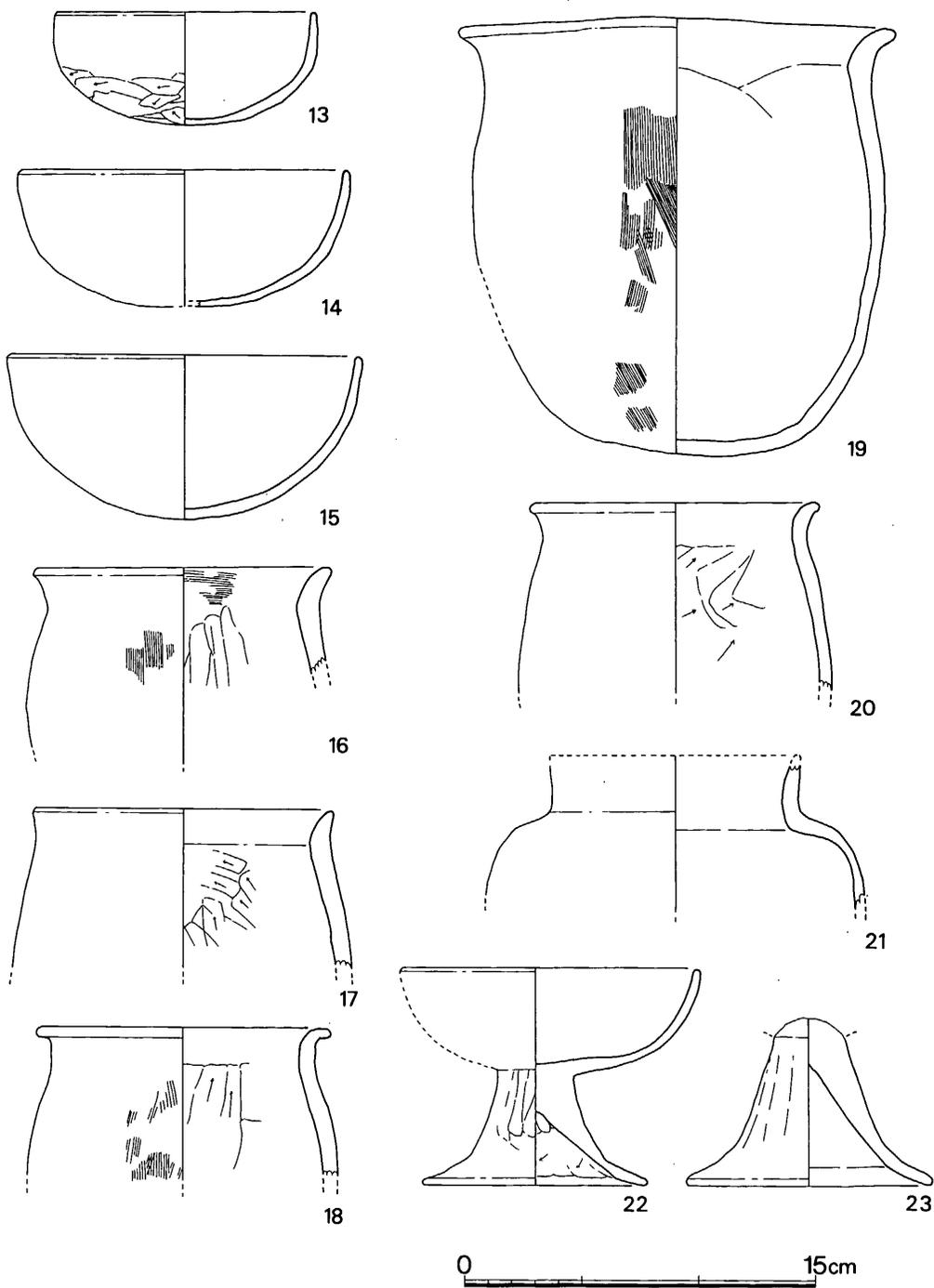
SX01の東側において検出された。SB08が重複し、当住居跡を壊している。長軸をほぼ東西に置き、その長さ約4.6m、南北は約3.0～3.85mを測る。台形状のプランを呈す。床面は西側でベッド状に高くなっているが、不整なものでありベッドか否か不詳である。主柱は4本かと考えられる。柱間は東西間に比べ南北間が非常に狭くなっている。柱穴の深さや床面での柱穴と思われる小穴の位置からして、2本柱とするよりも4本柱とした方が妥当と思われる。住居内にはカマド等の施設は確認されなかった。SB08より古い。

遺物

遺物は須恵器、土師器が出土している。須恵器は坏蓋、坏身、蓋、碗がある（第26・27図）。



第26図 A-I区 SX02出土須恵器実測図 (1/3)



第27图 A—I区 SX02出土土師器実測图 (1/3)

や薄手のものである。器面の調整は回転ヘラケズリのあとにナデ整形を施す。天井部外面には回転ヘラケズリが認められる。8は最も小径のものである。天井部は平坦で回転ヘラケズリによる調整で、体部は内外面ともナデ整形である。これは坏蓋というより坏身かも知れない。9は身受け部がやや外に広く形状で、体部に2黒の浅い沈線を施す。形状からして高坏の坏部かとも思われる。10は非常に器肉の薄いものである。身受け部がゆるやかに外反する。短頸あるいは直口の壺の蓋であろう。11は坏身である。蓋受け部は平坦でやや厚く、口縁部は短く大きく内傾する。器高も低く、やや平坦な底部となる。底部外面が回転ヘラケズリであるほかはナデによる調整である。12は堦であろうか。器肉の厚いもので、口縁部はやや内傾する部分もある。全体に丸味のある器形である。外底面は回転ヘラケズリである。

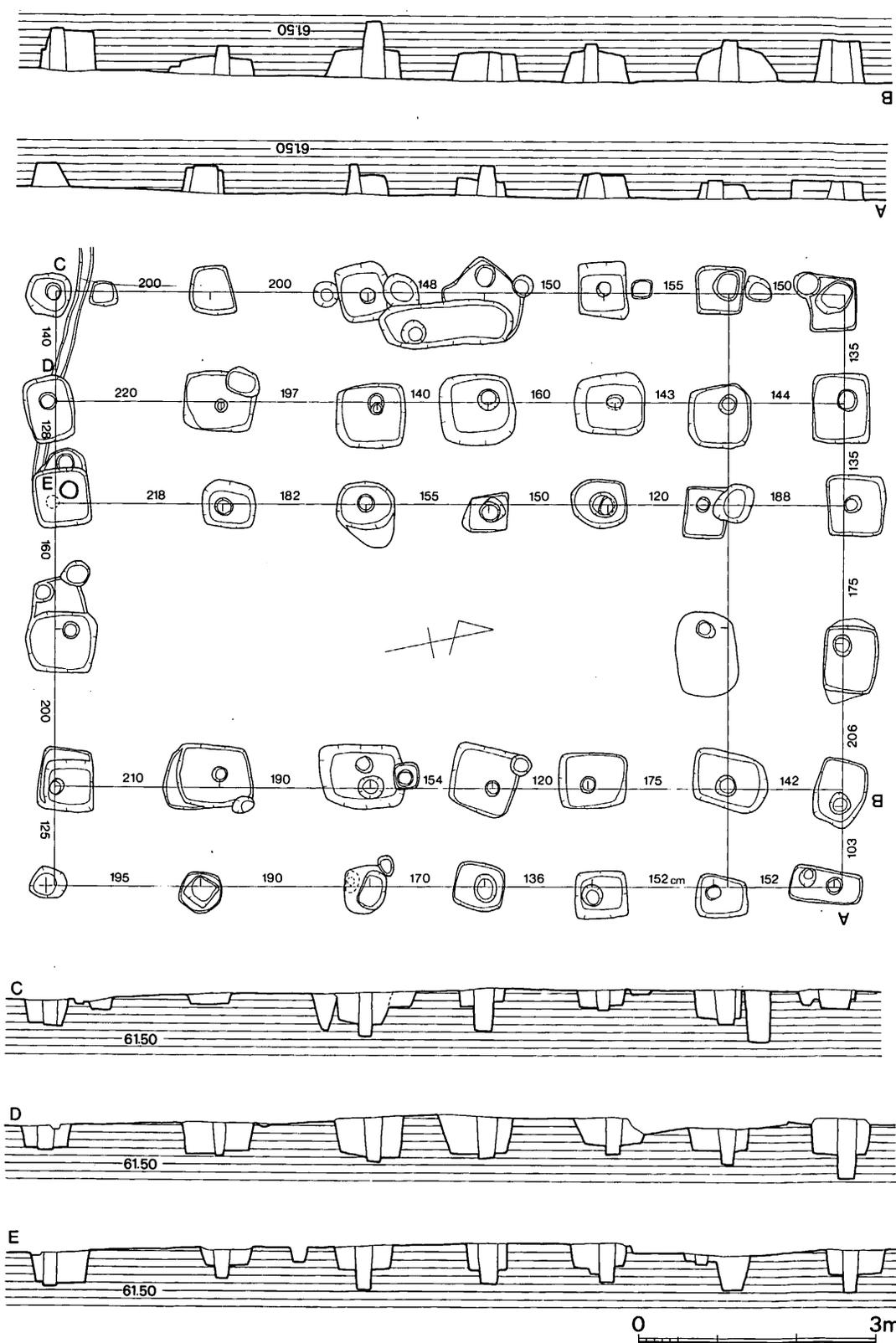
土師器は堦、甕、壺、高坏がある。堦は3点あり、13はやや直立する口縁部で深みのある器形である。外底面は手持ちヘラケズリである。14・15は同様の器形で、全体に丸味があり器高も深い。甕はいずれも小形のもので、15のみが完形品である。16・17は軽く外反する口縁部をもち、内面に稜がつく。両者とも胴部内面はヘラケズリ整形で、16は口縁部内面と体部外面にハケ目を施す。18は大きく外反する口縁部で、口唇は平坦となっている。体部は内面ヘラ削りで、外面はハケ目である。19は口縁部に歪みのある甕である。胴部最大径は上位にあるが、口縁部径より小さい。底部は丸底であり、口縁部は厚く大きく外反する。体部の内面はヘラ削りで外面は細いハケ目を施す。20は口縁部が短く外反しやや肥厚する。体部内面はヘラケズリであるが、外面は剝落により不詳である。21は直口の口縁をもつ壺である。口唇部を欠損するものである。胴下部を欠損するが、肩がはやや張り、下胴部は丸味のある器形であろうか。高坏(22・23)は、一点がほぼ完形で、他は脚部だけである。18は坏部の一部を欠くが、器高約9cmを測る。坏部および脚部の外面がヘラ削りである。23は高坏の脚部で、かなり大きな坏部がつくものと思われる。脚体部は内外面ともヘラ削りである。

掘立柱建物

SB01(第28図、図版8)

発掘区の西側にて検出された。SX01と重複し、掘り方の数量から当初2棟の建物が重複して遺存しているものと思われ発掘を進めたが、全体的にみて柱間に不合理な点が考えられた。検討の結果、2間×5間の本棟に南側を除く三面に庇が施けられ、西側にはさらに孫庇のつく建物と判断した。

建物の柱掘り方は大小あるが、総体的にみて掘り方の大きさはそれほど大きくはない。掘り方はおおむね長方形および方形プランを呈し、柱痕跡が観察される。これによると建物は梁行2間で総長約3.6m(12尺)、桁行は5間で総長8.25m(27.5尺)を測る。桁行の南側2間は柱間は2m前後と広く、他の3間の柱間は1.5m前後と狭くなっている。すなわち南側2間は6～7尺で、他3間の5尺に比べ広く柱間をとっている。これは庇にもこの差が観察される。庇



第28图 A—I区 SB01实测图 (1/80)

はほぼ4尺幅で桁行6間、5尺幅で梁行4間が取りつけられ、西にはさらに4尺幅で孫庇が取りつけられている。方位はN-11°30'-Wである。

なお、前述のとおり当初2棟の建物と観察し、SB01とSB02としていたので、SB02は欠番とする。

SB03 (第29図、図版8)

発掘区の西南隅において検出された。このため遺構の全容はつかみ得ないが、長軸を南北に置く建物と考えられる。柱掘り方には柱痕跡を観察できるものもある。掘り方は等間ではなく、さらに直線上にはなく多少の出入りがあるが、各柱間は梁行で1.22mと1.52m、桁行で1.55m、2.02m、1.4mを測り、相当の差が認められる。梁行は柱痕跡の認められない柱掘り方があるが、これが当建物に伴わないものであれば、この間は2.74m(9尺)となり相当柱間の広いものとなる。桁行は5~7尺が考えられる。建物はその規模が明らかでないが、他との比較から3間×5間の規模が推定される。方位はN-1°30'-Wである。

SB04 (第29図、図版9)

SB03の東側に隣接して検出された。遺構は総柱の建物と考えられるが、発掘区外の南にさらに延びるものか不詳で、このため2間×2間の東西棟なのか、梁行を東西とし南北に長い建物なのか判断しかねる。後述するSB05と同様の建物とも察せられるが、柱掘り方の規模からして、SB05よりも大型の建物が考えられる。規模は東西総長約4.5m(15尺)で、柱掘り方内に残る柱痕跡からは柱間は、東西で2.20~2.35mで、南北方向では柱間1.35~1.6mとなっている。各柱間には多少の差が認められるが、おおむね東西方向では7.5尺、南北方向で5尺等間となる。方位はN-30'-Wである。

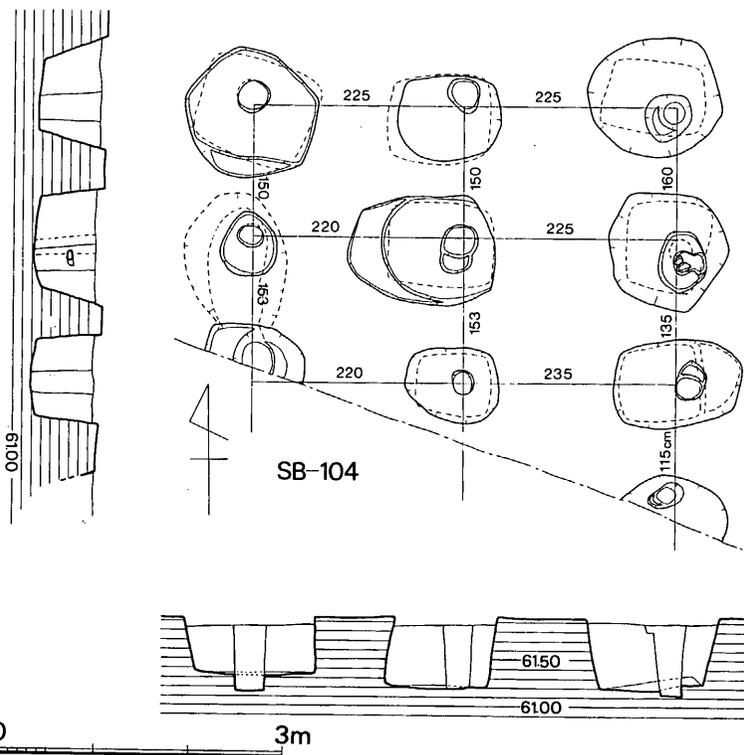
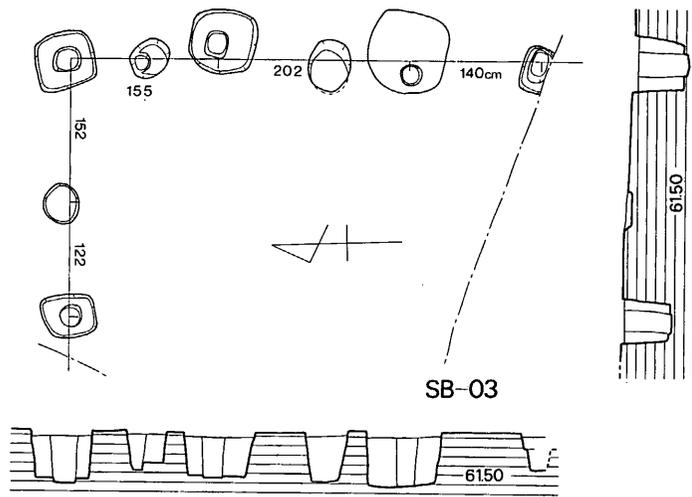
SB05 (第30図、図版9)

発掘区のほぼ中央において検出された。2間×2間の東西棟で、総柱の倉庫である。規模の小さな柱掘り方に柱痕跡の観察されるものがある。各柱間には多少の差が認められるが、梁行1.35m、桁行1.85m前後の等間である。方位はN-13'-Wである。

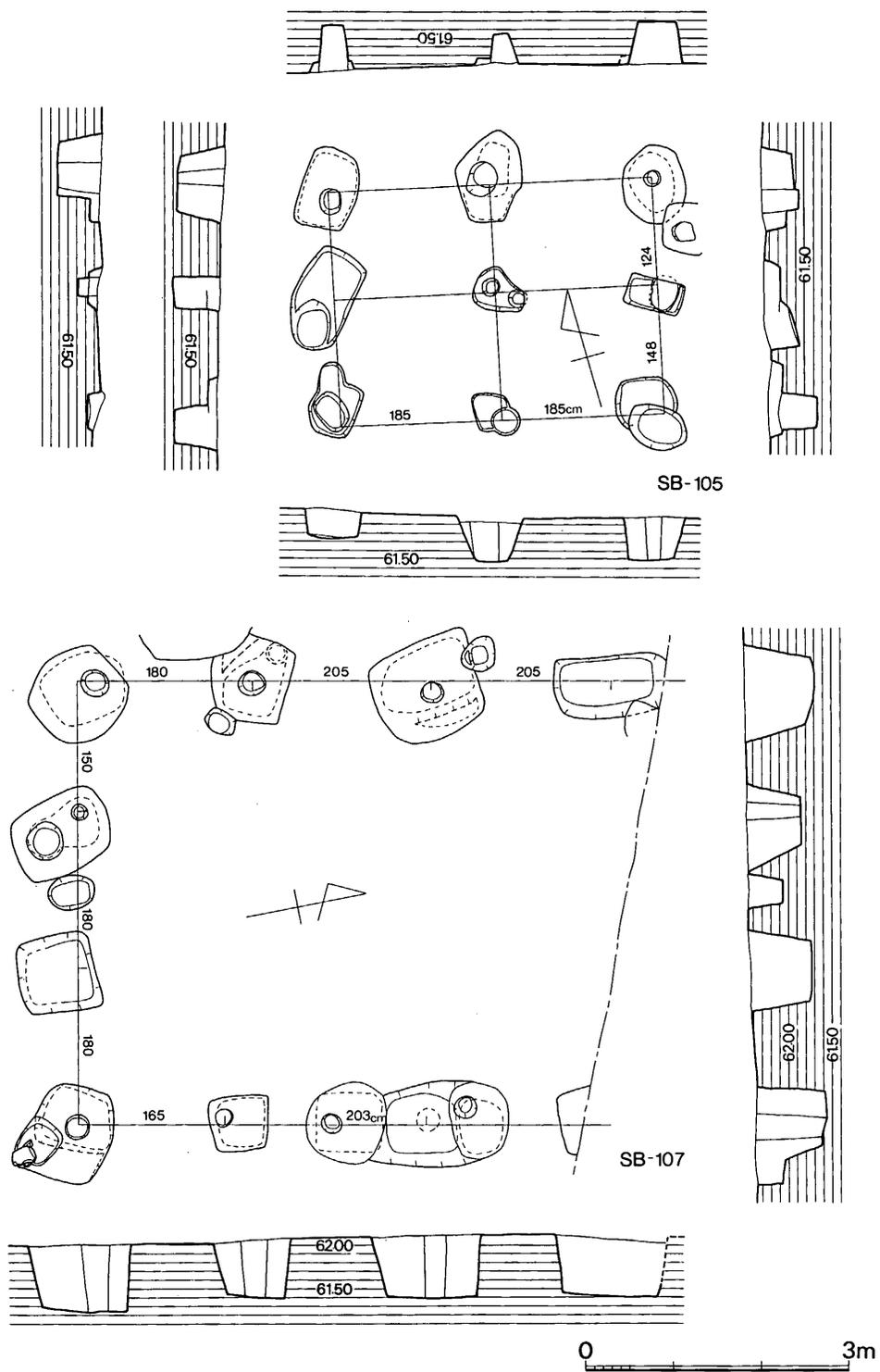
SB06 (第31図、図版10)

建物の平面規模が把握できる数少ない遺構である。梁行3間、桁行5間の東西棟である。柱は大きな掘り方に立てられている。掘り方は平面形が方形あるいは長形状を呈し、ほぼ斉一性が認められる。柱掘り方には、柱痕跡が観察され、径は0.2~0.4mを測る。これによると各柱間には多少の差は認められるが、梁行総長4.96mで各柱間は、1.43、1.72、1.81mを、桁行総長10.64mで各柱間は2.09、2.13、2.04、2.05、2.33mを測る。かなり大きな規模の建物である。総長と各柱間の数値から、梁行は総長が16.5尺で、各柱間は5.5尺となり、桁行は総長が約35尺で、各柱間は7尺と考えられる。柱間の広い建物である。方位はN-30'-Wである。

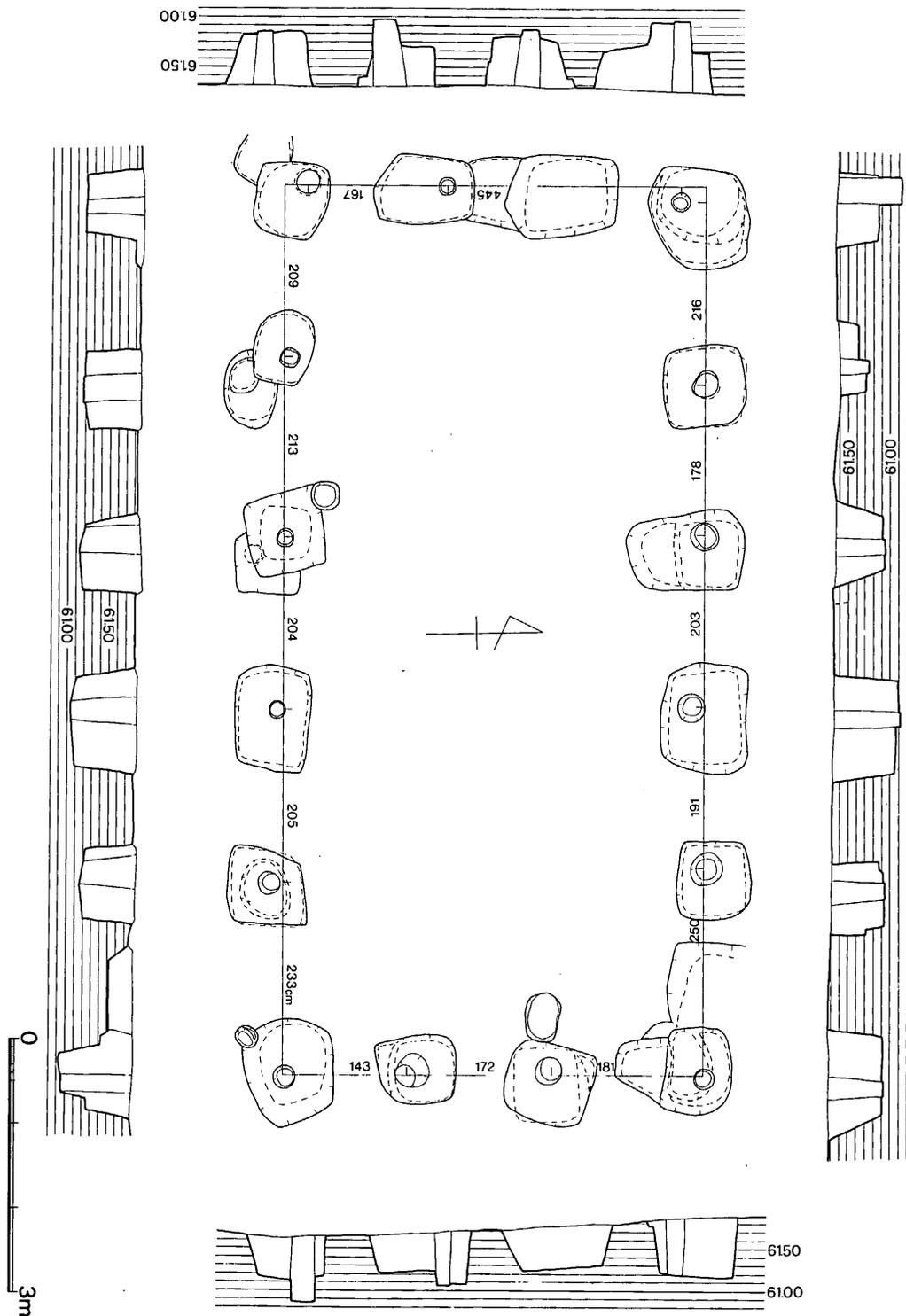
SB07 (第30図、図版10)



第29图 A—I区 SB03·04实测图 (1/80)



第30图 A—I区 SB05·07实测图 (1/80)



第31图 A-I区 SB06实测图 (1/80)

SB06の北に隣接して検出されたが、北半部が発掘区外に延びる。SB08、SB09建物と重複し、これらの柱掘り方も混在し、柱穴の位置関係の把握に困難を極めた。建物は南北に長軸をもつもので、柱掘り方に柱痕跡が観察できるものがいくつかある。これによると柱間等に多少の出入りがみられるが、梁行が1.5～1.8m（5～6尺）、桁行は1.65～2.3m（5.5～7尺）を測る。桁行の南側2間は柱間が広がっている。桁行総長は不明であるが、SB06と同じ3間×5間の規模と推定される建物である。掘り方の切り合いから、SB08、09より新しい。方位はN-110°-Wである。

SB08（第32図、図版10）

SB07、09の建物と重複する。東西に長い建物で、一部が発掘外に延びる。全容はつかめないが、梁行3間、桁間4間の東西棟と考える。建物の柱掘り方は大きく、柱痕跡を観察でき、さらにその中に扁平な石が確認された。レベル的には、それほど深い位置ではないが、根石と考えられる。この根石をもつ柱穴は桁行に観察される。梁行、桁行とも柱筋に多少の出入りはあるが、桁行は、各柱間が、3.05、2.85、2.45、2.22mを測る。柱間が広く、総長ではSB06と大差はない。桁行のうち西側2間分が他2間より広くとってあり、この間の掘り方には根石が2ヶ所検出され、桁行5間とも考えられる。この総長は10.65m（35.5尺）である。梁行は総長5.17m（約17尺）である。方位はN-17°20'-Wである。ほかの建物とは方位的には大きく異なる。

SB09（第33図、図版10）

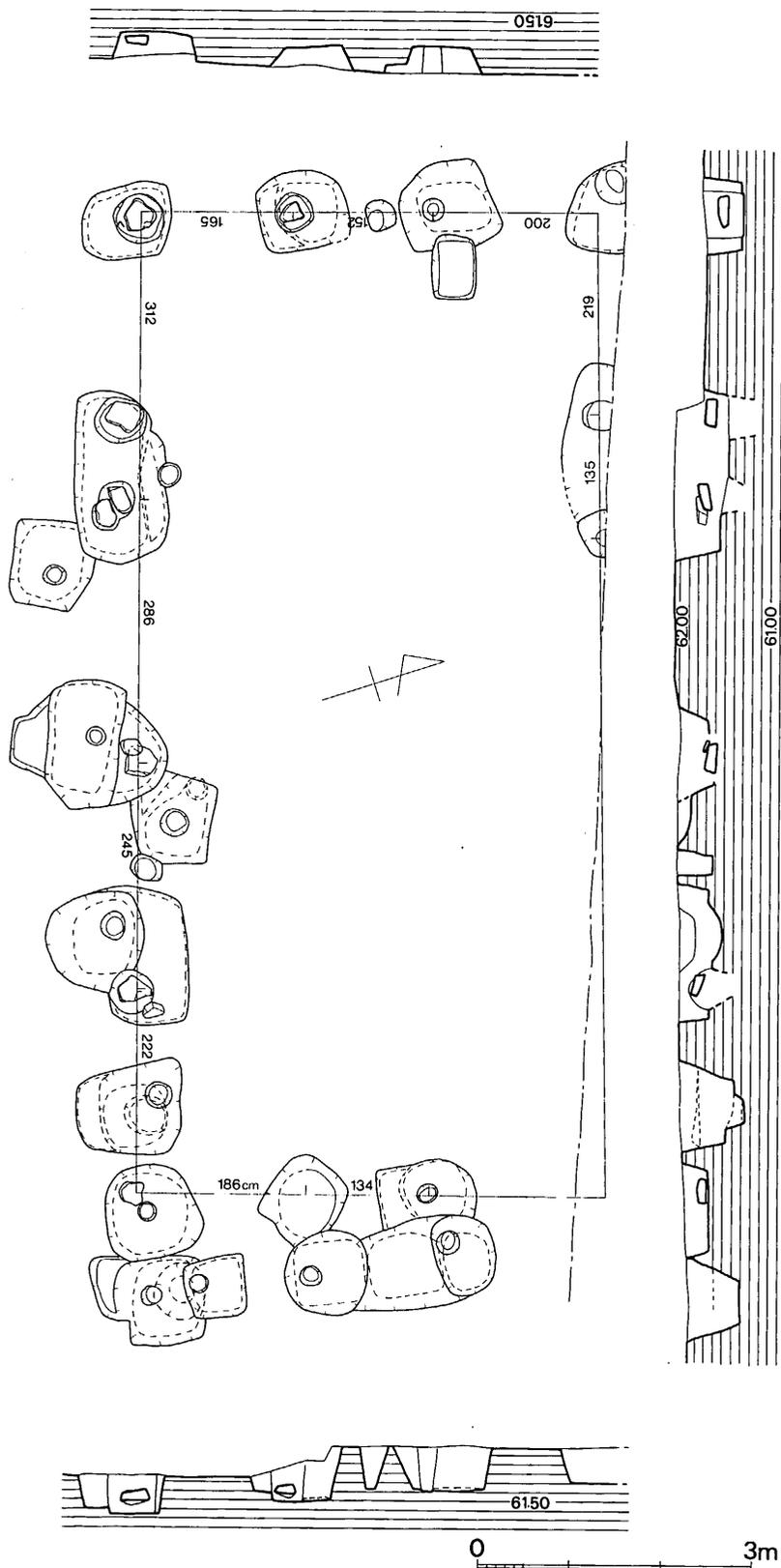
SB07・08と重複する。建物の北東側にあたる部分が発掘区外にあるが、梁行3間、桁行4間の東西棟である。柱掘り方は大きく、いくつかに柱痕跡が認められる。各柱間は西側梁行で1.59m、1.43m、1.77mを測る。桁行は南側で1.82m、2.07m、2.09m、1.93mを測る。これより各柱間と総長からして、梁間は総長で約16尺となり、柱間は5尺の等間か、桁間は総長で約26尺となり、柱間は6～7尺となる。方位はN-8°10'-Wとなる。SB01、07に近い方向である。

SB10（第34図）

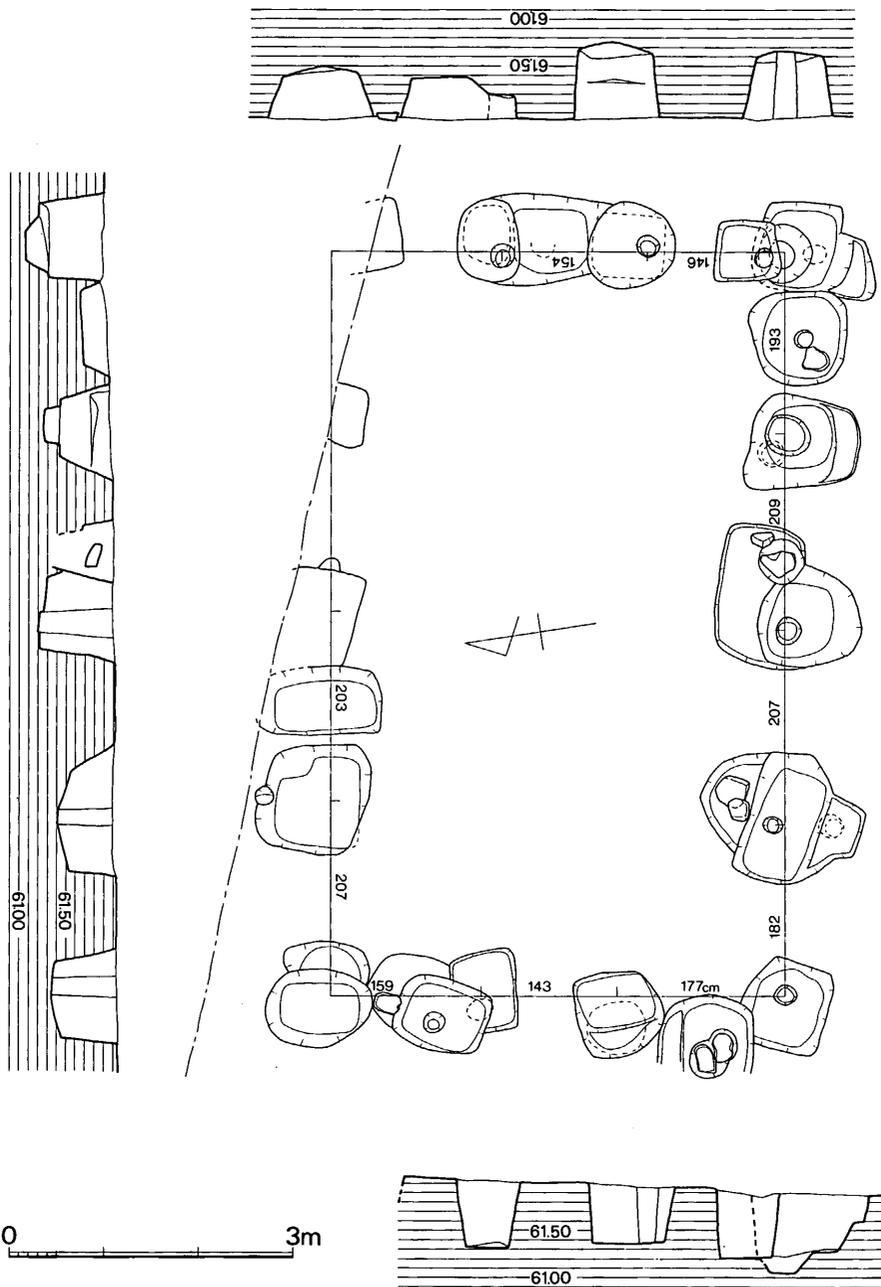
SB06の南にて検出された。建物の一部は発掘区外に延びるが、梁行2間、桁行3間の東西棟である。柱掘り方はやや小さく、柱痕跡は認められない。梁行は東側で総長3.3m（11尺）を測る。桁行は北側で総長4.5m（15尺）を測り、各柱間は1.5m、1.4m、1.6mとなり、5尺等間と考えられる。方位はN-1°30'-Wである。

建物はこのほかにもいくつか建つのではないかと考えられる。ことにSB10の東側には2間×2間の南北2棟が重複して遺存するように思えるが、確定できず建物として取り上げるまでにいたらなかった。

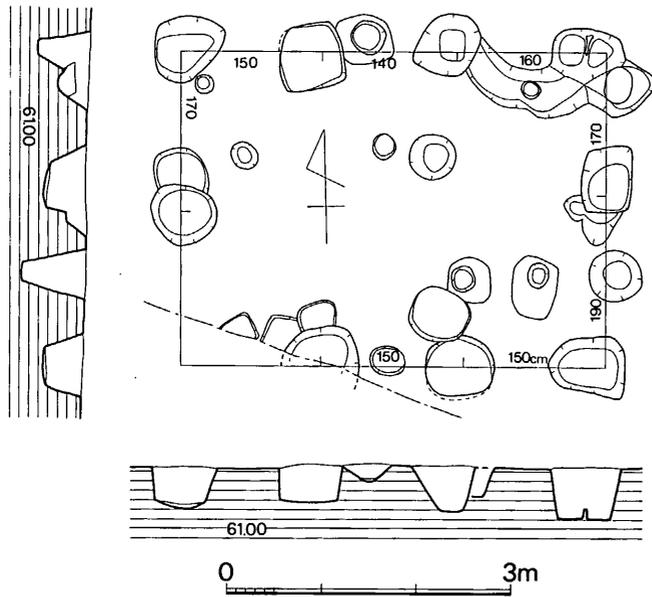
掘立柱建物群柱穴出土土器（第35・36図）



第32图 A—I区SB08实测图 (1/80)



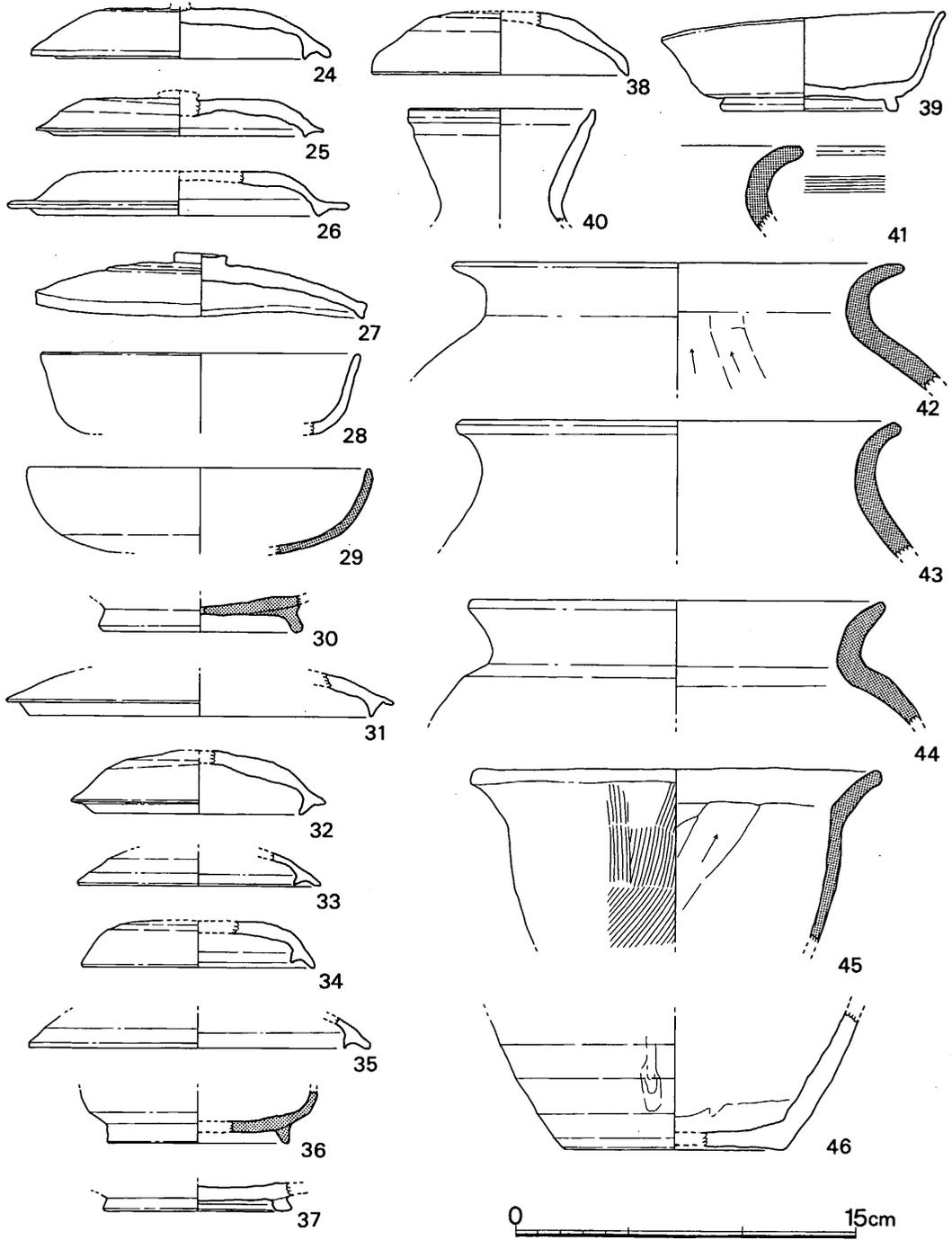
第33图 A—I区SB09实测图(1/80)



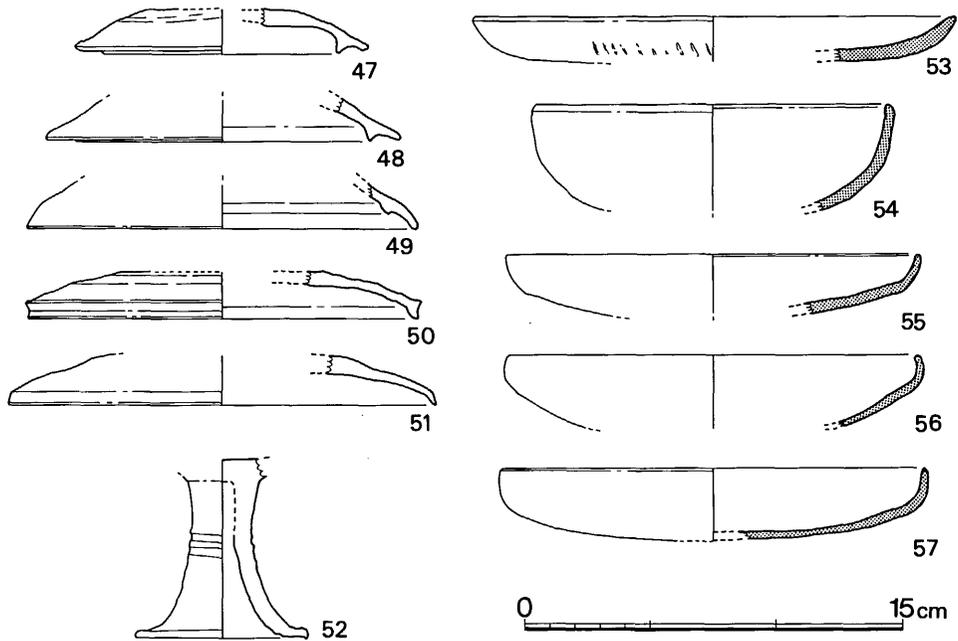
第34図 A—I区 SB10実測図 (1/80)

いずれも柱掘り方内から検出したものである。24～29はSB01の掘り方から出土。24～26は坏蓋で、身受け返りのつくもので、ボタン状の摘みのつくものである。27は碗蓋で口縁部は先端を肥厚することによって整形している。やや焼否みがある。28は碗の体部で、底部の形状は不詳である。29は土師器坏である。外底面は削りによるものか。30はSB03出土。土師器碗の底部である。高台はやや高く、畳付部は丸味を呈す。31はSB05出土。坏蓋の小片である。身受け部の返りは肥厚し、断面は三角形状をなす。32～36はSB06出土の坏蓋と碗である。坏蓋は須恵器で、いずれも身受け返りのつくものである。32は坏身とも考えられる器形である。36は土師器の高台付碗の底部である。外底面はヘラ削りの後にナデ整形を施す。37～39はSB07出土である。37は高台付碗の底部である。高台は低いものである。38は坏蓋である。身受け部は返りがなく、口縁部は器壁を肥厚させて整形している。37・45が伴出している。39は高台付碗である。焼き歪みのある器形である。40・41はSB06出土。40は平瓶の口頸部である。口縁部の内外に稜がつく。41は土師質の土器で、胎土は細砂粒を含む。焼成は土師器よりやや高温で、須恵質までに至っていない。大きく外反する口頸部で、内外面ともナデによる整形である。42はSB01出土である。41と形状をほぼ同じくする。ややもろく器面の剥落がみられるが、頸部から胴部内面はヘラケズリである。43・44はSB06出土である。41・42と同じ質のものである。44は肩部に稜縁がついている。41・42はいずれも器壁の肥厚するものである。45・46はSB07出土である。45は土師器の甕で、く字状に外反する口縁部は肥厚する。口縁部は内外ともナデ調整を施し、体部の内面は下方からのヘラ削りである。同部外面はハケ目である。46は須恵器壺の胴下部である。外面はヘラ削りである。自然釉が器面にみられる。47～52・54～57はSB09出土である。須恵器の坏および碗の蓋と高坏、土師器の坏と盤である。いずれも細片である。50の身受け部の返りは極めて短く、簡略化の傾向がうかがえる。47・48および55の盤は同じ掘り方より出土した。高坏は脚部のみで、体部に2条の沈線をめぐらす。脚端はあまり大径にはならず短い。54の坏は丸味のあるもので碗とも考えら

いずれも柱掘り方内から検出したものである。24～29はSB01の掘り方から出土。24～26は坏蓋で、身受け返りのつくもので、ボタン状の摘みのつくものである。27は碗蓋で口縁部は先端を肥厚することによって整形している。やや焼否みがある。28は碗の体部で、底部の形状は不詳である。29は土師器坏である。外底面は削りによるものか。30はSB03出土。土師器碗の底部である。高台はやや高く、畳付部は丸味を呈す。31は



第35图 A—I区掘立柱建物群柱穴出土土器实测图(1/3)



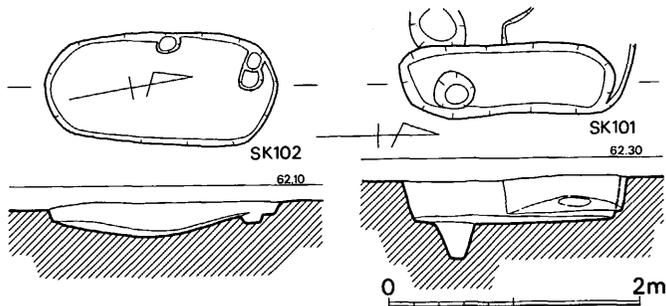
第36図 A-I区掘立柱建物群柱穴出土土器実測図(1/3)

れる。外底面がヘラ削りであるほかは内外面ともナデ整形をなしている。55~57は盤である。薄手造りのものである。口縁部は、外傾、内傾、直立と多様である。いずれ焼成あまく器面の剥落が著しい。53はSB08出土である。外面にはヘラによる暗文が観察される。

(3) 土壌

SK01 (第37図)

SB01の柱掘り方と重複し、SB01より新しい土壌である。ほぼ南北に長軸を置き、長さ約1.70m、最大幅約0.55mを測る。不整な長方形プランを呈し、壙底は深くほぼ平坦である。壙底にある小穴は、この遺構に伴うものである。埋土中には炭化木片が多く混入し、東・西壁の中央部が火熱により若干堅くなっていた。



第37図 A-I区SK01・02実測図(1/60)

SK02 (第37図)

SB01の南西隅に接して遺存する。ほぼ南北に長軸がある。長さ約1.75m、最大幅約0.9mを測る。楕円形状プランを呈す。墳底は平坦ではなく、ほぼ中央が深くなっている。墳底には小穴があるが、この遺構に伴うものか不明である。

(4) その他の遺構

溝、SD01～03の3条の溝とSD02に対応する溝の計4条が検出された。SD01はSB01建物の南に重複して検出されたが、非常に浅く、途中で消失している。SB01の柱掘り方を切っており新しいものである。SD02は発掘区の東北隅で検出された。SB07建物の東から蛇行し南東へ延びる。溝の西端部付近には、上面には河原石を集石している。この集石の間には須恵器や土師器の細片も認められた。さらに中ほどでは溝の北側肩部に河原石を配列している。この配石確認された時点で、発掘区を拡張し、配石がさらに延びるのかの確認作業を行なったが、溝の延長は認められたが、配石は新たに検出されなかった。しかしながら、拡張区南隅において配石に使用されたと考えられる石が散乱しており、従来は配石はあったものと察せられた。また、そのSD02に北側にこれとおおむね平行して走る細かい溝があるが、この幅約1.5mの間には、砂利を含む粘質土が硬くしまつて配石の傍から東へ確認された。この砂利まじりの粘質土は厚さ10cmほどで、溝とあわせて建物に関連する遺構かと思われたが、周辺の柱穴群からして、建物の一部というよりは通路と考えた方がよさそうである。すなわち、SD02と対峙す溝は、通路の両側に走る溝で、配石は路肩を安定するための施設であると考ええる。ただし、北側溝にはそれが認められない点で断定できない面がある。SD03は、北から南に走る小溝である。SD02より古い。深さ10～20cm程度のものである。

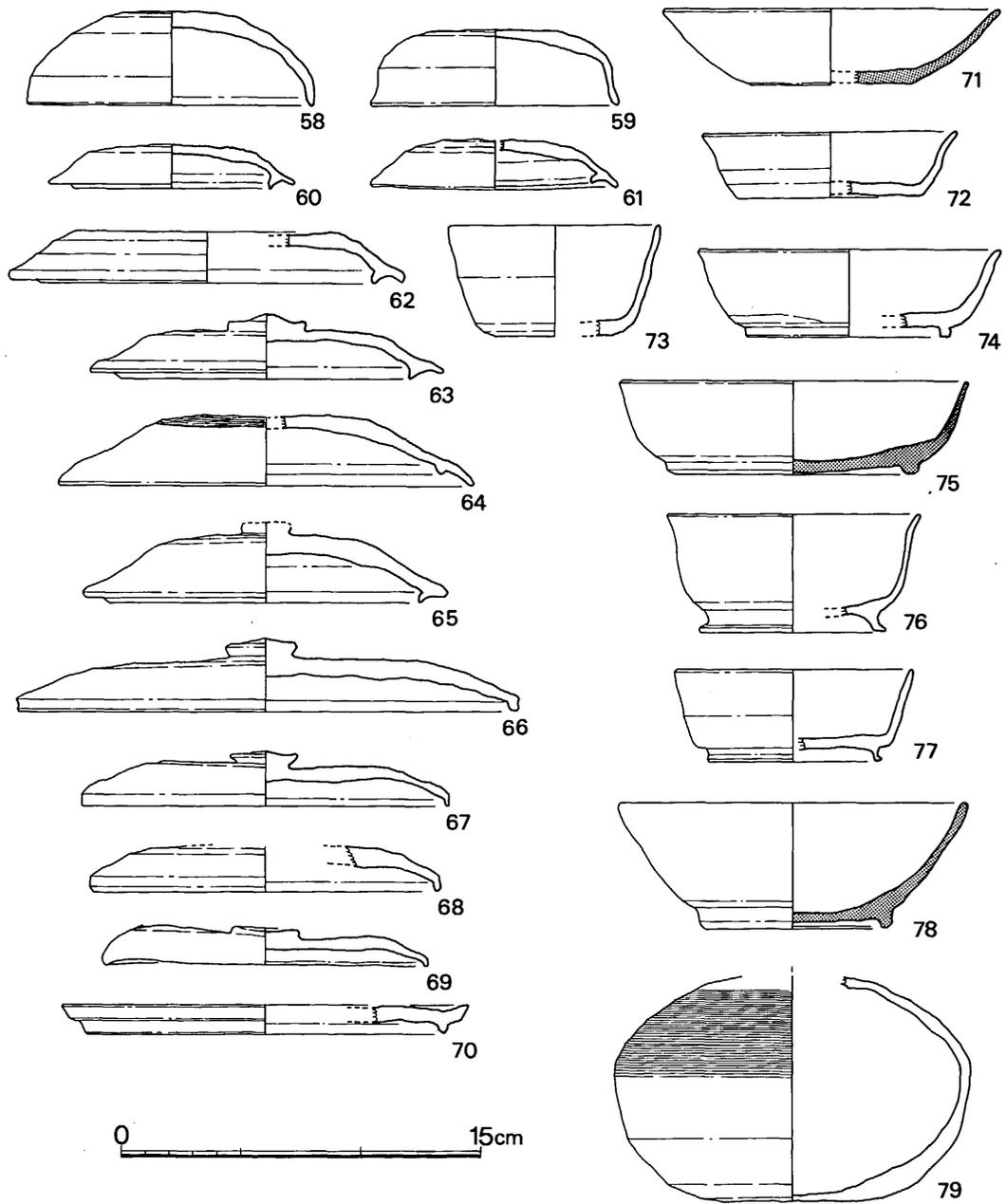
これらの溝のほかに、SB06のほぼ中央に長楕円形状プランの落ち込みがある。単なる落ち込みであった、SB06にも関連するものではない。

(5) 4層出土の土器 (第38図)

AI区の層序は、上から1層(表土)、2層(床土で黄色砂質土)、3層(灰色土)、4層(紫褐色土)、5層(黄褐色土、地山)となっている。4層は発掘区の東半部に厚く堆積し、特に東南に厚く堆積していた。遺物はこの4層に多く包含されており、2・3層には極めて少なく、細片が多い。遺構は4層の除去によって検出されている。

4層から出土した土器は、須恵器・土師器があるが、それらのほとんどが細片で図示できるものは少ない。

器種は坏蓋、坏身、壺がある。坏蓋は器形にバラエティがあり、時期差が認められる。58は器高の高いもので、身受け部は直口する。口唇部はやや尖り気味で、内面に稜がつく。天井部外面は回転ヘラケズリであるほかはナデによる整形である。59は薄手のやや小型の蓋である。



第38图 A—I区4层出土土器实测图 (1/3)

身受け部は外側にやや開くもので、器形的にみると短・無頸壺の蓋とも考えられる。60は身受け部にかえりのつくものでやや深い。かえり端部は尖っている。天井部外面は回転ヘラケズリである。同部にヘラ記号がある。61も小径の坏蓋である。身受け部はかえりがあり、受け部は浅い。天井部外面は回転ヘラケズリである。63は大径のもので、器肉のやや厚いものである。身受け部かえりもしっかりしている。天井部は欠失するが、回転ヘラ切りである。他はナデによる整形である。63は器形からしてやや大きな摘みをもつ。身受け部はかえりをもち、かえりはやや厚い。64・65は身受け部のかえりが簡略化したものである。64は天井部外面にカキ目を施す。65は厚みのあるもので、これに短いかえりがつく。66～69は端部を折り返している器形である。66は大径のもので厚く、摘みを付している。67も摘みのつくものである。69は焼き歪みのあるもので、折り返しは短く、いわば折り返し気味という感がする。簡略化したボタン状の摘みがついている。70は破片である。焼き歪みによるものか、特異な形状をなす。身受けかえりは直立し、跳ね上がる口唇部となっている。全体に厚手の土器である。71～73は坏身である。71は土師器で平坦な底部で薄手のものである。体部は大きく外傾するもので、扁平にみえる。72は薄手のもので、体部の上位がやや開く形状をなす。底部は平坦に近く、外底面にはヘラ記号がある。73は器高の高い坏である。やや外傾する体部上位にくびれがみられる。外底面は回転ヘラケズリである。74～77は高台付の塊である。74は口縁部がやや外反する。器壁のやや厚いものである。体部下位から外底部はヘラ削りである。高台は断面が方形状のものを付けている。75は土師器である。体部の器壁は薄く、底部はやや厚い。底部は平坦ではなく、高台も低い。76はやや器高の高い薄手のつくりのものであり、口縁部は外反し、内面に稜線がつく。付け高台は薄手のもので、外側に開き気味のもので、端部はつまみ出している。77は直線的に外傾する体部で、76とは若干趣きを異にする。平坦な底部に薄手の短い高台を付けている。高台の端部はつまみ出している。78は土師器の塊である。焼成あまく器表の剝落が著しい。高台は低いものである。内面は黒色を呈す。79は口頸部の欠失する壺である。断面形は扁球状を呈し、下胴部の器壁は厚い。肩部にはカキ目を施し、下胴部外面から底部は回転ヘラケズリである。底部にはヘラ記号がある。

2 A地区第1トレンチの調査

A-I区の西北側の水田で、ここに南北方向に幅3m、長さ約16mのトレンチを設定し、発掘調査した。調査の結果、表土下50～80cmのレベルに遺構面を確認した。遺構は住居跡1と掘立柱建物の柱掘り方群である。

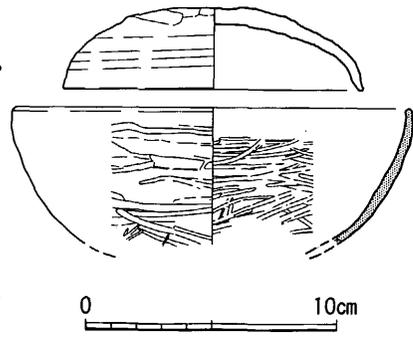
住居跡は、方形プランを呈するもので、南北辺約3.3mを測る規模である。居内東壁傍にはカマドを設けている。柱は柱穴の位置からして4本柱と考えられる。床面の深さは30cmほどで遺存状態はよい。

掘立柱建物の柱掘り方は平面形が不整形を呈し大きなものが多い。これらのうち、住居跡と重複する建物の一部が確認された。A-I区の建物との比較からして、3間×5間程度の建物が考えられる。方向もA-I区のSB04、06とほぼ同一である。他掘り方の規模、数量からして、A-IV区にもA-I区と同様規模の遺存することが考えられる。

A-IV区の土層は、表土（耕作土）、床土、黒褐色土からなり、調査区の南半には、床土下に客土層がある。遺構は黒褐色土層下の地山面で検出された。遺物は4層とした黒褐色土層に多く包含されていた。遺物は細片が多く、須恵器、土師器がみられる。他地区とほぼ同時期のものである。

住居跡出土の土器（第39図）

遺物は須恵器坏蓋（80）と土師器埴（81）とがある。坏蓋は口縁部を摘み出すように軽く外反させて身受け部としている。器高の低いもので全体に丸味がある。天井部外面は手持ちヘラ削りである。同部にヘラ記号がある。土師器埴は薄手のもので、胎土は精製土を使用する。底部を欠失する。口唇部がナデであるほかは、内外面ともヘラ削り後に粗雑な横位のヘラ磨きを施している。

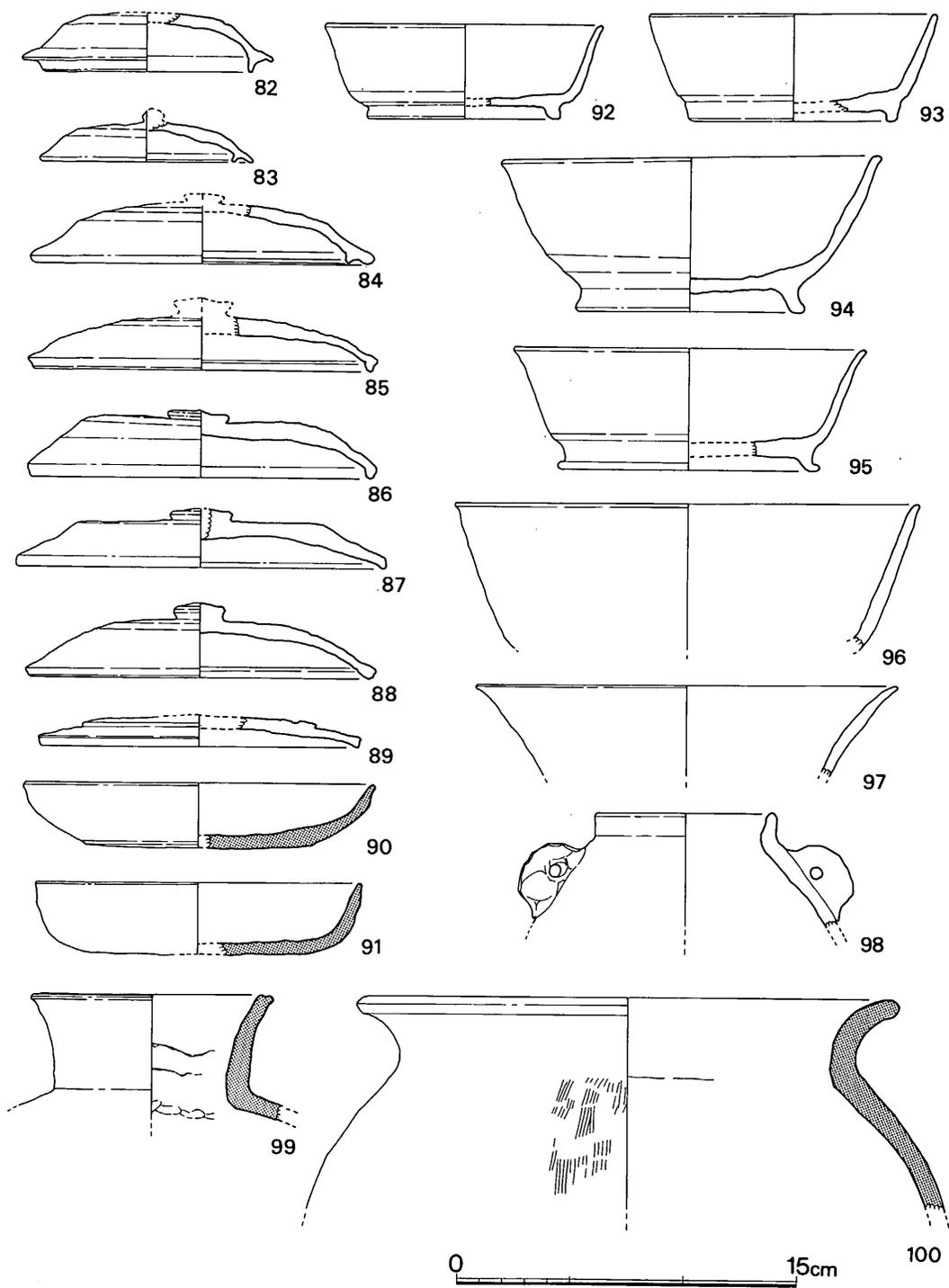


第39図 A地区第1トレンチ住居跡出土土器実測図（1/3）

3 A地区第2トレンチの調査

A-I区の北側の2mほど高い位置で、ここに幅3m、長さ45mの東西方向のトレンチを設けた。調査の結果、表土、床土、黒褐色土、地山となっている。黒褐色土は厚く、遺物を含む。遺構面は表土下30～50cmの深さにあり、東側に深くなっている。遺構はトレンチ内の両側では稀薄である。住居跡2軒と掘立柱建物の柱掘り方群である。住居跡は長方形プランを呈するものと思われる。時期的にはA-I・IV区のものと同時期である。柱掘り方は大小多数が検出されたが、トレンチ内では建物の規模は把握できないが、相当規模の建物の遺存が考えられる。また、これらはA-I区の遺構と一連のものとして推定される。

3層出土の土器（第40図）



第40図 A地区第2トレンチ3層出土土器実測図(1/3)

耕作土の床土下にある黒褐色土層にかなりの遺物が含まれていた。土器は須恵器が多く、土師器、瓦器がある。

坏蓋（82～89）は須恵器である。82～84は身受け部にかえりのつくもので、82・83は小型のものである。82のかえりに較べ、83・84は短くなっている。いずれも天井部外面は回転ヘラ削りである。85～87は口縁部を内側に折り返して身受け部とした坏蓋である。87は摘み出した感がある。85は天井部に丸味が残り、86・87は平坦となっている。88・89は口唇部を肥厚して身受け部としている。90・91は土師器の坏である。90は器高が低く、器壁は厚い。底部外面はヘラ削りで平坦である。91もやや器壁の厚いもので、底部外面には簾状の板目痕がみられる。92～96は高台付塊である。92は外傾する体部で、口縁部はやや外反する。平坦な底部に低い高台を付す。93は外傾する体部で、91に較べやや肥厚する器壁である。高台は低いものが付けられている。94～96は大型で、とくに96は特大のものである。94はやや厚手のもので、器高もやや高く、95に較べ丸味のある塊である。95は高台端をつまみ出し、畳付部を平坦としている。96は底部がないが、恐らく高台付の塊であると思われる。97は須恵器甕の口頸部と思われる。頸部から大きく開く形状をなす。98は須恵器で短口縁の壺で頸部下に耳がつく。双耳短頸壺と考えられる。99は須恵器の甕である。ゆるやかに外傾する口頸部をもつ。同部内面には粘土接合部や頸部に指頭圧痕が観察される。100は土師器甕である。器壁の厚い土器である。

口頸部は内外面ともナデ整形を、体部内面はヘラ削り、外面はハケ目整形を施す。

4 A地区第3・第4トレンチの調査

第2トレンチのさらに北側で、約70mほど離れた位置に、それぞれトレンチを設定した。

東側に、幅3m、長さ10mの南北方向の第4トレンチを設けた。遺構面は床土下にあり浅く、砂層となっている。遺構は小柱穴が数個程度で稀薄である。

西側では、幅3m、長さ5mの南北方向に第3トレンチを設けた。遺構面は砂質の土層で、レベル的には浅くなっている。遺構は小柱穴群が検出されたが、建物は把握されてはいない。

5 A-II区の調査

A-II区は大地の西端に当り、以前より削平と客土がくりかえされているため、遺構面の大半

が削平され、浅い小ピットが僅かに残るのみである。そのほかにウネと水田跡が検出されたが、いずれも近代のものと考えられる。

6 AⅢ区の調査

AⅢ区はA地区の西端、AⅡ区の北側に位置する。遺構面は削平を受け、ウネの跡が多く残る。遺構は掘立柱建物が多くみられるが、全体に小規模のものである。柱間が明確なものは2×3が4棟、1×3が1棟、1×2が5棟、1×1が13棟である。また土壟6基、溝3条が検出された。溝の内、溝1と2は幅5mで平行して南北に走るもので道路の可能性もある。

7 A地区第5～16トレンチの調査

A5 a トレンチでは多数の掘立柱跡を確認し大ぶりの掘り方をもつものも数個ある。うち明確に柱間の把握できるものは1棟で、東西2間の柱間をもち北に延びる建物である。また南北に延びる細い溝も検出した。A5 b トレンチでも多数の柱穴を確認した。柱穴はほぼ東西に走る。また畦畔をはさんで延びるA5 a トレンチにまたがり竪穴住居跡1軒を検出した。

A6 トレンチは小ピットのほか東西に走る浅い溝状遺構を確認した。遺構面は浅い。

A7 トレンチは小ピットを多数確認した。遺構面は浅い。

A8 トレンチは小ピットを多数確認した。遺構面は浅い。

A9 トレンチも多数の小ピットのほか、細い溝状遺構を検出した。

A10 トレンチは比較的しっかりした柱穴を確認し、明確に柱間の把握できるものが1棟ある。南北2間の柱間をもち東に延びる建物である。遺構面は深い。

A11 トレンチは竪穴住居跡1軒、ピット多数を検出し、ピットのなかにはしっかりしたものもみられる。遺構面は浅い。

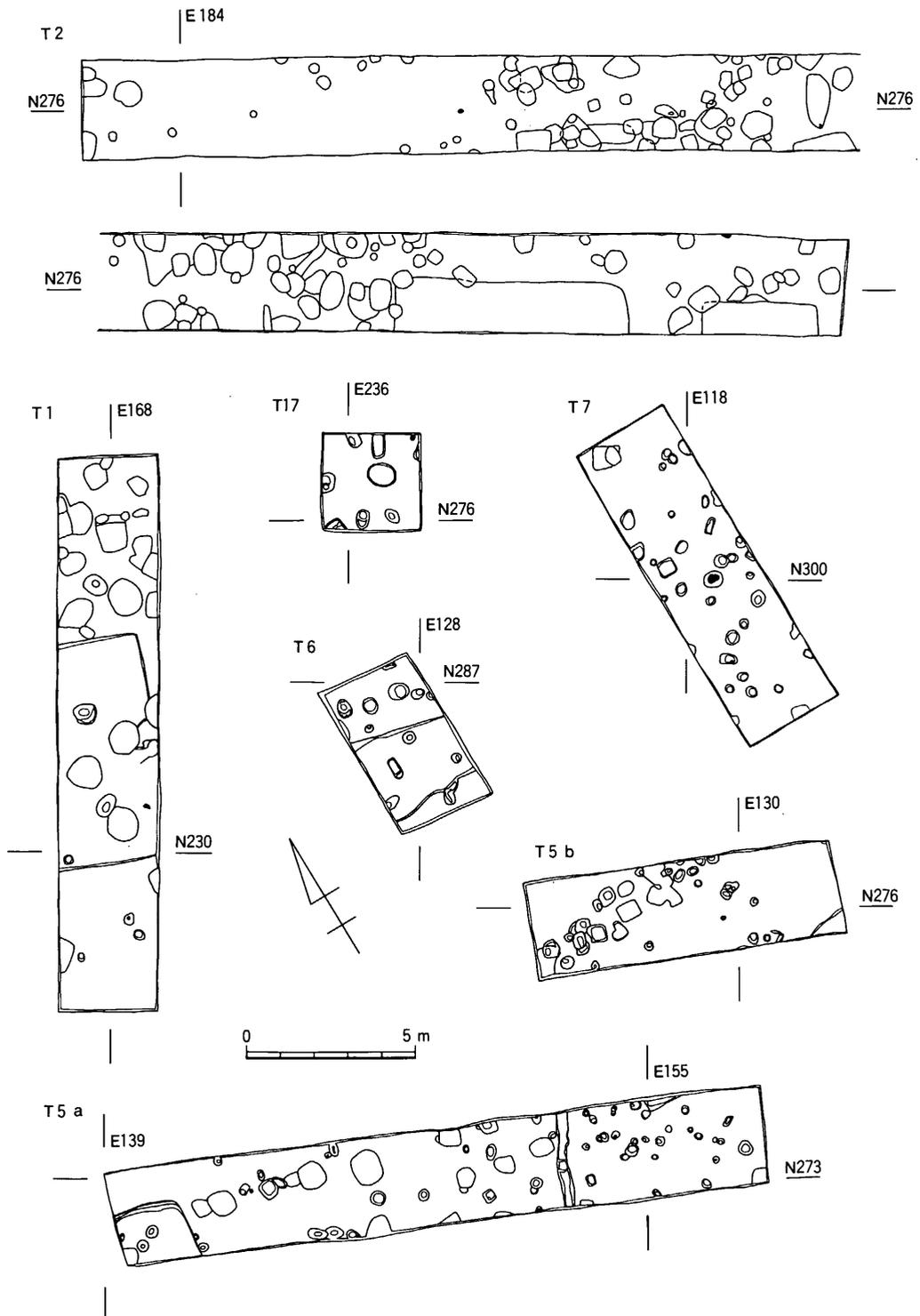
A12 トレンチは小ピットを多数確認した。遺構面は浅い。

A13 トレンチでは遺構が検出されなかった。

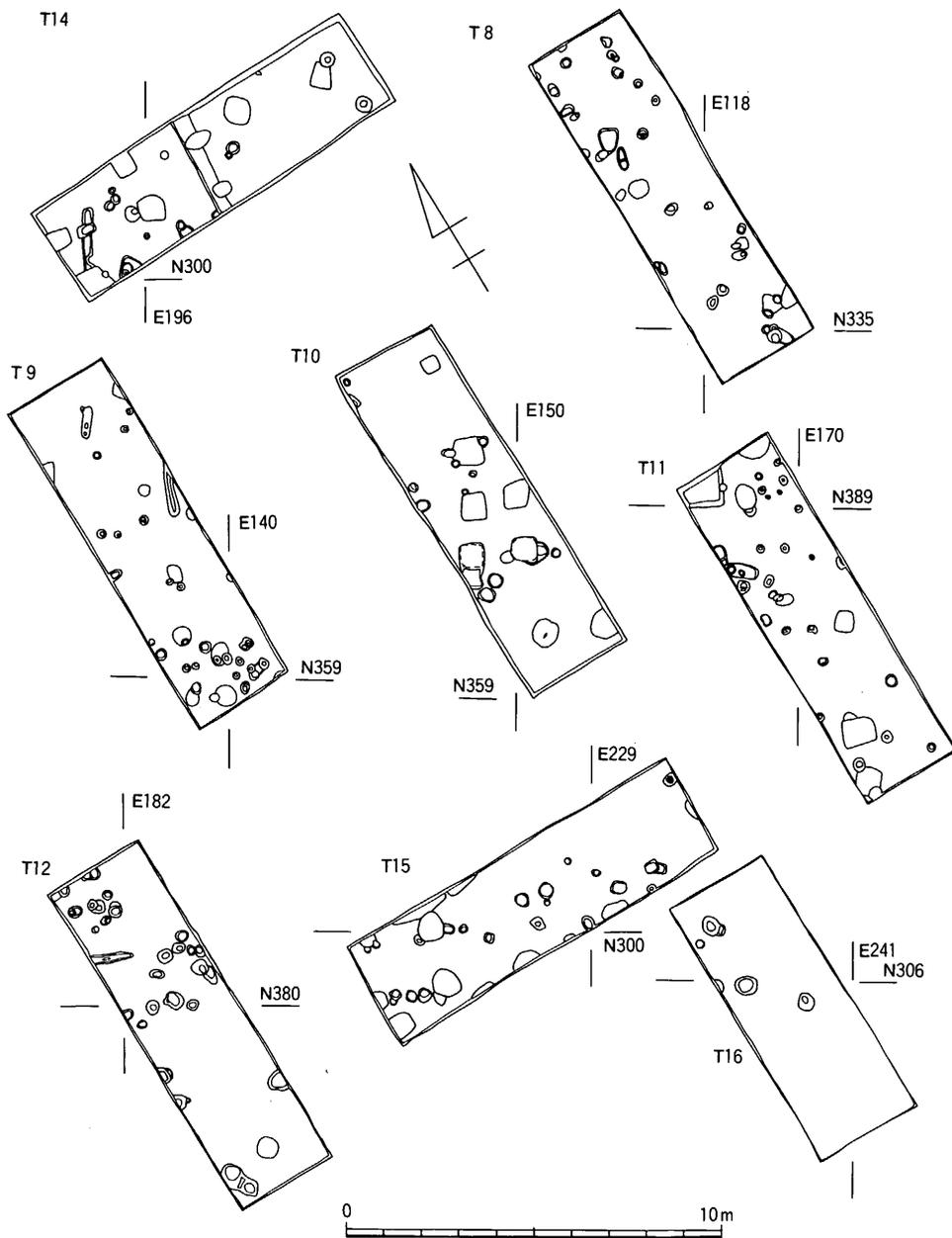
A14 トレンチでは竪穴式住居跡1軒と、かなりしっかりしたピットを検出した。

A15 トレンチは多くのピットを検出し、大きな掘り方をもつものも検出された。

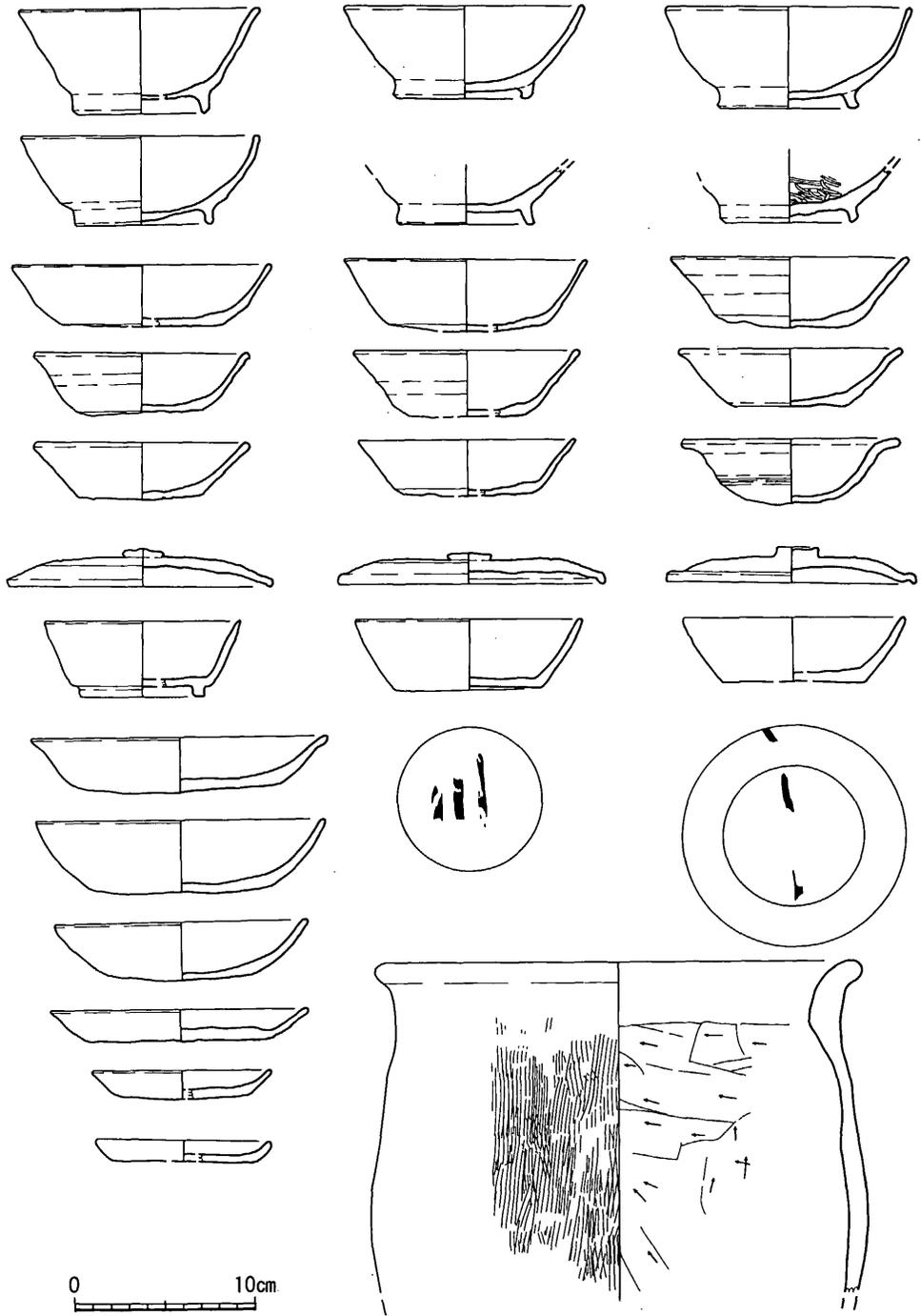
A16 トレンチは小ピットが数個検出された。



第41図 A地区1～7・17号トレンチ遺構配置図 (1/200)



第42図 A地区8~12・14~16号トレンチ遺構配置図(1/200)

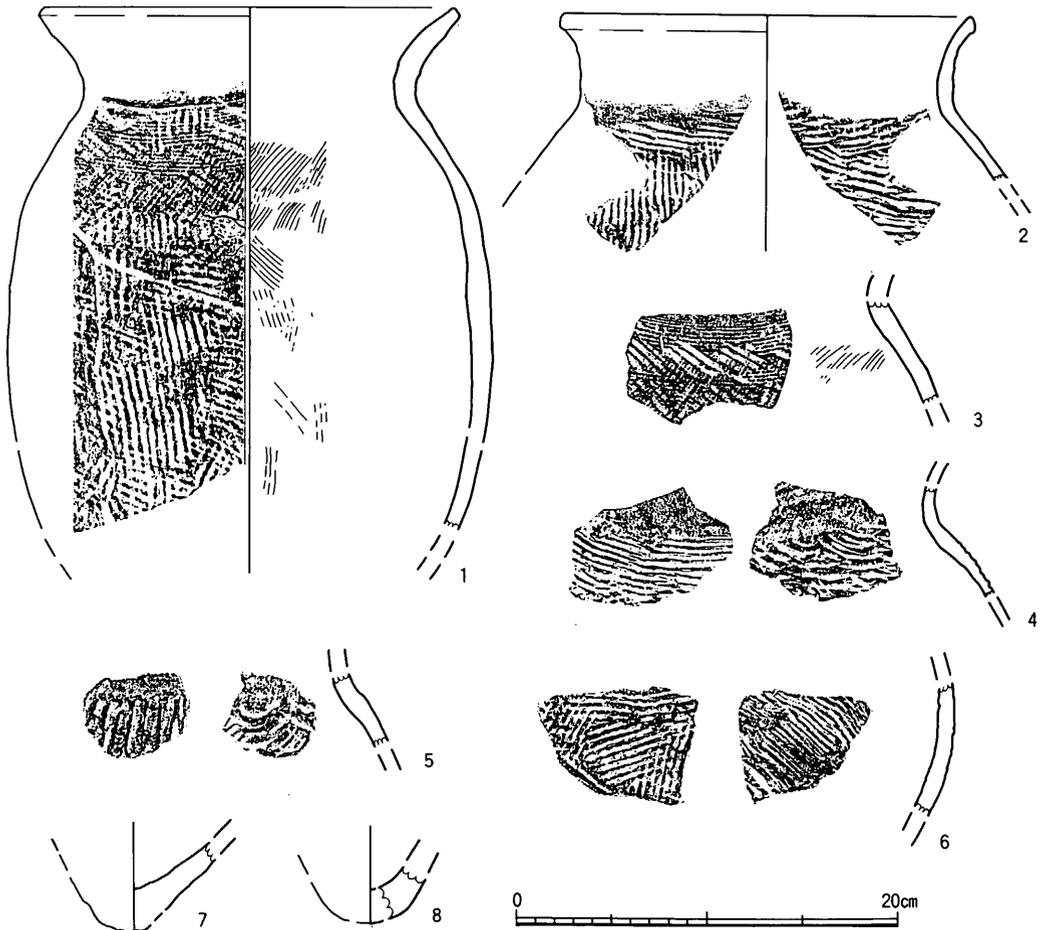


第43图 A—Ⅲ区出土土器实测图 (1/4)

8 A地区出土の製塩土器

註¹
 いわゆる玄海灘式整塩土器で、A地区からは32片が出土した。1は最もよく残存している。外面の叩きはやや粗く、肩部から上をナデ消している。内面の当て具痕は一見、刷毛状を呈す比較的細密なもので、全体的にナデ消している。2は内外面ともに平行線の叩きが施されており、頸部下は横方向に施され、その下は外面が縦方向、内面が斜方向を呈す。3～5は肩部の小片である。3の外面は叩きの後、刷毛目を施す。内面は細密なもので、ナデ消しが行なわれている。3の外面は横方向、4の外面は縦方向に平行線の叩きが施され、内面の当て具痕はいずれも明瞭な弧状を呈す。外面の平行線文叩きはすべて木目に直交して平行線を刻んだ叩き板を用いる。

7・8は底部の小片で焼塩用の土器であろう。

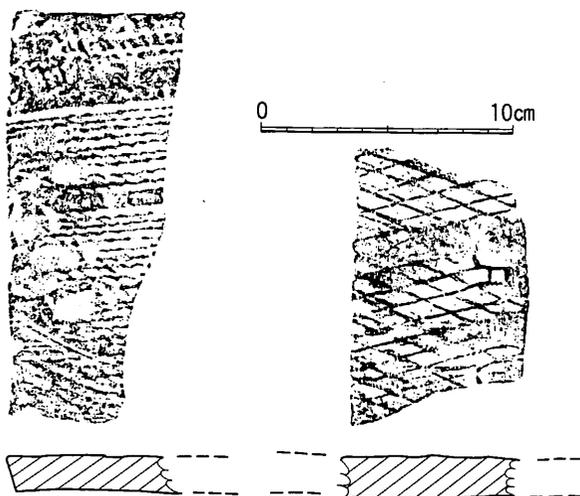


第44図 A地区出土製塩土器実測図 (1/4)

9 A地区出土の瓦

いずれも破片である。1はⅣ区で出土した平瓦であり、2は第56トレンチで出土した丸瓦である。凸面の叩きはそれぞれ、縄目と格子目によるものであるが、2には瓦の銘が残る。

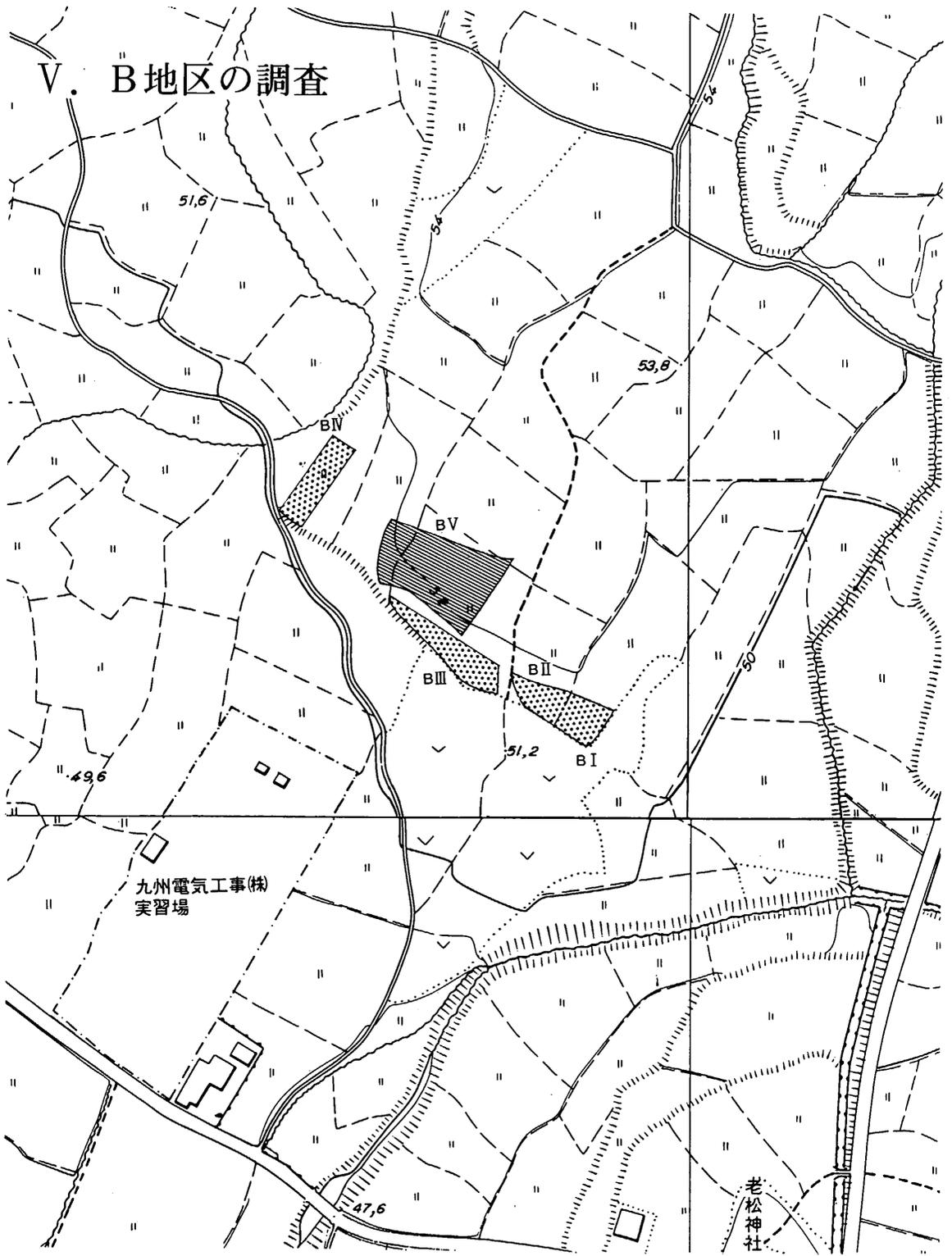
出土土器101～115はSX01からの出土遺物である。101～106は土師器椀で、102は内面黒色土器である。101は口径13.4cm、器高5.8cmを測り、端部は僅かに外反する。102は口径13.3cm、器高5.2cmを測る。103は口径13.6cm、器高5.7cmを測る。104は口径13.2cm、器



第45図 A地区出土の瓦実測図(1/3)

高5.2cmを測る。101～103はいずれも口縁部は直線的に外傾する。107～114は土師器の坏で口径13.2～14.4cm、器高3.5～4.0cmのもの(107～109)と口径12～12.5cm、器高3.2～3.7cmのもの(110～114)に分けることができる。すべてヘラ切り離しで107、108、112、114には板状圧痕が認められる。115も土師器坏であるが、口縁部が大きく外反し、ヘラ離しの後底部を押し出し丸底気味に仕上げている。116～118は須恵器坏蓋である。116は18号ピット、117は黒色土層、118はSD 2からの出土である。口径はそれぞれ14.5、14.8、13.8cmを測る。いずれも天井部には撮みを有し、口縁端部は嘴状を呈す。119は黒色土層出土の須恵器坏身である。口径10.8cm、器高4.2cmを測る。体部から口縁にかけて直線的に外傾する。高台は底部外端に貼り付けられる。120～128は中央の谷部からの出土である。120、121は土師器坏で、底部に墨字が残る。それぞれ口径12.5、12.3cm、器高4.0、3.6cmを測る。ヘラ切りで120には板状圧痕が残る。

V. B地区の調査



-  昭和53年度発掘調査地域
-  昭和54年度発掘調査地域

(縮尺1/2,500)

B地区の調査

1 調査の概要

B地区は昭和53年度と昭和54年度の2ヶ年度にわたり調査を実施した。昭和53年度はBⅠ～Ⅳ区まで1,440㎡の発掘調査を実施した。BⅣ区の遺構は浅いピットが発見されたのみである。

BⅠ～Ⅲ区は竪穴式住居跡6軒と掘立建物6棟、土壇8基、溝4条が検出された。昭和54年度はB地区の北隣りを894㎡発掘調査した。調査した結果、竪穴式住居跡7軒、掘立建物5棟、土壇3基、溝2条、その他多くのピットを検出した。溝はそれぞれ前年度調査のSM03・04の続きである。

2 遺構

竪穴式住居跡13軒、掘立建物11軒、土壇11基、溝4条を検出した。

竪穴式住居跡はすべて方形プランである。SX10にはかまどが認められ、かまどの西脇には須恵器の坏が残っていた。SX8は3方にベッドをもち、中央には炭化材が残り、その下から土器が出土した。また南壁中央の床を楕円形に掘り窪めており、その中と西脇に焼土が多く残されていた。

3 出土遺物

土器

遺物はSX02が出土土器の大半を占める。SX02には大量の土器が投棄されていた。

甕はその形状から4タイプに分けることができる。Ⅰ類は口縁部が直線的に外傾し、胴部のやや上位に最大径をもつ。口縁端部は内側に肥厚、またはヨコナデにより端部が跳ね上るよう

な効果をもたせるもの。外面調整は縦方向または斜方向の刷毛目調整を胴部全体に施した後、胴部上位に横方向の刷毛目を施す。内面は頸部からヘラ削りを施すものである。Ⅱ類は口縁部が内湾し、胴部は球状を呈す。外面調整はⅠに比べ横方向の刷毛目の割合が増す。内面は頸部よりやや下る位置からヘラ削りが施され、また指頭痕が底部や胴部上位に多く残る。Ⅲ類は口縁部が外反し、器壁がやや厚みを増す。外面調整は縦方向の刷毛目調整を主に施す。内面は頸部または頸部近くからヘラ削りを施す。Ⅳ類は「く」字状口縁を呈し、長胴となるもので、内外面とも刷毛目調整される。Ⅴ類は複合口縁をもつ甕である。

Ⅰ類には1～11が含まれる。2・11は外面の刷毛目調整が斜格子状に施され、タタキを思わせる。11は内面のヘラ削りの上端の位置が磨滅のため不明瞭である。また4の胴部外面には横方向の刷毛目調整がみられない。8～10は口縁から胴部内面まで刷毛目調整され、頸部からやや下った位置からヘラ削りされており、他のⅠ類とはさらに細分しえるものかもしれない。Ⅱ類は12～20が含まれ、12には刷毛状工具による波状文、15には沈線の波状文がめぐり、18は一条の沈線を水平にめぐらす。また12～16の口縁端部は僅かに、肥厚する。Ⅲ類には22・23が含まれ、Ⅳ類には24・25、Ⅴ類には27・28が相当する。

これらの甕はⅠ類が庄内式の新しい段階、Ⅱ類が布留式に比定しえようが、17はやや長胴の傾向が見られ、外面胴部の調整も刷毛目がナデ消されており、内面のヘラ削りも頸部付近まで上っていることから、布留式土器の最も新しい段階といえよう。Ⅳ類は弥生時代終末の土器であり、Ⅴ類は山陰系と呼ばれるものである。

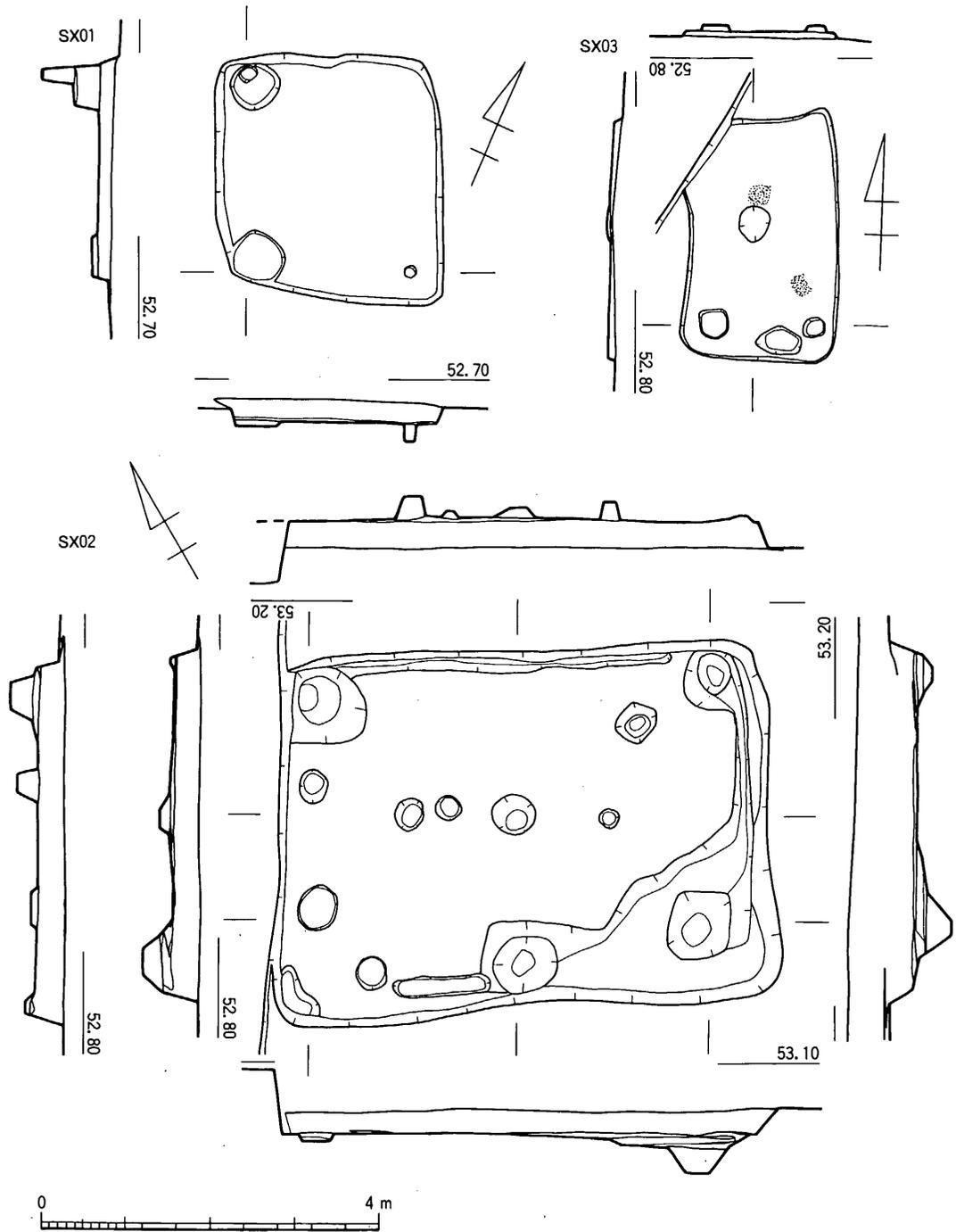
壺では29・30は小径の平底で、中央が窪むものである。小片のため明確ではないが畿内Ⅴ様式の範疇に収まるものであろう。32は複合口縁をもつ壺の口縁が直立するもので、下半に刷毛状工具により斜格子状に刺突が施される。

高坏は123が大阪府船橋遺跡等から出土している畿内系のものである。

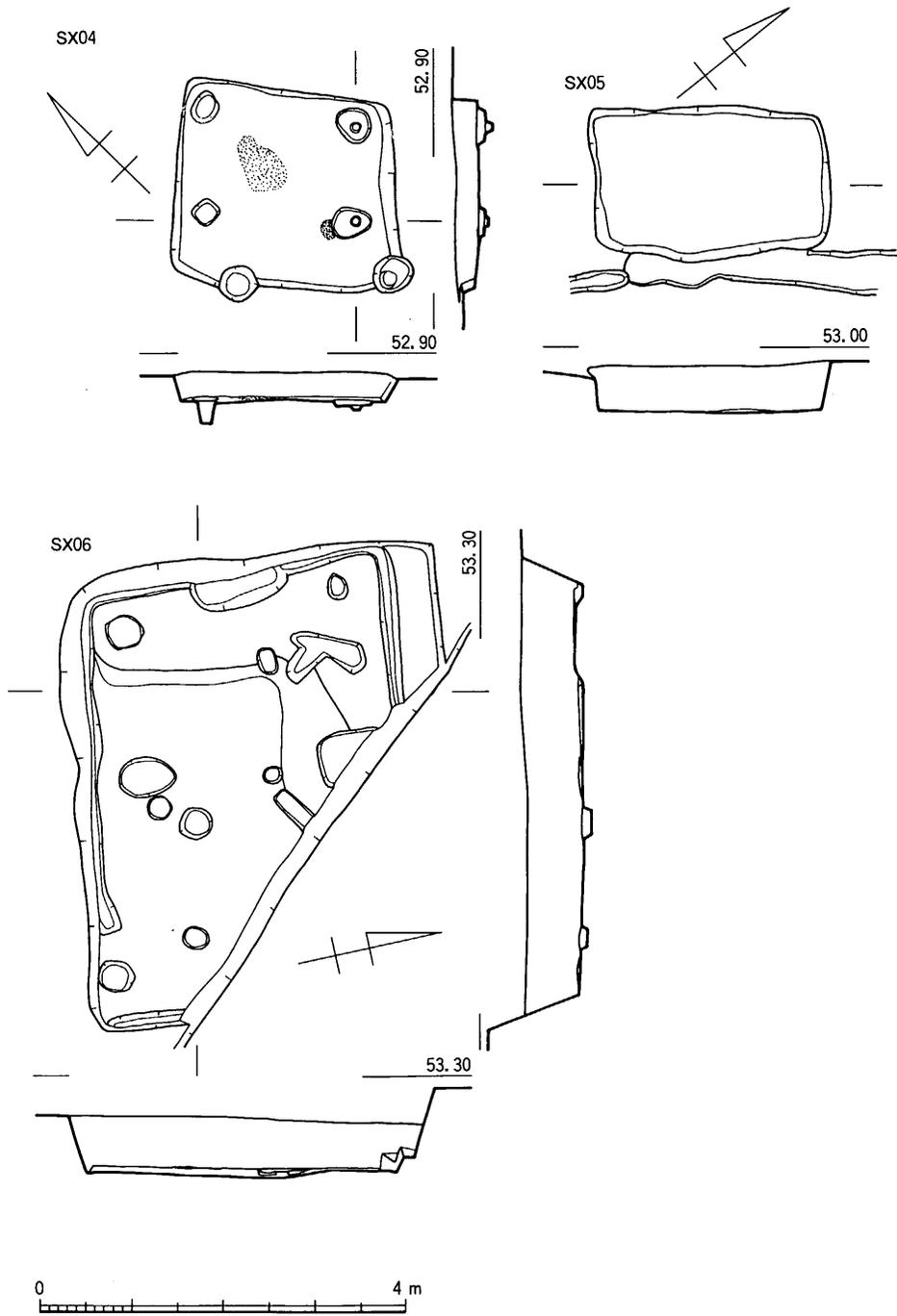
器台133～135は鼓形器台である。

4号住居出土土器のうち複合口縁139は小片のため明瞭でないが、竹管浮文の脇にそれぞれ櫛状工具による縦の条線と波状文が施される。表土から出土した196と同一のものと思われる。

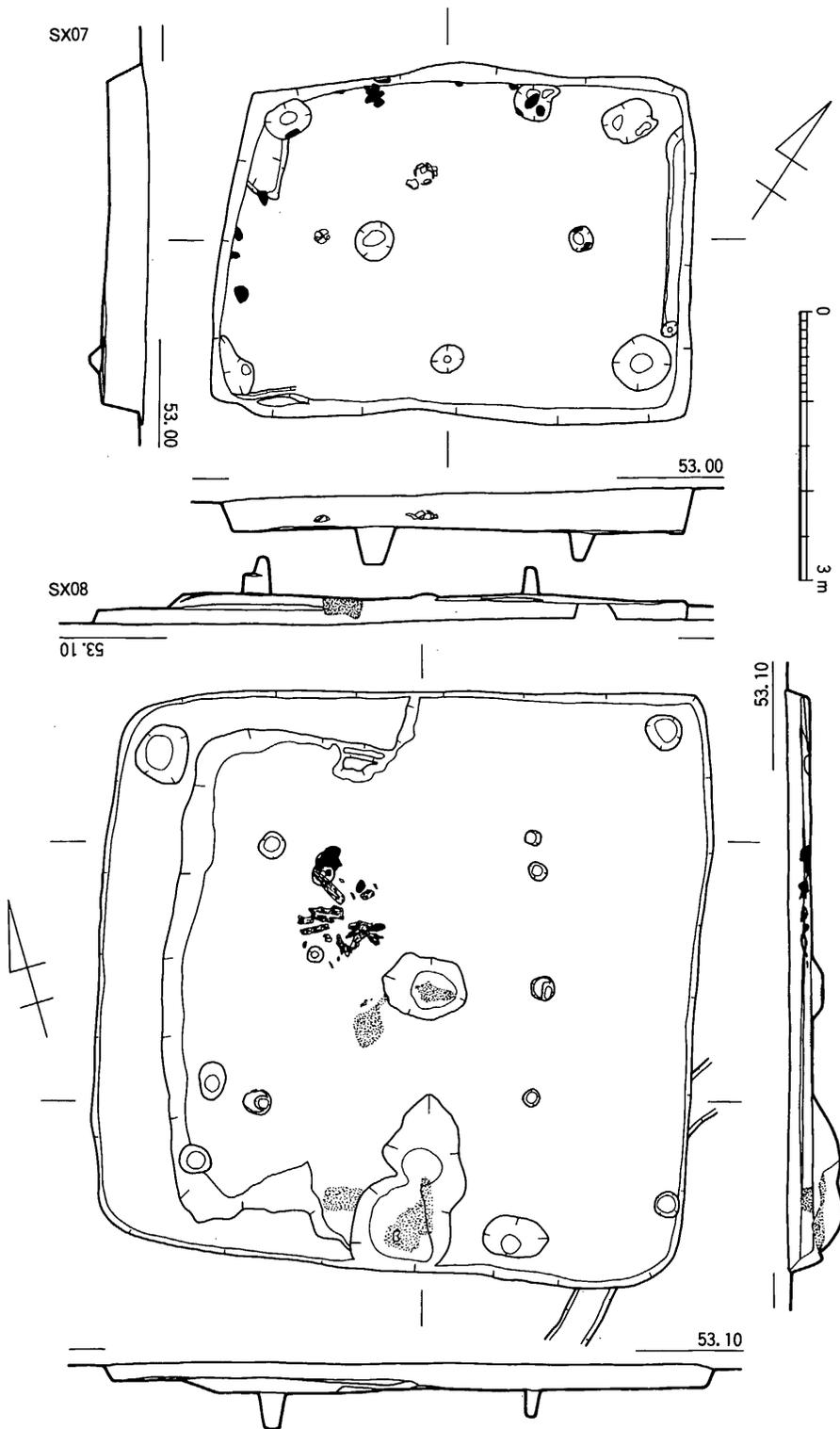
10号住居跡はカマドをもつもので、須恵器が出土している。170～172は坏蓋で170・171の口縁は15.3cm、16.1cmで、172はやや小振りとなり13cmを測る。口縁部も前者が内面に段をもつのに対し、後者は丸く収まる。173～175は坏身で、173は口径14.5で、174は口縁を欠失するが14cmほどと推定される。175は口径15.8cmを測る。以上の須恵器は172がⅣ様式に、他はⅢbに比定されよう。



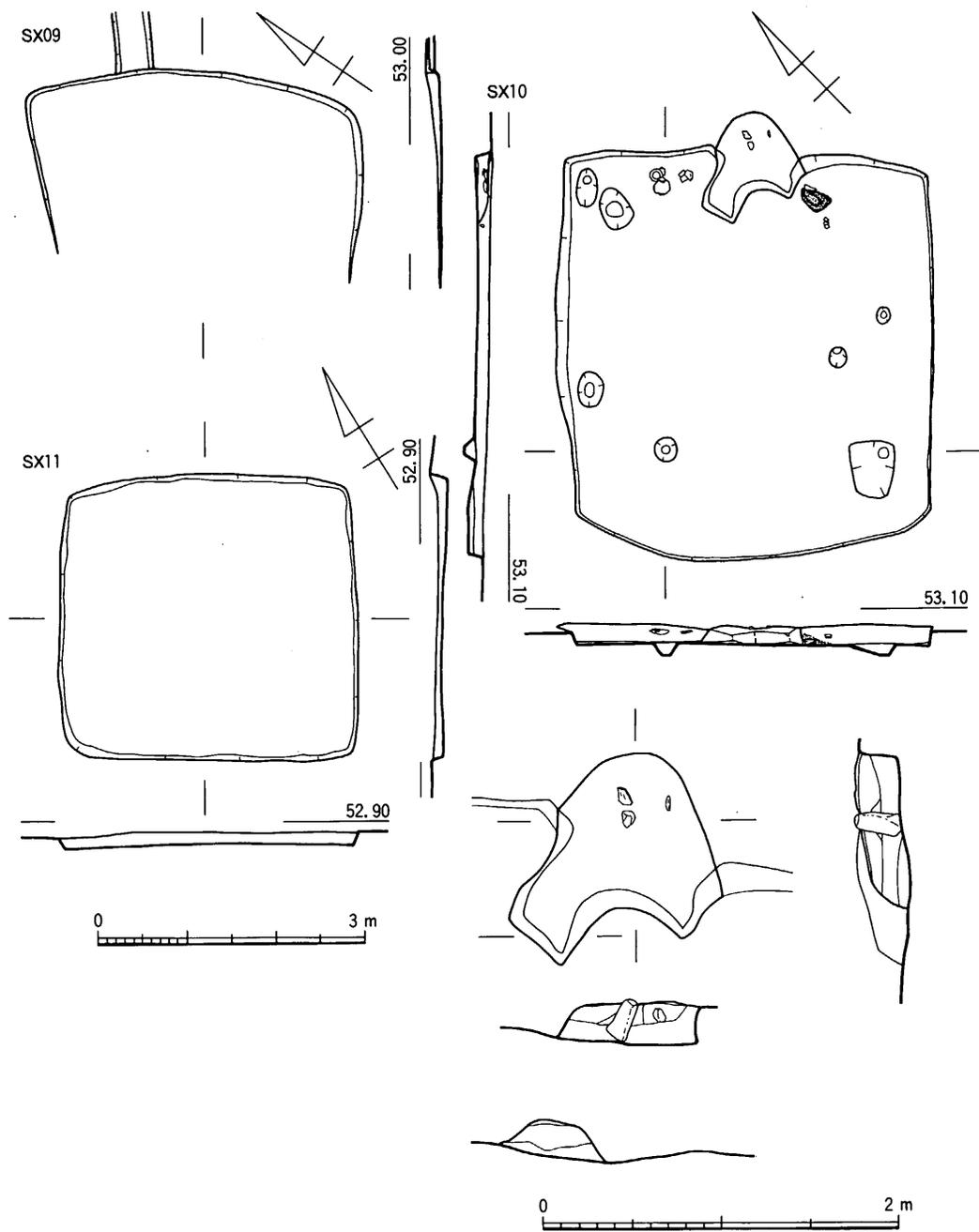
第46図 B地区 SX01~03実測図 (1/80)



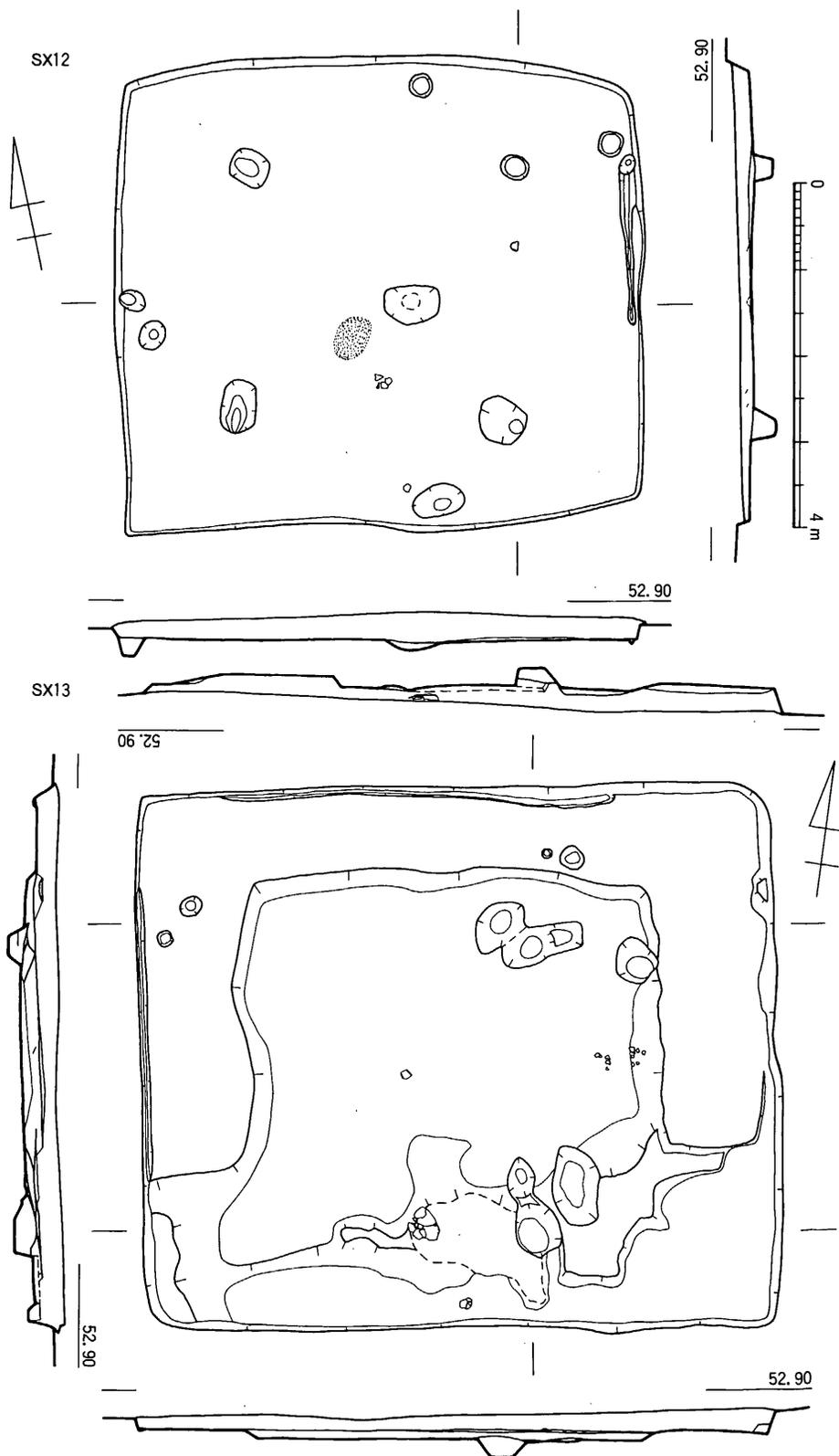
第47図 B地区 SX04~06実測図 (1/80)



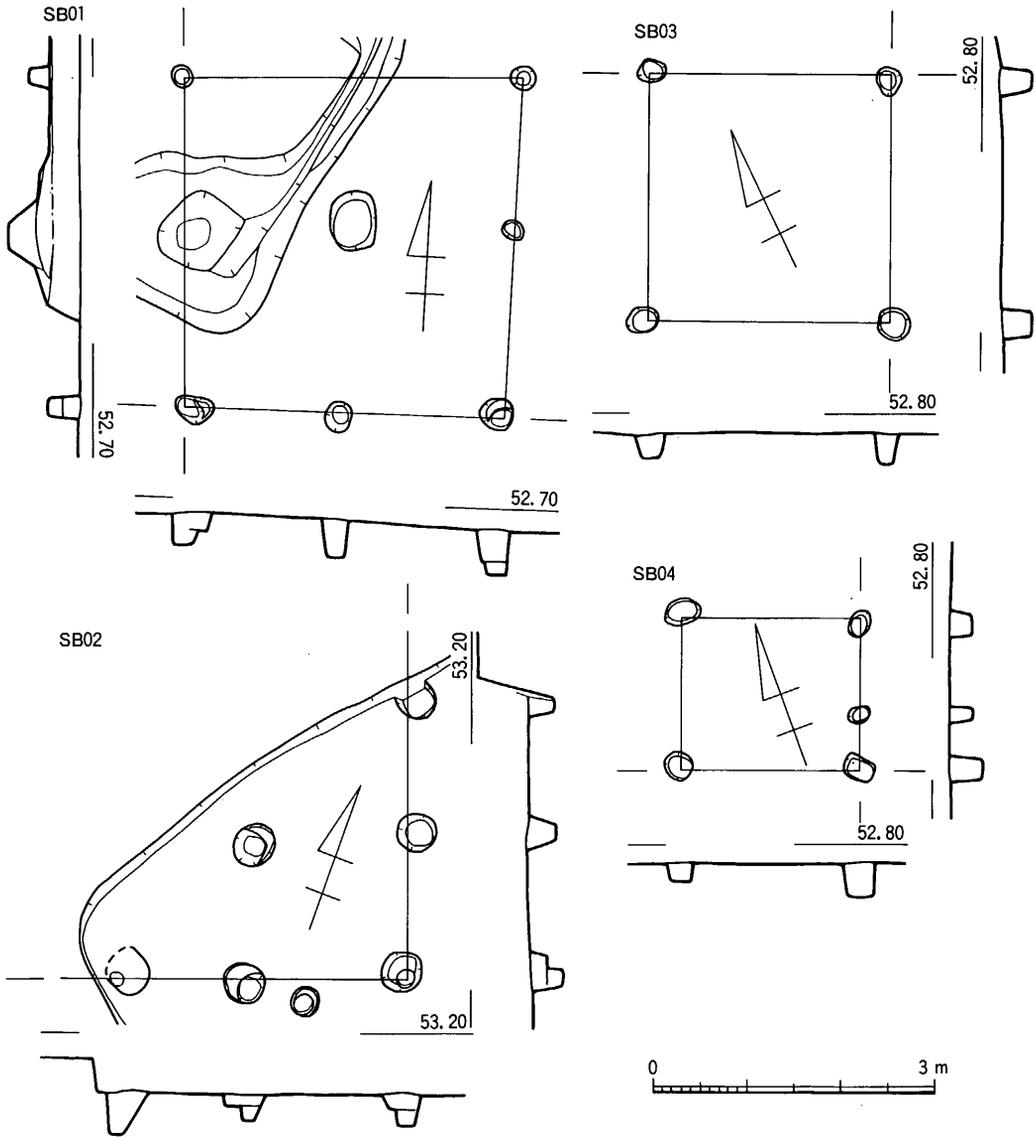
第48图 B地区 SX07·08实测图 (1/80)



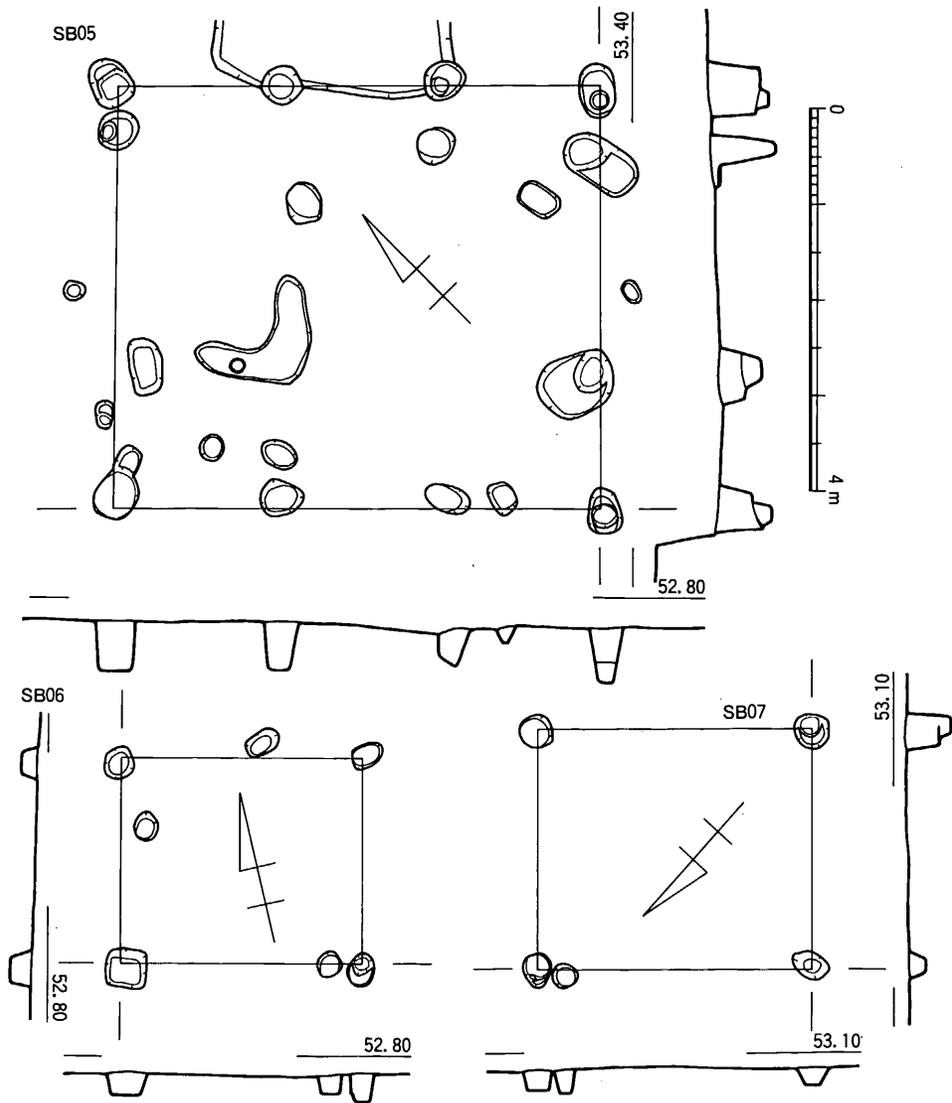
第49図 B地区 SX09~11実測図 (1/80) SX10かまど実測図 (1/40)



第50図 B地区 SX12・13実測図 (1/80)



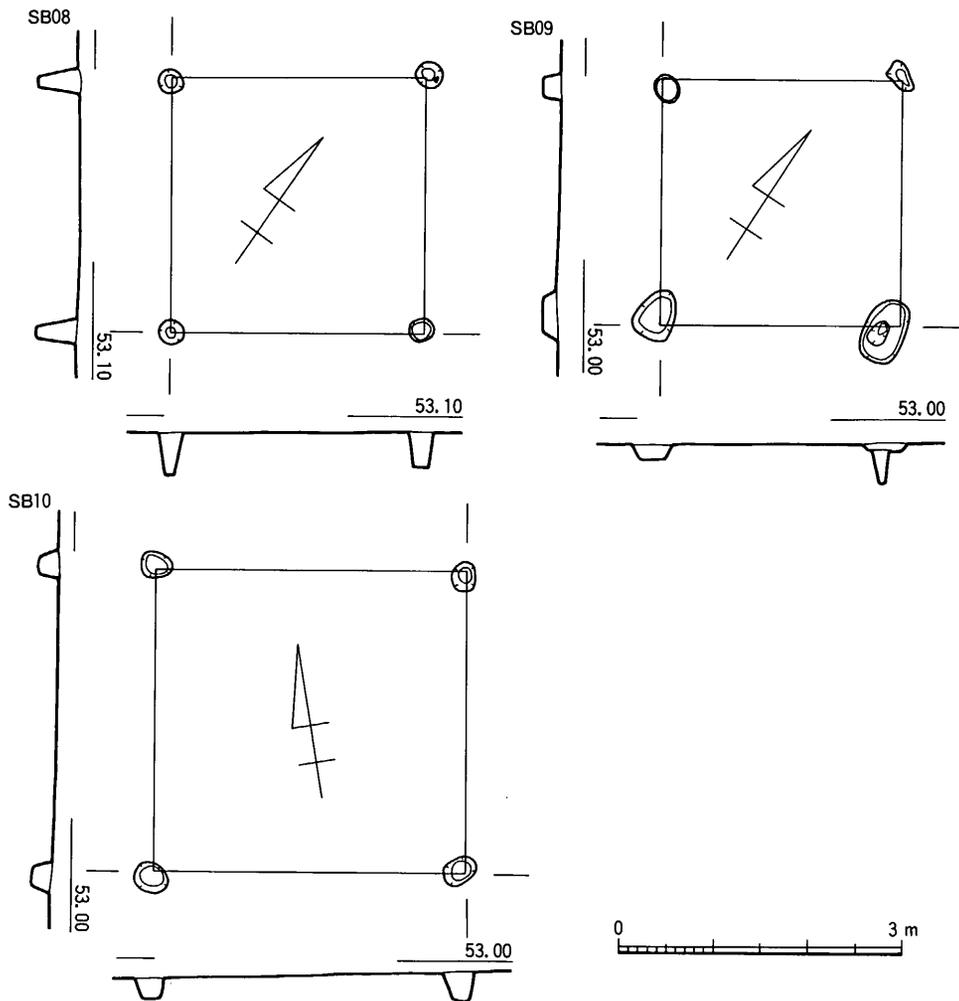
第51图 B地区 SB01~04实测图 (1/80)



第52図 B地区 SB05~07実測図 (1/80)

表 2-1 B地区竪穴住居跡要説

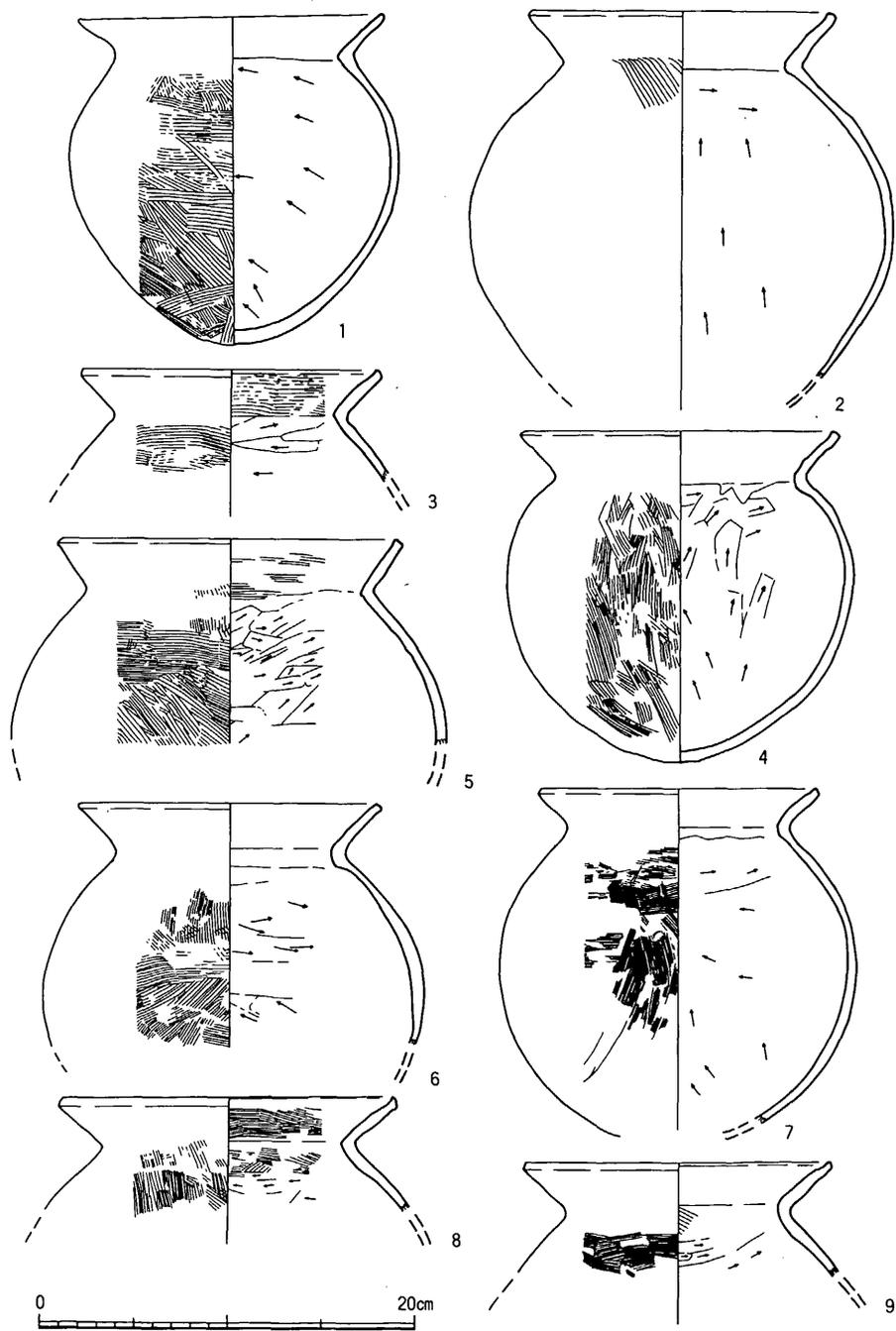
番号	挿図番号	図版番号	平面形	規模(m)	主柱穴	切り合い関係	備	考
01	46	27	方形	2.9×2.7				
02	46	27	方形	5.8×4.1	2or4?		東北壁に側溝。中央に52×48cm、深さ約11cmの炉?	
03	46	29	方形	2.9×1.8			中央に43×36cmの炉。炉の横や東南寄りに焼土	
04	47	29	方形	2.4×2.1	4?		中央よりやや北寄りの床面と南西の柱穴の横に焼土	
05	47		方形	2.6×1.7				
06	47	30	方形	5.2×4.2	2		2方向にベッド(北側にはベッドか段となっている)。南北東西壁に沿って側溝。	



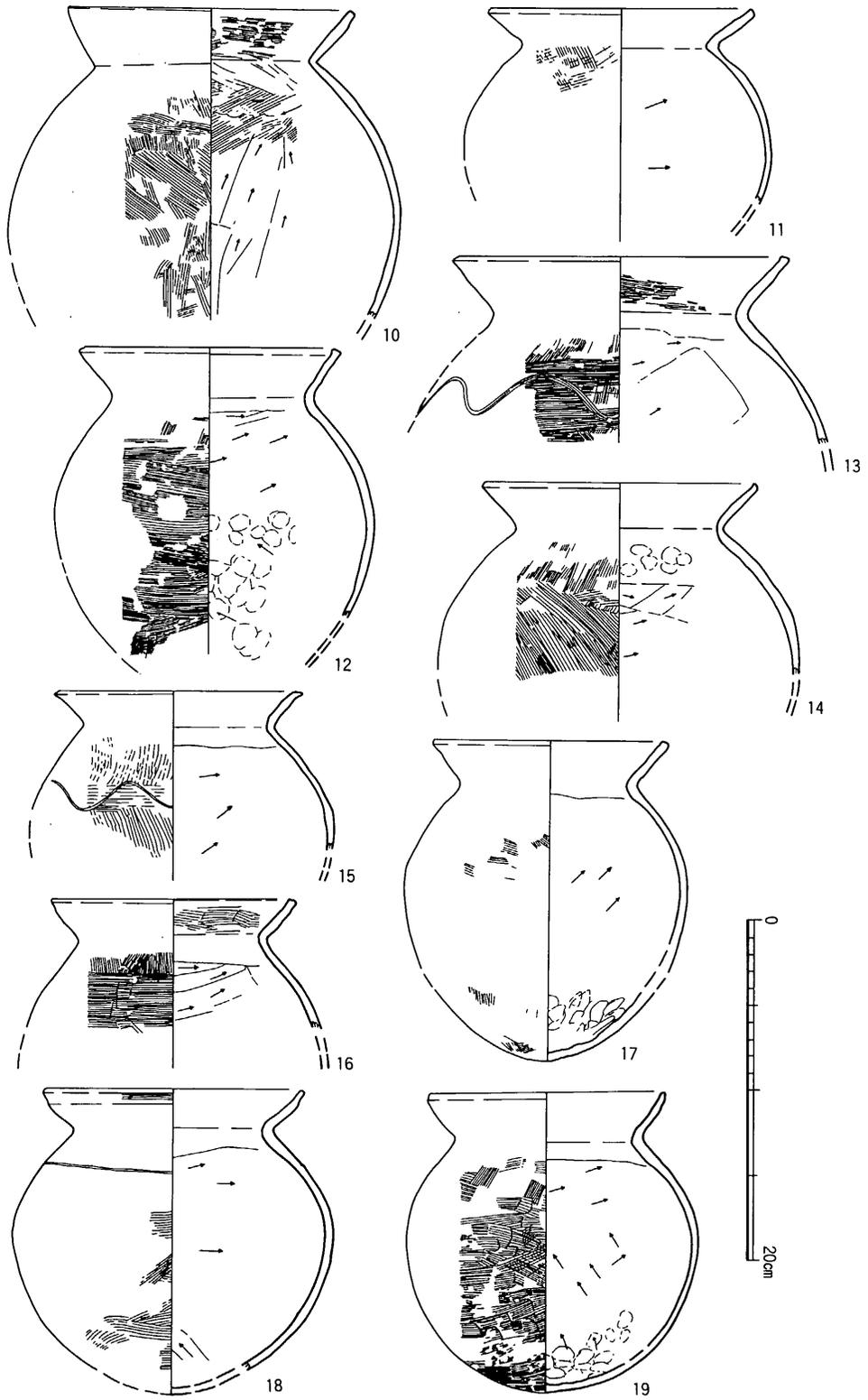
第53図 B地区SB08~10実測図(1/80)

表2-2 B地区竪穴住居跡要説

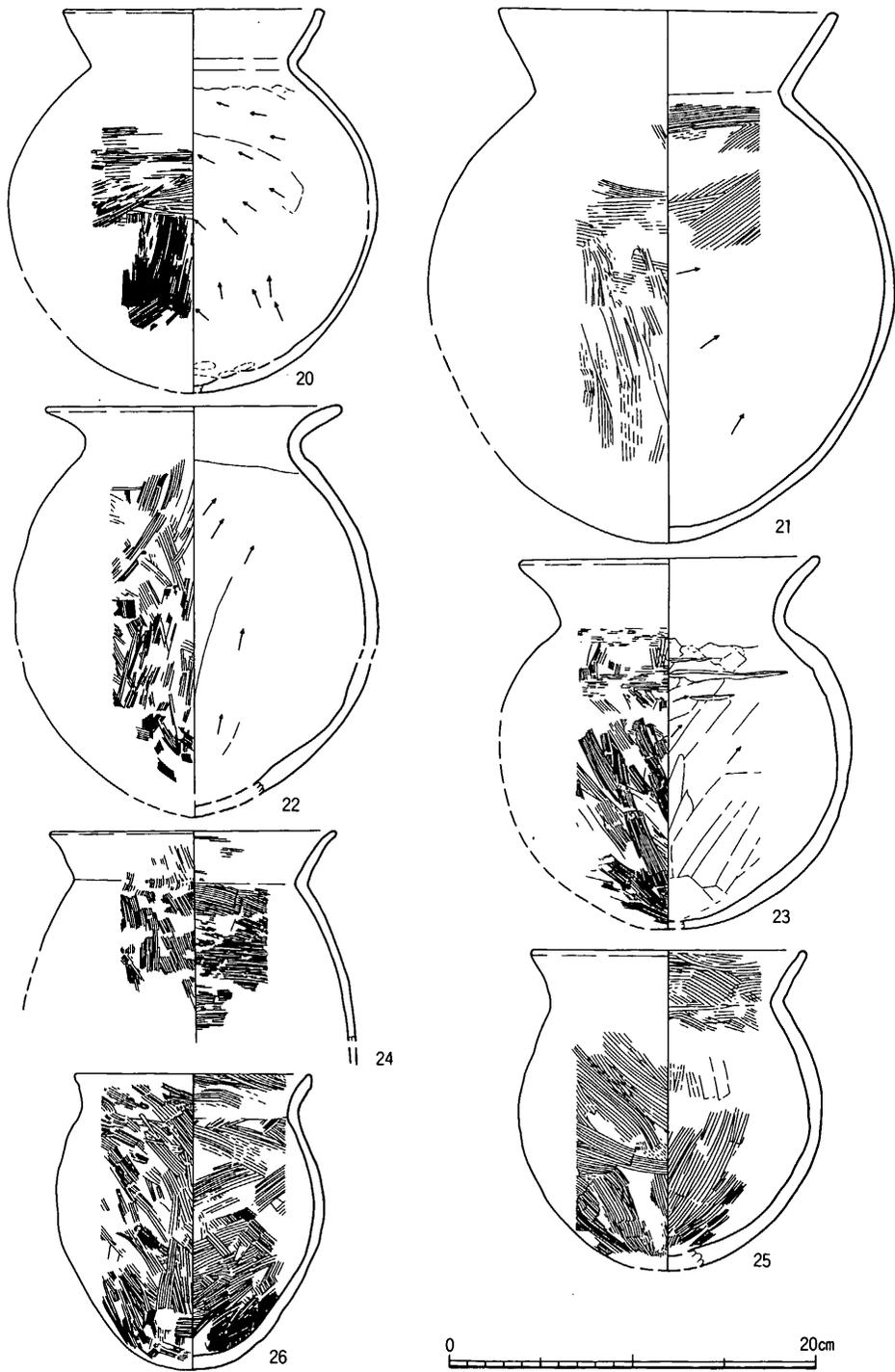
番号	挿図番号	図版番号	平面形	規模(m)	主柱穴	切り合い関係	備	考
07	48	31	方形	5.3×3.9	2		東壁の一部に側溝	
08	48	31	方形	6.7×6.5	4		3方向にベッド。炉の近くに木炭がちらばっている 中央に94×70cm、深さ約11cmの炉。炉の中や側、南壁の中央近くに焼土	
09	49			3.7×不明			西側半分は削平により不明	
10	49	32	方形	4.6×4.2			東北壁の中央にカマド。又カマドの側に焼土らしきもの有	
11	49	32	方形	3.4×3.2				
12	50	33	方形	6.1×5.5	4		中央に66×46cm、深さ8~9cmの炉。炉の側に焼土有。東壁の一部に側溝	
13	50	33	方形	7.4×6.3			3方向にベッド。北壁と西壁の半分は側溝。南壁寄りの中央に焼土有	



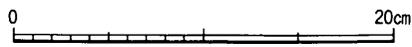
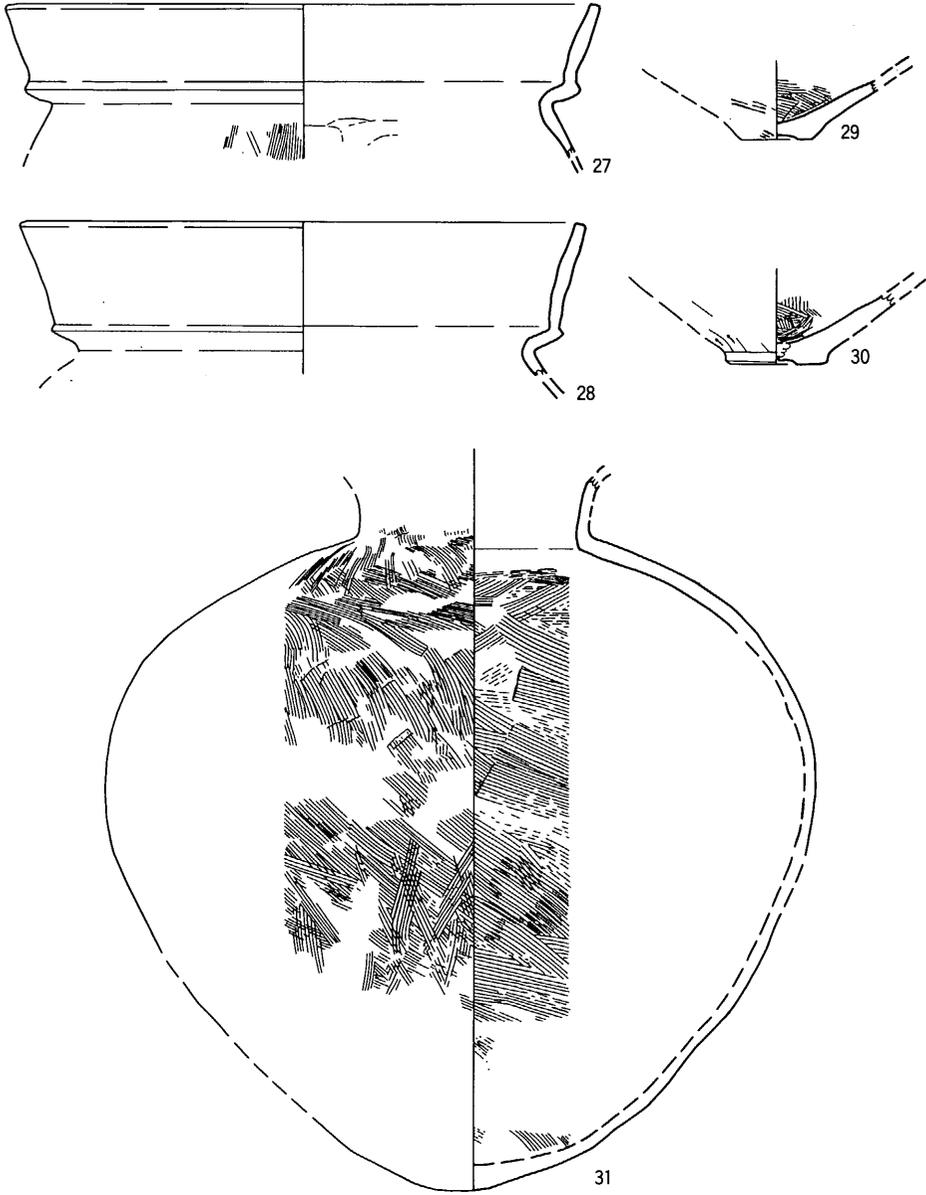
第54图 B地区 SX02出土土器实测图 (1/4)



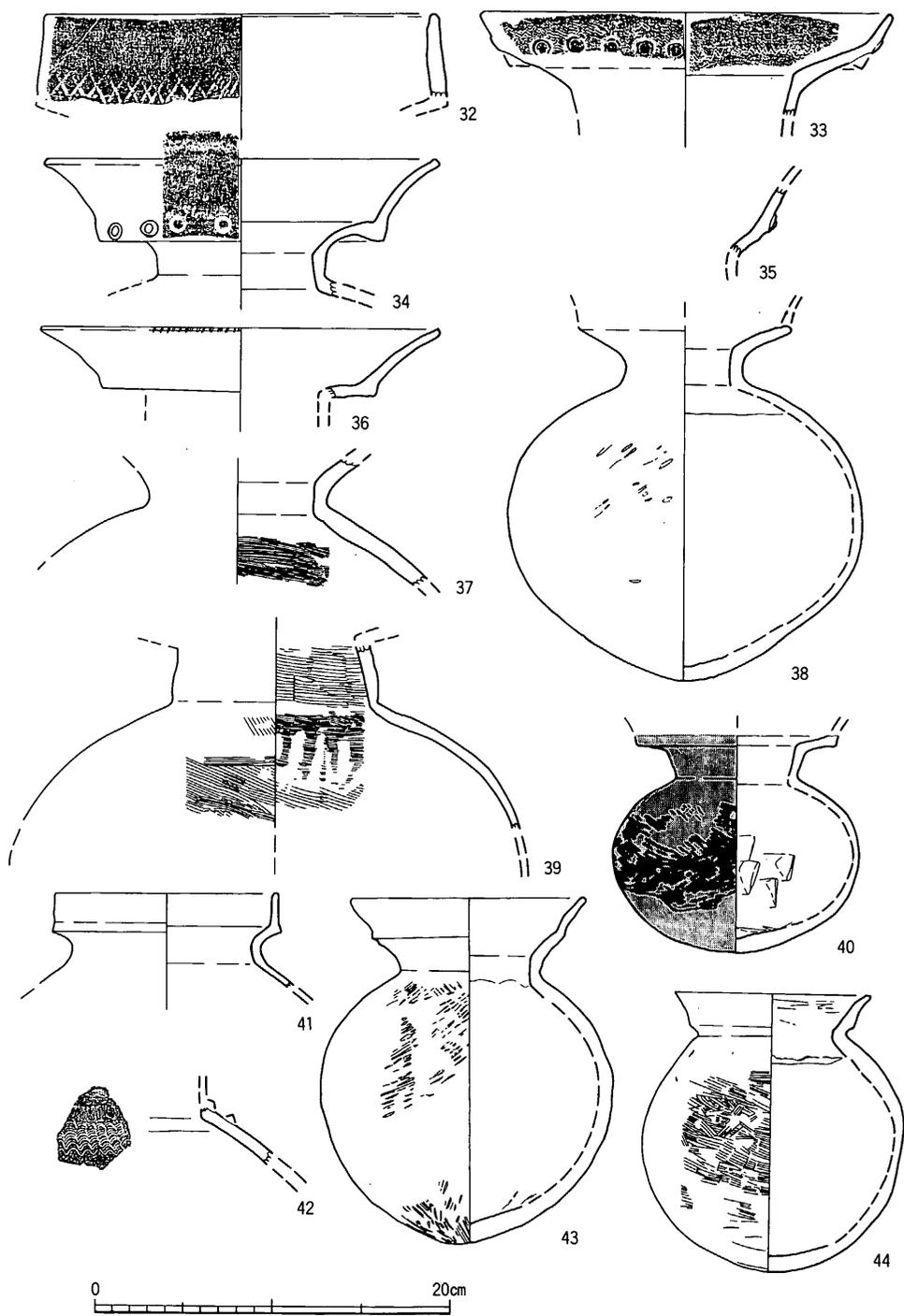
第55图 B地区 SX02出土土器实测图 (1/4)



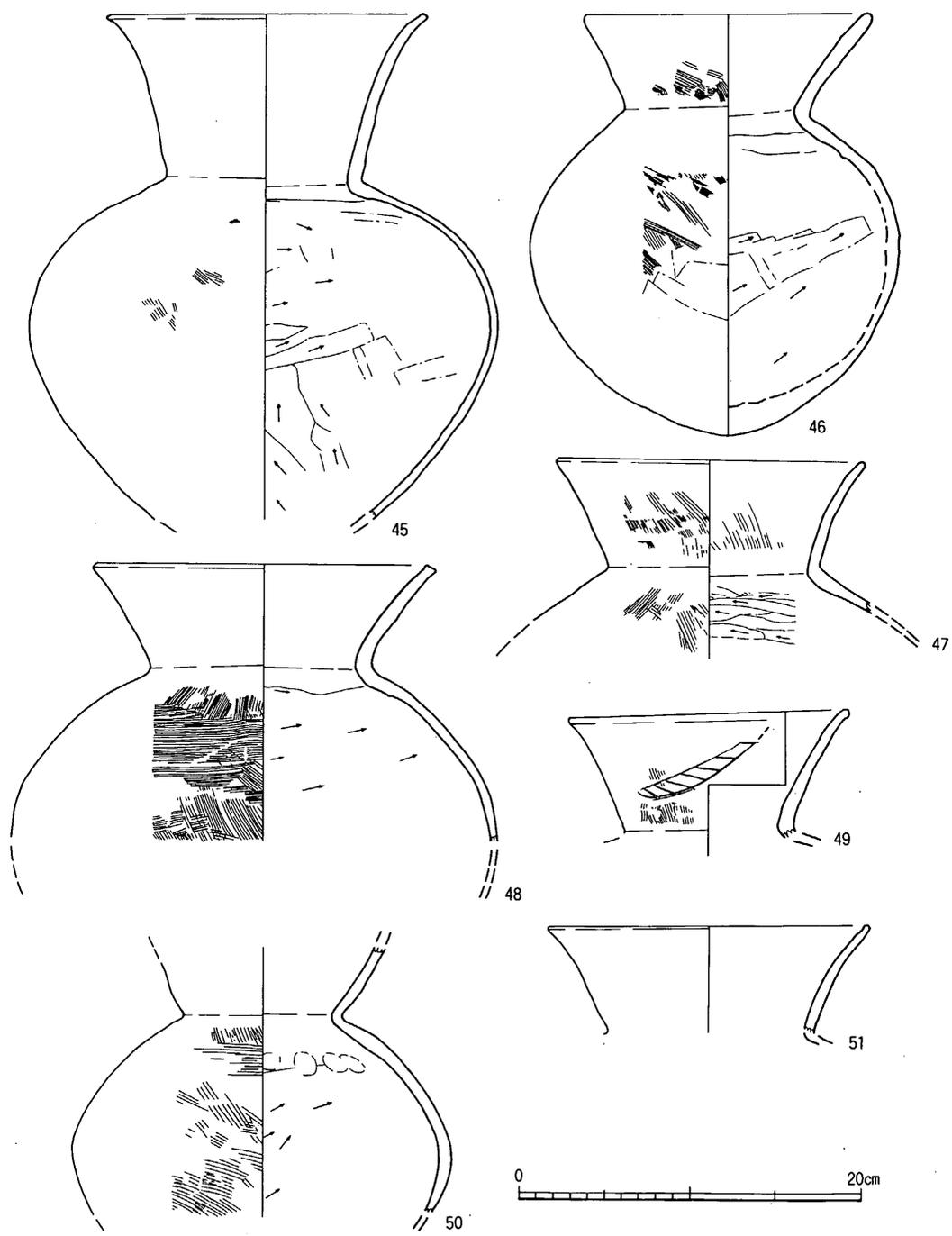
第56图 B地区 SX02出土土器实测图 (1/4)



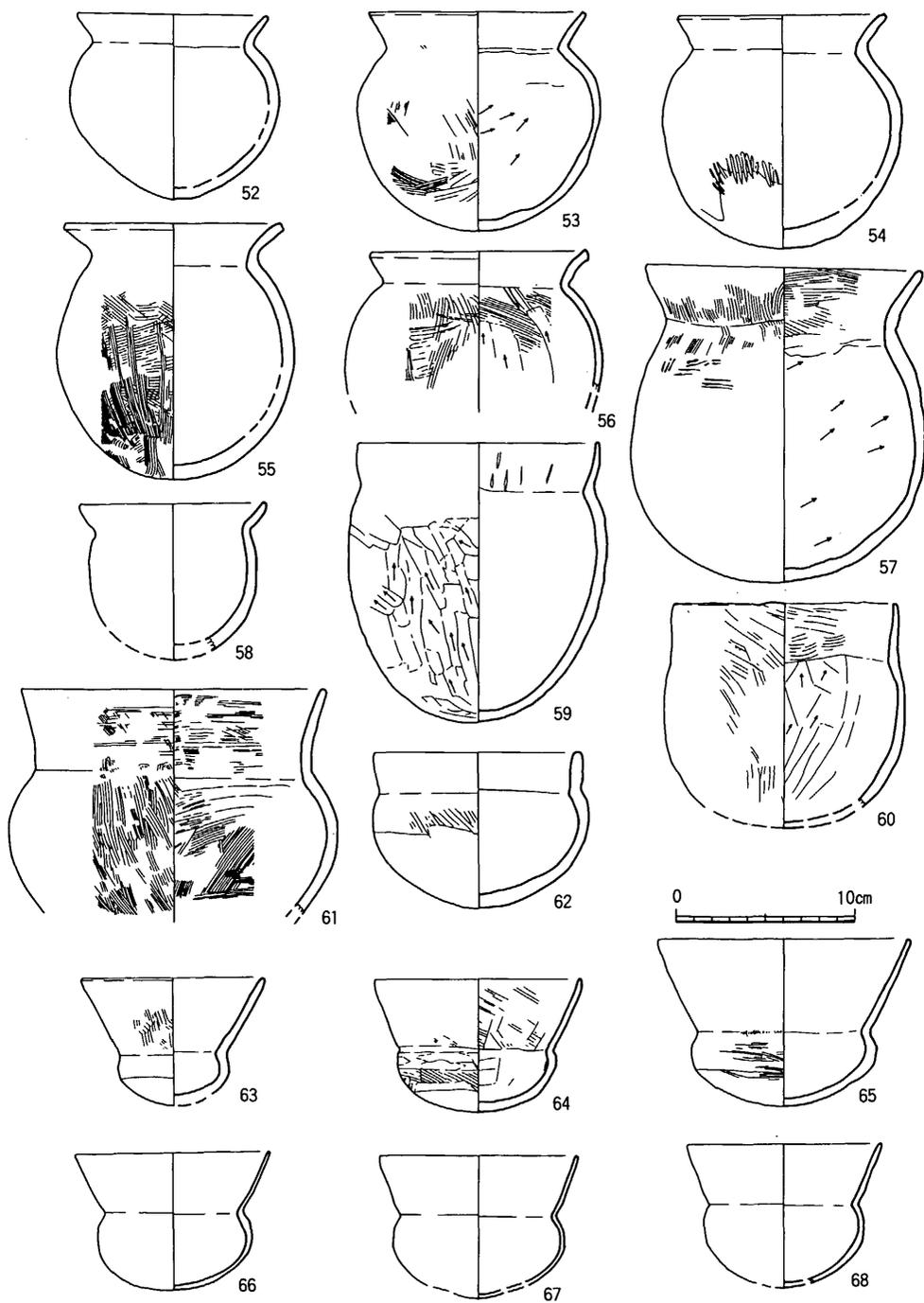
第57图 B地区 SX02出土土器实测图 (1/4)



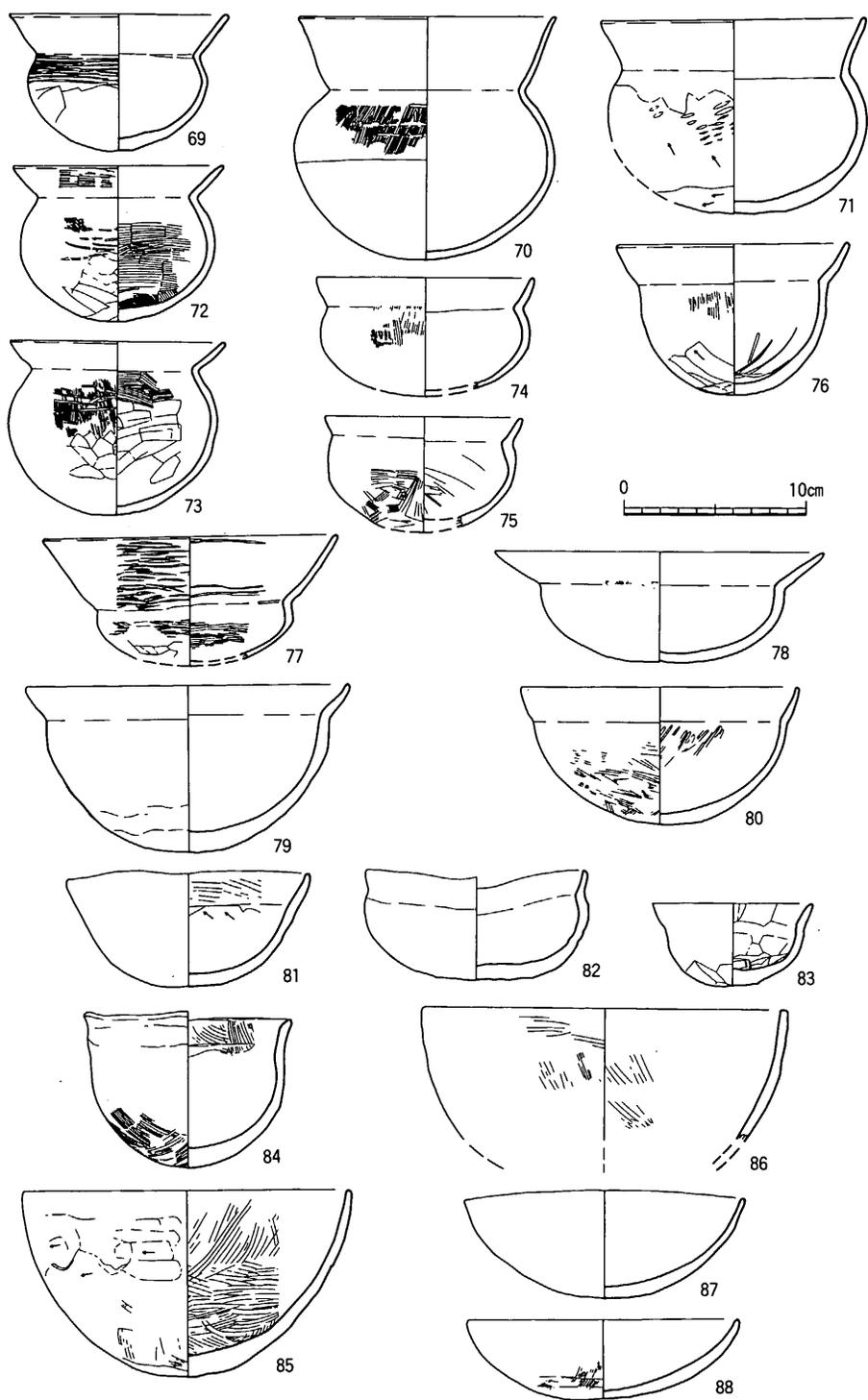
第58图 B地区 SX02出土土器实测图 (1/4)



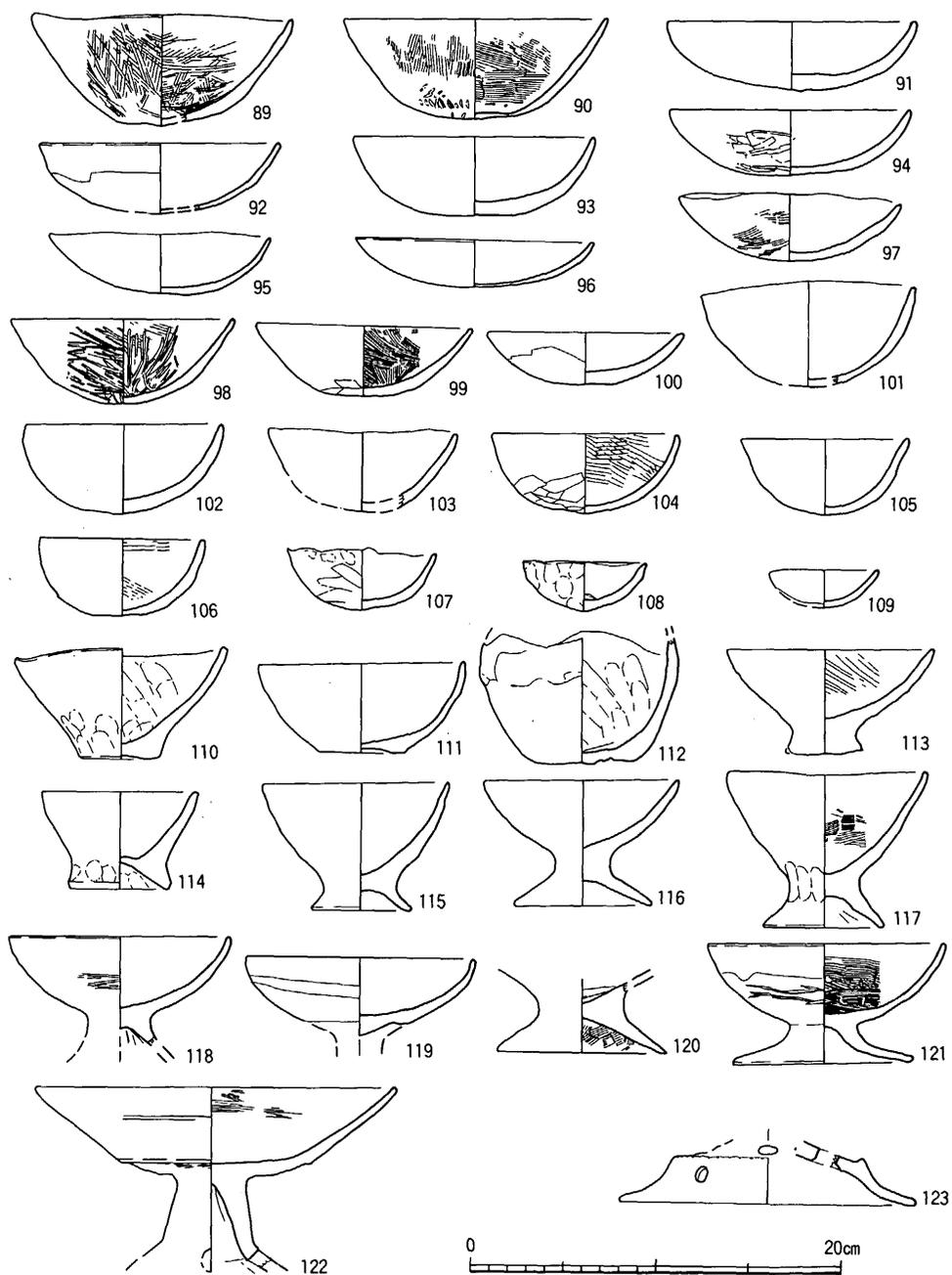
第59图 B地区 SX02出土土器实测图 (1/4)



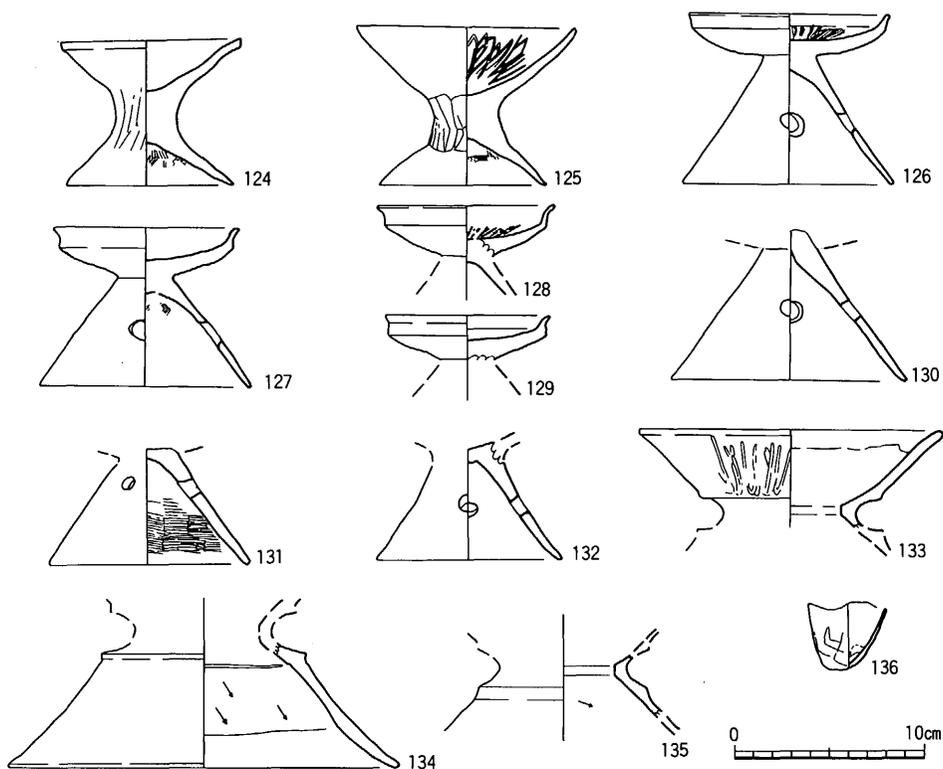
第60图 B地区 SX02出土土器实测图 (1/4)



第61图 B地区 SX02出土土器实测图 (1/4)



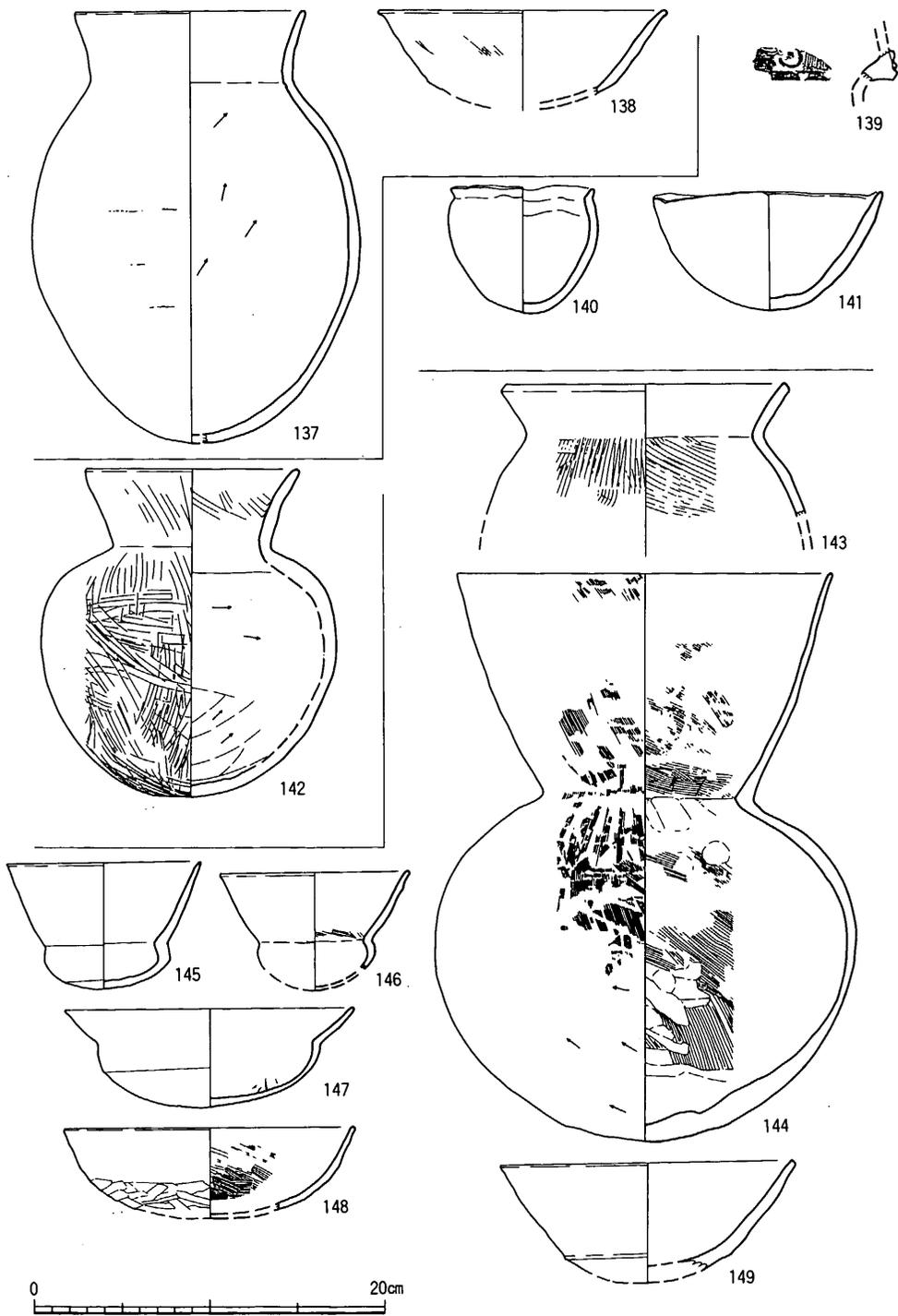
第62图 B地区 SX02出土土器实测图 (1/4)



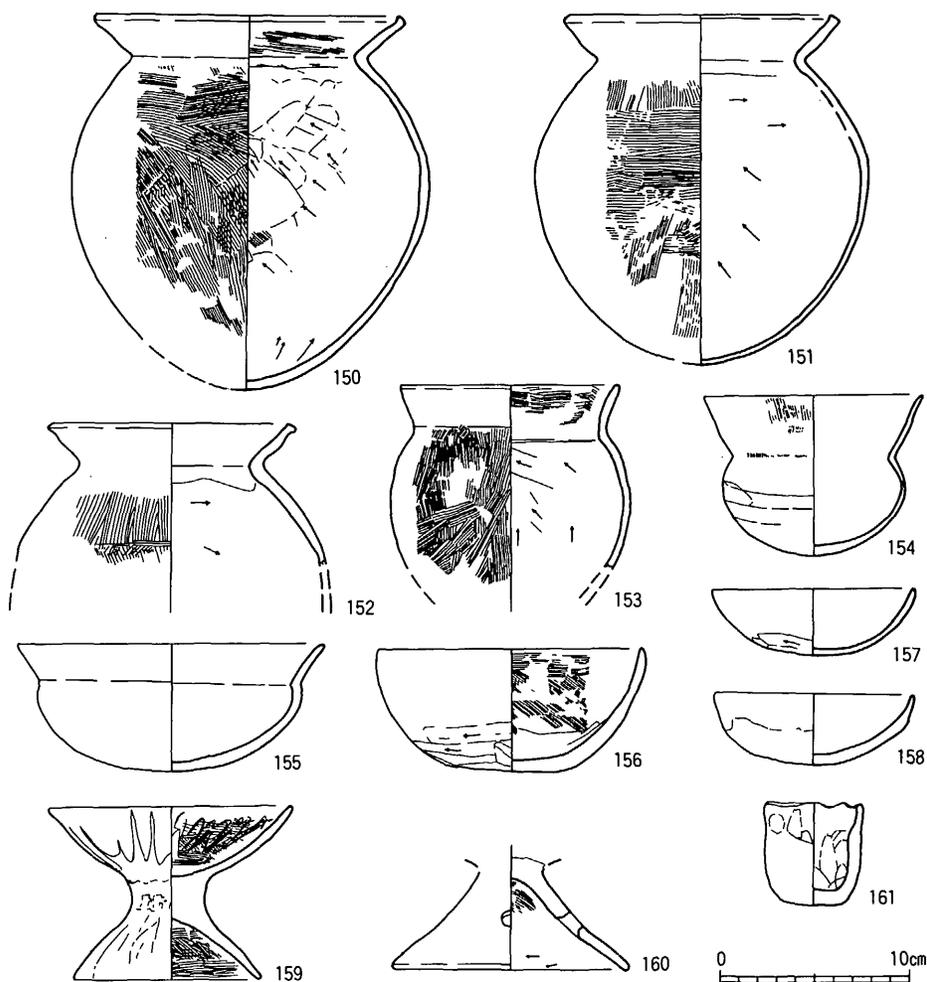
第63図 B地区 SX02出土土器実測図 (1/4)

表3-1 B地区出土土器要説

番号	器種	法量(cm)	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
1	甕	口径 16.3 器高 17.8	淡黄褐色	1~2mm大の砂粒を中量含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 頸部より ヘラケズリ	外面 僅かにススが附着
2	甕	口径 16.4	黄褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 頸部より ヘラケズリ	
3	甕	口径 16	黄褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ハケメ 頸部より ヘラケズリ	
4	甕	口径 17 器高 17.8	黄褐色	1~4mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 頸部長下より ヘラケズリ	外面 胴部以下にスス附着 内面 炭化物の附着
5	甕	口径 18.4	淡黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 頸部近より ヘラケズリ	外面 胴部の一部にスス附着
6	甕	口径 16.2	淡黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多量に含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 頸部直下より ヘラケズリ	外面 全体にスス附着
7	甕	口径 14.9	淡黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多量に含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 頸部直下より ヘラケズリ	外面 全体にスス附着
8	甕	口径 18	淡黄褐色	1~2mm大の砂粒を中量含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ	口頸部 ハケメ 頸部下約1.5cmより ヘラケズリ	外面 スス附着



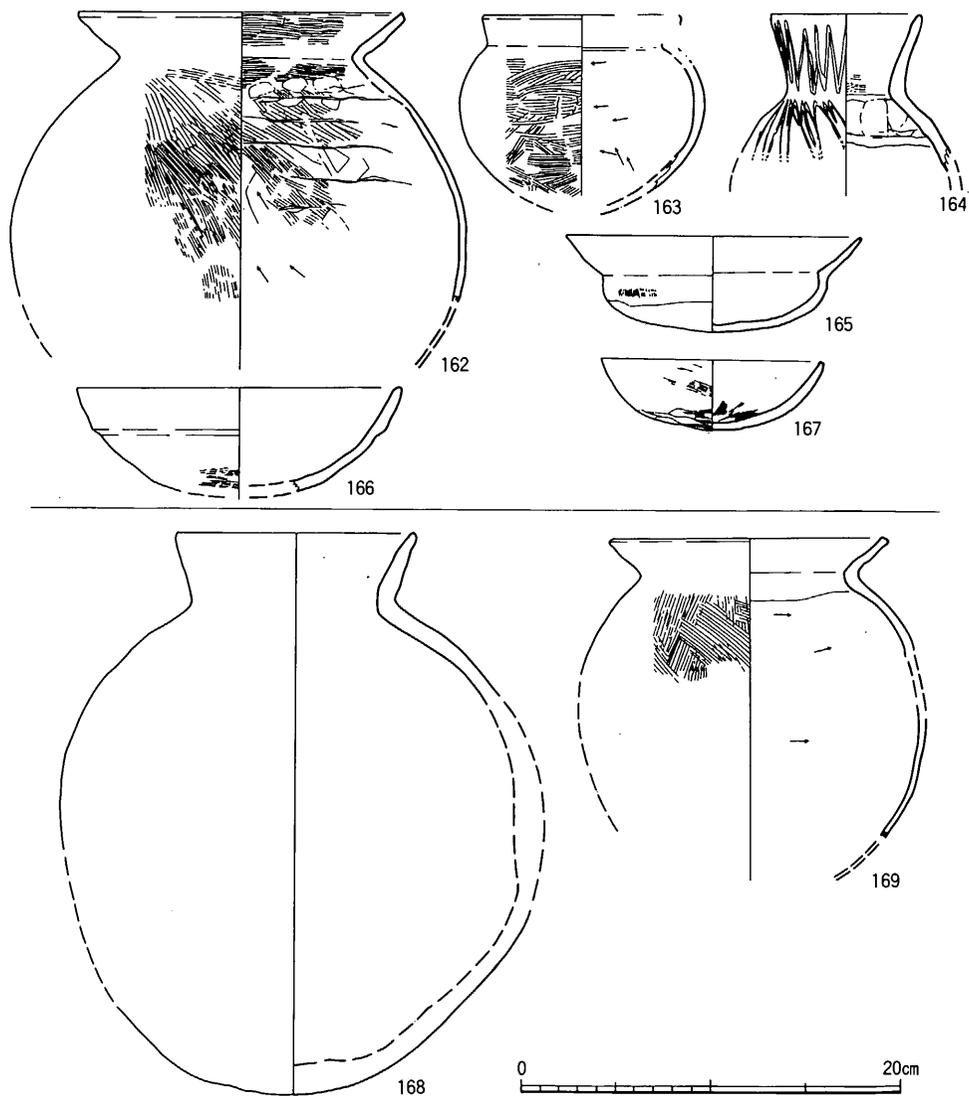
第64图 B地区 SX03~06出土土器实测图 (1/4)



第65図 B地区 SX07出土土器実測図 (1/4)

表3-2 B地区出土土器要説

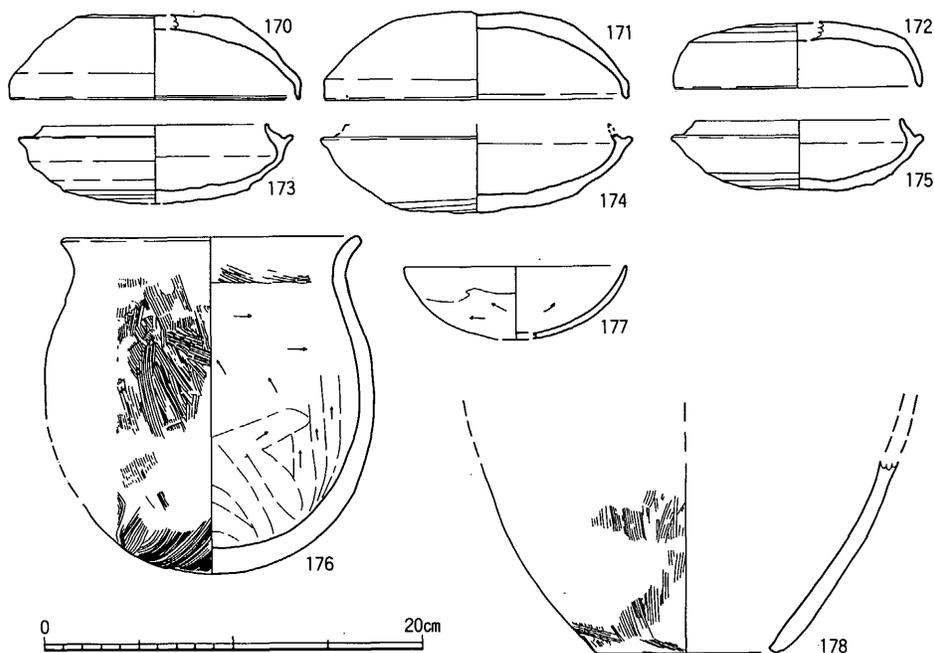
番号	器種	法量(cm)	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
9	甕	口径 16.4	黄褐色	2~3mm大の砂粒を少量含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ 頸部下約2cmより ヘラケズリ	外面 スス附着
10	甕	口径 16.8	淡赤褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部上位 ハケメ後ヨコナデ 胴部中位下 ハケメ	口頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部上位 ハケメ 胴部中位下 ヘラケズリ	外面 全体にスス附着
11	甕	口径 15.6	黄褐色	1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 磨滅 胴部 磨滅(ハケメ残)	口縁部 磨滅 胴部 ヘラケズリ	
12	甕	口径 19.7	淡黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部上位 ハケメ後ヨコナデ 胴部中位 ハケメ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 頸部 ナデ 頸部下約2cmより ヘラケズリ	外面 胴部上位ハケによる波状文 外面 スス附着



第66図 B地区SX08・09出土土器実測図(1/4)

表3-3 B地区出土土器要説

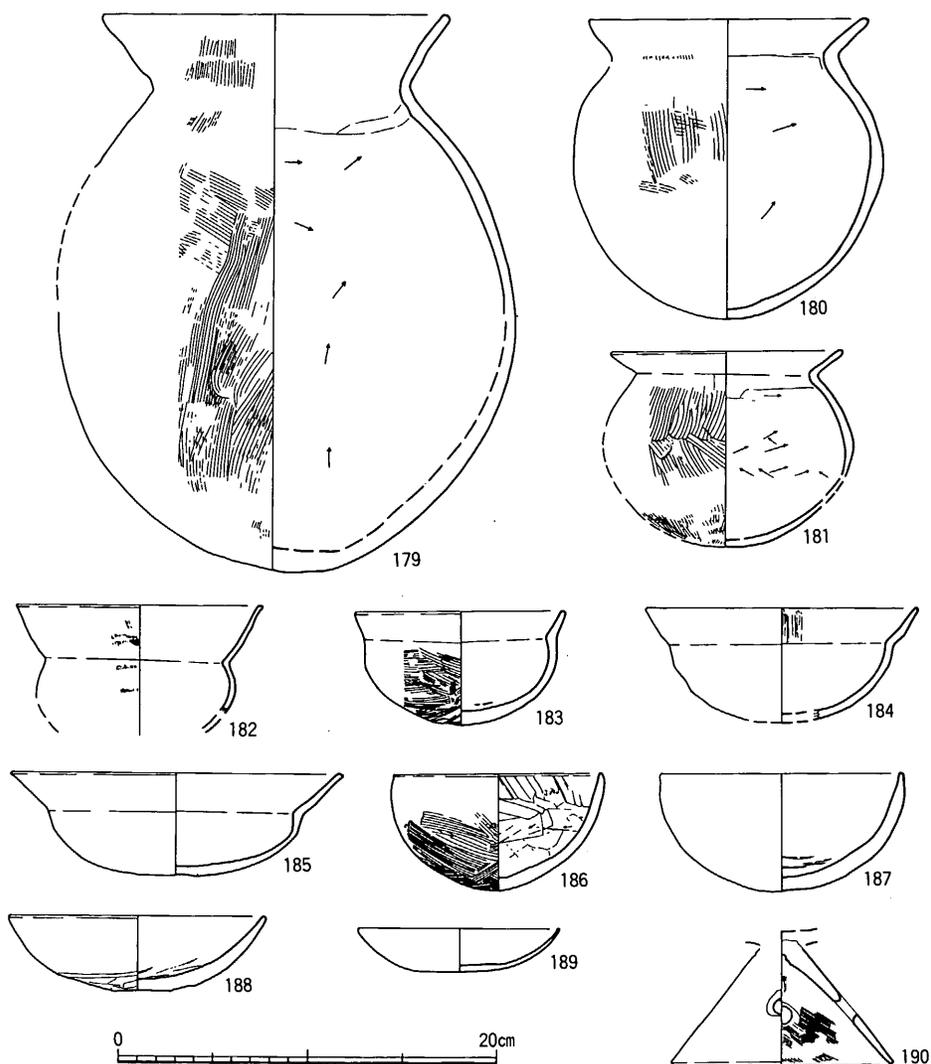
番号	器種	法量(cm)	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
13	甕	口径 15.2	黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部上位 ハケメ後ヨコナデ 胴部中位 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 頸部下約1cmよりヘラケズリ 胴部下半に指頭痕が多い	外面 胴部中位を中心にスス付着
14	甕	口径 16.1	淡赤褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部上端 ハケ目後ヨコナデ 胴部中位 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 胴部上位 ナデ、指頭痕 頸部下約4cmよりヘラケズリ	外面 スス付着
15	甕	口径 14.5	淡赤褐色	1~2mm大の砂粒をやや多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 胴部下約1.5cmよりヘラケズリ	外面 胴部上位に波状沈線



第67図 B地区 SX10出土土器実測図 (1/4)

表 3-4 B地区出土土器要説

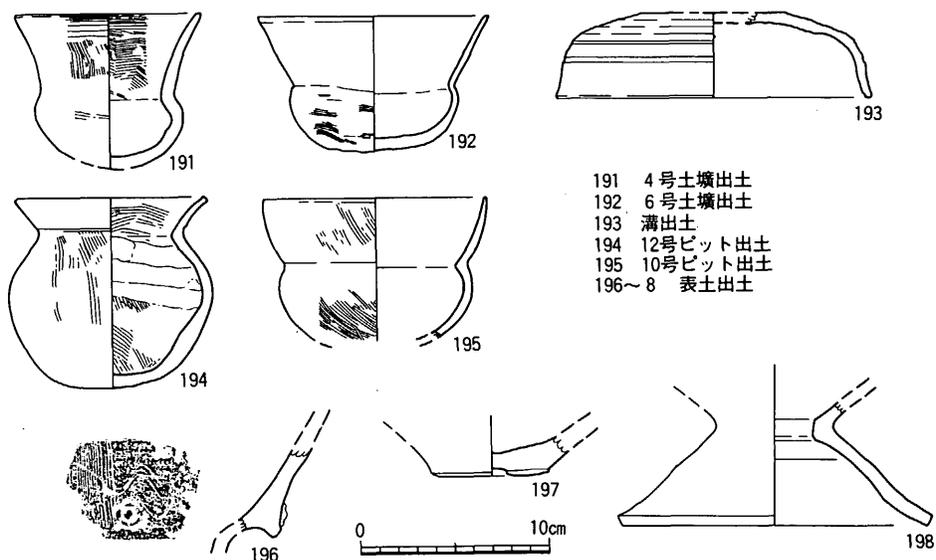
番号	器種	法量(cm)	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
16	甕	口径 14.4	淡褐色	1~2mm大の砂粒を少し含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ハケメ 頸部直下 ナデ 頸部下約2cmより ヘラケズリ	
17	甕	口径 13.8 器高 18.8	淡黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 頸部下約1cmより ヘラケズリ	内面 底部周囲に指頭痕
18	甕	口径 15.2 器高 18.8	黄褐色	1~2mm大の砂粒をやや多く含む	口頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部上位 ハケメ後ヨコナデ 胴部中位以下 ハケメ	口頸部 ハケメ後ヨコナデ 頸部下約1cmより ヘラケズリ	外面 胴部上位に一条の沈線
19	甕	口径 13.8 器高 17.7	黄褐色	微砂粒を少し含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 頸部下約1.5cmより ヘラケズリ	内面 底部周囲に指頭痕
20	甕	口径 14.3	淡黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 頸部下約1.5cmより ヘラケズリ 底部 指頭痕	外面 全体にスス附着 内面 下半を中心に炭化物附着
21	甕	口径 18.6 器高 29.5	黄褐色	1mm大の砂粒を少し含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 胴部上半 ハケメ 胴部下半 ヘラケズリ	
22	甕	口径 16.2	淡黄褐色	微砂粒をやや多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 頸部直下より ヘラケズリ (頸部はケズリ後ナデ)	外面 胴部中位にスス附着
23	甕	口径 16.4	暗褐色	1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 頸部直下より ヘラケズリ	
24	甕	口径 15.6	淡黄褐色	1~3mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ	



第68図 B地区 SX13出土土器実測図(1/4)

表 3-5 B地区出土土器要説

番号	器種	法量(cm)	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
25	甕	口径 15	淡赤褐色	0.5~1mm大の砂粒を少し含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	全面 ハケメ	
26	甕	口径 13 器高 16.3	淡黄褐色	1~2mm大の砂粒をやや多く含む	全 面 ハケメ	全 面 ハケメ	
27	甕 (複合口縁)	口径 31.4	淡黄褐色	微砂粒1mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部上位 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 頸部直下より ヘラケズリ	外面 スス付着 内面 口縁部炭化物付着
28	甕 (複合口縁)	口径 29.8	淡黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多量に含む	口頸部 ヨコナデ	口頸部 ヨコナデ	



191 4号土壇出土
 192 6号土壇出土
 193 溝出土
 194 12号ピット出土
 195 10号ピット出土
 196~8 表土出土

第69図 B地区その他の遺構等出土土器実測図(1/4)

表3-6 B地区出土土器要説

番号	器種	法量(cm)	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
29	壺	底径 3.7	淡褐色	1mm大の砂粒を少し含む	底部 タタキ後ナデ	底部 ハケメ	内面 クモの巣状ハケメ 底部 くぼみ底
30	壺	底径 5.4	暗赤褐色	1mm大の砂粒を少し含む	底部 ヘラケズリ(右回り)	底部 ハケメ	底部 くぼみ底
31	壺	胴部最大径 37.4	黄褐色 淡赤褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多量に含む	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケメ 底部 ヘラケズリ	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ 底部 ハケメ後ナデ	
32	壺 (複合口縁)	口径 22.2	赤褐色	0.5mm大の砂粒を中量含む	口縁部 ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ	
33	壺 (複合口縁)	口径 23.2	赤褐色	1mm大の砂粒やや多く含む	口縁部 櫛書波状文後竹管 浮文	口縁部 櫛書波状文 頸部 磨滅	
34	壺 (複合口縁)	口径 22.3	黄褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ミガキ	口縁部 暗文 頸部 ヨコナデ	外面 口縁部に竹管文
35	壺 (複合口縁)		淡褐色	1mm大の砂粒を少し含む	口頸部 ヨコナデ	口頸部 ヨコナデ	外面 口縁部に竹管浮文
36	壺 (複合口縁)	口径 22.4	淡赤褐色	1~4mm大の砂粒を含む	口縁部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ	外面 口唇部 刻み目
37	壺 (複合口縁)		黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多量に含む	頸部 ヨコナデ 胴部 磨滅	頸部 ヨコナデ 頸部下2cmより ハケメ	
38	壺 (複合口縁)		黄褐色	1.5~2mm大の砂粒をやや多く含む	頸部 磨滅 胴部 ハケメ 底部 ヘラケズリ	頸部 磨滅 胴部上位 磨滅 胴部上下位 ハケメ	
39	壺 (複合口縁)		淡赤褐色	微砂粒を多く含む	頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	頸部 ハケメ 胴部 ハケメ後ナデ	
40	壺 (複合口縁)		丹	微砂粒、1mm大の砂粒を多く含む	頸部 ヨコナデ 胴部上位、中位 タタキ後ナデ 胴部下位下 丁寧なヘラケズリ	頸部 ヨコナデ 胴部上位、中位 ヘラケズリ 胴部下位下 ヘラケズリ後ナデ	外面、内面頸部 丹塗り
41	壺 (複合口縁)	口径 12.6	赤褐色	微砂粒を含む	口頸部 磨滅	口頸部 磨滅	

表3-7 B地区出土土器要説

番号	器種	法量(cm)	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
42	壺 (複合口縁)		淡黄褐色	1mm大の砂粒を少し含む		胴部上端 ヘラケズリ	外面胴部上端に波状文肩部に凸帯
43	壺 (複合口縁)	口径 13.3 器高 19.6	黄褐色	1~2mm大の砂粒をごく少量含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 タタキ後ナデ 底部 タタキ	口縁部 ヨコナデ 頸部 ナデ(部分的に指頭痕) 胴部、底部 ヘラケズリ後ナデ	
44	壺 (複合口縁)	口径 10.6 器高 15.9	淡赤褐色	微砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ 底部 ハケメ後ナデ	口縁部 ハケメ 頸部 ヨコナデ 胴部上下 ヘラケズリ	
45	壺	口径 18.8 最大径27.5	淡黄褐色	微砂粒、1~2mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ミガキ 胴部 難なミガキ(部分的にハケ目残)	口縁部 ミガキ 頸部 指押え後ナデ 胴部 ヘラケズリ	
46	壺	口径 16.8 器高 24.9	黄茶褐色	1~2mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ヨコナデ 頸部、胴上位 ハケメ後ヨコナデ 胴部 中位 ハケメ後ナデ 胴部 中位下 ヘラケズリ後ナデ	口頸部 ヨコナデ 胴部 上位 ナデ 胴部 中位下 ヘラケズリ	
47	壺	口径 18	暗褐色	1mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ後ナデ	口頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ヘラケズリ	
48	壺	口径 20	黄褐色	微砂粒を中量含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 胴部 ヘラケズリ	
49	壺	口径 16.3	淡赤褐色 ~ 黄褐色	微砂粒1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ハケメ後ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ	外面 口縁部に沈線で木葉状文様
50	壺		淡黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 胴部 上位 ナデ、指頭痕が多い 胴部 中位 ヘラケズリ	外面 胴部中位にスス付着
51	壺	口径 18.7	黄褐色	微砂粒、1.5mm大の砂粒を多量に含む	口縁部 磨滅	口縁部 磨滅	
52	甕	口径 10.7 器高 5.4	淡赤褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 磨滅 頸部 ヨコナデ 胴部 磨滅	口縁部 磨滅 胴部 磨滅	
53	甕	口径 12 器高 12.3	黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 胴部 上位 ナデ 胴部 中位下 ヘラケズリ 底部 指頭痕	外面 胴部中位、口縁の一部にスス付着
54	甕	口径 11.6 器高 13.1	暗褐色 ~ 黄褐色	0.5mm、3mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 上位 ナデ 胴部 中位 タタキ 胴部 下位 ヘラケズリ	口頸部 ヨコナデ 胴部 上位 ナデ 胴部 中位下 ヘラケズリ後ナデ	
55	甕	口径 12.2 器高 14.4	淡黄褐色	微砂粒1mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ 底部 ハケメ後ナデ	口縁部 ヨコナデ 頸部 ナデ 胴部 ヘラケズリ(部分的にハケ目)	外面 胴部全体にスス付着
56	甕	口径 12.1	淡赤褐色	微砂粒1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 胴部 タタキ後ハケメ	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラケズリ後ハケメ	外面 僅かにスス付着
57	甕	口径 15.4 器高 17.7	淡黄褐色	微砂粒をやや多く含む	口頸部 ハケメ 胴部 上位 タタキ後ハケメ 胴部 中位下 ハケメ	口縁部 ハケメ 頸部 ナデ 胴部 ヘラケズリ	
58	甕	口径 10.4	淡黄褐色	微砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ナデ	口縁部 磨滅 胴部 磨滅	
59	甕	口径 13.4 器高 15.8	黄褐色	1~0.5mm大の砂粒を中量含む	口縁部 ヨコナデ 胴部 上端 ヘラケズリ後ナデ 胴部 ヘラケズリ	口縁部 ヘラケズリ後ヨコナデ 胴部 上位 ヨコナデ 胴部 中位下 ナデ	
60	甕	口径 12.5	淡黄茶色	1.5mm大の砂粒を中量含む	口縁部 ハケメ 胴部 ハケメ	口縁部 ハケメ 胴部 ヘラケズリ	
61	壺	口径 17	淡赤褐色	微砂粒1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 上端 ハケメ後ナデ 胴部 ハケメ	外面 全体にスス付着

表 3-8 B地区出土土器要説

番号	器種	法量(cm)	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
62	壺	口径 11.5 器高 8.7	淡黄茶褐色	微砂粒を少し含む	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 胴部上位 ハケメ後ナデ 胴部中位下 粗いヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 胴部 ナデ	
63	小型丸底壺	口径 10.2 器高 7.15	黄褐色	0.5~1mm大の砂粒を若干含む	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ミガキ	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ミガキ 胴部 ヨコナデ 底部 ナデ	
64	小型丸底壺	口径 11.5 器高 7.4	黄褐色	1~1.5mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ後ナデ 底部 丁寧なヘラケズリ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 胴部上位 ヘラケズリ後ヨコナデ 胴部中位下 ヘラケズリ後ナデ	
65	小型丸底壺	口径 14 器高 9.3	黄茶褐色	0.5mm大の砂粒を中量含む	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラケズリ 底部 ナデ	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケメ後ナデ 底部 ヘラケズリ後丁寧なナデ	
66	小型丸底壺	口径 10.8 器高 7.8	淡赤褐色	0.5~1mm大の砂粒を少量含む	口縁部 磨減 胴部 磨減	口縁部 磨減 胴部 磨減	
67	小型丸底壺	口径 11 器高 8	淡黄褐色	微砂粒を若干含む	口縁部 ミガキ 胴部上位 ハケメ後ミガキ 胴部中位下 磨減	口縁部 ヨコナデ 胴部 磨減	
68	小型丸底壺	口径 10.8	淡黄褐色	0.5mm大の砂粒を少量含む	口縁部 ミガキ 胴部上位 ハケメ後ミガキ 胴部中位下 ミガキ	口縁部 ミガキ 胴部 ミガキ	
69	小型丸底壺	口径 12.1 器高 7.6	赤褐色	1mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 胴部上位 ミガキ 胴部中位下 丁寧なヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラケズリ後ナデ	
70	小型丸底壺	口径 14.2 器高 13.4	黄褐色	1mm大の砂粒を少し含む	口縁部 ヨコナデ 胴部上位 ハケメ後ミガキ 胴部中位下 丁寧なヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 胴部 丁寧なナデ	
71	小型丸底壺	口径 14.6 器高 10.7	淡茶褐色	微砂粒1mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 タタキ後ヘラケズリ(ナデ状) 底部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 胴部 ナデ 底部 ヘラケズリ後ナデ	外面 口縁部、胴部にスス付着 内面 全体に炭化物付着
72	小型丸底壺	口径 11.6 器高 8.6	赤褐色	1mm大の砂粒を少し含む	口縁部 ハケメ 頸部 ヨコナデ 胴部上位 ハケメ後ミガキ 胴部中位下 ヘラケズリ	口縁部 ミガキ 胴部 ハケメ	
73	小型丸底壺	口径 11.9 器高 9.6	暗褐色	0.5~1mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部上位 ハケメ後ミガキ 胴部中位下 丁寧なヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 胴部上位 ハケメ 胴部中位下 ヘラケズリ後ナデ	内、外面共にスス付着
74	小型丸底壺	口径 12	淡赤褐色	微砂粒を少し含む	口縁部 ヨコナデ 胴部上位 ハケメ後ヨコナデ 胴部中位下 磨減	口縁部 ヨコナデ 胴部上位 ヨコナデ 胴部中位下 ナデ	
75	小型丸底壺	口径 10.9	黄褐色	0.5mm大、3mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	
76	小型丸底壺	口径 12.8 器高 8.4	淡黄茶褐色	微砂粒1mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部上位 ハケメ後ナデ 胴部中位 ナデ 胴部下位下 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 胴部 ナデ	
77	鉢	口径 16.2	淡黄褐色	0.5mm大の砂粒を少量含む	口頸部 ミガキ 体部上半部 ミガキ 体部下半部 ヘラケズリ	口頸部 ミガキ 体部 ハケメ	
78	鉢	口径 18.1 器高 6.1	赤褐色	微砂粒を少し含む	口頸部 ヨコナデ (頸部ハケメ残) 体部上半部 ヨコナデ 体部下半部 ナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 ナデ	

表3-9 B地区出土土器要説

番号	器種	法量(cm)	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
79	鉢	口径 17.8 器高 9.2	淡黄褐色	微砂粒1mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 体部 ナデ (部分的に粗いヘラケズリ)	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	
80	鉢	口径 15.2 器高 7.6	黄褐色	1mm大の砂粒を少し含む	口縁部 ミガキ 体部上半部 ハケメ後ミガキ 体部下半部 ハケメ 底部 ナデ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体部上半部 ミガキ 体部下半部 ナデ	外面 口縁から底部にかけて帯状にスス付着
81	鉢	口径 13.4 器高 6.2	淡黄褐色	1mm大の砂粒を多量に含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	口縁部 ハケメ後ナデ 体部 ヘラケズリ後ナデ	
82	鉢	口径 12.2 器高 6.1	淡黄褐色	1mm大の砂粒を多量に含む	口頸部 ヨコナデ 体部 磨滅	口縁部 ヨコナデ 体部上位 ナデ 体部中位 磨滅	
83	鉢	口径 8.8 器高 4.6	暗褐色	微砂粒を多く含む	口頸部 ナデ 体部 ヘラケズリ	口縁部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ	
84	鉢	口径 11.4 器高 8.6	暗黄褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ナデ 体部上半部 ナデ 体部下半部 ハケメ	口縁部 ハケメ 体部 ナデ	
85	鉢	口径 16.1 器高 10.3	暗褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多量に含む	口縁部 ヨコナデ 体部上半部 ハケメ後ヘラケズリ 体部下半部 ハケメ後ナデ 底部 ナデ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体部 ハケメ	外面 スス付着 (底部を除く)
86	鉢	口径 20.1	茶褐色	微砂粒0.5mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ハケメ後ナデ 体部 ヘラケズリ後ハケメ	口縁部 ハケメ後ナデ 体部 ハケメ後ナデ	
87	鉢	口径 15.4 器高 5.9	淡赤褐色 ～ 黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 磨滅	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	
88	鉢	口径 15.1 器高 4.4	淡黄褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ後ナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	
89	鉢	口径 14 器高 6	淡赤褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ 底部 ハケメ後ナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ	
90	鉢	口径 14.2 器高 5.4	淡赤褐色	1mm大の砂粒を少し含む	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体部上半部 ハケメ後ナデ 体部下半部 タタキ後ナデ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体部 ハケメ 底部 ナデ	
91	鉢	口径 13.4 器高 3.6	暗茶褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	口縁部 ナデ 体部 ナデ	
92	鉢	口径 13	茶褐色	微砂粒を少量含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ後ナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ	
93	鉢	口径 13 器高 4.3	淡黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多量に含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	
94	鉢	口径 13 器高 3.5	淡赤褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多量に含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 底部 ナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	
95	鉢	口径 11.9 器高 3.2	黄褐色	0.5mm大の砂粒を多量に含む	口縁部 ヨコナデ 体部 磨滅	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	
96	鉢	口径 12.8 器高 2.6	淡赤褐色	0.5mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ後丁寧なナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 ナデ	
97	鉢	口径 12 器高 3.7	淡赤褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ後ナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	
98	鉢	口径 12 器高 4.6	淡赤茶褐色	0.8mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ミガキ	口縁部 ハケメ後ミガキ 体部 ミガキ	
99	鉢	口径 11.7 器高 3.8	黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多量に含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ 底部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ	
100	鉢	口径 10.6 器高 2.8	淡赤褐色	0.5mm大の砂粒を多量に含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 底部 ナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	

表 3-10 B地区出土土器要説

番号	器 種	法 量(cm)	色 調	胎 土	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
101	鉢	口径 11.6 器高 5.6	淡赤褐色	0.5mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 体 部 ヘラケズリ(ナデ状)	口縁部 ヨコナデ 体 部 ハケメ	
102	鉢	口径 10.7 器高 4.9	黄褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 磨滅 体 部 磨滅	口縁部 磨滅 体 部 磨滅	外面 体部下位に指頭痕が多く残る
103	鉢	口径 10.2	黄褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部上半部 ハケメ後ナデ 体部下半部 ナデ	口縁部 ヨコナデ 体 部 ハケメ後ナデ	
104	鉢	口径 10.1 器高 4.3	淡黄褐色	0.5~1mm大の砂粒を中量含む	口縁部 ヨコナデ 体部上位 ナデ 体部中位下 ヘラケズリ	口縁部 ハケメ 体 部 ハケメ 底 部 ナデ	
105	鉢	口径 9.1 器高 4.1	淡黄褐色	微砂粒を少し含む	口縁部 ヨコナデ 体 部 ナデ	口縁部 ヨコナデ 体 部 ナデ	
106	鉢	口径 8.9 器高 4.2	暗褐色	1mm大の砂粒を中量含む	口縁部 ヨコナデ 体 部 ヘラケズリ(ナデ状) 底 部 ヘラケズリ後ナデ	口縁部 ハケメ後ナデ 体 部 ナデ	
107	鉢	口径 8.1 器高 3.2	赤褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 指頭痕 体 部 ヘラケズリ	口縁部 ナデ 体 部 ナデ	
108	鉢	口径 6.6 器高 2.7	暗褐色	0.8mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ナデ(指頭痕残) 体 部 ナデ(指頭痕残)	口縁部 ヘラケズリ後ナデ 体 部 ヘラケズリ後ナデ	
109	鉢	口径 5.9 器高 2.6	淡黄褐色	0.5~1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ヨコナデ 体 部 ナデ	口縁部 ヨコナデ 体 部 ナデ	
110	鉢	口径 11.5 器高 6	黄褐色	1~2mm大の砂粒を多量に含む	口縁部 ヨコナデ 体部上半部 ナデ 体部下半部 ナデ (指頭痕残)	口縁部 ヨコナデ 体 部 ナデ 底 部 指頭痕	外面 底部に木葉痕
111	鉢	口径 11.1 器高 4.9	赤褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 磨滅 体 部 磨滅	口縁部 磨滅 体 部 磨滅	
112	鉢		淡黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多く含む	体 部 ナデ 底 部 未調整	体 部 ナデ	口縁部打ち欠き
113	鉢 (脚台付)	口径 11.1 器高 5.7	茶褐色	微砂粒を少量含む	口縁部 ヨコナデ 体 部 ナデ 脚台部 ナデ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体 部 ハケメ	
114	鉢 (脚台付)	口径 8.4 器高 5.2	淡黄褐色	1~2mm台の砂粒をやや多く含む	口縁部 磨滅 体 部 磨滅 脚台部 指頭痕	口縁部 磨滅 体 部 磨滅 底 部 指頭痕 脚台部 指頭痕	
115	鉢 (脚台付)	口径 10.1 器高 6.9	茶褐色	微砂粒を少量含む	口縁部 ヨコナデ (ハケメ残) 体 部 ナデ 脚台部 ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ 体 部 ナデ 脚台部 ヨコナデ	
116	鉢 (脚台付)	口径 10.5 器高 6.8	淡黄褐色	微砂粒を中量含む	口縁部 ヨコナデ 体 部 ナデ 脚台部 ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ 体 部 ナデ (ハケ目残) 脚台部 ヨコナデ	
117	鉢 (脚台付)	口径 10.7 器高 8.3	黄茶褐色	微砂粒を少量含む	口縁部 ヨコナデ 体 部 ナデ 脚台部 指頭痕 脚裾部 ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ 体 部 ハケ目後ナデ 底 部 ナデ 脚台部 ヘラケズリ後ヨコナデ	
118	鉢 (脚台付)	口径 12	黄褐色	微砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 体部上半部 ハケメ後ナデ 体部下半部 雑なミガキ 脚台部 ヨコナデ	口縁部 ミガキ 体 部 ミガキ 脚台部 ヘラケズリ	
119	鉢 (脚台付)	口径 12.4	暗黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 体 部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体 部 ヘラケズリ後ナデ	
120	鉢 (脚台付)		黄褐色	0.5mm大の砂粒を中量含む	脚台部 ナデ (一部ハケメ残) 脚裾部 ヨコナデ	体 部 ヘラケズリ 脚台部 ハケメ	

表 3-11 B 地区出土土器要説

番号	器種	法量(cm)	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
121	鉢 (脚台付)	口径 12.9 器高 6.5	赤茶褐色	微砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ後ミガキ 脚台部 ヘラケズリ後ヨコナデ 脚部 ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ 脚台部 ハケメ後ヨコナデ 脚部底 ナデ	
122	高坏	口径 19.5	赤茶褐色	2~3mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 体部 磨滅 坏底部 ハケメ 脚部 磨滅	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体部 ハケメ後ヨコナデ 坏底部 ナデ 脚部 ヘラケズリ 脚筒 しぼり目	穿孔 3
123	高坏	脚裾径 16	淡赤褐色	微砂粒をやや多く含む	台形状に誇張された脚裾部で、裾端の径は16cmを測る。裾部中位には凸帯を貼付し、その上に刻みを施す。穿孔は小片のため明確ではないが凸帯を挟み、裾上位と下位の2ヶ所に観察されたのみで、その角度から、中心により45°毎に上半部と下半部に交互に穿孔されていると考えられる。		
124	器台	受部径 9.5 脚裾径 8.7 器高 7.8	淡赤褐色	微砂粒を多く含む	受部口縁部 ヨコナデ 受部体部 ヨコナデ 脚部 ヘラケズリ 脚裾部 ヨコナデ	受部口縁部 ヨコナデ 受部体部 磨滅 脚部 ハケメ 脚裾部 ヨコナデ	
125	器台	受部径 11.5 脚裾径 8.3 器高 8.4	淡赤褐色	0.5~1mm大の砂粒をやや多く含む	受部口縁部 ヨコナデ 受部体部 ミガキ 脚部 ヘラケズリ 脚裾部 磨滅	受部口縁部 ヨコナデ 受部体部 暗文 (一部ハケメ) 脚部 ハケメ 脚裾部 ヨコナデ	
126	器台	受部径 10.6 脚裾径 11.1 器高 9.1	淡赤褐色	微砂粒を若干含む	受部口縁部 ヨコナデ 受部体部 ナデ 脚部 ヨコナデ	受部口縁部 ヨコナデ 受部体部 ミガキ 脚部 ハケメ後ナデ	穿孔 1/2
127	器台	受部径 9.8 器高 8.4	赤褐色	0.5~1mm大の砂粒を中量含む	受部口縁部 ヨコナデ 受部体部 ミガキ 脚部 磨滅	受部 磨滅 脚部 磨滅(ハケメ残)	穿孔 2
128	器台	受部径 9.4	淡赤褐色	1mm大の砂粒を若干含む	受部口縁部 ヨコナデ 受部体部 ナデ	受部口縁部 ヨコナデ 受部体部 ミガキ	
129	器台	受部径 8.7	赤褐色	微砂粒を少し含む	受部口縁部 磨滅(ミガキ) 受部体部 磨滅(ミガキ)	受部口縁部 磨滅 受部体部 磨滅	
130	器台	脚裾径 12.4	淡黄褐色	微砂粒を多く含む	脚部 ヨコナデ	脚部 磨滅	穿孔 2
131	器台	脚裾径 10.6	暗褐色	微砂粒を多く含む	脚部 粗いミガキ	脚部 ハケメ 脚部底 ナデ	穿孔 3
132	器台	脚裾径 9.8	淡黄褐色	2~4mm大の砂粒を多く含む	脚部 磨滅	脚部 磨滅	穿孔 4
133	器台	受部径 16.1	淡黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多量に含む	受部口縁部 ヨコナデ 受部体部 ヨコナデ後ミガキ 脚部 ヨコナデ	受部口縁部 ミガキ 受部体部 ヘラケズリ後ナデ	
134	器台	脚裾径 20.6	赤褐色	0.5~2mm大の砂粒をやや多く含む	くびれ部 ヨコナデ 脚部 ヨコナデ後粗いミガキ	脚部 ヘラケズリ 脚部底 ヨコナデ後粗いミガキ	
135	器台		淡赤褐色	微砂粒を少し含む	くびれ部 ヨコナデ(磨滅) 脚部 ヨコナデ(磨滅)	くびれ部 ヨコナデ 脚部 ヘラケズリ	
136	手づくね	口径 4.1 器高 3.5	淡黄褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ナデ 体部 ヘラケズリ 底部 ナデ	口縁部 ナデ 体部 ナデ 底部 指頭痕	
137	壺	口径 13.2	淡黄褐色	微砂粒を少量含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ナデ 胴部中位 (タタキ残)	口頸部 ヨコナデ 胴部 ヘラケズリ後ヨコナデ 胴部 ヘラケズリ後ナデ	
138	高坏	口径 16.5	赤茶褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を少量含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ後ヨコナデ 杯底部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ後粗いミガキ	
139	壺 (複合口縁)		淡灰色	微砂粒を含む		ヨコナデ	外面 竹管浮文 柳書文

表3-12 B地区出土土器要説

番号	器種	法量(cm)	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
140	鉢	口径 8.1 器高 7.1	黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多量に含む	口縁部 ナデ後雑なヨコナデ 体部 ナデ	口縁部 ナデ後雑なヨコナデ 体部 ナデ	
141	鉢	口径 13.1 器高 6.6	黄褐色	1~3mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ナデ後ヨコナデ 体部 ナデ	口縁部 ナデ後ヨコナデ 体部 ヘラケズリ	
142	壺	口径 12.2 器高 18.7	黄褐色	0.5~1mm大の砂粒を少し含む	口頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部上位 ハケメ後ナデ 胴部中位下 ハケメ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 頸部 ナデ 胴部 粗いヘラケズリ	
143	甕	口径 16.4	黄褐色	1mm大の砂粒を含む	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	
144	壺	口径 21.4 器高 32.2	黄茶褐色	微砂粒を少量含む	口縁部 ハケメ後ミガキ 胴部上位 ハケメ後ミガキ 胴部中位 ヘラケズリ後ミガキ 胴部中位下 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ後粗いミガキ 口縁部 ハケメ後ミガキ 胴部 ハケメ後雑なナデ(指頭痕残)	
145	小型丸底壺	口径 11.1 器高 7.2	淡赤褐色	2~3mm大の砂粒を多量に含む	口縁部 ミガキ 胴部 ミガキ 底部 ケズリ	口縁部 ミガキ 胴部 ナデ 底部 ヘラケズリ後ナデ	
146	小型丸底壺	口径 10.9	黄褐色	0.5mm大の砂粒を若干含む	口頸部 ヨコナデ (頸部 ハケメ残) 胴部 ナデ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ヨコナデ	
147	鉢	口径 16.5 器高 5.6	淡赤褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を若干含む	口頸部 ミガキ 体部 ヘラケズリ後ミガキ 底部 ミガキ	口縁部 ヨコナデ後ミガキ 体部 ミガキ 底部 ヘラケズリ(ナデ状)	
148	鉢	口径 16.6	淡赤茶褐色	1mm大の砂粒を少量含む	口縁部 ヨコナデ 体部 輪位 ヨコナデ 体部中位下 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部上位 ハケメ後ヨコナデ 体部中位下 ハケメ	
149	鉢	口径 16.8	淡黄褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ	
150	甕	口径 16.5 器高 19.6	黄褐色	1~1.5mm大の砂粒を中量含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ 底部 変剥落	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 頸部 ハケメ後ナデ 胴部上位 ヘラケズリ後ナデ(指頭痕残) 胴部中位下 ヘラケズリ	外面 全体にスス附着
151	甕	口径 14.6	淡暗褐色	砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 頸部付近より ヘラケズリ	外面 全体にかなりスス附着
152	甕	口径 13.2	淡黄褐色	砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 頸部付近より ヘラケズリ	
153	甕	口径 11.6	淡暗褐色	微砂粒を中量含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ハケメ 頸部直下より ヘラケズリ	外面 全体にスス附着 内面 胴部炭化物附着
154	小型丸底壺	口径 11.5 器高 8.5	赤褐色	微砂粒を含む	口頸部 ミガキ(ハケメ残) 胴部上位 ミガキ 胴部中位下 ヘラケズリ	口縁部 ミガキ 胴部 ミガキ	
155	鉢	口径 16.2 器高 6.7	赤褐色	1~2mm大の砂粒を少し含む	口縁部 ヨコナデ 体部上位 ヨコナデ 体部中以下 ヘラケズリ	口縁部 ミガキ 体部 ミガキ(放射状)	
156	鉢	口径 13.9 器高 6.4	淡黄褐色	砂粒を多く含む	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体部上半部 ハケメ 体部下半部 ヘラケズリ(ナデ状)	口縁部 ヨコナデ 体部上半部 ナデ 体部下半部 ヘラケズリ	
157	鉢	口径 10.7 器高 3.5	淡黄褐色	0.5~3mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	
158	鉢	口径 10.5 器高 3.8	淡黄褐色	砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	
159	器台	受部径 12.9 脚径 10 器高 9.2	赤褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	受部口縁部 ヨコナデ 受部体部 ヨコナデ後 ヘラケズリ(放射状) 脚部 ヘラケズリ	受部口縁部 ヨコナデ 受部体部 ハケメ後ミガキ(暗文) 脚部 ハケメ	

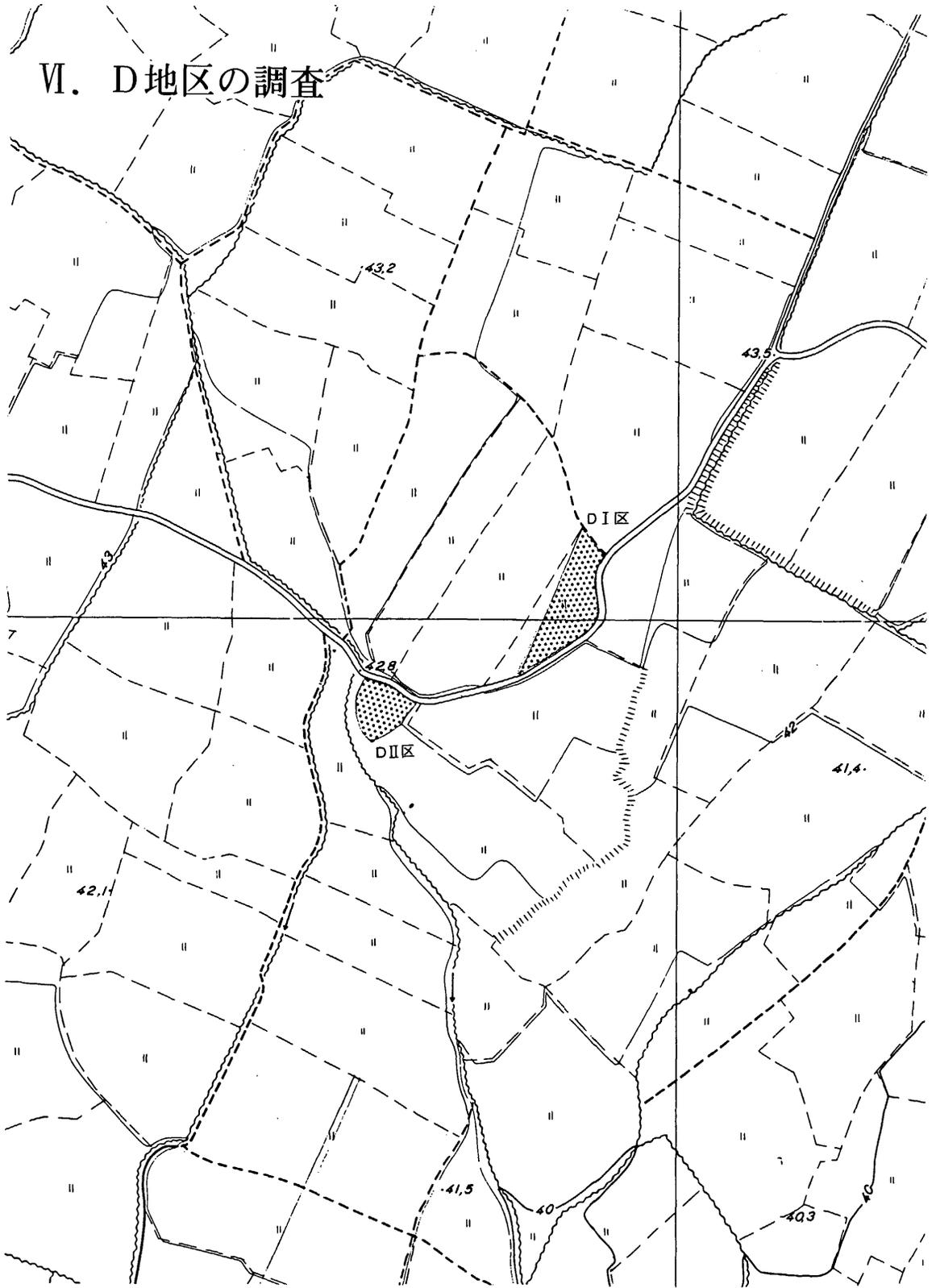
表 3-13 B 地区出土土器要説

番号	器種	法量(cm)	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
160	器台	脚裾径 12.5	淡赤褐色	1mm大の砂粒を少し含む	脚部 ヨコナデ後粗いミガキ	脚部 ハケメ後雑なナデヘラケズリ(ナデ状)	穿孔 3
161	手づくね	口径 5 器高 5.4	淡黄褐色	砂粒を多く含む	口縁部 指頭痕 体部 ナデ	口縁部 ナデ 体部 指頭痕	
162	壺	口径 17.2	茶褐色 赤褐色	砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 頸部 ハケメ、指頭痕 胴部上位 ハケメ 胴部中位下 ハケメ後ヘラケズリ	
163	壺	口径 10.5	淡黄茶褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ハケメ 頸部 ナデ 胴部 ヘラケズリ	
164	壺	口径 8	黄褐色	1mm大の砂粒を少し含む	口縁部 ヨコナデ後ミガキ(暗文) 胴部 ヨコナデ後ミガキ(暗文)	口縁部 ヨコナデ(頸部ハケメ残) 胴部 ナデ(指頭痕残)	
165	鉢	口径 15.7 器高 5.1	淡赤褐色	0.5mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ミガキ 体部上位 ミガキ(ハケメ残) 体部中位下 ヘラケズリ	口縁部 ミガキ 体部 ミガキ 底部 ナデ	
166	鉢	口径 17.2	黄褐色	1-2mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部上半部 ヨコナデ 体部下半部 粗いハケメ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ	
167	鉢	口径 11.7 器高 3.7	淡赤褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体部上半部 ハケメ後ナデ 体部下半部 ヘラケズリ後ハケメ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体部上半部 ハケメ後ナデ 体部下半部 ハケメ	
168	壺	口径 12.8 器高 29.8	淡赤褐色 淡暗褐色	微砂粒、3mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 胴部 磨滅	口縁部 ヨコナデ 胴部 磨滅	
169	壺	口径 14.8	黄褐色	1-3mm大の砂粒を含む	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 頸部 ナデ 頸部付近より ヘラケズリ	
170	坏蓋	口径 15.3	淡灰色	微砂粒、1mm大の砂粒を少量含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 天井部 回転ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 天井部 ナデ	須恵器
171	坏蓋	口径 16.1 器高 4.7	淡黄灰色	微砂粒、1mm大の砂粒を若干含む	口縁部 磨滅 体部 磨滅 天井部 回転ヘラケズリ	口縁部 磨滅 体部 磨滅	須恵器
172	坏蓋	口径 13	青灰色	2-3mm大の砂粒を少し含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 天井部 回転ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 天井部 ナデ	須恵器
173	坏身	口径 14.5	灰色	微砂粒、1.5mm大の砂粒を少量含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 回転ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 ヨコナデ	須恵器
174	坏身	器高 4.2	淡黄灰色	2mm大の砂粒を若干含む	受部 磨滅 体部 ヨコナデ 天井部 回転ヘラケズリ	体部 磨滅 底部 磨滅	須恵器
175	坏身	口径 11 器高 4.7	灰色	微砂粒を少量含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 回転ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 ナデ	須恵器 外面 底部にヘラ記号
176	壺	口径 15.8 器高 17.9	赤褐色	2-4mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ヘラケズリ	外面 胴部から底部にかけて赤変
177	鉢	口径 11.8	黄褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 底部 ヘラケズリ(ハケメ残)	口縁部 ヨコナデ 体部 ミガキ	
178	甌		黄茶褐色	1-2mm大の砂粒を少量含む	底部 ヘラケズリ後ハケメ	底部 ヘラケズリ	底部に径8.7cm開孔

表3-14 B地区出土土器要説

番号	器種	法量(cm)	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
179	甕	口径 18.3 器高 29.6	淡黄褐色	微砂粒を多く含む	口頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ 底部 ハケメ後ナデ	口頸部 ヨコナデ 胴部 ヘラケズリ	外面 胴部中位、下位にスス付着
180	壺	口径 14.8 器高 16.2	黄褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ後ナデ	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラケズリ	
181	壺	口径 12.2 器高 10.3	赤褐色	1~2mm大の砂粒を少し含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 胴部 ヘラケズリ	
182	小型丸底壺	口径 13	赤茶褐色	微砂粒を若干含む	口頸部 ハケメ後ミガキ 胴部 ハケメ後丁寧なヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ後ミガキ 胴部 ナデ	
183	小型丸底壺	口径 11.1 器高 6.1	淡黄褐色	微砂粒を少量含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ後ナデ	
184	鉢	口径 14.4	黄褐色	1.5mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ヨコナデ後ミガキ 体部 ハケメ後ミガキ	口縁部 ミガキ(暗文) 体部上位 ヨコナデ 体部中位下 ナデ	
185	鉢	口径 17.6 器高 5.4	淡赤黄褐色	微砂粒、1~2mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ後ミガキ 体部 ヘラ削り後ミガキ 底部 丁寧なヘラ削り後雑なミガキ	口縁部 ヨコナデ (下位にハケメ残) 体部 ヨコナデ後一部ミガキ 底部 ヘラケズリ後ナデ	
186	鉢	口径 11.1	黄褐色	微砂粒を若干含む	口縁部 磨減 (一部ミガキ残) 体部 ハケメ	口縁部 ヘラケズリ (ミガキ) 体部 丁寧なヘラケズリ 底部 指頭痕残	
187	鉢	口径 12.8 器高 6.3	淡黄茶褐色	微砂粒、1~2mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ナデ後ヨコナデ 体部 ヘラケズリ後ナデ	口縁部 ヘラ削り後ナデ 体部 ヘラケズリ後ナデ	
188	鉢	口径 13.6 器高 4	淡黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を中量含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ後ナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ後ナデ	
189	鉢	口径 10.7 器高 2.3	淡赤褐色	微砂粒を若干含む	口縁部 磨減 体部 磨減	口縁部 磨減 体部 磨減	
190	器台	脚裾径 11.7	淡赤褐色	微砂粒を少し含む	脚部 ハケメ後ヨコナデ (脚部下位 磨減) 脚裾部 ヨコナデ	脚部 ハケメ (脚部上位 磨減) 脚裾部 ハケメ後ヨコナデ	穿孔 2
191	小型丸底壺	口径 9.8	淡黄褐色	微砂粒を若干含む	口縁部 ハケメ 頸部 ヨコナデ 胴部上位 ハケメ後ナデ 胴部中位下 ナデ	口縁部 ハケメ 胴部上位 ヨコナデ 胴部中位下 ナデ	
192	小型丸底壺	口径 12.2 器高 7.2	赤茶褐色	微砂粒を少量含む	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケメ後ナデ 底部 ナデ	口縁部 ヨコナデ 胴部上位 ヘラケズリ後ヨコナデ 胴部中位下 ハケメ後ナデ 底部 ナデ	
193	坏蓋	口径 16.7	黒灰色	微砂粒を少量含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 天井部 回転ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 天井部 中心から5cmナデ	須恵器
194	壺	口径 10.2 器高 10.1	黄褐色	1mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ 胴部上半部 ナデ 胴部下半部 ハケメ後雑なナデ	
195	小型丸底壺	口径 11.8	淡黄褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 頸部上位 ヨコナデ 胴部中位下 ハケメ	口縁部 ヨコナデ後ミガキ 胴部上位 ハケメ後ナデ 胴部中位 粗いミガキ	
196	壺 (複合口縁)		淡灰色	微砂粒を多く含む	口縁部 櫛書文	口縁部 ミガキ	外面 貼付竹管文
197	壺	底径 6.3	黄褐色	0.5~1mm大の砂粒を多く含む	底部 ナデ	底部 ヘラケズリ後ナデ	
198	器台	脚裾径 16.4	淡赤褐色	1~2cm大の砂粒を若干含む	くびれ部 ヨコナデ 脚部 ヘラケズリ後ミガキ 脚裾部 ヨコナデ	くびれ部 ヨコナデ 脚部 ハケメ後ミガキ 脚裾部 ヨコナデ	

VI. D地区の調査



 昭和58年度発掘調査地域

(縮尺1/2,500)

D地区の調査

1 調査の概要

D地区は圃場整備地域の東側中ほどに位置する。発掘調査は昭和58年度に発掘調査を実施した。調査対象地は2地点あり、便宜上、北側をDⅠ区(980㎡)、南側をDⅡ区(650㎡)とした。

DⅠ区では竪穴式住居跡19軒。掘立建物3棟、土壇5基、溝2条、その他ピットが多数検出された。DⅡ区では竪穴式住居跡4軒、土壇4基その他ピットを多数検出したが、DⅠ区に比べ遺構の残りは悪い。

2 遺構

竪穴式住居跡

検出された住居跡はすべて方形プランを呈し、ベッド状遺構を有すSX3・20はいずれもコ字状に配される。

掘立建物

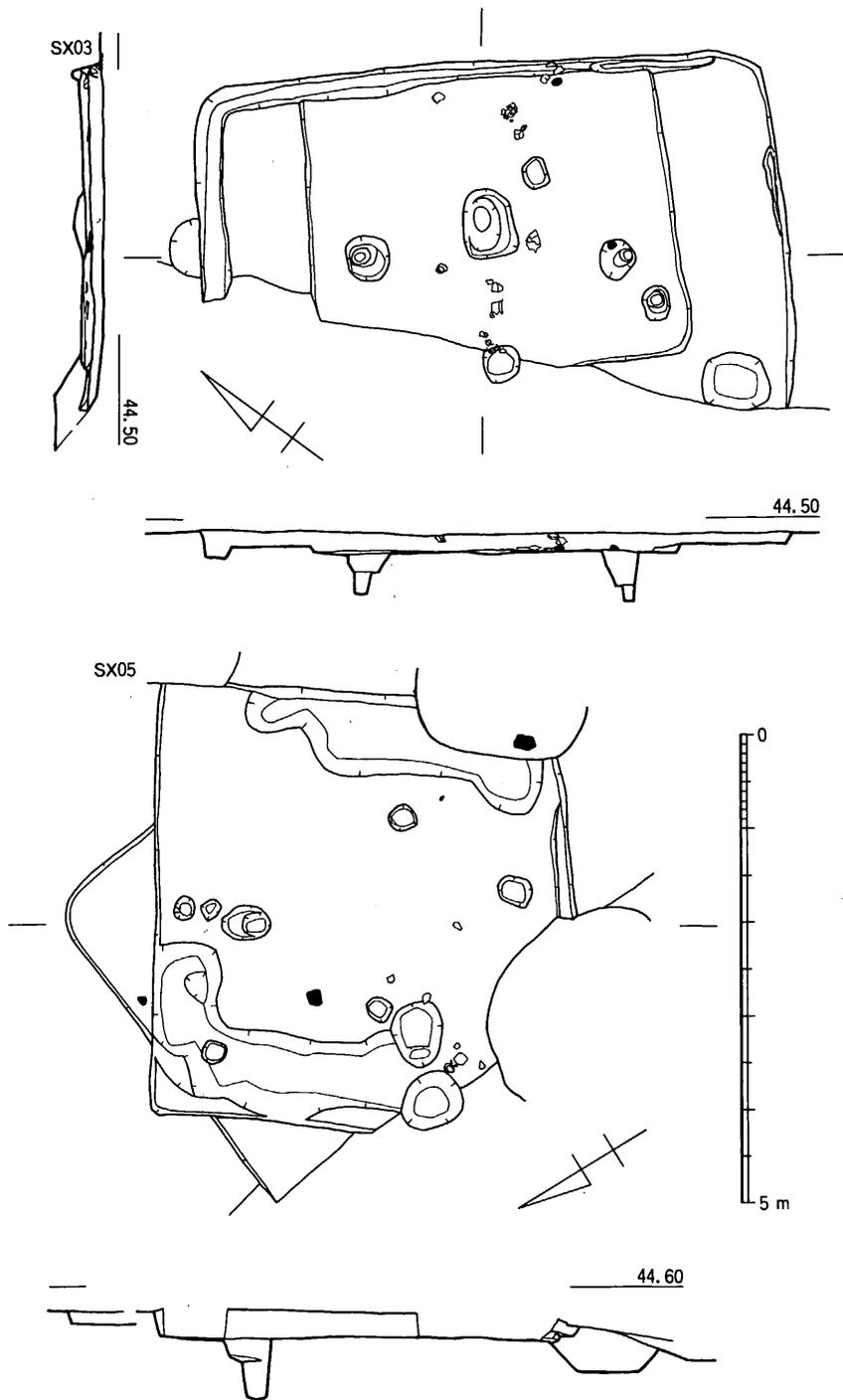
SB1はDⅠ区中央東端に位置し、東側は段落ちとなっており、すでに遺構の半分以上は失われている。残存するのは4間以上×2間以上で、南北棟建物と思われる。柱穴は2mたらずの方形で、柱痕跡は確認しえなかった。桁行総寸法は現存する4間で8.4m(28尺)で、梁行は残存する南側柱列の2柱穴で3.0m(10尺)を測る。建物方位はN-29.5°-Eである。

SB2はDⅠ区のほぼ中央で検出した5間×2間の東西棟建物である。柱穴は一辺70cmほどの隅丸方形を呈す。柱痕跡は明瞭に確認できなかったが、北側柱列の東から3番目は柱根の周囲を固めた礫が残る。桁行の総寸法は9.6m(32尺)、梁行は4.8m(16尺)であり、桁行柱間寸法は中央3間が1.8m(6尺)、脇間2.1m(7尺)で、梁行は2.4m(8尺)等間と考えられる。建物方位はN-28°-Eである。

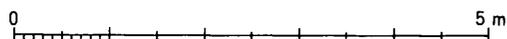
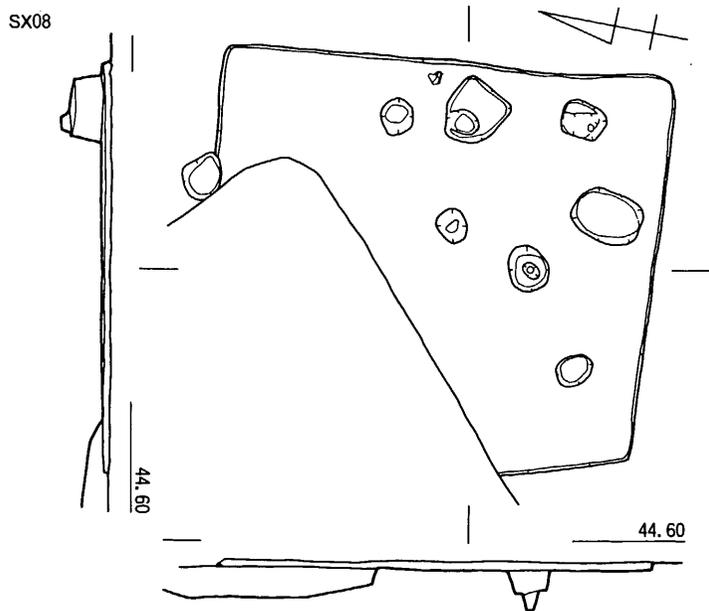
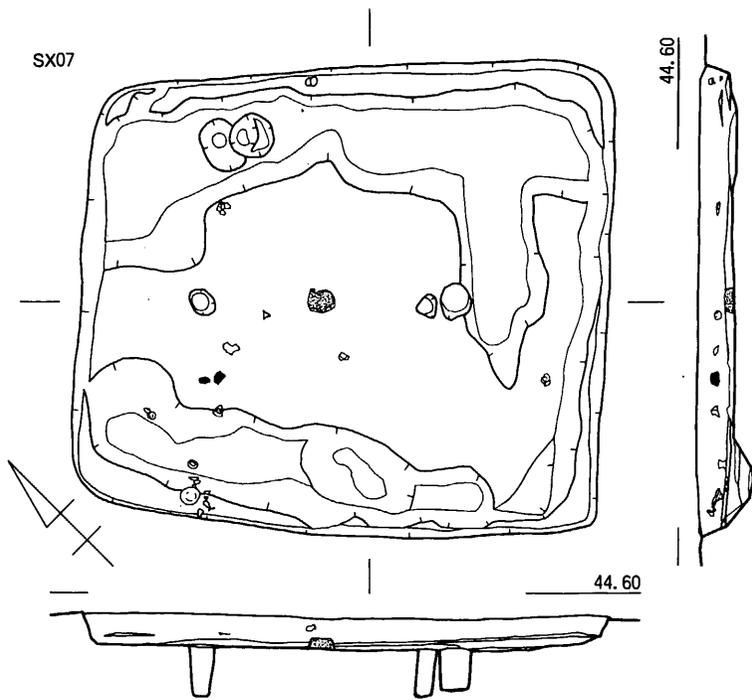
SB3はSB1・2の北側で検出した2間以上×2間の総柱建物である。柱穴は一辺50cmほどの隅丸方形を呈す。柱間寸法は桁行が1.5m(5尺)、梁行が1.65m(5.5尺)を測る。建物方位はN-29.5°-Eである。

土壇

D1はS×5の北隅を切るもので、2.4×1.75mの方形プランを呈す。深さは約30cmを測り、



第70图 D地区 SX03·05实测图 (1/80)



第71图 D地区 SX07·08实测图 (1/80)

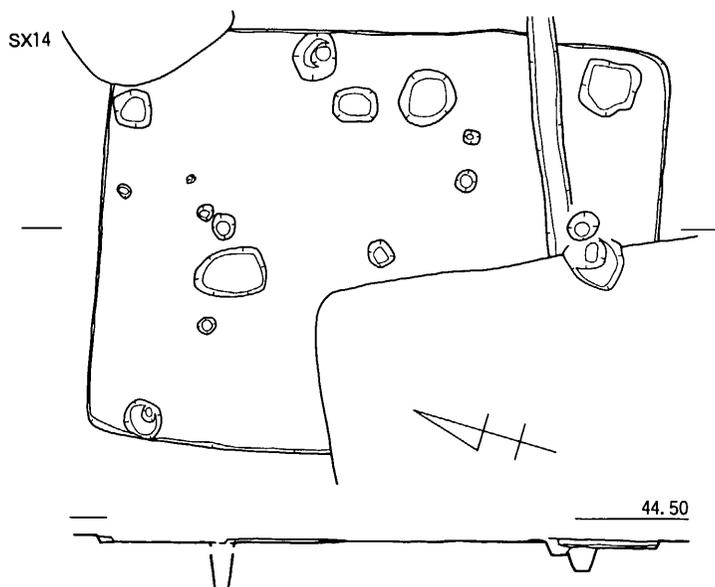
床面中央に径30cm、深10cmほどのピットを残す。壁面はほぼ直立している。

D 2 は SX 5 の東隅を切るもので1.8×1.4mの不整楕円形を呈す。深さは約20cmを測る。

D 3 は SX 5 の北隣に位置し、2.3×1.6mの丸味の強い三角形プランを呈す。深さは約95cmを測り、壁は摺鉢状に落ちる。

D 4 は SB 2 南側柱列の東から3番目の柱穴に切られる。1.5×1.2mの不整楕円形プランを呈す。深さは約80cmを測る。

D 5 は SB 2 柱列の内側に位置する。1.6×1.3mの方形プランを呈し、深さは約75cmを測る。壁面は直立する。



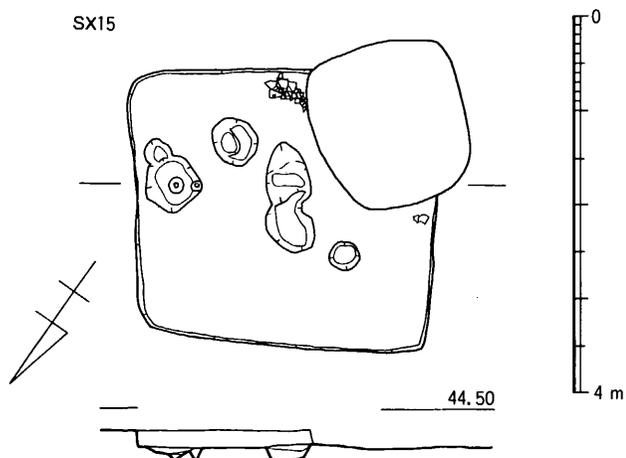
D 6 は SX14・15・16を切るもので、1.75×1.65mの丸味の強い方形プランを呈す。深さは約75cmを測る。

D 7 は D II 区東端で検出されたもので D 2 に切られる。1 m以上×1 mを測り、深さは約40cmを測る。

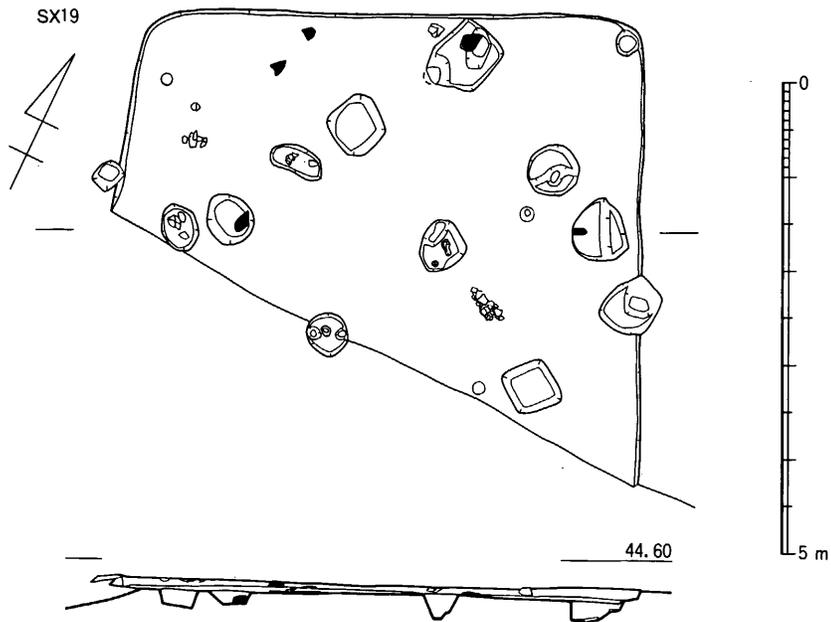
D 8 は D 7 を切るもので1.2×0.8mを測る楕円形プランを呈す。深さは約45cmを測る。

D 9 は D 7・8の南側に位置し、1.4×1 mの卵形プランを呈す。深さ約25cmを測る。

D10はS×20・21の北側に位置し、1.5×1.2mの楕円形プランを呈す。深さ約15cmを測り床面中央がやや高くなっている。



第72図 D地区 SX14・15実測図 (1/80)

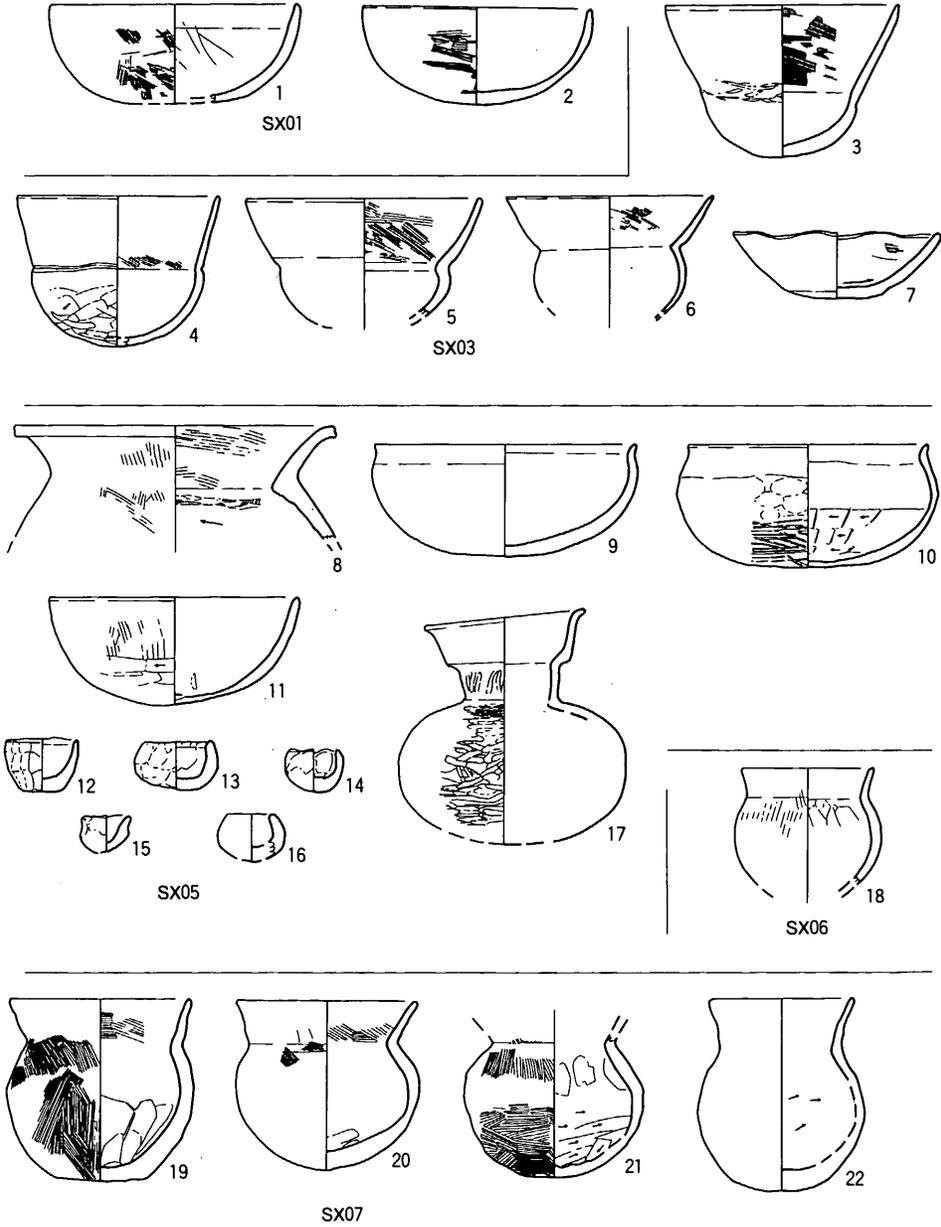


第73図 D地区 SX19実測図 (1/80)

表 4-1 D地区住居跡要説

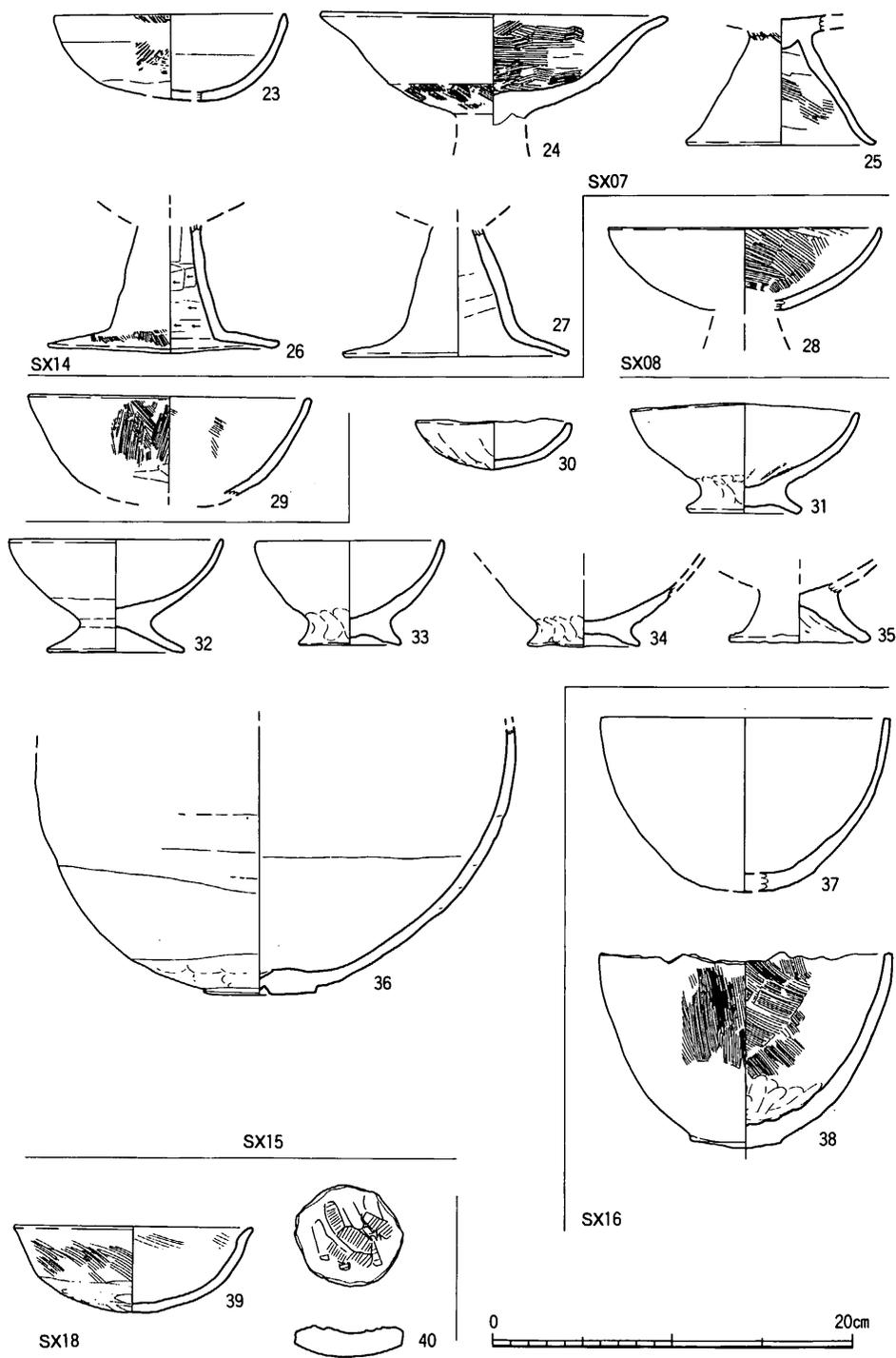
番号	挿図番号	図版番号	平面形	規模(m)	主柱穴	切り合い関係	備考
01			方形				
02			方形				
03	70	55	方形	6.3×	2		3方にベット。壁際の一部に側溝 中央に72×56cm、深さ約10cmの炉
04			方形				西半は調査対象地外
05	70	55	方形	5.7×4.5		SD1・2←○←SX6	壁際に幅80cmほどの溝
06		55	方形			SX5←○	
07	71	56	方形	5.6×5.0	2	○←SX8	ほぼ中央に28×22cm、高さ10cmの焼土 壁際に溝
08	71	56	方形	4.8×4.3		SX7←○	
09		56	方形	4.0×		SX8←○	
10			方形				
11			方形				
12			方形				西側コーナーのみ調査対象地内
13			方形	4.2×			西側壁周辺のみ調査対象地内
14	72		方形	6.0×4.5		SX19, SD6, SM1←○←SX16・17	
15	72		方形	3.2×2.8		SD6←○←SX16	
16			方形	6.0×4.3	2	SX14・15, SD6・SM1←○←SX18	北壁際中ほどに焼土塊(混土器片)。 中央に深さ7cmほどの炉
17			方形			SX14・15・16, SD6←○	
18			方形			SX16←○	西側は調査対象地域外
19	73		方形	5.5×		○←SX14	
20		57	方形	4.7×3.6		○←SX21	3方にベット
21		57	方形	5.3×			残りが悪く周溝および土壇のみが残る
22		57	方形	3.2×			南側壁が若干残る
23		58	方形	5.7×5.7	2		中央に74×72cm、深さ約8cmの炉があり、 高坏の坏部を焼床に使う

3 出土遺物

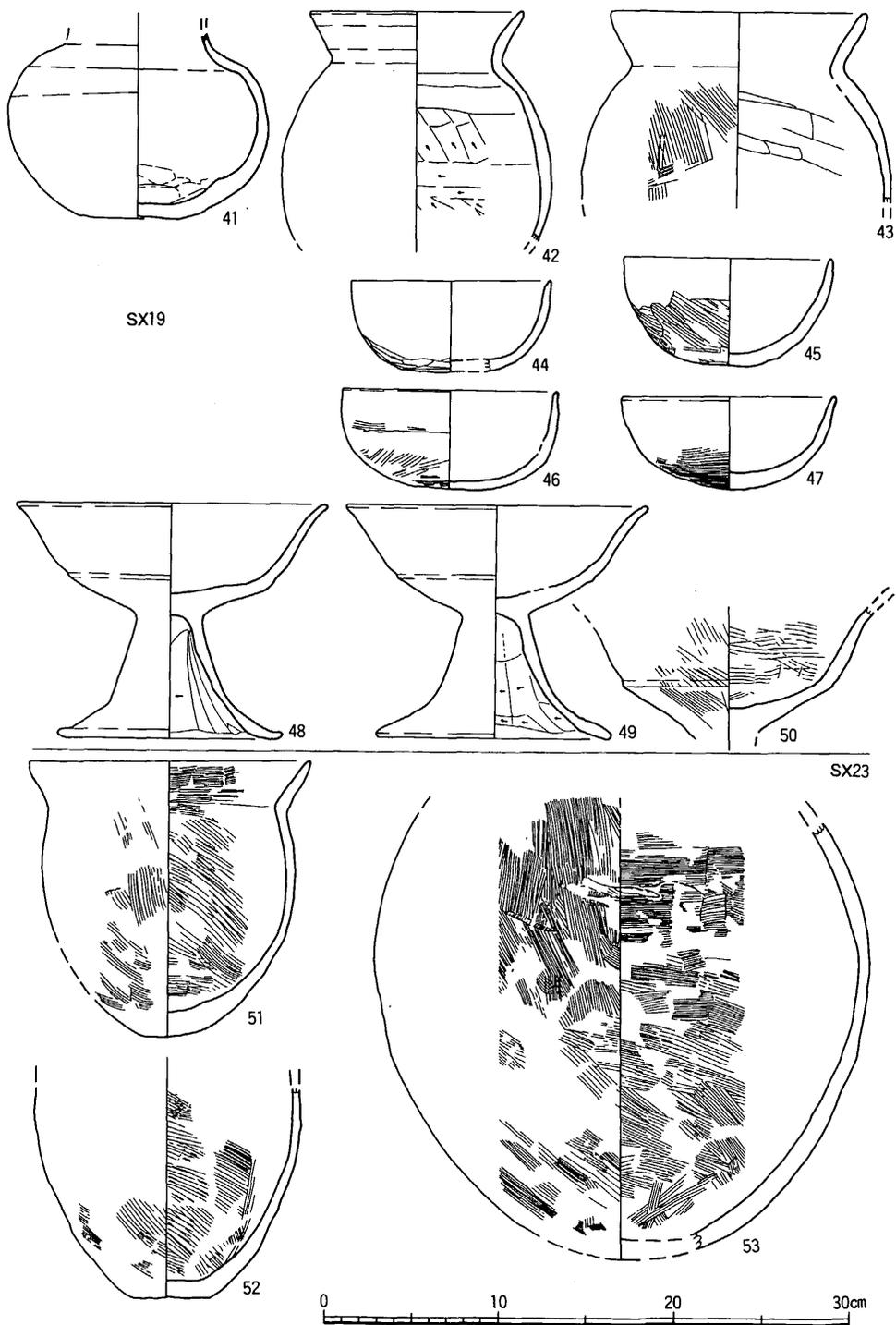


0 10 20 30cm

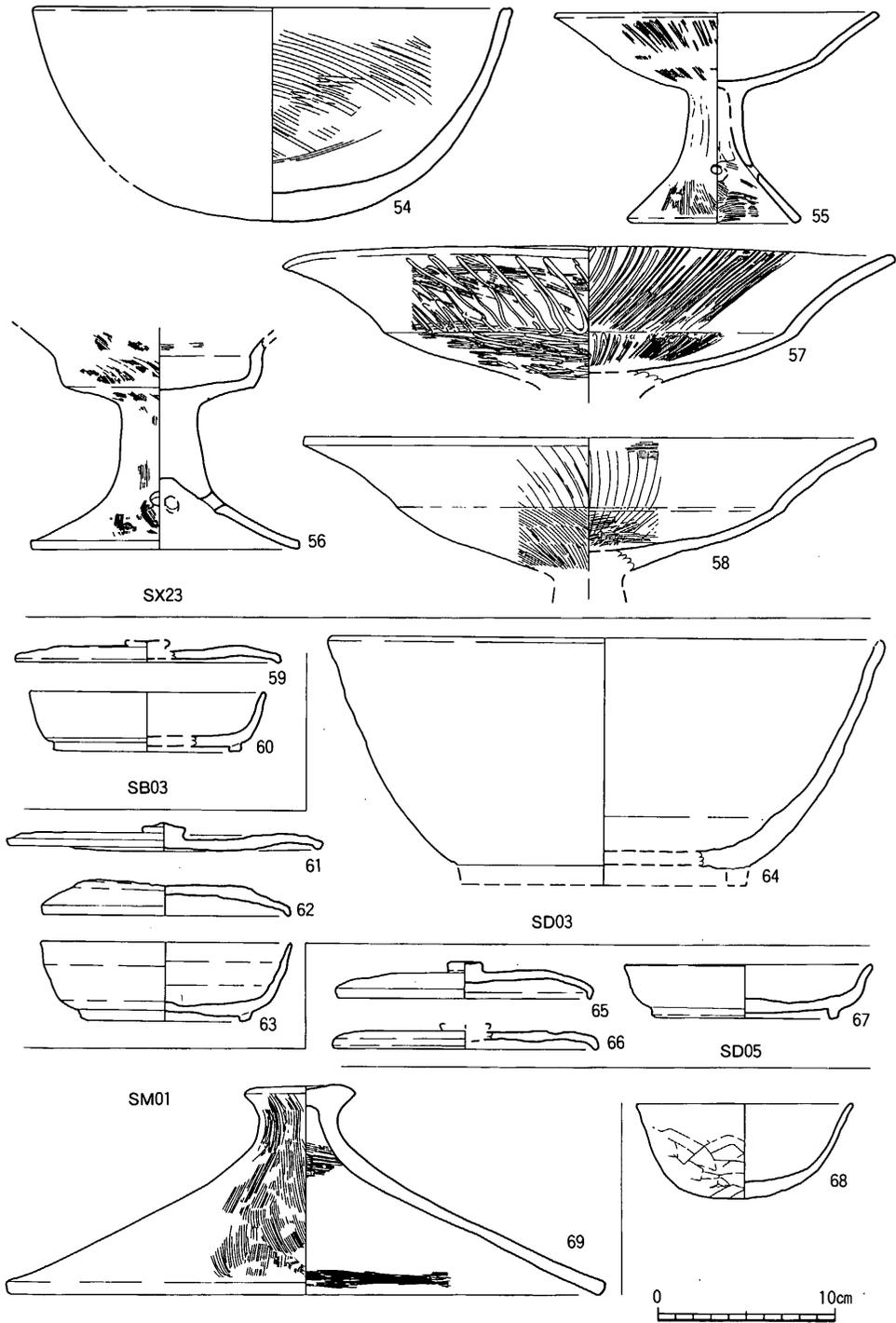
第74図 D地区 SX01・03・05~07出土土器実測図(1/4)



第75图 D地区 SX07·08·14~16·18出土土器实测图 (1/4)



第76图 D地区 SX19·23出土土器实测图 (1/4)



第77图 D地区 SX23、SB03、SD03·05·10、SM01出土土器实测图 (1/4)

表5-1 D地区出土土器要説

番号	器種	法量(cm)	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
1	鉢	口径 13.0	赤褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	
2	鉢	口径 12.1 器高 5.1	赤褐色	微砂粒を多量に含む	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケメ 体部 ハケメ後ナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	
3	小型丸底壺	口径 12.4 器高 7.95	淡赤褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ナデ 胴部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ 胴部 ヘラケズリ後ナデ	
4	小型丸底壺	口径 10.7 器高 7.85	淡赤褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ後ナデ 胴部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ 胴部 ナデ	
5	小型丸底壺	口径 12.5	黄褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ミガキ	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ 胴部 ナデ	
6	小型丸底壺	口径 10.9	淡赤褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ミガキ 胴中位下 ヘラケズリ後ミガキ	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ナデ	
7	鉢	口径 11.0 器高 3.5	黄茶褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ナデ 体部 ナデ 底部 ナデ	口縁部 ナデ 体部 ハケメ後ナデ 底部 ナデ	
8	壺	口径 17.0	淡赤褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ後ナデ	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ後ヨコナデ 頸部下1.5cmよりヘラケズリ	外面 スス付着
9	鉢	口径 13.8 器高 5.9	赤味を帯びる黄褐色	微砂粒を多量に含む	口縁部 ヨコナデ 体部上位 ナデ 体部中位下 ヘラケズリ後ナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	底部 ヘラ記号
10	鉢	口径 12.7 器高 6.5	赤褐色	微砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 体部上位 指頭痕 体部中位下 平行タタキ	口縁部 ヨコナデ 体部上位 ヨコナデ 体部中位下 ミガキ	底部 ヘラ記号
11	鉢	口径 13.2 器高 5.65	淡茶褐色	微砂粒を多量に含む	口縁部 ヨコナデ 体部上位 ハケメ後ナデ 体部中位下 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ (ナデ状)	
12	手づくね	口径 3.8 器高 2.8	明黄茶色	微砂粒を若干含む	口縁部 ナデ 体部 指頭痕	口縁部 ナデ 体部 ナデ	
13	手づくね	口径 3.5 器高 2.5	明黄茶褐色	混入物ほとんどなく緻密	口縁部 ナデ 体部 指頭痕	口縁部 ナデ 体部 ナデ	
14	手づくね	口径 2.7 器高 1.2	黄褐色	微砂粒を中量含む	口縁部 ナデ 体部 指頭痕	口縁部 ナデ 体部 指頭痕	
15	手づくね	口径 2.6 器高 1.95	赤褐色	微砂粒を中量含む	全体 指頭痕	全体 ナデ	
16	手づくね	口径 2.5 器高 2.35	茶褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	
17	甌	口径 8.5	赤茶褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 頸部下 ミガキ	口縁部 ヨコナデ 胴部 ナデ(指頭痕)	
18	小型丸底壺	口径 7.0	淡黄褐色	2mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ 胴部 磨滅	口縁部 ヨコナデ 頸部下 ナデ(指頭痕)	

表5-2 D地区出土土器要説

19	小型丸底壺	口径 9.6 器高 9.4	暗褐色	0.5mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ナデ 頸部下 ハケメ	口縁部 ナデ 頸部 ハケメ 頸部直下より 指頭痕	
20	小型丸底壺	口径 9.65 器高 8.9	赤褐色	0.5mm大の砂粒を少量含む	口縁部 ヨコナデ 頸部下 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ 頸部直下より 指頭痕	
21	小型丸底壺		赤褐色	1.5mm大の砂粒を含む	頸部下 ハケメ	頸部 ハケメ 胸部上位 指頭痕 胸部中位下 ヘラケズリ	外面胸部上位下にスズ附着
22	小型丸底壺	口径 7.6 器高 10.1	淡赤褐色	2mm大の砂粒を若干含む	全体 磨滅	口頸部 磨滅 頸部直下より ヘラケズリ	
23	鉢	口径 13.0 器高 4.7	明茶褐色	微砂粒を若干含む	口唇部 タタキ 口縁部 ヨコナデ 体部上位 タタキ 体部上位下 ナデ	口頸部 ヨコナデ 体部上位 ヨコナデ 体部中位下 ナデ	
24	高坏	口径 19.4	淡赤褐色	0.5mm大の砂粒を多量に含む	坏 口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 ハケメ	坏部全体 ハケメ	
25	高坏	脚裾径 10.5	黄褐色	0.5mm大の砂粒を含む	脚筒部 磨滅 裾部 磨滅	脚裾部 磨滅 筒部上位 ハケメ 筒部下位 ヘラケズリ	
26	高坏	脚裾径 12.8	赤褐色	1mm大の砂粒を含む	脚筒部 ハケメ後ヨコナデ 裾部 ハケメ後ヨコナデ	脚裾部 ヨコナデ 筒部 ヘラケズリ	
27	高坏	脚裾径 12.6	淡黄褐色	0.5mm大の砂粒を含む	脚筒部 磨滅 裾部 ヨコナデ	脚裾部 ヨコナデ 筒部上・中位 ヘラケズリ 筒部下位 シボリ痕	
28	鉢	口径 15.2	淡茶褐色	0.5mm大の砂粒を含む	口縁部 ヨコナデ 体部 磨滅	口唇部 ヨコナデ 口縁部下 ハケメ	脚がついていたと思われる。
29	鉢	口径 15.8	淡黄褐色	微砂粒をやや多く含む	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体部上・中位 ハケメ 体部下位 ヘラケズリ	口唇部 ヨコナデ 口縁部下 磨滅(ハケメ残)	
30	手づくね	口径 8.7 器高 2.65	暗黄褐色	微砂粒を中量含む	全体 ナデ(指頭痕残)	全体 ナデ	全体的に歪つてである為、短径7cmを測る。
31	鉢 (脚台付)	口径 12.7 脚裾径 6.4 器高 5.55	赤味を帯びる 黄褐色	0.5mm大の砂粒、微砂粒をやや多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ 脚台部 ナデ 端部 ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ後ミガキ 底部 ヘラケズリ後ミガキ 脚台部 ハケメ後ナデ	
32	鉢 (脚台付)	口径 12.0 脚裾径 7.6 器高 6.3	明茶褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 磨滅 体部上・中位 磨滅 体部下位 ナデ 裾部 ナデ	口縁部 磨滅 体部 磨滅 底部 ヘラケズリ	
33	鉢 (脚台付)	口径 10.4 脚裾径 5.6 器高 5.75	黄褐色	微砂粒を少量含む	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ナデ後ミガキ 体部 ナデ後ミガキ 脚台部 ナデ	口縁部 ナデ後ミガキ 体部 ナデ後ミガキ 底部 ナデ後ミガキ 脚台部 ナデ	
34	鉢 (脚台付)	脚裾径 6.3	黄褐色	微砂粒を中量含む	体部下位 ミガキ 脚台部下 ナデ	体部下 放射状のミガキ 脚台部 ナデ	外面足底部にモミと思われる圧痕が認められる。

表5-3 D地区出土土器要説

35	鉢 (脚台付)	脚径 7.9	茶褐色	微砂粒を少量 含む	脚台部 ヨコナデ	底部 ヘラケズリ後ミガ キ 脚台部 ナデ	
36	壺	底径 6.2	暗褐色	微砂粒を多量 に含む	胴部中・下位 ナデ 底部 ナデ	胴部中・下位 ナデ 底部 ナデ	外面底部に繊維状の瓦 痕が認められる。
37	鉢	口径 16.0	淡黄褐色	微砂粒を少量 含む	口縁部 ヨコナデ 体部 粗いハケメ 底部 粗いハケメ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体部 ハケメ 底部 ハケメ	
38	鉢	口径 16.2 器高 10.3	暗黄褐色	微砂粒を少量 含む	口縁部 ハケメ 体部上・中位 ハケメ 体部下位下 ナデ	口縁部 ハケメ 体部上・中位 ハケメ 体部下位下 ナデ	
39	鉢	口径 12.3 器高 4.7	赤褐色	微砂粒を多く 含む	口縁部 ヨコナデ 体部上位 ハケメ 体部中位下 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部上位 ハケメ 体部中位下 ヘラケズリ (ナデ状)	
40	土製品	径 6.0~5.4	黄褐色	0.2mm大の砂 粒をごく少量 含む			
41	壺		濃青灰色	0.5mm大の砂 粒を若干含む	頸部 ヘラケズリ後ヨコ ナデ 胴部上・中位 ヨコナデ 胴部下位下 タタキ	頸部 ヨコナデ 胴部 ヨコナデ 底部 ナデ	須恵器
42	壺	口径 12.3	明茶灰色	微砂粒を少し 含む	口頸部 ヨコナデ 胴部上・中位 タタキ 胴部下位 ヘラケズリ (ナデ状)	口頸部 ヨコナデ 胴部上位 ナデ 胴部中位下 ヘラケズリ	
43	壺	口径 14.6	黄褐色	微砂粒を少量 含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 胴部 ヘラケズリ	
44	鉢	口径 11.5	黄橙色	微砂粒を多く 含む	口縁部 ヨコナデ 体部上位 ヨコナデ 体部中・下位 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	
45	鉢	口径 11.8 器高 6.1	黄橙色	微砂粒を多く 含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ 底部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 底部 ヘラケズリ	
46	鉢	口径 12.5 器高 5.6	赤褐色	微砂粒を多く 含む	口頸部 ヨコナデ 体部上・中位 ヨコナデ 体部下位 ハケメ 底部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 体部上・中位 ハケメ 体部下位 ヘラケズリ 底部 ヘラケズリ	
47	鉢	口径 12.1 器高 5.2	赤褐色	微砂粒を多く 含む	口縁部 ヨコナデ 体部上・中位 ヨコナデ 体部下位 ハケメ 底部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ後ナデ 底部 ヨコナデ後ナデ	
48	高坏	口径 17.3 脚径 13.6 器高 13.2	赤褐色	微砂粒を少量 含む	坏 口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 ヨコナデ 脚筒部 ヘラケズリ後 ナデ 裾部 ヨコナデ	坏 口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 ヨコナデ 脚筒底部 ナデ(指瓦痕) 筒部 ヘラケズリ 裾部 ヨコナデ	
49	高坏	口径 17.8 脚径 12.9 器高 13.3	赤褐色	0.3mm大の砂 粒をやや多く 含む	坏 口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 ヨコナデ 脚筒底部 ナデ 筒部 ヘラケズリ 裾部 ヨコナデ	坏 口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ後 ナデ 脚筒底部 ナデ 筒部 ヘラケズリ 裾部 ヨコナデ	

表5-4 D地区出土土器要説

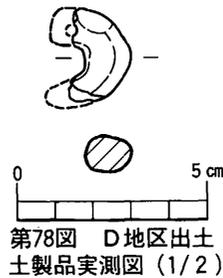
50	高坏		赤褐色	微砂粒を微量含む	坏体部 ハケメ後ヨコナデ 底部 ハケメ後ヨコナデ	坏体部 ハケメ後ナデ 底部 ハケメ後ナデ	
51	壺	口径 16.1 器高 15.6	黄褐色	0.5mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ 胴部 ハケメ 底部 ハケメ	口縁部 ハケメ 胴部 ハケメ 底部 ナデ	
52	壺	底径 4.8	黄褐色	1mm大の砂粒を若干含む	胴部 磨滅(ハケメ残) 底部 磨滅	胴部 ハケメ 底部 ハケメ	
53	壺		黄褐色	1mm大の砂粒を少量含む	胴部 ハケ目	胴部 ハケメ	
54	大型鉢	口径 27.2 器高 12.3	黄褐色	1mm大の砂粒を多量含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ(ナデ状) 底部 ヘラケズリ(ナデ状)	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ 底部 ナデ	
55	高坏	口径 18.4 脚裾径 12.0 器高 9.8	黄褐色	0.5mm大の砂粒を若干含む	坏口縁部 ミガキ 体部 ミガキ 屈曲部 ハケメ後ナデ 底部 ハケメ 脚筒部 ヘラケズリ(ナデ状) 裾部 ハケメ 端部 ハケメ後ヨコナデ	坏口縁部 ミガキ 体部 磨滅(ミガキ) 脚筒部 ヘラケズリ 裾部 ハケメ 端部 ハケメ後ヨコナデ	
56	高坏	脚裾径 15.2	淡黄褐色	微砂粒を多く含む	坏体部下位 ハケメ 屈曲部 ハケメ後ヨコナデ 底部 ハケメ 脚筒部 ハケメ 裾部 ハケメ 端部 ヨコナデ	坏体部下位 ハケメ後ヨコナデ 屈曲部 ヨコナデ 底部 ハケメ 脚筒部 ナデ 裾部 ハケメ後ナデ 端部 ヨコナデ	脚部に穿孔4
57	高坏	口径 34.4	黄茶褐色	微砂粒を多量含む	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ヨコナデ後暗文 体部 ハケメ後暗文 底部 ハケメ	口唇部 ヨコナデ 口縁部 暗文 体部 暗文 底部 暗文	
58	高坏	口径 32.3	暗赤褐色	1mm大の砂粒を若干含むが緻密	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ後暗文 底部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ後暗文 底部 ハケメ	
59	坏蓋	口径 15.1	暗紅褐色	砂粒をごく少量含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 天井部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ後ナデ 天井部 ヨコナデ後ナデ	須恵器
60	坏身	口径 13.4 器高 3.4 底径 9.4	明青灰色	砂粒を含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 高台 ヨコナデ 底部 ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 ナデ	須恵器
61	坏蓋	口径 17.6 器高 1.6	明青灰色	微砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 天井部下位 ヘラケズリ 天井部上位 ヨコナデ 撮み ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ 天井部下位 ヨコナデ 天井部 ナデ	須恵器
62	坏蓋	口径 14.1	明青灰色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 天井部上位 ヨコナデ 天井部 回転ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 天井部上位 ヨコナデ 天井部 回転ヘラケズリ	須恵器

表5-5 D地区出土土器要説

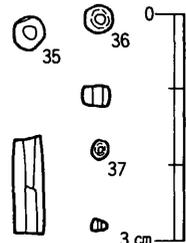
63	坏身	口径 14.2 器高 4.5 底径 8.7	暗青灰色	0.2mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 高台部 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 ナデ	須恵器
64	鉢	口径 31.5	青灰色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 高台部 ヨコナデ 底部 ナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 ヨコナデ	須恵器
65	坏蓋	口径 14.6 器高 2.0	暗青褐色	微砂粒を少量含む	口縁部 ヨコナデ 天井部 下位 ヨコナデ 天井部 ヘラケズリ 撮み ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ 天井部 ナデ	須恵器
66	坏蓋	口径 15.1	暗黒褐色	1mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 天井部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 天井部 ナデ	須恵器
67	坏身	口径 14.0 器高 3.0 底径 10.4	淡黄褐色	微砂粒をごく少量含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 高台部 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部上位 ヨコナデ 底部 ナデ	赤焼け?
68	鉢	口径 12.2 器高 5.4	茶褐色	0.5mm大の砂粒を少量含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 底部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 磨滅 底部 磨滅	
69	傘蓋	口径 33.8 器高 11.9	淡黄褐色	微砂粒を多く含む	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ後ヨコナデ 天井部 ハケメ	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ後ヨコナデ 天井部 ナデ	

土製品 (第78図)

1は土製の勾玉で、I地区の溝2より出土した。頭端部および末端部は折損するが、現存全長2.4cm・幅1.2cm・厚さ0.95cmである。平面形態は全体的に強く弧を描く。頭端部近くには径0.3cmの孔を有する。表面はナデ調整か。



第78図 D地区出土土製品実測図 (1/2)



第79図 D地区出土玉類実測図 (実大)

表6-1 D地区出土玉類計測表

(単位: mm)

No	出土遺構	径	厚(長)	孔径	種別	色	材質	備考
35	D II SX 20	4.20	13.25	2.05	管玉	淡緑色	ヘキギョク	側面を欠す
36	D II SX 20	3.60	2.80	1.20	小玉	明青色	ガラス	①
37	D II SX 20	2.60	1.65	0.80	〃	〃	〃	②

Ⅶ. E地区の調査



 昭和58年度発掘調査地域

 昭和59年度発掘調査地域

(縮尺1/2,500)

E地区の調査

1 調査の概要

E地区は昭和58年度と同59年度の2ヶ年度にわたり4地点を発掘調査した。対象地は便宜上、北からEⅠ、EⅡ、EⅢ、EⅤとした。

EⅠ区は昭和59年度に1,650㎡を発掘調査した。この地区はEⅡ区と共に周辺より一段高くなっており、水がかからない部分である。調査前には植木が植えられており、遺構面は攪乱が著しかった。調査の結果、竪穴式住居跡2軒、掘立建物1棟、土壇3基およびピット多数を検出した。また、下層には旧石器時代の包含層が認められた。

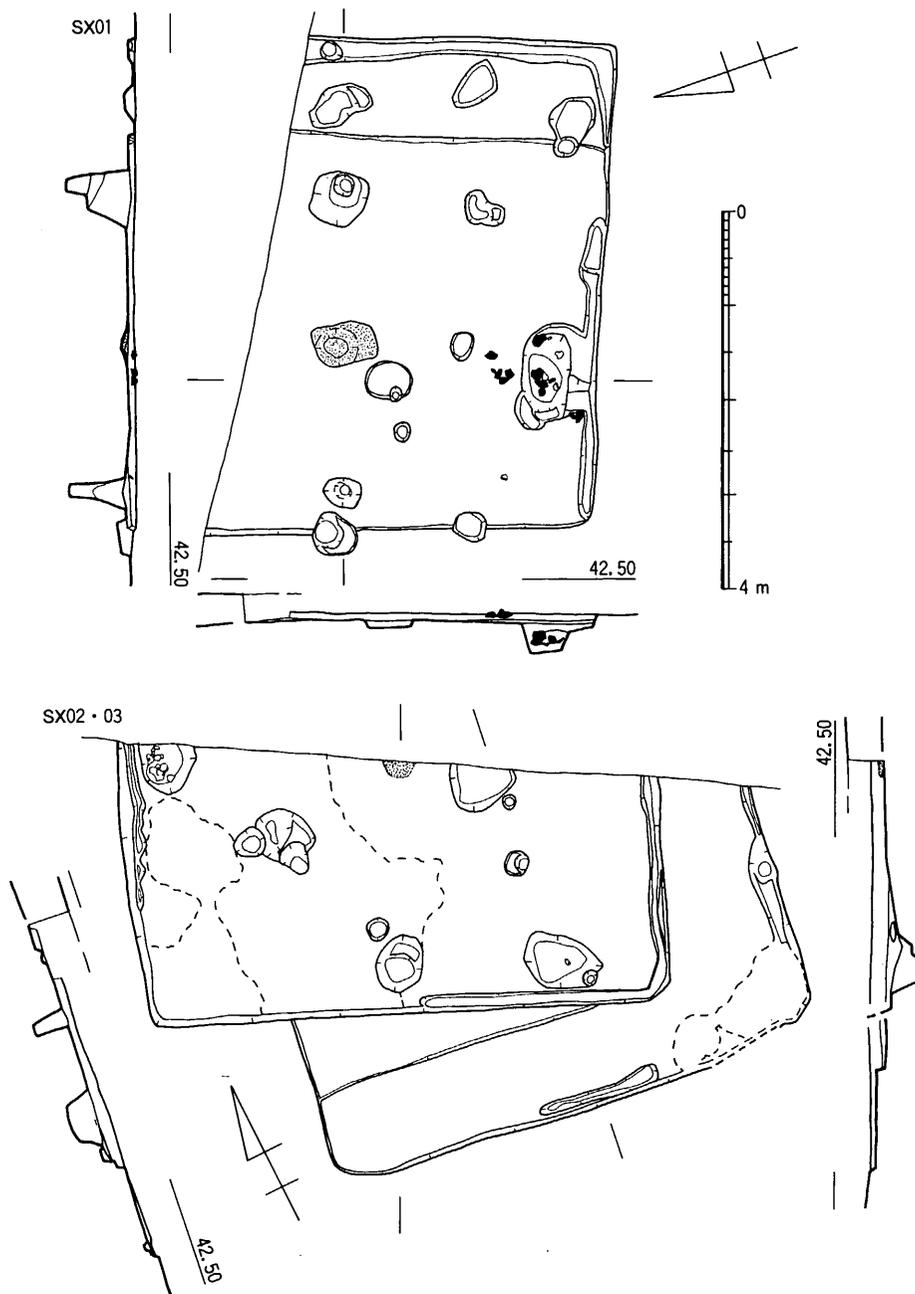
EⅡ区は植木の植えかえのため2次に分けて昭和58年度に調査した。調査面積は1,300㎡である。調査の結果、竪穴式住居跡43軒、溝10条、多数のピットを検出した。

EⅢ区はEⅡ区の南に位置し、水路が設置される部分を発掘調査した。調査面積は430㎡であるが、圃場整備工事の関係で2ヶ年に分けて実施した。調査の結果、竪穴式住居跡7軒と多数のピットを検出した。遺構はいずれも残りが悪い。

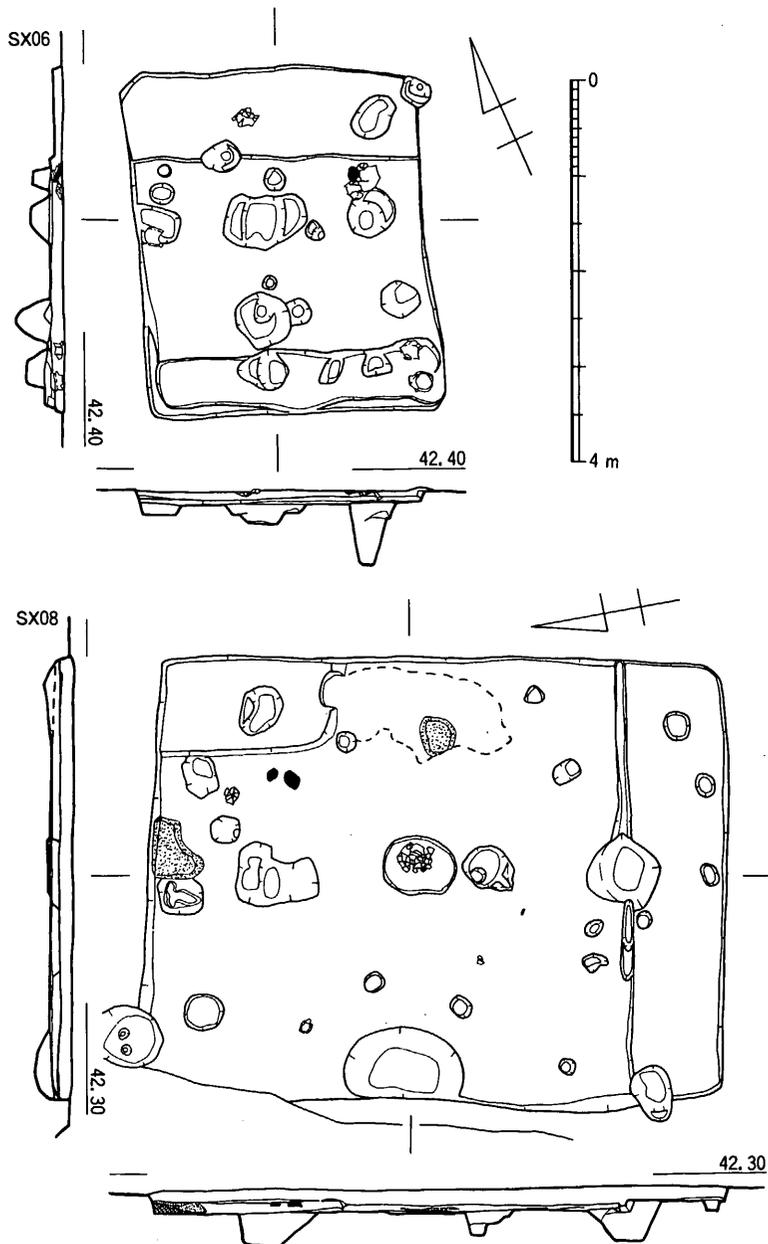
EⅤ区はE地区の調査対象地の中で最も南側に位置し、切土部分と水路設置部分の634㎡を発掘調査した。調査区中央部は窪地となっており、北端には土器が溜まっていた。遺構はこの部分より北側に集中し、南側は方形プランの段状に下る性格不明遺構と若干のピットおよび溝が検出された程度であった。北側には竪穴式住居跡13軒、掘立建物1軒、土壇2基と多数のピットである。掘立建物は3m幅の調査区内で検出したもので、間数、寸法は不明であるが、柱穴のうち1個には底に板が敷かれており、他のピットにも木片が残っていたことから、同様のものではあったと考えられる。

2 遺構

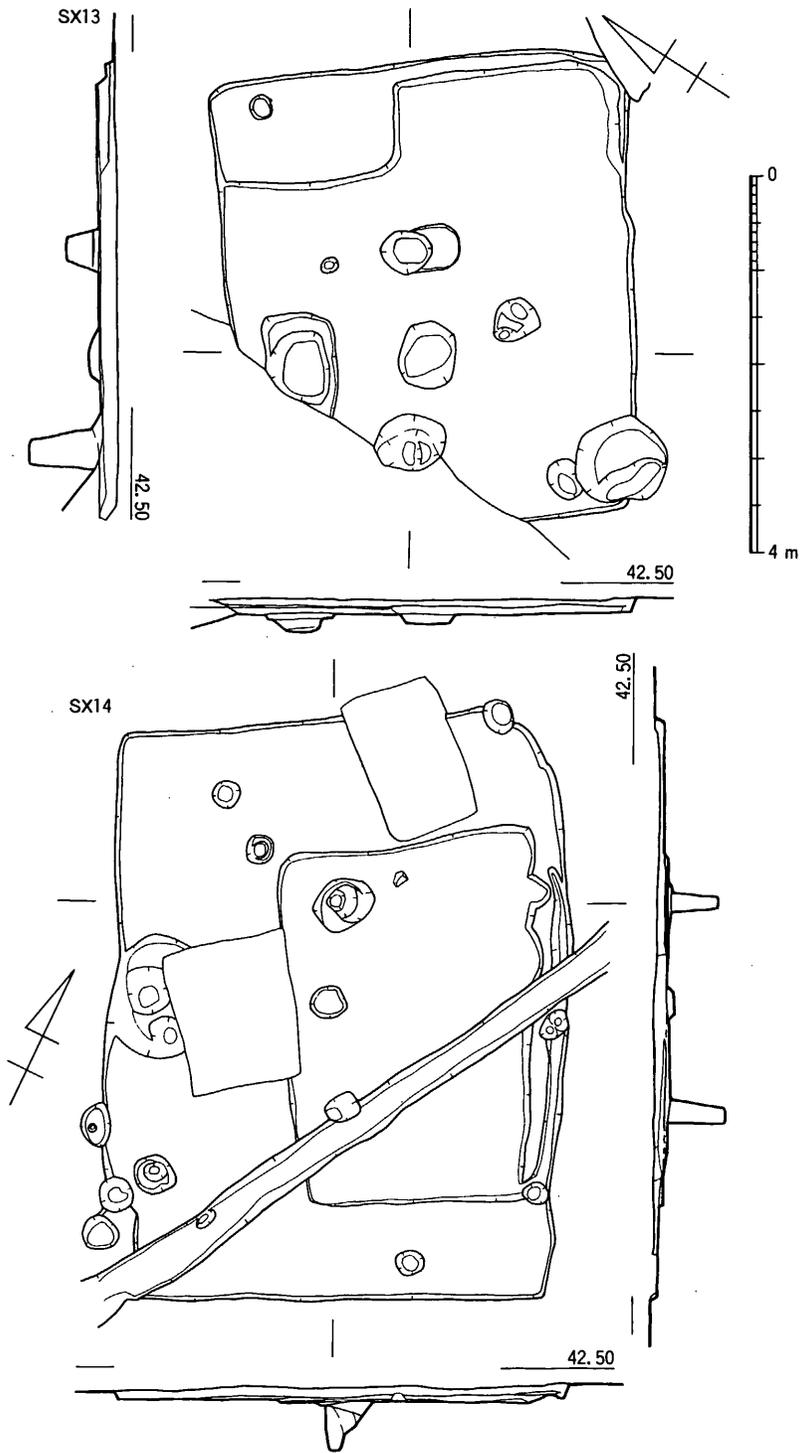
検出した住居跡43軒はすべて方形プランを呈す。ベッド状遺構は14軒に見られ、半数が住居跡の一边にもつものである。これらの住居跡はEⅠ区からEⅤ区北側に至る広い範囲に見られ、全体に切り合いが少ない。



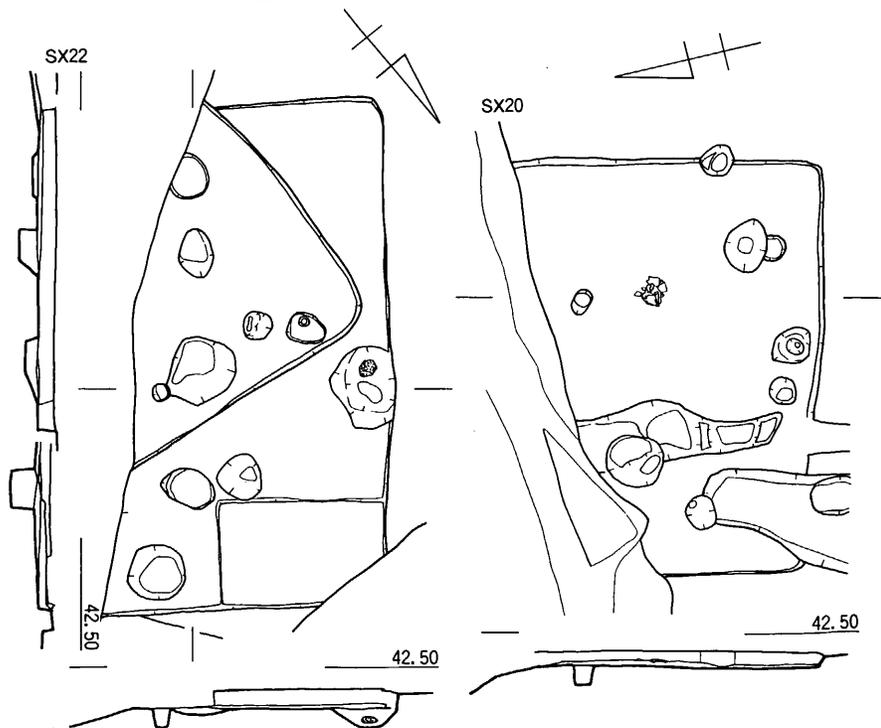
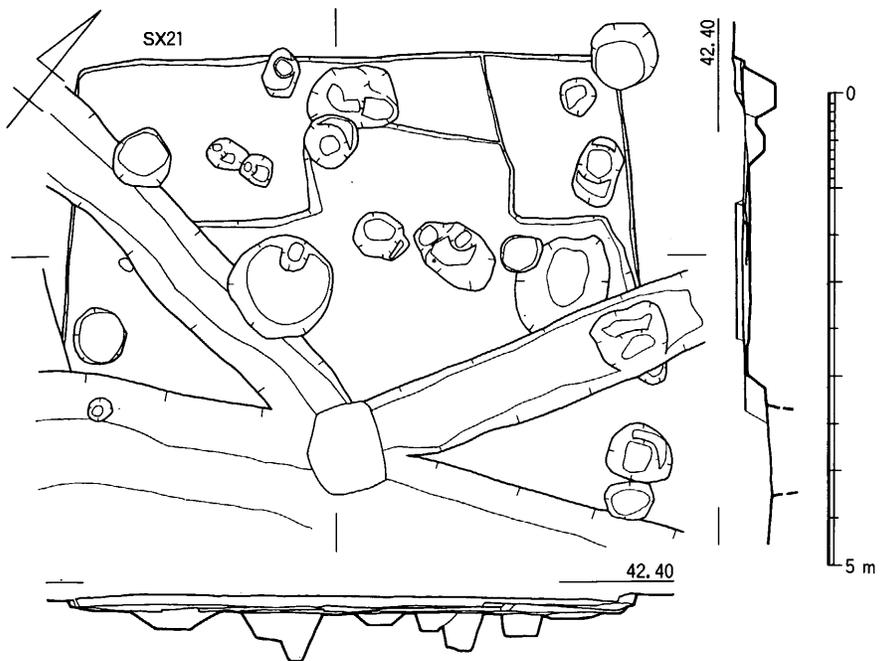
第80図 E地区 SX01~03実測図 (1/80)



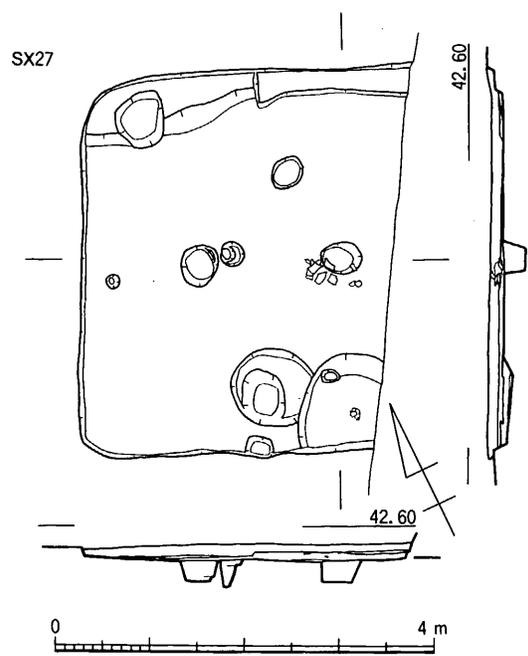
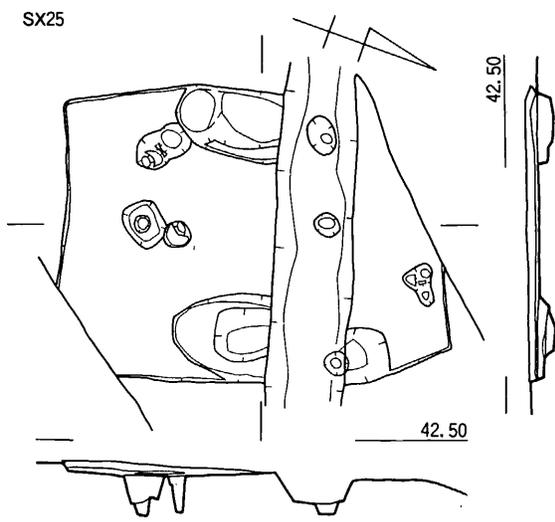
第81图 E地区 SX06·08实测图 (1/80)



第82図 E地区 SX13・14実測図 (1/80)



第83図 E地区 SX20~22実測図 (1/80)



第84图 E地区 SX25・27实测图 (1/80)

表 7-1 E 地区住居跡要説

番号	挿図番号	図版番号	平面形	規模 (m)	主柱穴	切り合い関係	備 考
01	80	72	方形				南側壁下の側溝と床面中央の炉が残る。西側は調査対象地外
02	80		方形	5.2×	2		一方にベット。南・東壁下に側溝。床面中央に64×46cm、深さ7cmの炉 東側に土壇。東側は調査対象地外
03	80		方形	5.6×		○←SX4	南壁・東～北壁下に側溝。床面中央に焼土塊 西側は調査区域外
04			方形	5.4×		SX3←○	2方以上にベット。東壁・北壁下に側溝 西側は調査区域外
05			方形				東壁の一部が残る
06	81	73	方形	5.7×			西壁・南壁下に幅広の側溝。北壁より1.5m南に溝。東側段落ち
07			方形	3.7×3.1	2		2方にベット
08	81	73	方形	4.2×			1方以上にベット。東壁下に幅広の側溝
09			方形	6.2×4.8	2		2方にベット。東側ベットに沿って側溝 中央に炉。南側コーナー段落ち
10			方形	4.9×			東西は調査区外
11			方形	5.6×			東側は調査区外
12			方形	4.7×			東側は調査区外
13	82	74	方形	4.8×3.6			北東壁下に土壇
14	82	75	方形	4.9×4.3	2		1方にベット。南側コーナーは段落ち
15			方形	6.2×4.8	2		3方にベット。1方に短かいベット。北側壁下に側溝 中央に炉。南壁下に土壇
16		75	方形	4.2×			西側は段落ち
17			方形	4.2×			南側は段落ち
18			方形				
19			方形				
20	83		方形			SX21←○	
21	83	76	方形	4.5×		○←SX20	
22	83		方形	6.0×		SX23←○	2方向にベット
23		76	方形	5.4×		SX24←○←SX21・25	1方向にベット
24		77	方形	8.0×5.8	2		2方向にベット 床面中央に70×54cm、深さ9cm炉
25	84	77	方形			SX24←○	
26		78	方形	4.1×3.0	2	SX23←○	東壁・西壁下にそれぞれ土壇
27	84	78	方形				南側は段落ち
28		79	方形	4.1×	2	○←SX29・30	1方向にベット 北側は調査対象地外
29		79	方形	3.7×2.9		SX28←○	
30			方形	3.4×		SX28←○	1方向にベット・北側は調査対象地外
31			方形				北側は調査対象地外
32			方形	4.2×			1方向にベット 北壁下に側溝 南側は調査対象地外
33			方形				北側コーナーのみ調査 他は調査対象地外
34			方形				北壁のみ調査 他は調査対象地外
35			方形				〃
36			方形				東側コーナーのみ残存
37			方形			○←SX38	南側のみ残存
38			方形	5×		SX37←○	南側は調査区外 一部炉を検出
39			方形				一方にベット 南・北側は調査区外
40			方形				東コーナーのみ調査 他は調査区外
41			方形	8×			
42			方形				壁下に幅広の側溝 南半は調査対象地外
43			方形				西側コーナーのみ残存 西壁下に土壇

土壌

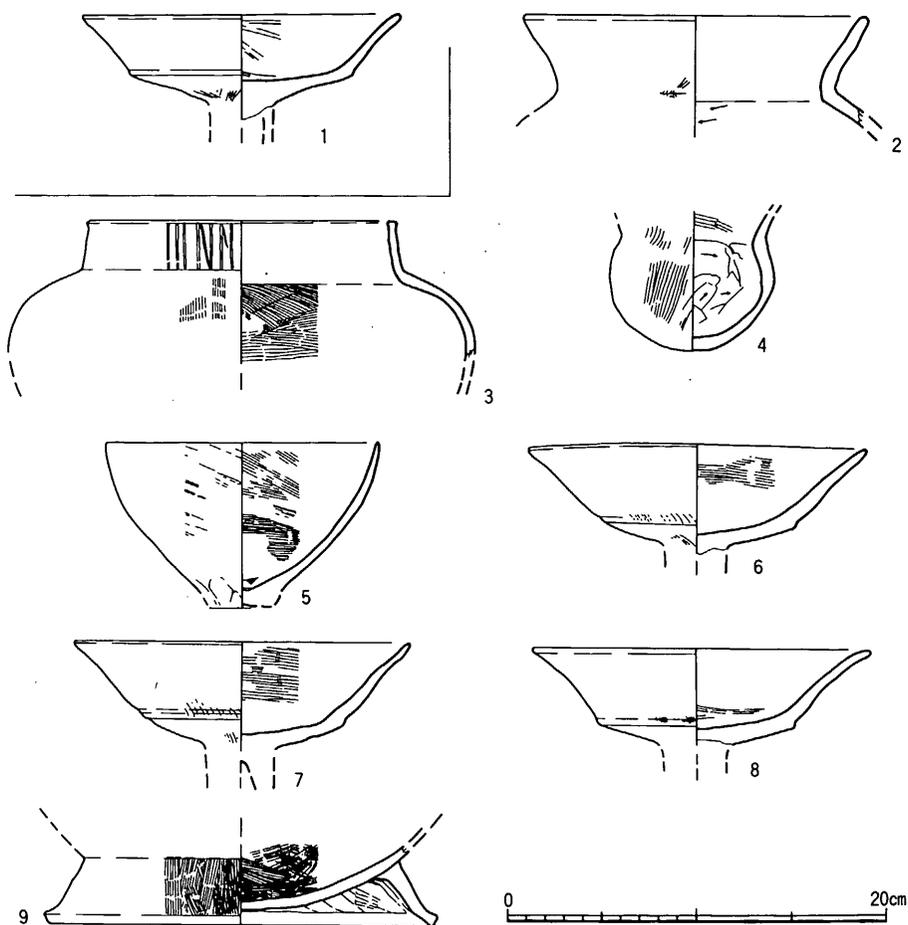
土壌は小地区ごとに番号を付した。

EISD 1 は調査区の西端に位置し、 $3.7 \times 1.9\text{m}$ を測る楕円形プランを呈す。深さは約50cmを測る。土器が床面から出土した。

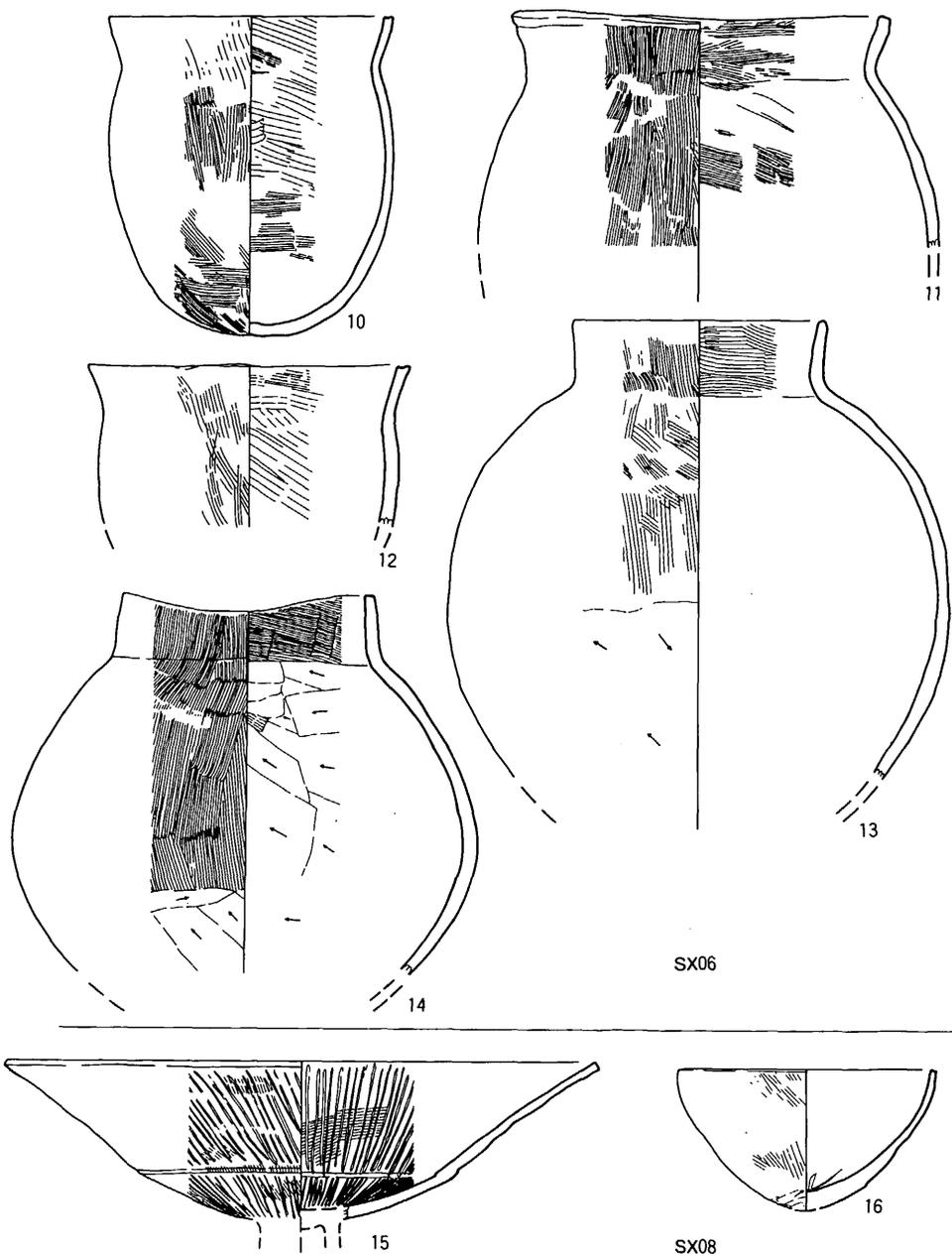
EISD2は EISD 1 の北に位置し、 $2.9 \times 1.4\text{m}$ を測る不整形な土壌である。全体に浅いが、北側部分は深さ25cmほどになっており、床面から遺物が出土した。

EISD 3 は調査区東側に位置し、 $2.4 \times 0.8\text{m}$ の長楕円形プランを呈し、深さは中央で約57cmを測る。遺物は包土中より出土した。

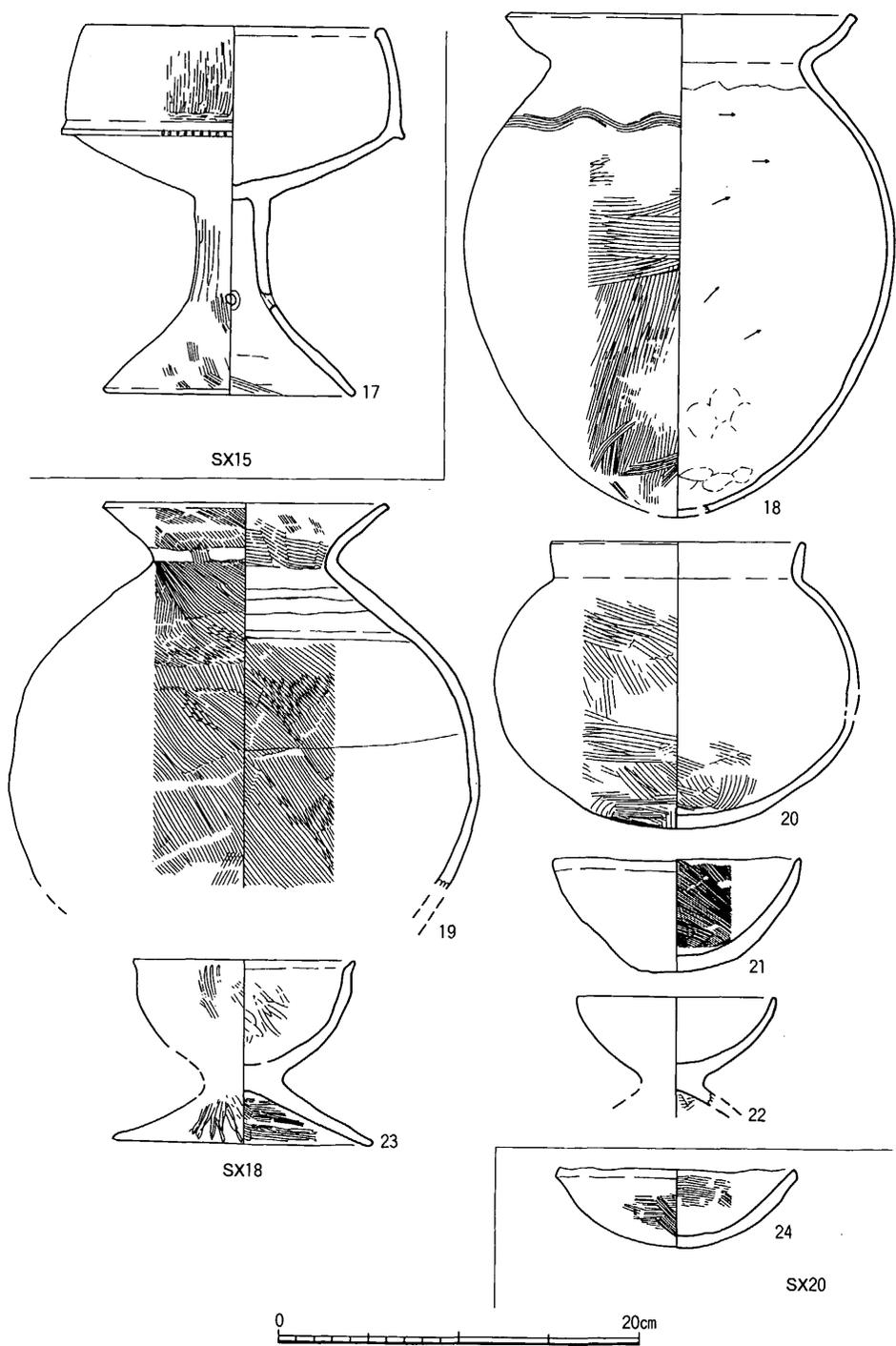
3 出土遺物



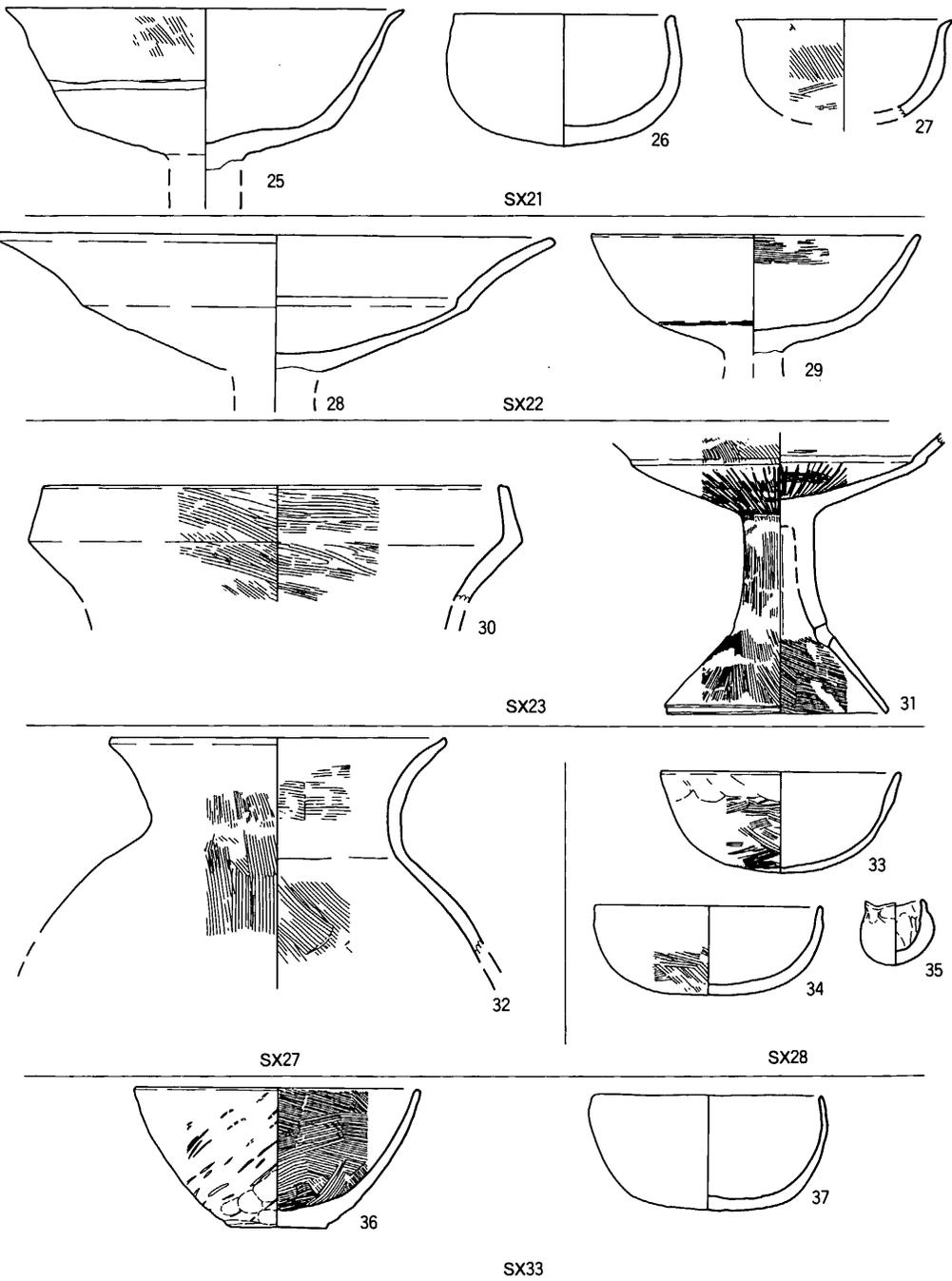
第85図 E地区 SX01・02出土土器実測図(1/4)



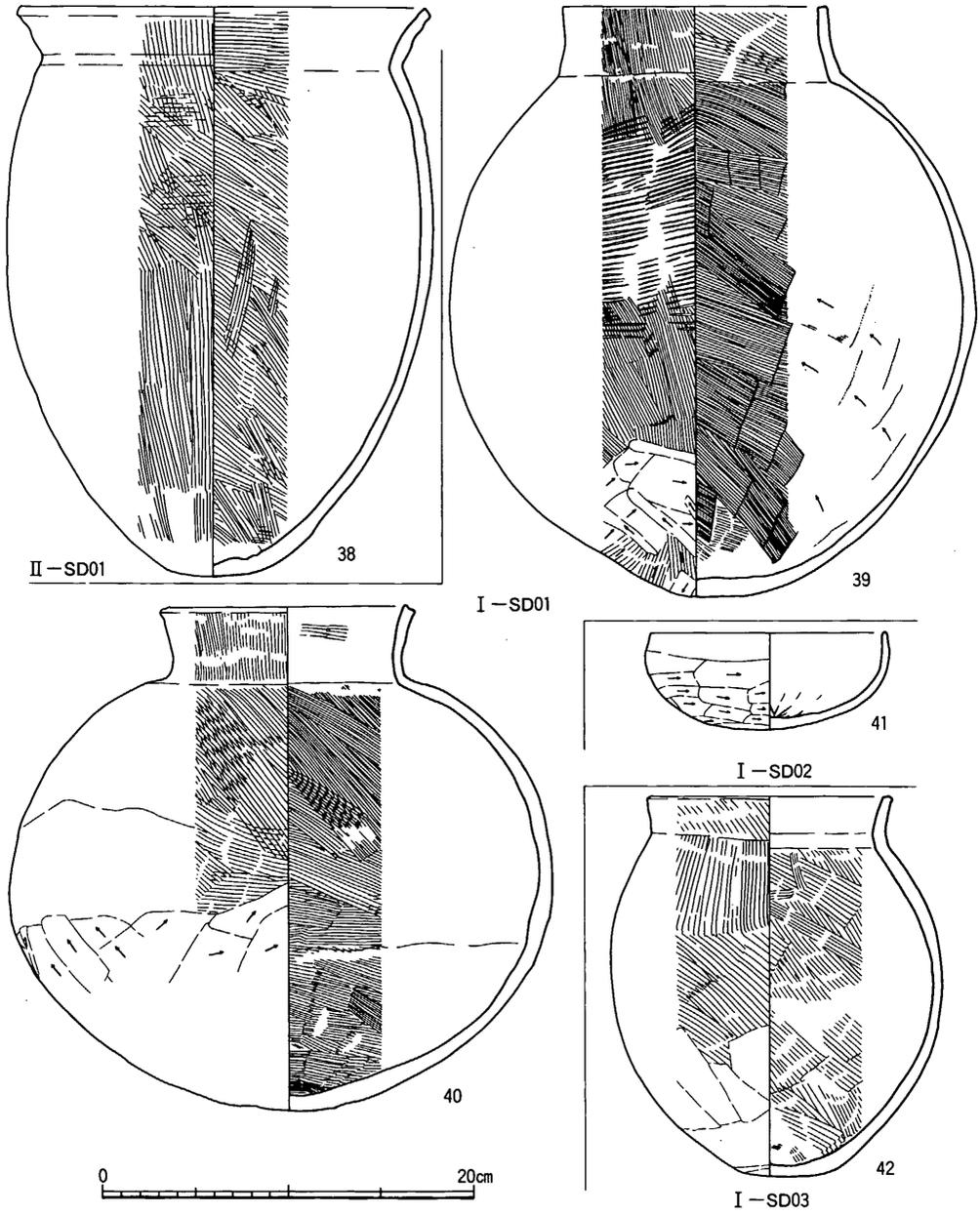
第86图 E地区 SX06·08出土土器实测图 (1/4)



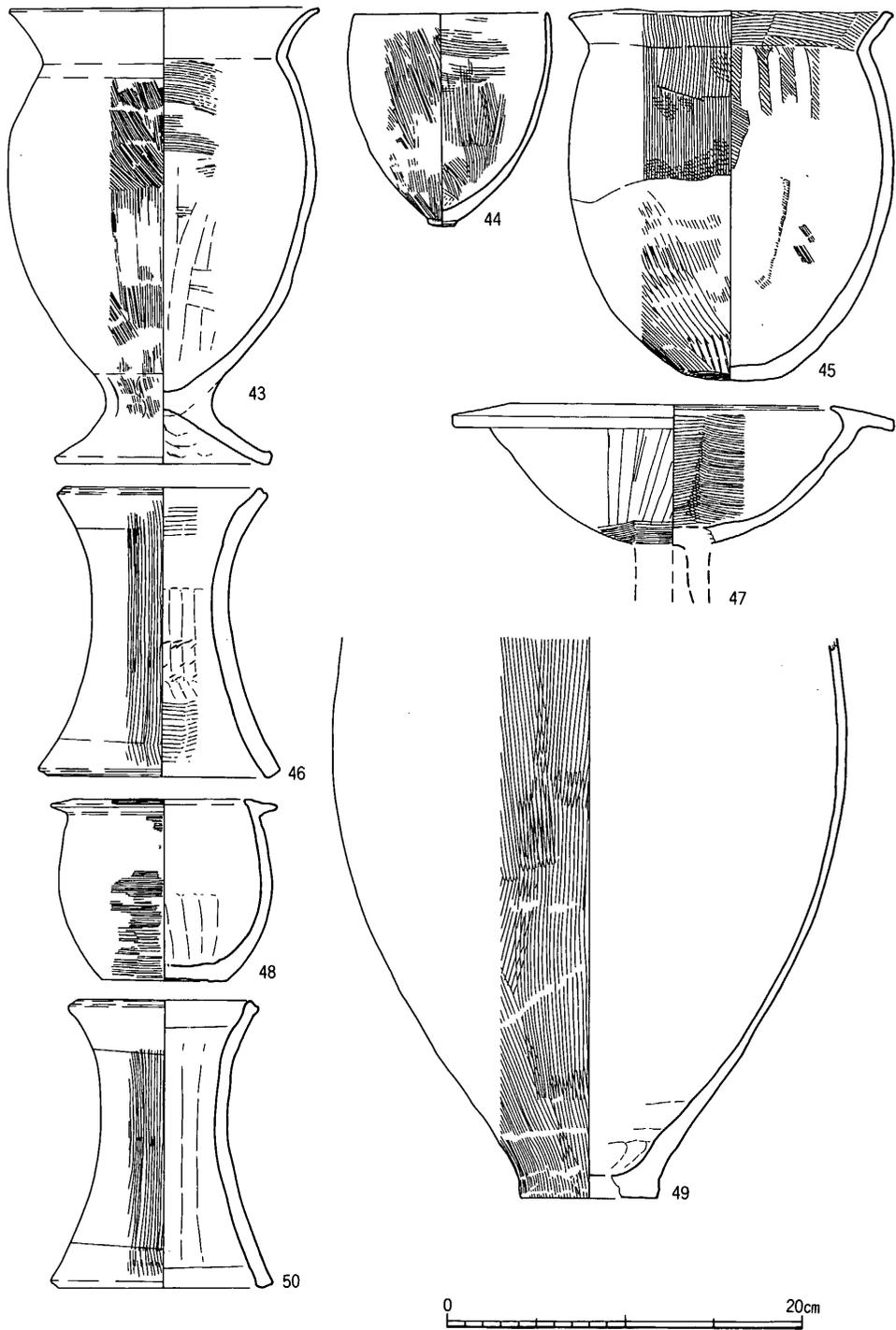
第87图 E地区 SX15·18·20出土土器实测图(1/4)



第88图 E地区 SX21~23·27·28·33出土土器实测图(1/4)



第89图 E地区II SD01・I SD01~03出土土器实测图(1/4)



第90図 E地区 SM・SH・ピット出土土器実測図(1/4)

表 8-1 E 地区出土土器要説

番号	器 種	法 量(cm)	色 調	胎 土	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
1	高 坏	口径 16.8	淡赤褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体 部 ヨコナデ 屈曲部 ハケ目後ヨコナデ 底 部 磨滅(ハケメ残)	口縁部 ヨコナデ 体 部 ハケメ後ヨコナデ 底 部 磨滅	
2	壺	口径 18.2	淡赤褐色	0.5mm大の砂粒を中量含む	口縁部 ヨコナデ 頸 部 ヨコナデ 胴部上部 磨滅	口縁部 ヨコナデ 頸 部 ヨコナデ 頸部直下 ヘラケズリ	
3	壺	口径 16.3	浅白黄褐色	微砂粒を中量含むが密	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ヨコナデ後ミガキ 頸 部 ヨコナデ後ミガキ 体 部 ナデ(ミガキ残)	口縁部 ヨコナデ 頸 部 ヨコナデ 頸部直下 ハケメ	
4	小型丸底壺		暗黄褐色	微砂粒を多量に含む	頸 部 ハケメ後ヨコナデ 胴 部 ハケメ後ナデ 底 部 ハケメ後ナデ	頸 部 ハケメ後ヨコナデ 頸部直下 ヘラケズリ 底 部 ナデ	
5	鉢	口径 14.4 器高 8.6	淡赤褐色	1mm大の砂粒を中量含む	口唇部 ヨコナデ 口縁部 タタキ後ナデ 体 部 磨滅 体部下位 ナデ(指頭痕) 底 部 ナデ	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ヨコナデ 体 部 ハケメ 底 部 ナデ	
6	高 坏	口径 19.8	赤褐色	微砂粒を中量含む	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体 部 ハケメ後ヨコナデ 底 部 ナデ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体 部 ハケメ後ヨコナデ 底 部 ナデ	
7	高 坏	口径 17.8	赤茶褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体 部 ヨコナデ 屈曲部 ハケ目後ヨコナデ 底 部 ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ 体 部 ヨコナデ 底 部 ナデ	
8	高 坏	口径 17.8	黄褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体 部 ヨコナデ 底 部 ナデ	口縁部 ヨコナデ 体 部 ヨコナデ 屈曲部 ハケメ後ヨコナデ 底 部 ナデ	
9	脚台	底径 20.7	浅白黄褐色	1mm大の砂粒を少し含むが密	脚 台 ヨコナデ 脚台接合部 ハケメ後ヨコナデ 底 部 ヘラケズリ(ナデ状)	底 部 ハケメ	
10	甕	口径 15.2 器高 17.0	淡黄褐色	微砂粒を多く含む	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ 胴 部 ハケメ 底 部 ハケメ	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ 胴部上・中位 ハケメ 胴部下位下 ナデ	胴部中・下位にスス附着
11	甕	口径 20.2	暗褐色	微砂粒を多量に含む	口唇部 ヨコナデ 口縁部下 ハケメ	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ 胴 部 ハケメ後部分的にナデ	全体にスス附着
12	甕	口径 17.2	黄褐色	0.5mm大の砂粒を多く含む	口唇部 ヨコナデ 口縁部下 ハケメ	口唇部 ヨコナデ 口縁部下 ハケメ	全体にスス附着
13	壺	口径 13.6 最大径 26.6	赤褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ 胴部上・中位 ハケメ 胴部下部 ヘラケズリ	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ヨコナデ 頸部直下 ヨコナデ 胴部上・中位 ヨコナデ 胴部下位 ハケメ	
14	壺	口径 13.5	暗灰褐色	1mm大の砂粒を多く含む	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ 胴部上・中位 ハケメ 胴部下位 ヘラケズリ(ナデ状)	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ 頸部直下より下 ヘラケズリ(ナデ状)	胴部中位にスス附着

表8-2 E地区出土土器要説

15	高坏	口径 31.6	赤褐色	緻密	口縁部 ミガキ後ヨコナデ 体部 ハケメ後ミガキ (暗文風) 底部 ハケメ後ミガキ (暗文風)	口縁部 ミガキ後ヨコナデ 体部 ハケメ後ミガキ (暗文風) 底部 ミガキ(暗文風)	
16	鉢	口径 13.7	黄褐色	微砂粒を中量 含む	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体部 ハケメ後ナデ 底部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部上・中位 ナデ 体部下位 ヘラケズリ(ナ デ状) 底部 ヘラケズリ(ナデ 状)	
17	高坏	口径 16.5 器高 20.3 脚裾径 14.0	淡黄褐色	微砂粒を少量 含む	坏 口唇部 ヨコナデ 体部 ミガキ 底部 ミガキ 脚 筒部上・中位 ミガキ 筒部下位 ハケメ後ミ ガキ 裾部 ハケメ後ミガ キ 端部 ヨコナデ	坏 口唇部 ヨコナデ 体部 ハケメ後ヨコ ナデ 底部 ハケメ 筒部 ヘラケズリ 裾部 ハケメ 端部 ヨコナデ	坏部 凸帯にキザミメ 脚部穿孔3
18	甕	口径 19.4 最大径 23.8	黄褐色	1mm大の砂粒 をやや多く含 む	口縁部 ヨコナデ 頸部直下 ハケメ 胴部 ハケメ 底部 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 頸部下1cmより ヘラケズ リ 胴部下位 ヘラケズリ後ナ デ 底部 ナデ(指頭痕)	胴部中位下 スス付 着 胴部上位 波状文
19	甕	口径 15.8 最大径 26.0	淡黄褐色	1mm大の砂粒 を多く含む	口頸部 ハケメ後ヨコナデ 頸部直下より ハケメ 胴部 ハケメ	口頸部 ハケメ後ヨコナデ 頸部直下より6.5cm ナデ 胴部中位下 ハケメ	胴部中位下 スス付 着
20	壺	口径 14.0 器高 16.0	黄褐色	1mm大の砂粒 を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 胴部上・中位 ナデ 胴部下位 ハケメ後ナデ	全面にスス附着
21	鉢	口径 13.7 器高 6.3	淡黄褐色	1mm大の砂粒 を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部下 ナデ	口縁部 ヨコナデ 体部下 ハケメ	
22	鉢 (脚台付)	口径 18.6	暗赤褐色	1mm大の砂粒 をやや多く含 む	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ 脚台部 ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ	内面にスス状のもの がわずかに残る。
23	鉢 (脚台付)	口径 12.2 脚裾径 14.4 器高 10.2	淡褐色	1mm大の砂粒 を若干含む	口唇部 ヨコナデ 体部 ミガキ 脚部 ミガキ	口縁部 ヨコナデ 体部 ミガキ 脚部 ハケメ	
24	鉢	口径 13.4 器高 4.4	淡赤褐色	1mm大の砂粒 をやや多く含 む	口縁部 磨滅 体部 ハケメ	口縁部 磨滅 体部 ハケメ	
25	高坏	口径 22	淡赤褐色	0.5mm大の砂 粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ後ヨコナデ 底部 ナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ 底部 ナデ	外面体部中央に2条 の沈線をめぐらす。
26	鉢	口径 11.2 器高 7.4	暗褐色	1mm大の砂粒 を少量含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ 底部 ナデ	
27	鉢	口径 12.0	黄褐色	1mm大の砂粒 を少し含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	
28	高坏	口径 30.8	黄褐色	1mm大の砂粒 を多く含む	全体 磨滅 (底部 一部にハケ目残)	全体 磨滅 (屈曲部 一部にハケ目残)	内外面に丹塗り。
29	高坏	口径 18.2	淡赤褐色	微砂粒を少し 含む	口唇部 ヨコナデ 体部 ハケメ後ヨコナデ 底部 ナデ	口唇部 ヨコナデ 体部 ハケメ後ヨコナデ 底部 ナデ	

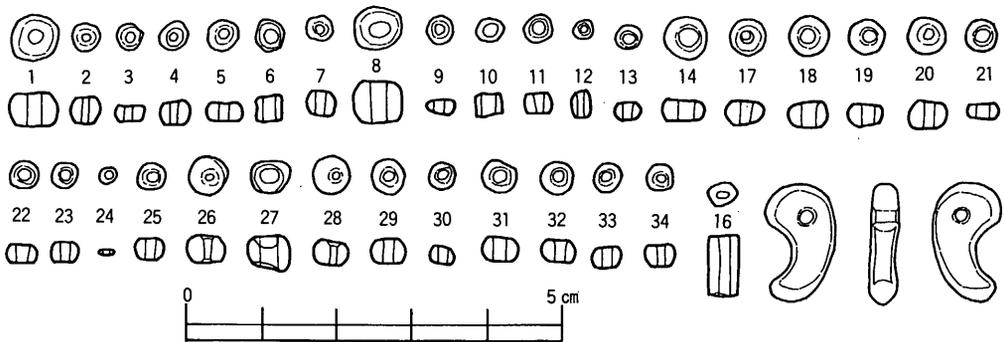
表 8-3 E 地区出土土器要説

30	壺 (複合口縁)	口径 25.8	淡黄褐色	微砂粒を多く含む	口縁部上半 ハケメ後ヨコナデ 口縁部 ハケメ	口縁部 ハケメ	
31	高坏	脚裾径 12.4	浅赤褐色	微砂粒を多く含む	坏体部 ハケメ後ナデ 後ミガキ 底部 ハケメ後ナデ 後ミガキ 脚筒部 ハケメ後ナデ 脚裾部 ハケメ後ナデ 脚端部 ヨコナデ	坏体部 ナデ 底部 ハケメ後ナデ 後放射状のミガキ 脚筒部 ナデ 脚裾部 ハケメ 脚端部 ヨコナデ	
32	壺	口径 18.6	淡赤褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ後粗いナデ	
33	鉢	口径 13.3 器高 5.6	淡赤褐色	微砂粒を中量含む	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ナデ 体部下 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 体部下 ナデ	
34	鉢	口径 12.6 器高 5.0	暗褐色	1mm大の砂粒を少し含む	口縁部 ヨコナデ 体部下 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 体部下 ナデ	
35	手づくね	口径 3.4 器高 3.5	淡黄褐色	2mm大の砂を若干含む	口縁部 ヨコナデ 体部下 ナデ	口縁部 ヨコナデ 体部下 ナデ(指頭痕)	
36	鉢	口径 15.9 器高 7.7 底径 5.5	白黄色	1mm大の砂粒を多く含む	口唇部 ヨコナデ 口縁部 タタキ後ナデ 体部 タタキ後ナデ 底部 ナデ	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ 体部下 ハケメ	
37	鉢	口径 12.6 器高 6.5 底径 8.8	明赤褐色	1mm大の砂粒を多く含む	全 而 磨滅	口縁部 磨滅 体部下 ヘラケズリ(ナデ状)	
38	甕	口径 22.8 器高 30.9 底径 5.0 胴最大径22.9	茶褐色	2mm大の砂を若干含むが密	口唇部 ヨコナデ 口頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ 底部 未調整	口唇部 ヨコナデ 口頸部 ハケメ 胴部 ハケメ 底部 ナデ(指頭痕)	頸部~体部下半にスス付着
39	壺	口径 14.3 器高 31.9 胴最大径28 底径 3.3	淡黄赤褐色	1mm大の砂粒を若干含むが密	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ後ナデ 頸部直下3cm タタキ後ハケメ 胴部上・中位 タタキ後部分的ハケメ 後ナデ 胴部下位 ヘラケズリ 底部 ヘラケズリ後ナデ	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ後ナデ 頸部直下より ハケメ 胴部 ハケメ 底部 ナデ(指頭痕)	
40	壺	口径 13.8 器高 27.3 胴最大径29.2	淡白黄褐色	1mm大の砂粒を若干含むが密	口唇部 ヨコナデ 口頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部上位 ハケメ 胴部中位 ハケメ後ナデ 胴部下位 ヘラケズリ 底部 ヘラケズリ後ナデ	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ後ヨコナデ 頸部直下より胴部 ハケメ 底部 ハケメ	
41	鉢	口径 12.8 器高 7.2	浅赤黄褐色	緻密	口縁部 ヨコナデ 体部上位 ヘラケズリ後ナデ 体部中位下 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部下 ヘラケズリ後ナデ	
42		口径 13.2 器高 20.5 胴最大径17.9	浅橙色 ~ 暗灰褐色	1mm大の砂粒をやや多く含むが密	口唇部 ヨコナデ 口頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部上・中位 ハケメ 胴部下位 ヘラケズリ(ナデ状) 底部 ナデ	口唇部 ヨコナデ 口頸部 ヨコナデ 頸部直下より胴部 ハケメ 後ナデ 底部 ハケメ後ナデ	

表 8-4 E地区出土土器要説

43	壺 (台付)	口径 17.4 器高 26.8 台底径 12.0	薄茶褐色	1mm大の砂粒 を若干含むが 密	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ 底部 ナデ後ハケメ 台部 ナデ後ハケメ 裾部 ヨコナデ	口頸部 ヨコナデ 頸部直下より胴部上位 ハケメ 胴部中・下位 ヘラケズリ (ナデ状) 底部 ナデ(指頭痕) 台部 ヘラケズリ	胴部上・中位にスス 付着。
44	鉢	口径 11.2 器高 12.0 底径 1.4	淡赤褐色	1mm大の砂粒 を少し含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ 底部 磨滅	口縁部 ヨコナデ 体部下 ハケメ	底部に穿孔している が、貫通しているか どうかは不明。
45	壺	口径 18.3 器高 21.1 胴最大径18.3 底径 5.4	浅黄褐色	1mm大の砂粒 をやや多く含 むが密	口唇部 ヨコナデ 口頸部 ハケメ 胴部上位 ハケメ 胴部中位下 ヘラケズリ (ナデ状) 底部 ハケメ	口唇部 ヨコナデ 口頸部 ハケメ 頸部直下より胴部 ハケメ 後ナデ 底部 ナデ	胴部中位にスス付着。
46	器台	受部径 10.9 器高 16.4 脚裾径 13.6	薄茶褐色	1mm大の砂粒 を多く含む	受部 ヨコナデ 胴部下 ハケメ 脚裾部 ヨコナデ	受部 ヨコナデ 胴部上位 ハケメ 胴部中位 ナデ 脚裾部 ハケメ 端部 ヨコナデ	
47	高坏	口径 24.8	薄茶褐色	微砂粒を含む が密	口縁部 ヨコナデ 体部下 ミガキ	口唇部 ヨコナデ 体部下 ミガキ	内外面に丹塗り。
48	小型壺	口径 12.8 器高 10.3 底径 7.0	薄茶褐色	微砂粒を若干 含むが精良	口縁部 ヨコナデ 口頸直下より胴部 ミガキ 底部 磨滅	口唇部 ミガキ 口頸部 ヨコナデ 胴部上位 ヨコナデ 胴部中・下位 ヘラケズリ 後ナデ 底部 磨滅(一部に指頭 痕残)	外面は丹塗り 内面は胴の上位に丹 塗りと思われるが大 半は剝離。
49	壺	胴最大径29.0 底径 7.8	淡黄褐色	1mm大の砂粒 を多く含むが 密	胴部 ハケメ 胴部下位 ハケメ後ナデ 底部 ナデ	胴部 ナデ(一部にヘラ ケズリ痕残) 胴部下位 ナデ 底部 ナデ	胴部中位に薄くスス 付着。
50	器台	受部径 10.7 器高 16.3 脚裾径 12.5	薄赤茶褐色	微砂粒を少量 含む	受部端部 ヨコナデ 胴部上位 ハケメ後ヨコナ デ 胴部 ハケメ 脚裾部 ハケメ後ヨコナデ 端部 ヨコナデ	受部 ヨコナデ 胴部 ヘラケズリ(ナデ 状) 脚裾部 ヨコナデ	

玉類



第91図 E地区出土玉類実測図 (1/1)

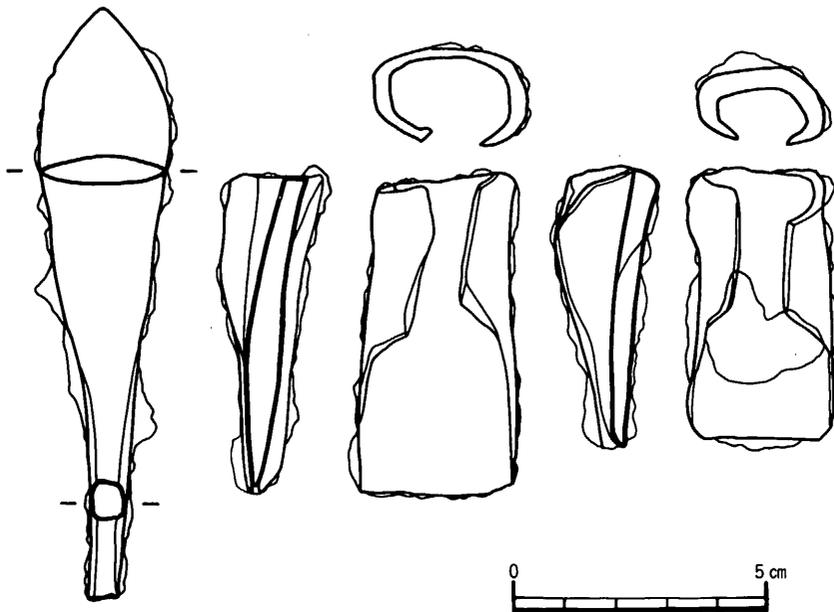
表9-1 E地区出土玉類計測表

No	出土遺構	径	厚(長)	孔径	種別	色	材質	備考
1	E-II SX13	6.00	4.20	1.00	小玉	明青色	ガラス	①
2	E-II SX13	3.45	3.60	1.05	〃	淡青色	〃	②
3	E-II SX13	3.30	2.30	1.15	〃	〃	〃	④
4	E-II SX13	3.95	3.15	0.65	〃	藍色	〃	③
5	E-II SX13	4.20	2.80	0.95	〃	〃	〃	⑤
6	E-II SX13	3.60	3.40	1.45	〃	明青色	〃	④
7	E-II SX13	3.40	2.85	0.90	〃	〃	〃	⑥
8	E-II SX14	6.10	5.35	1.95	〃	〃	〃	②
9	E-II SX14	3.60	1.95	1.10	〃	明藍色	〃	③
10	E-II SX14	3.35	2.75	1.05	〃	淡青色	〃	東穴
11	E-II SX14	3.60	2.75	0.90	〃	明藍色	〃	⑤
12	E-II SX26	2.50	3.05	0.80	〃	淡青色	〃	A
13	E-II SX26	3.30	2.35	0.60	〃	藍色	〃	B
14	E-II SX26	5.50	2.45	2.00	〃	〃	〃	
52	E-II SX15	5.65	2.40	2.85	〃	〃	〃	③
53	E-II SX21	3.40	3.95	1.20	白玉	—	滑石	A
54	E-II SX23	6.20	4.60	2.40	小玉	明青色	ガラス	③
55	E-II	2.40	1.65	0.65	〃	淡緑色	〃	表採
56	E-II	4.10	3.66	0.70	〃	淡青色	〃	〃 SX14の北
57	E-II P-1	3.00	2.90	0.75	〃	藍色	〃	
58	E-II P-1	5.25	2.15	2.40	〃	明藍色	〃	
59	E-II P-174	2.65	2.35	0.85	〃	明青色	〃	
60	E-II 溝6B	3.45	2.10	0.90	〃	〃	〃	
61	E-III-c P-142	3.70	1.85	0.85	〃	〃	〃	
62	E-III-c P-159	4.90	3.80	2.15	〃	暗青色	〃	
	E-V SX02	3.65	15.00	1.65	勾玉	—	滑石	①
63	E-V SX03	3.05	2.75	0.55	小玉	藍色	ガラス	②
16	E-V-c SX12	3.85	8.15	1.30	管玉	〃	〃	
17	E-V-c SX12	4.65	2.80	1.25	小玉	〃	〃	
18	E-V-c SX12	5.15	3.10	1.35	〃	〃	〃	③
19	E-V-c SX12	4.60	2.85	1.15	〃	〃	〃	③
20	E-V-c SX12	4.85	3.60	1.20	〃	暗藍色	〃	①
21	E-V-c SX12	4.25	1.95	1.00	〃	明藍色	〃	①
22	E-V-c SX12	4.05	2.35	1.35	〃	藍色	〃	①
23	E-V-c SX12	3.40	2.65	0.70	〃	〃	〃	①
24	E-V-c SX12	2.30	1.00	0.60	〃	〃	〃	
25	E-V-c SX12	3.65	2.75	0.65	〃	〃	〃	
26	E-V-c SX12	4.85	3.45	0.85	〃	暗藍色	〃	
27	E-V-c SX12	5.40	4.10	2.25	〃	淡青色	〃	
28	E-V-c SX12	4.75	3.25	1.10	〃	藍色	〃	
64	E-V-c SX12	5.65	3.15	1.85	〃	〃	〃	破片
65	E-V-c SX12	3.30	3.80	0.65	〃	明藍色	〃	〃
66	E-V-d SX01	2.95	1.30	0.95	〃	青色	〃	①
67	E-V-d SX04	3.85	2.85	1.20	〃	明青色	〃	

表9-2 E地区出土玉類計測表

No.	出土遺構	径	厚(長)	孔径	種別	色	材質	備考
68	E-V-d SX08	3.80	1.40	1.10	小玉	淡青色	ガラス	①
29	E-V-d SX12	4.70	3.10	1.35	〃	暗藍色	〃	
30	E-V-d SX12	3.40	2.20	1.15	〃	明藍色	〃	
31	E-V-d SX12	5.50	3.20	1.40	〃	暗藍色	〃	
32	E-V-d SX12	4.40	3.10	1.20	〃	〃	〃	
33	E-V-d SX12	4.00	3.00	1.00	〃	〃	〃	
34	E-V-d SX12	3.85	3.00	0.90	〃	淡青色	〃	
69	E-V-d SX12	3.25	2.95	1.00	〃	明藍色	〃	破片ㄥ
70	E-V-d SX12	3.80	2.45	0.65	〃	明青色	〃	〃
71	E-V-d P-51	3.60	2.60	1.45	〃	〃	〃	
72	E-V-d P-67	3.25	3.65	1.20	〃	〃	〃	両端はカクばる
164	E 表 採	3.50	2.35	1.15	〃	淡青色	〃	
165	E 表 採	3.20	2.05	1.35	〃	明青色	〃	
166	表 採	4.50	2.50	1.25	〃	明藍色	〃	
167	表 採	4.20	3.85	1.30	〃	明青色	〃	
168	表 採	3.65	2.10	1.25	〃	淡青色	〃	
169	表 採	3.25	2.05	1.05	〃	〃	〃	
170	表 採	5.45	2.85	1.60	〃	藍色	〃	
171	表 採	3.90	3.10	1.25	〃	暗藍色	〃	

鉄器

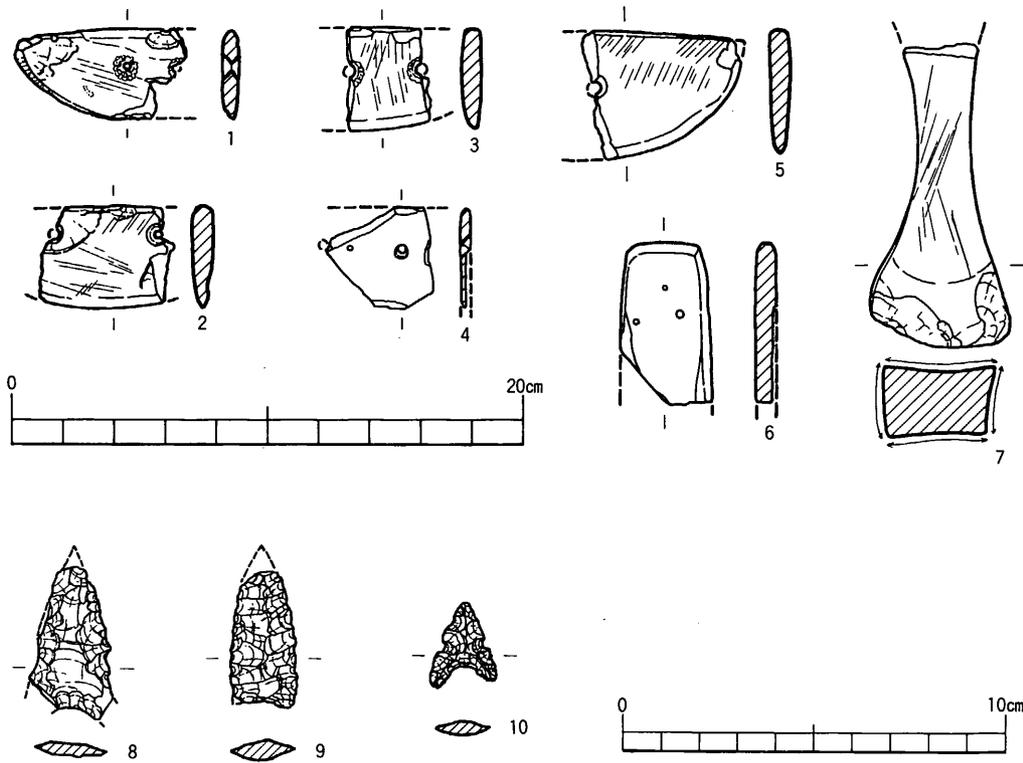


第92図 E地区出土鉄器実測図(2/3)

1はSX21出土の鉄鏃である。有柄式で茎の一部を欠失する。残存長11.6cmを測る。2はSX02より出土した袋状鉄斧で、全長6.4cm、刃幅3cm、袋部幅3cmを測る。良好な残りの製品である。3は2と同様な袋状鉄斧である。全長5.3cm、刃幅2.6cm、袋部幅2.6cmを測る。

2・3ともに片刃で小形である。

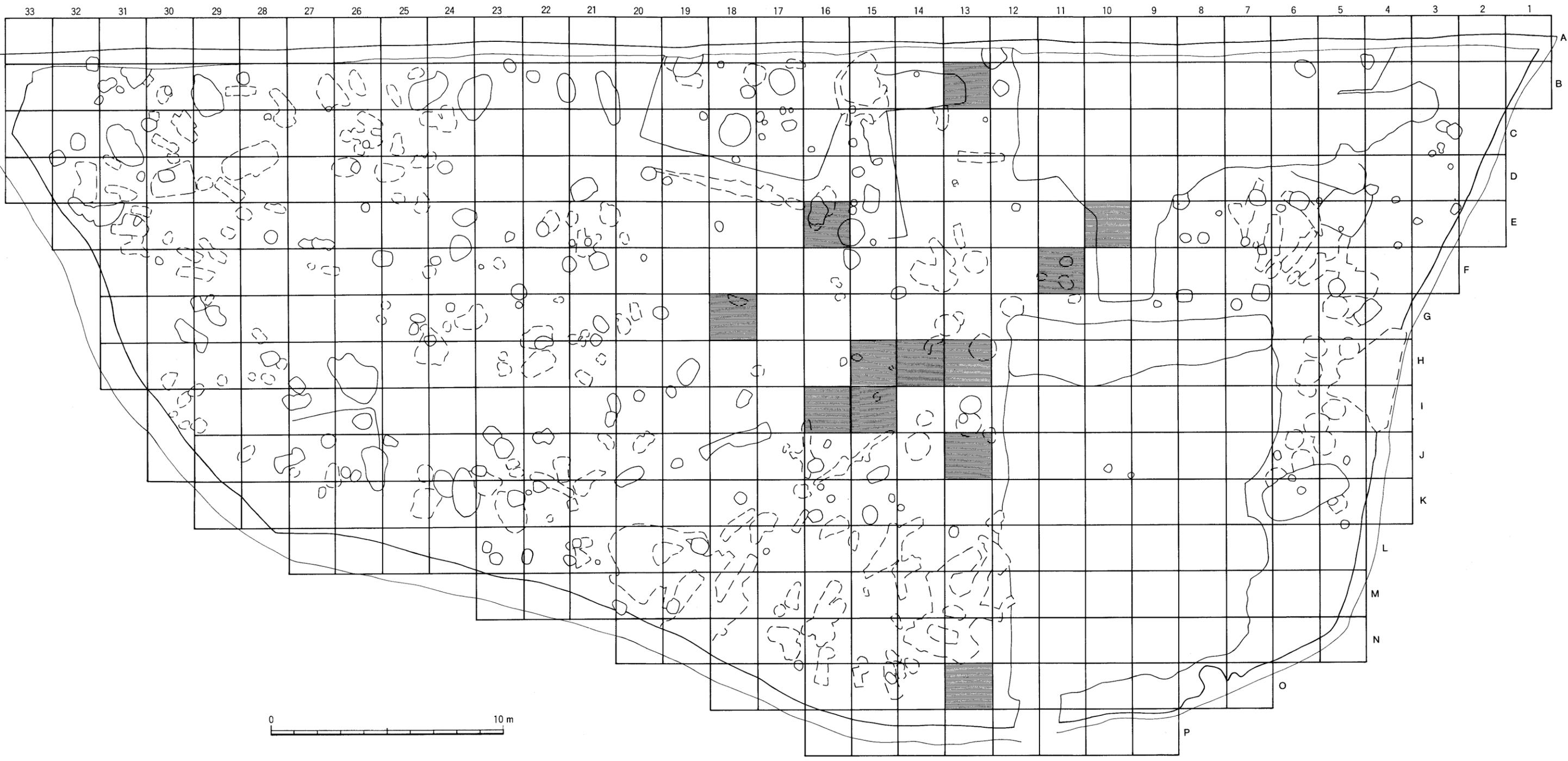
石器



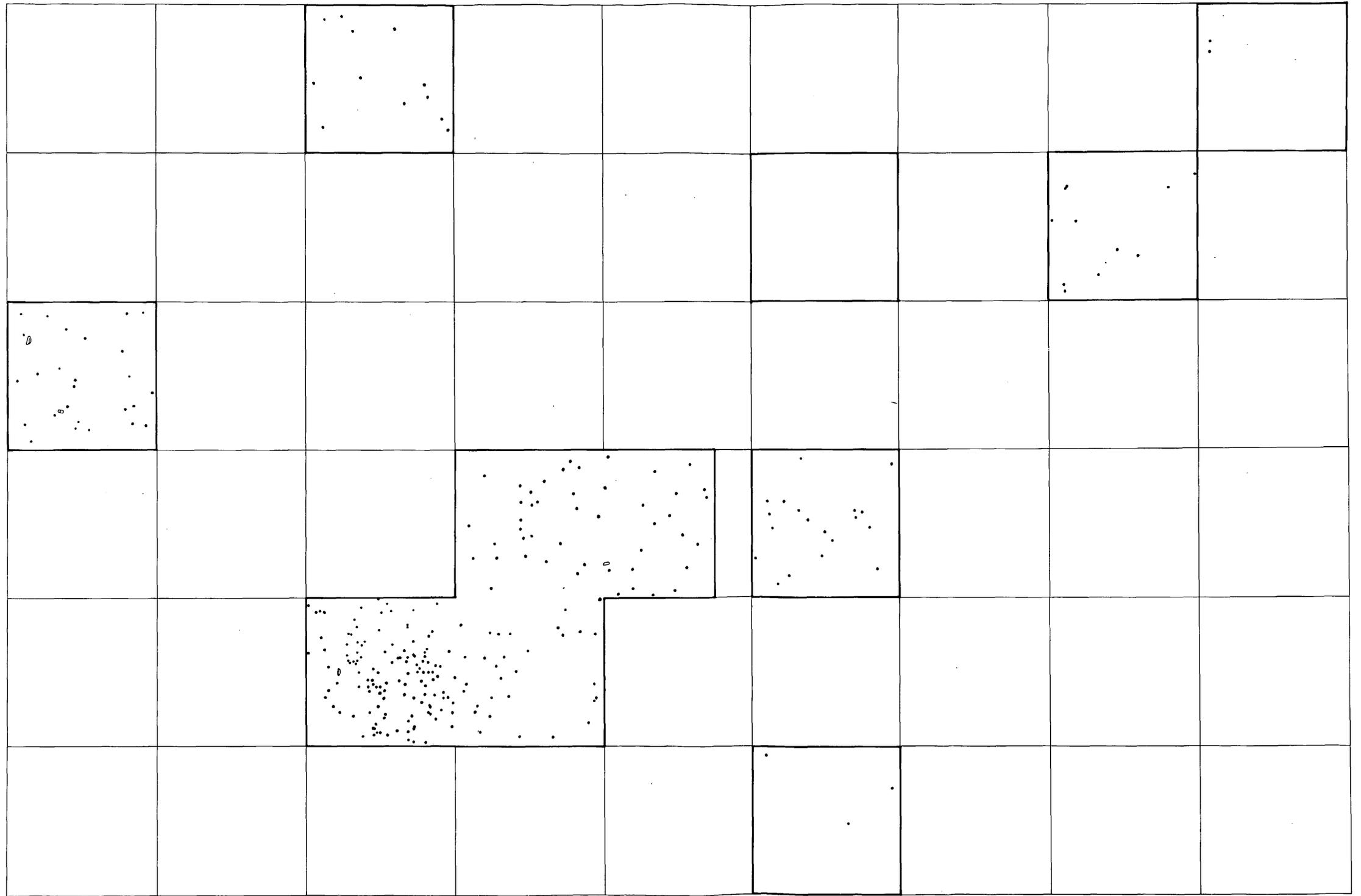
第93図 E地区出土石器実測図（縮尺は1～7が1/3、8～10が1/2）

4 旧石器時代の遺物

1は2-eより出土した尖頭器状石器である。パティナの進んだ黒耀石製で厚手の剥片が素材である。一側辺に不規則な加工を施し刃部としている。もう一側辺は素材そのまま刃部として使用。2、M-2グリッド出土のブレイドで、両端は折断されている。両側辺に使用痕的剥離が認められ、パティナはそれほど進まない黒耀石製である。3は表採の黒耀石製ブレイドである。先端部は折断、両側辺部には使用痕的剥離が認められる。4はM-15グリッド出土。サヌカイト製のナイフ型石器である。素材の裏面部の打面部に二次加工を施し打^{バルブ}瘤を除去している。表面部は先端部にのみ加工を施すが、側辺部は素材のままである。5はM-8グリッド出土。黒耀石製の二次加工剥片である。表面に自然面を残す。先端部と右側辺の一部に加工を施している。もう一方の側辺には使用痕的剥離が認められる。6、0-8グリッド出土の折断ブレイドである。両端を折断、一側辺部にのみ細い二次加工を施す。良質の黒耀石製である。7はP-9グリッド出土。頁岩製の小形のナイフ型石器。先端部は欠損。一側辺部には裏面よりブランディング。もう一方の側辺の先端から胴部中位まで二次加工を施している。剥離はやはり裏面からである。8は0-8グリッドより出土。基部は二次加工によりバルブ等を除去し、先端、基部ともに尖る。右側辺にブランディングを施した黒耀石製のナイフ型石器である。9はR-7グリッド出土のナイフ型石器。石材は気泡の混じった黒耀石製である。先端部・基部は欠損。両側辺に細い剥離を施している。加工は裏面よりおこなっている。素材の縁辺部は僅かに残るだけである。10はR-7グリッド出土の黒耀石製のナイフ型石器。素材の剥片の打点部に二次加工を施し、バルブ等を除去。残りの縁辺部にブランディングを施している。11は残核で素材は不純物の混じった黒耀石である。表面の末端部と左側辺部に僅かに自然面が残る。一側辺には使用痕的剥離が認められる。

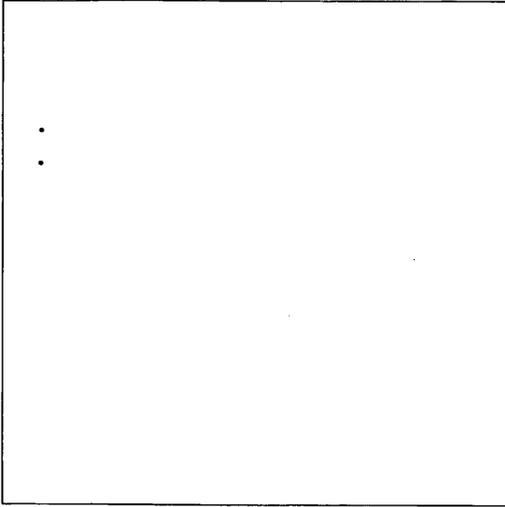


第94図 E地区グリッド設定図

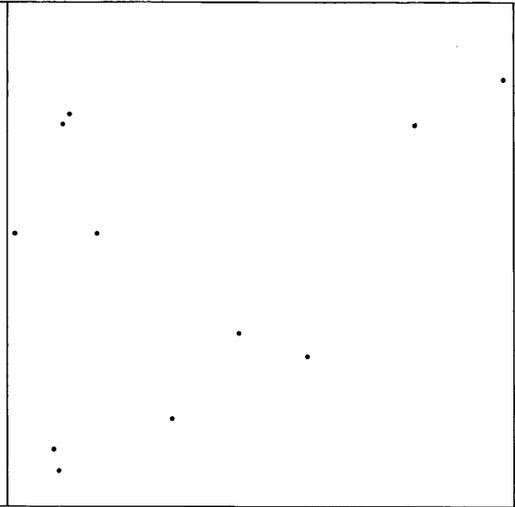


第95图 E地区旧石器·石片出土分布图

E10グリッド

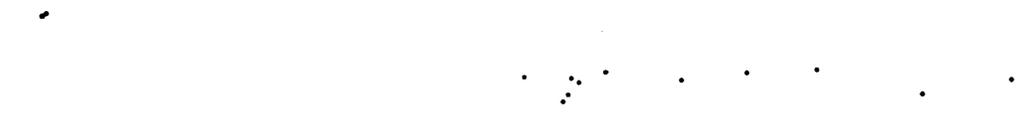


F11グリッド

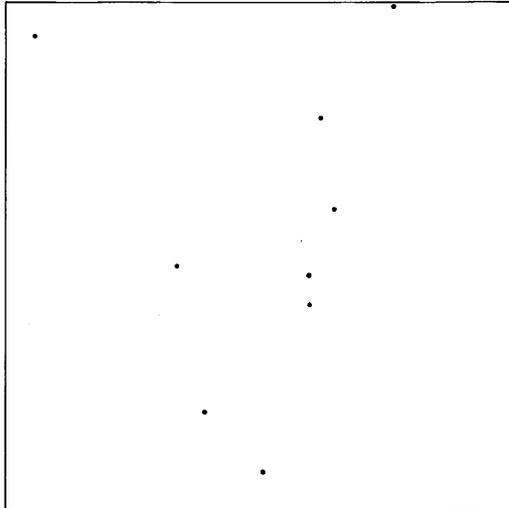


43・40

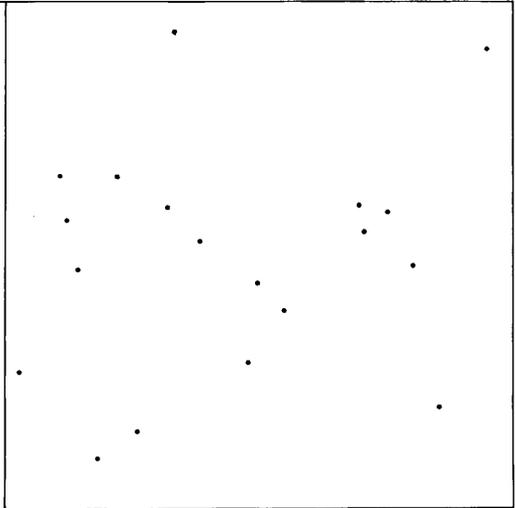
43・40



B13グリッド

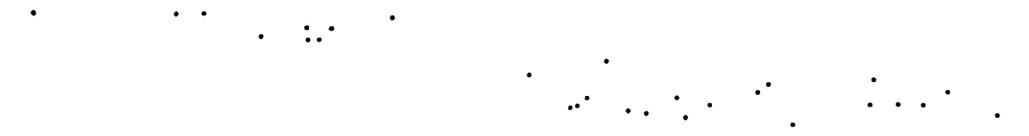


H13グリッド



43・40

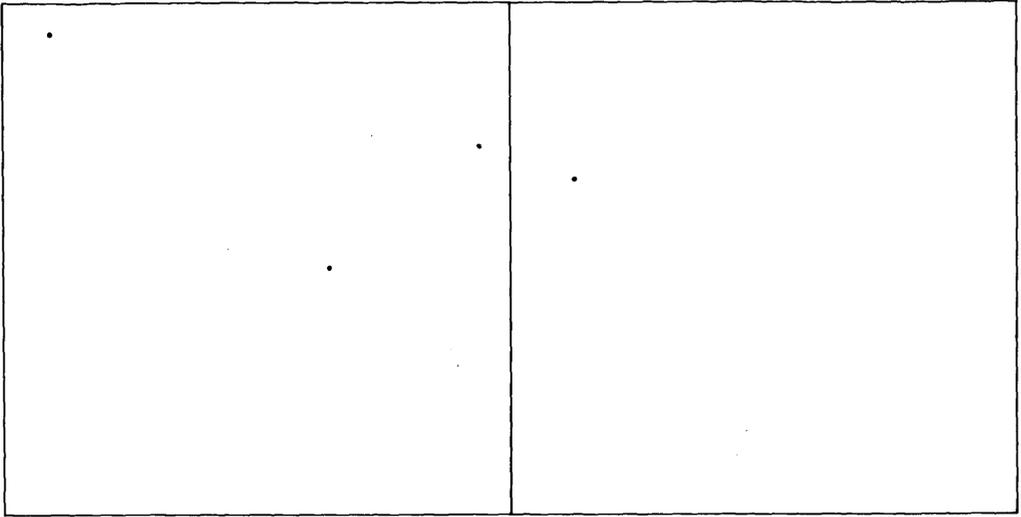
43・40



第96図 グリッド遺物分布図 (1/30)

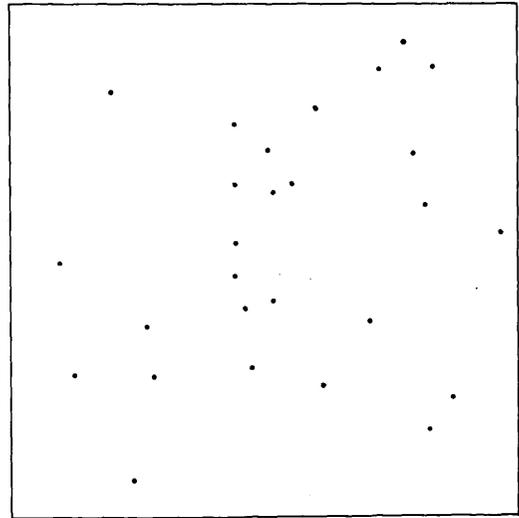
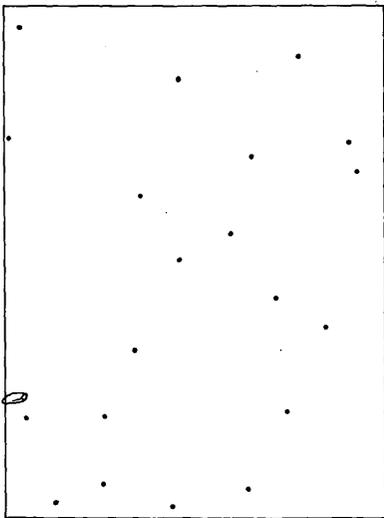
J13グリッド

O13グリッド



H14グリッド

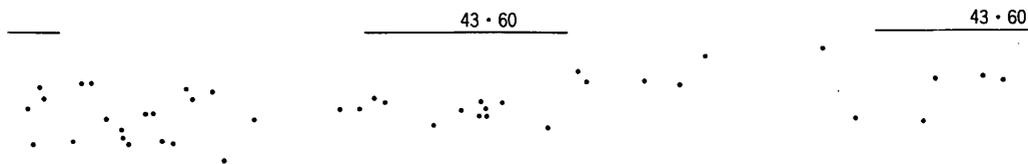
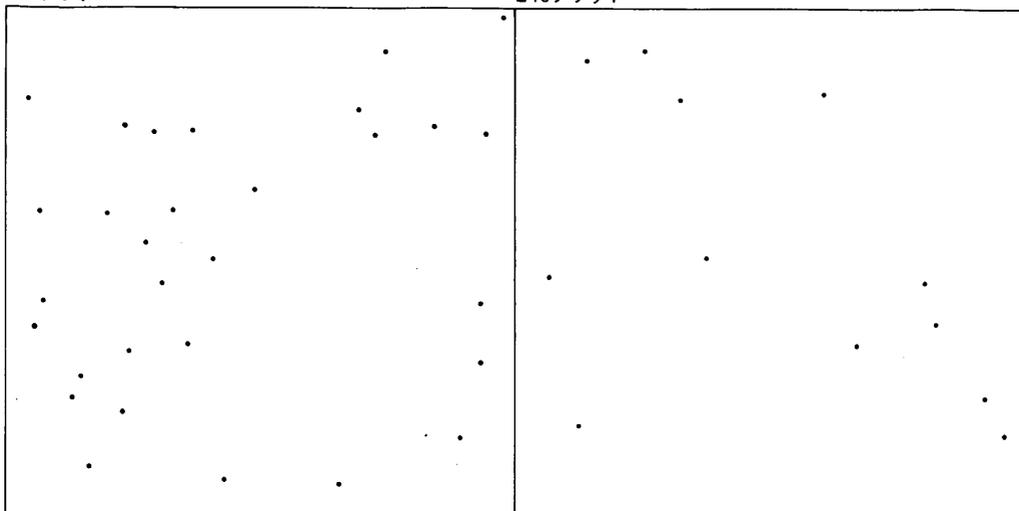
H15グリッド



第97図 グリッド遺物分布図 (1/30)

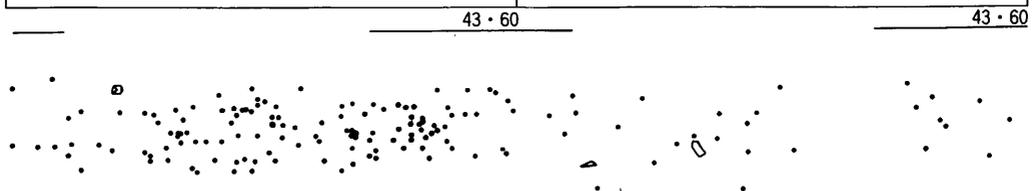
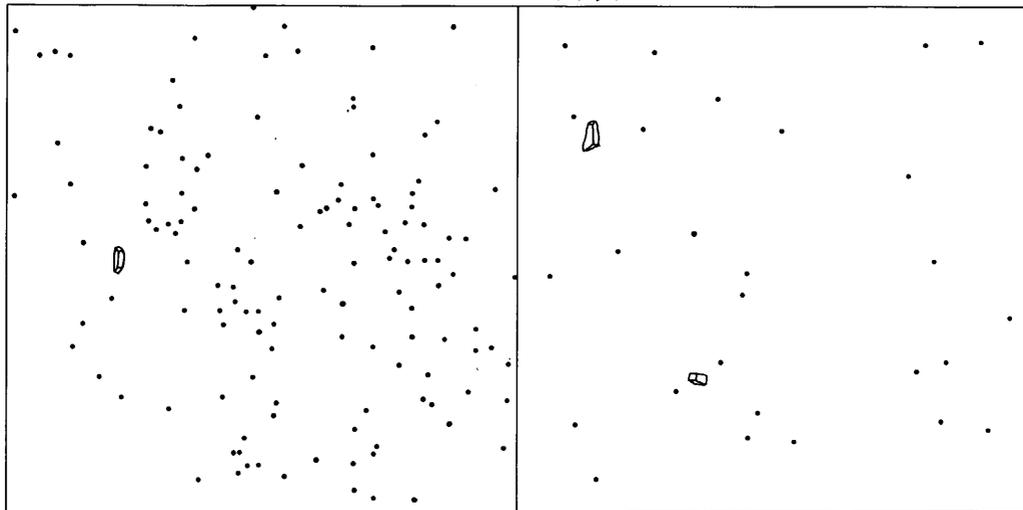
I15グリッド

E16グリッド

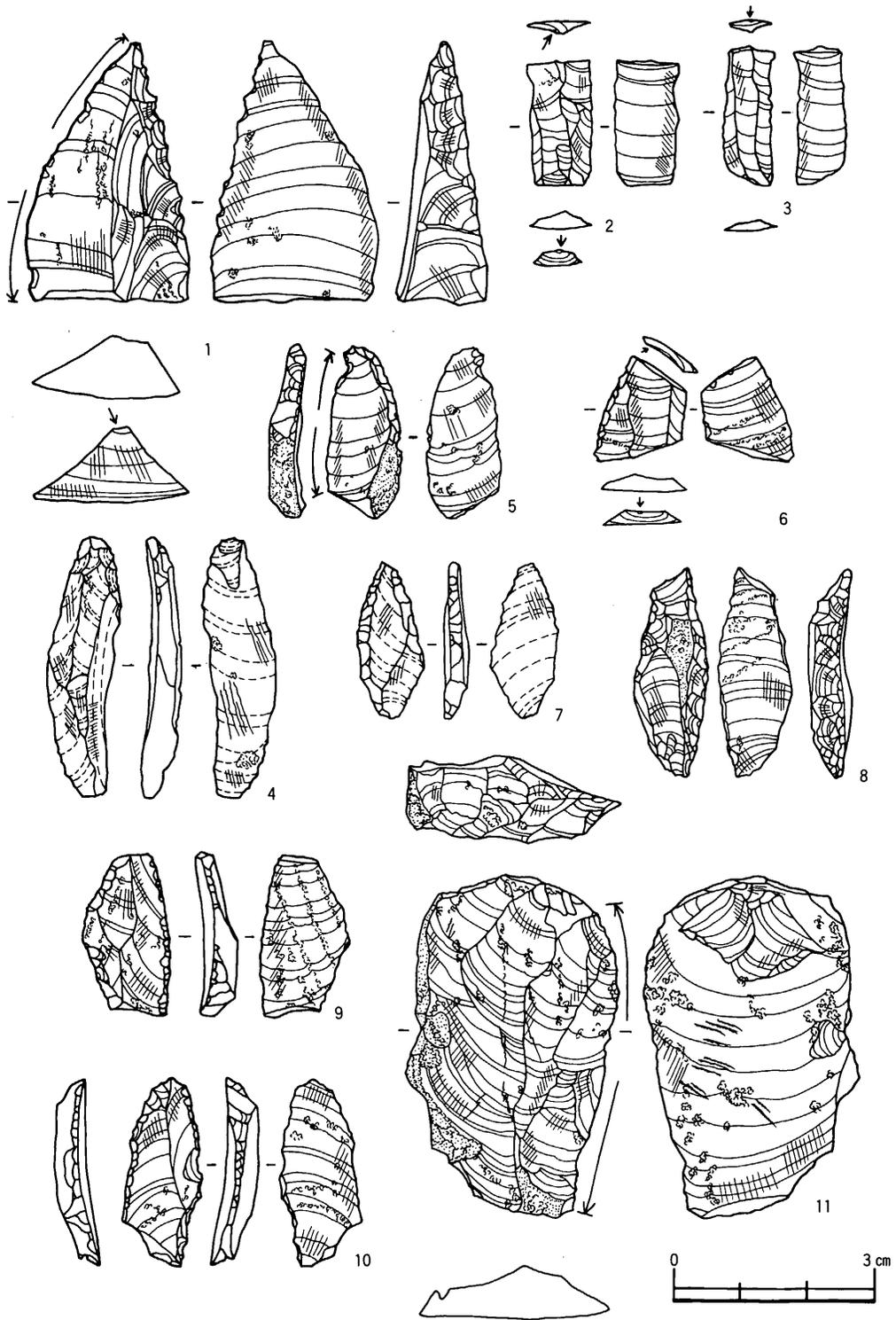


I16グリッド

G18グリッド

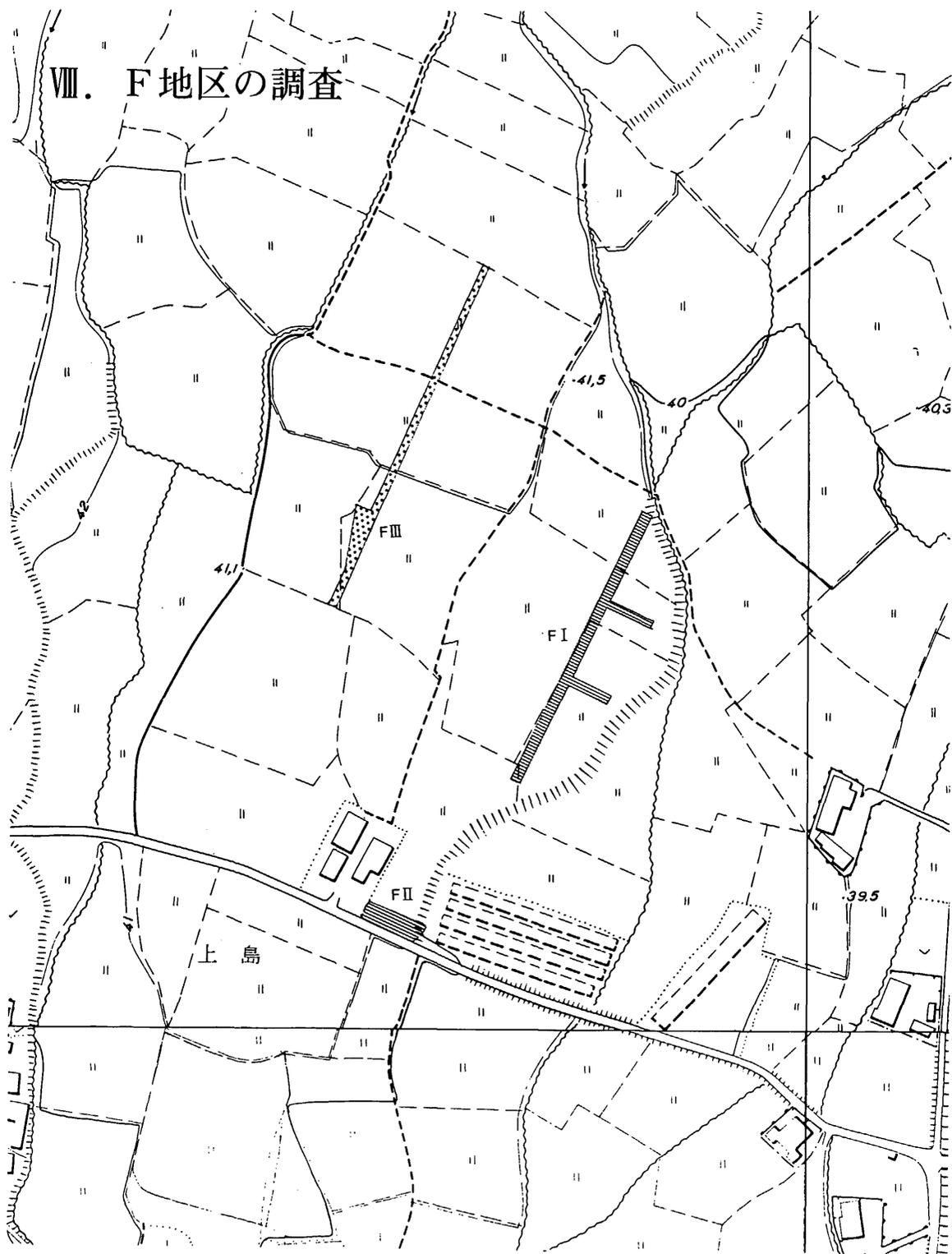


第98図 グリッド遺物分布図 (1/30)



第99图 E地区出土旧石器时代遗物实测图(1/1)

Ⅷ. F地区の調査



- 昭和57年度発掘調査地域
- 昭和58年度発掘調査地域

(縮尺1/25,000)

F地区の調査

1 調査の概要

F地区は圃場整備地域の南半にあり、D地区とG地区の間に位置する。

発掘調査は昭和57年度と同58年度の2ヶ年度にわたり3地点を調査し、便宜上、調査を実施した順に添ってFⅠ～Ⅲ区とした。

FⅠ区は昭和57年度の調査で、トレンチを設定し、約800m²を発掘調査した。南端には幅4.5m、深さ0.6mの溝が検出された。そのほかには若干の土壙とピットを検出した。

FⅡ区はFⅠ区の南に位置し、昭和57年度の調査である。約150m²を発掘調査し、北東から南西に走る溝1条と不整形土壙1基、および若干のピットを検出した。

FⅢ区はFⅠ区の西に位置し、約860m²を調査した。遺構は南端の三角地に集中し、中央部は窪地となっており遺構はみられない。さらに北側は氾濫源となっており礫が厚く堆積している。FⅢ区からは竪穴式住居跡13軒、溝2条、ピットを多数検出した。

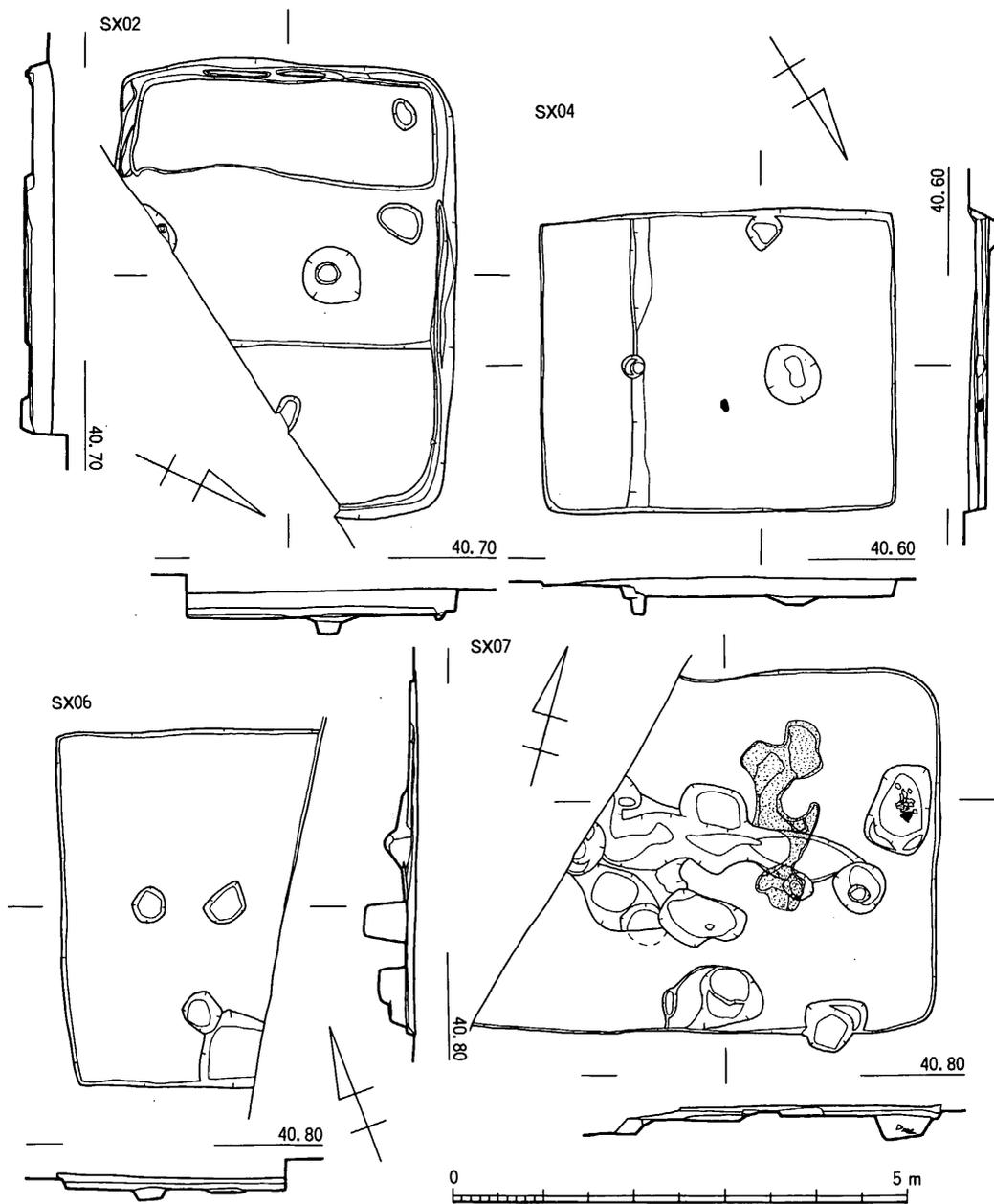
2 遺構

竪穴式住居跡

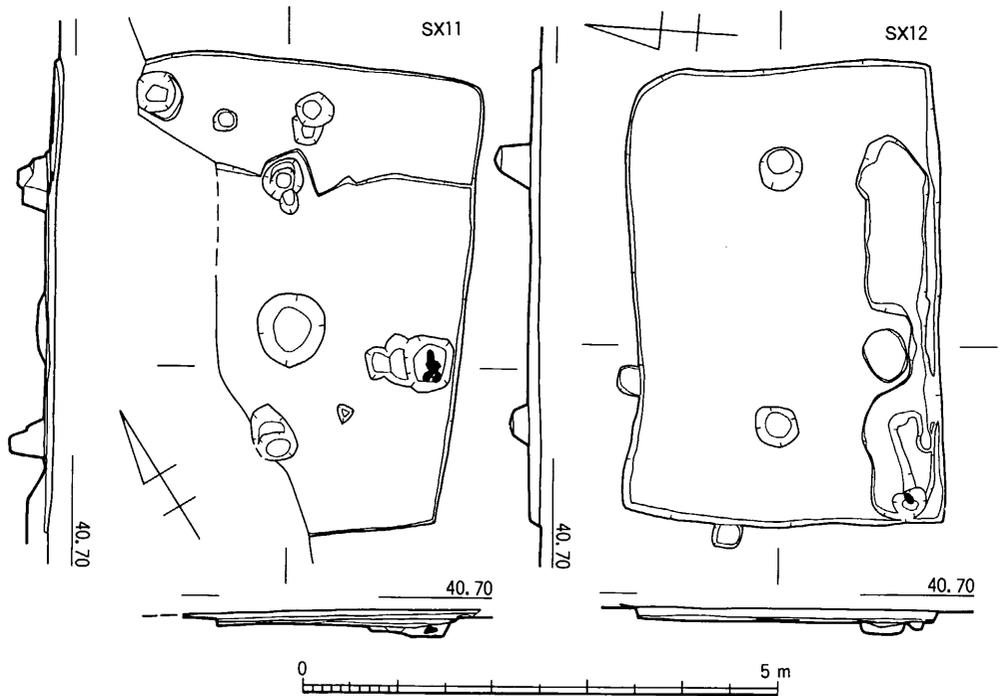
FⅢのみで検出された。調査対象地が狭いこともあって、完掘できたのはSX12のみである。ベッド状遺構をもつものは3軒で、うち2方にもつものが1軒、1方にもつものが2軒である。

掘立建物

FⅢで2軒確認された。いずれも1間×1間で、寸法はSB1が2.8×2.6m、SB2が1.7×1.6mである。



第100图 F地区 SX02·04·06·07实测图 (1/80)

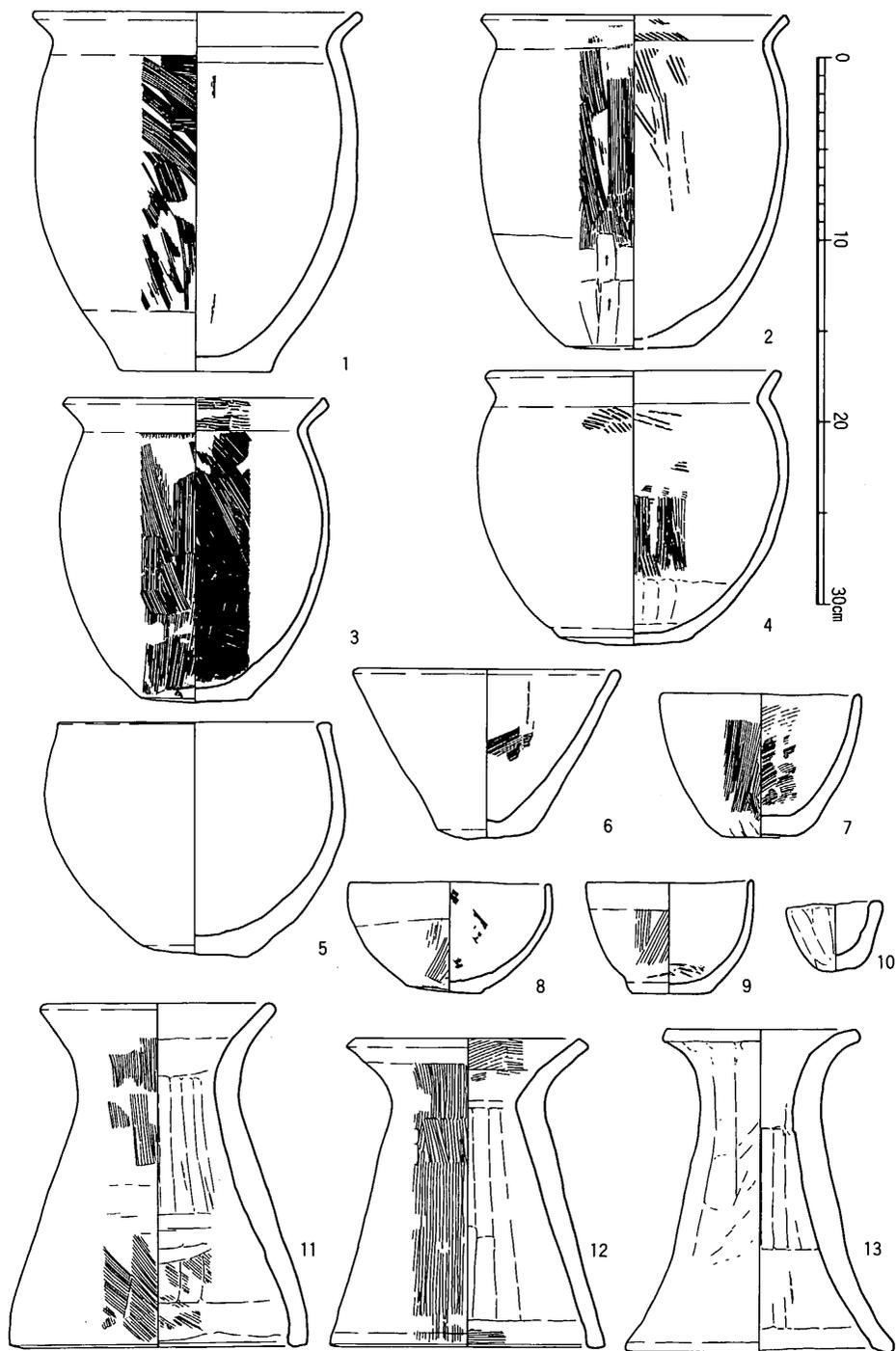


第101図 F地区 SX11・12実測図 (1/80)

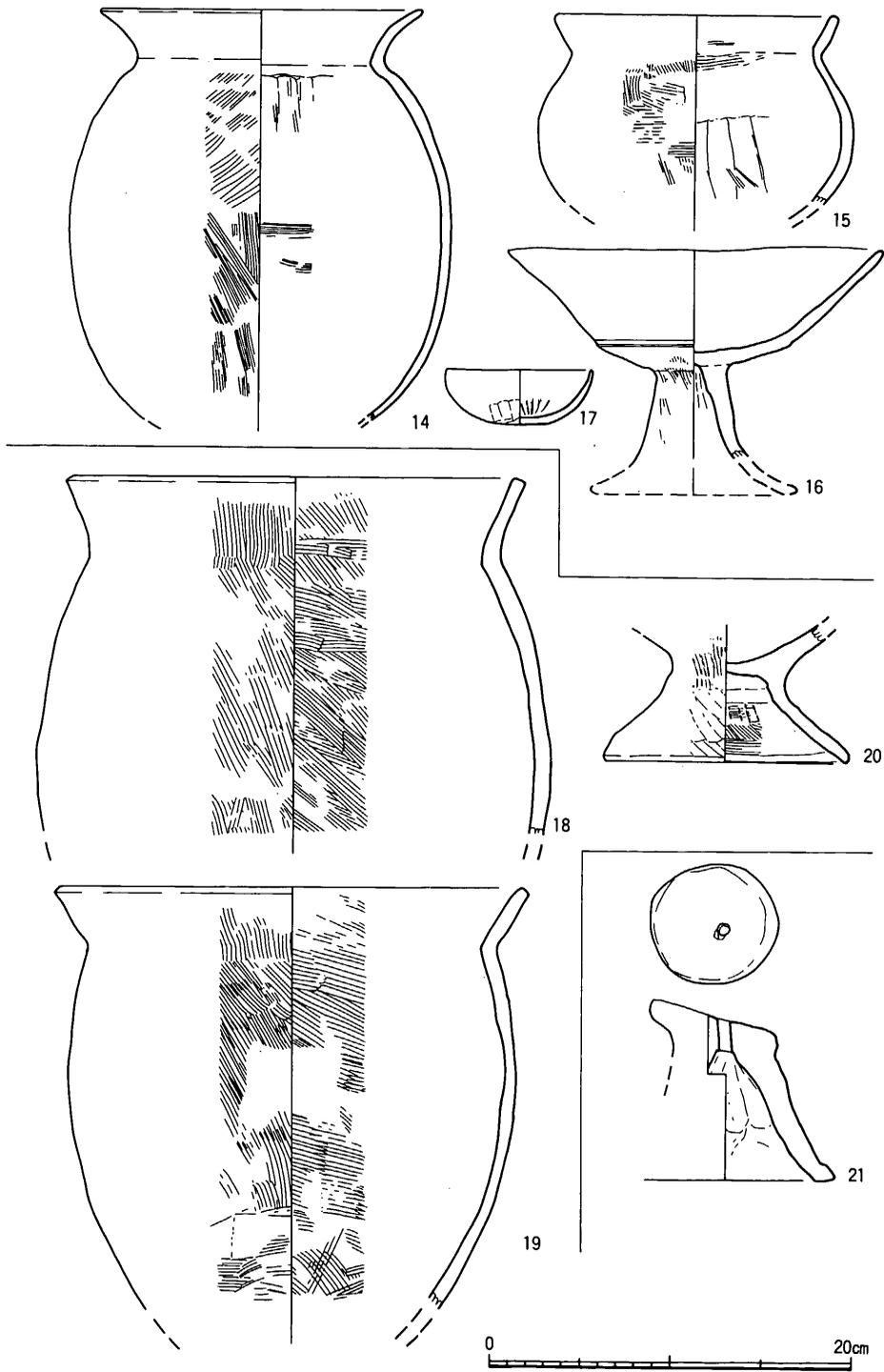
表10-1 F地区竪穴式住居跡要説

番号	挿図番号	図版番号	平面形	規模(m)	主柱穴	切り合い関係	備考
01		90	方形				西側コーナーのみ調査対象地内
02	100	90	方形	5.0×3.7			2方向にベッド。東・南壁、西・北壁の一部に側溝。北西のコーナーは調査区域外。
03			方形				東側コーナーのみ調査対象地内
04	100	91	方形	3.9×3.4	2		1方向にベッド。
05			円形				
06	100	91	方形	4.0×			52×38cm、深さ4～5cmの炉。
07	100	92	方形	3.9×		○←SX8・9・10	中央より東北寄りに焼土・炭化米が多く残る北西のコーナー、西壁は調査区域外。
08		92	方形			SX7←○←SX9・10	
09		92	方形			SX8・9←○	
10		92	方形			SX8←○	
11	101	92	方形	5.0×不明	2		1方向にベッド。中央に80×70cm、深さ7cmの炉。
12	101	93	方形		2		

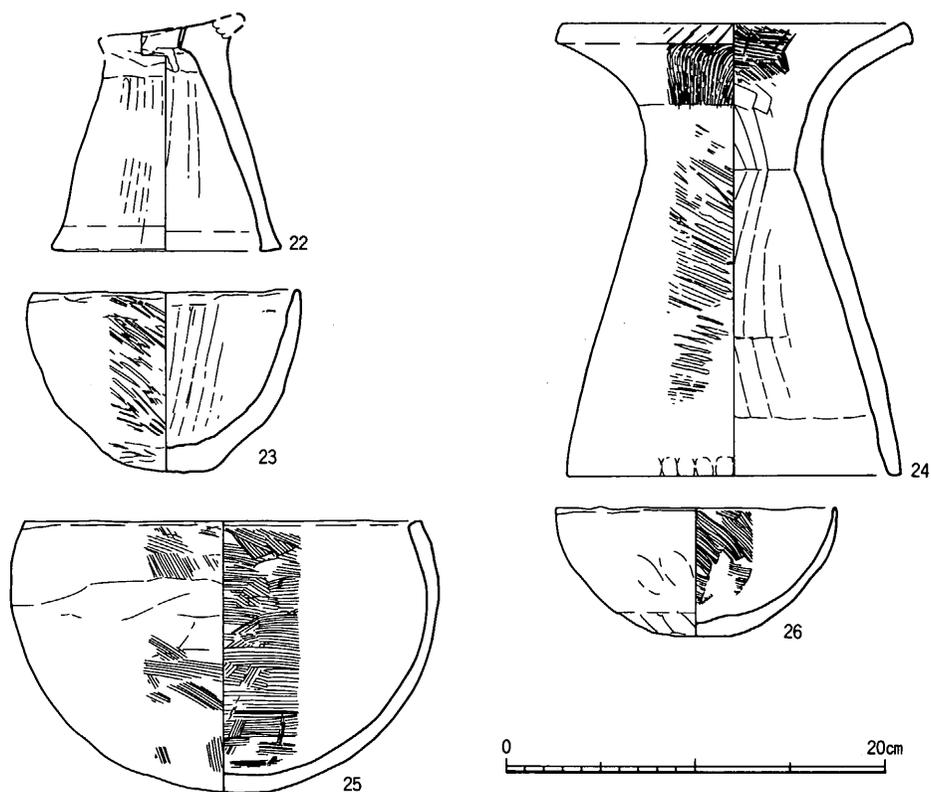
3 出土遺物



第102図 F地区Ⅱ SM01出土土器実測図(1/4)



第103图 F地区 SX02·04·12出土土器实测图(1/4)



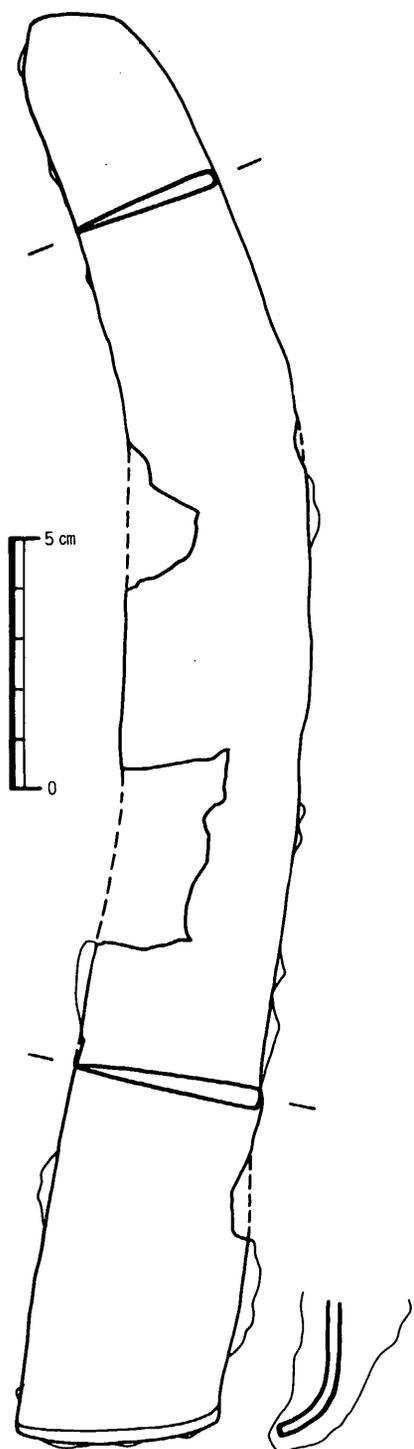
第104図 F地区 SM・ピット・表土出土土器実測図(1/4)

表11-1 F地区土器要説

番号	器種	法量(cm)	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
1	甕	口径 18 器高 19.8	黄茶褐色	1~5mm大の砂粒を多量に含む	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケメ 胴部下位 ナデ 底部 未調整	口頸部 ヨコナデ 胴部 ナデ	
2	甕	口径 16.9 器高 18.3	淡茶白色 ~ 黄茶色	1~3mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ 胴部下位 ヘラケズリ 底部 未調整	口縁部 ハケメ 胴部上半部 ハケメ 胴部下半部 ナデ	
3	甕	口径 14.6 器高 16.8	淡茶灰色	1~3mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケメ 底部 ヘラケズリ(ナデ状)	口縁部 ハケメ 胴部 ハケメ 底部 ハケメ	
4	甕	口径 16.1 器高 15	明黄茶色	1~3mm大の砂粒を多量に含む	口縁部 ヨコナデ 胴部上位 ハケメ 胴部 ヘラケズリ(ナデ状) 底部 未調整	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケメ後ヘラケズリ(ナデ状) 底部 ナデ、指頭痕	
5	鉢	口径 15 器高 12.7	淡明茶褐色	1~2mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 磨減 底部 未調整	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	
6	鉢	口径 14.6 器高 9.2	明茶褐色	1~3mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部上位 ハケメ 体部中位下 ナデ 底部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部上位 ヨコナデ 体部中位下 ハケメ 底部 ナデ	

表11-2 F地区出土土器要説

7	鉢	口径 11 器高 7.9	薄茶褐色	2mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ 底部 未調整	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ 底部 ナデ	
8	鉢	口径 10.9 器高 6.1	薄茶褐色	2～3mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ 底部 未調整	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ、ハケメ 底部 ナデ	
9	鉢	口径 9.2 器高 6	薄茶褐色	1～2mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ 体部下位 ヘラケズリ 底部 未調整	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ 底部 ヘラケズリ	
10	手づくね	口径 5.2 器高 3.8	暗褐色	1～2mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ナデ 体部 ナデ	口縁部 ナデ 体部 ナデ	
11	器台	受部径12.9 脚裾径16.2 器高 13.9	淡茶灰色	1mm大の砂粒を若干含む	受部口縁部 ヨコナデ 受部 ハケメ 胴部 ハケメ 脚裾部 ハケメ	受部口縁部 ヨコナデ 受部 ナデ 胴部 ナデ 脚裾部 ハケメ	
12	器台	受部径13.2 脚裾径15 器高 16.9	淡茶白色	微砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 受部 ハケメ 胴部 ハケメ 脚裾部 ハケメ	口縁部 ハケメ 受部 ナデ 胴部 ナデ 脚裾部 ナデ(一部ハケメ)	
13	器台	受部径10.8 脚裾径14.6 器高 17.7	灰茶色 ～ 明茶褐色	1～2mm大の砂粒を若干含む	口縁部 指頭痕 受部 雑なナデ 胴部 雑なナデ 脚裾部 雑なナデ	口縁部 ヨコナデ 受部 ヨコナデ 胴部 ナデ 脚裾部 ナデ	
14	壺	口径 17.8	明茶褐色	2～4mm大の砂粒を多量に含む	口頸部 ヨコナデ 胴部上半部 タタキ 胴部下半部 ハケメ	口頸部 磨滅 胴部 磨滅 (胴部中位 ハケメ残)	
15	壺	口径 15.7	淡赤褐色	1～2mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケメ(磨滅)	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部上位 ハケメ後ヨコナデ 胴部中位下 ヘラケズリ後 雑なナデ	
16	高坏	口径 20.8	茶褐色	2～3mm大の砂粒を多く含む	坏 口縁部 磨滅 体部 磨滅 底部 ハケメ 脚筒部 磨滅(ハケメ残)	坏部 磨滅 筒部 ナデ状	
17	鉢	口径 8.1 器高 3	茶褐色	1～3mm大の砂粒を含む	口縁部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部上半部 ヨコナデ 体部下半部 ヘラケズリ	
18	壺	口径 25.4	暗褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 頸部 ハケメ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 頸部 ハケメ	外面 胴部にスス付着
19	壺	口径 26	暗褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 頸部 ハケメ 胴部下位 ハケメ後ナデ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ	外面 口縁部胴部上位にスス付着
20	脚台	脚裾径13.6	暗褐色	微砂粒を多量に含む	底部 ハケメ 脚部 ハケメ	底部 ナデ 脚部 ハケメ 脚部底 ナデ	
21	支脚		黄褐色	0.5～1mm大の砂粒を少し含む	受部 磨滅 脚部 タタキ	脚部 ナデ	
22	支脚	脚裾径12.1	明茶褐色	2～3mm大の砂粒をやや多く含む	脚部 磨滅(ヘラケズリ) 脚部底 ナデ	脚部 ナデ	
23	鉢	口径 14.2 器高 9.5	薄暗茶褐色	1～2mm大の砂粒を多く含む	口唇部 ナデ 体部 タタキ 底部 未調整	口縁部 ナデ 体部 ナデ	
24	器台	受部径18.8 脚裾径17.6 器高 24	明茶褐色	砂粒を多く含む	受部 ハケメ 受部下位 ナデ 胴部 タタキ後雑なナデ 脚裾部 ナデ(指頭痕残)	受部上半部 タタキ 受部下半部 ナデ 胴部 ナデ 脚裾部 ナデ	外面 口縁部にヘラ痕による文様
25	鉢	口径 21 器高 14.4	薄茶褐色	微砂粒を若干含む	口縁部 ハケメ後ヘラケズリ 体部上位 ハケメ後ヘラケズリ 体部中位下 ハケメ	全 面 ハケメ	
26	鉢	口径 9 器高 6.2	茶褐色	砂粒を若干含む	口縁部 雑なナデ 体部 雑なナデ 底部 未調整	口唇部 ナデ 体部 ハケメ (ヘラ当り痕残)	



第105図 F地区出土鉄器実測図(2/3)

鉄器 (第105図)

溝Ⅰ出土の大形の鎌である。刃部の一部は欠失しているが、ほぼ原形の全容を知ることができる。鋒部は丸く収め、刃部はゆるやかに弯曲する。柄着装部の折り返しは浅く、ゆるやかで全長28cm、刃部中央の幅3.8cm、背の厚さ5mmを測る。

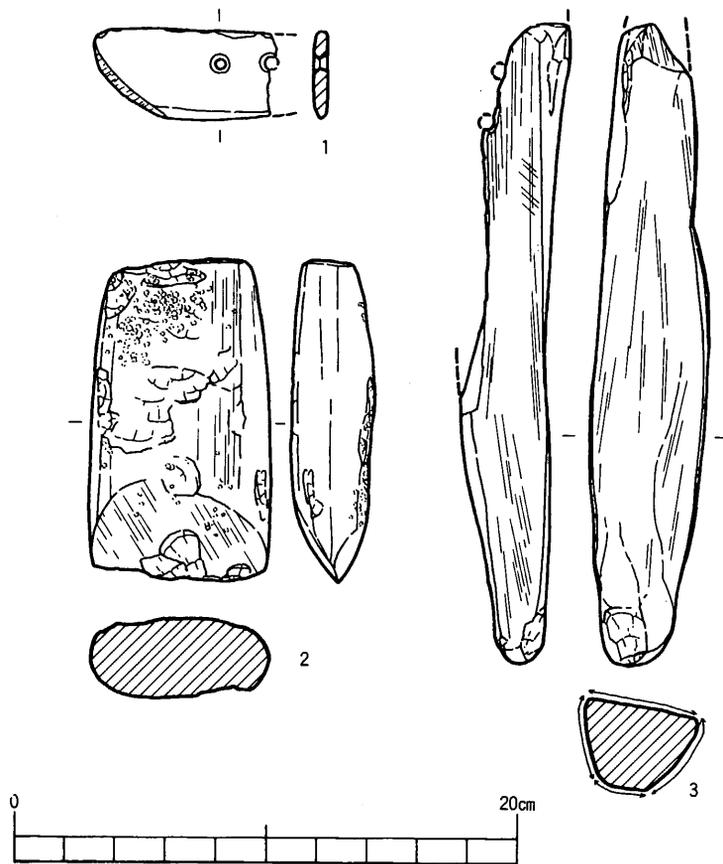
石器 (第106図)

1は石庖丁で、Ⅲ地点のSX11から出土した。厚さは0.6cm、幅は3.6cmである。背部は直線で端部がほぼ平面をなす。身部は中原部が最も厚いが全体的に板状をなす。孔は2孔とも両面からの回転穿孔である。刃部は中央部ではやや不均等であるが両面から研削するが、側縁部では片面からのみ研削する。石材は緑泥片岩かと考えられる。

2は蛤刃石斧で、Ⅱ地点の溝Ⅰの底部より出土した。刃部先端が使用により部分的に小さく欠損するが、ほぼ完形品で長さ12.8cm・幅7.2cm・厚さ3.2cmと、幅に比して長さが短く、厚さと幅の比が0.44と薄手である。平面形態は頭端部が直線的で、胴身部・刃部にかけて幅がほぼ一定である。刃部はわずかに外湾するがほぼ直線をなす。断面形態は両主要面が平坦な扁平な形態をなす。表面の成形は敲打を施したのち、研磨調整によって仕上げている。刃部は両面からほぼ均等に幅広く研削し、やや薄手である。表面の保存状態は比較的良好で、石材は玄武岩である。

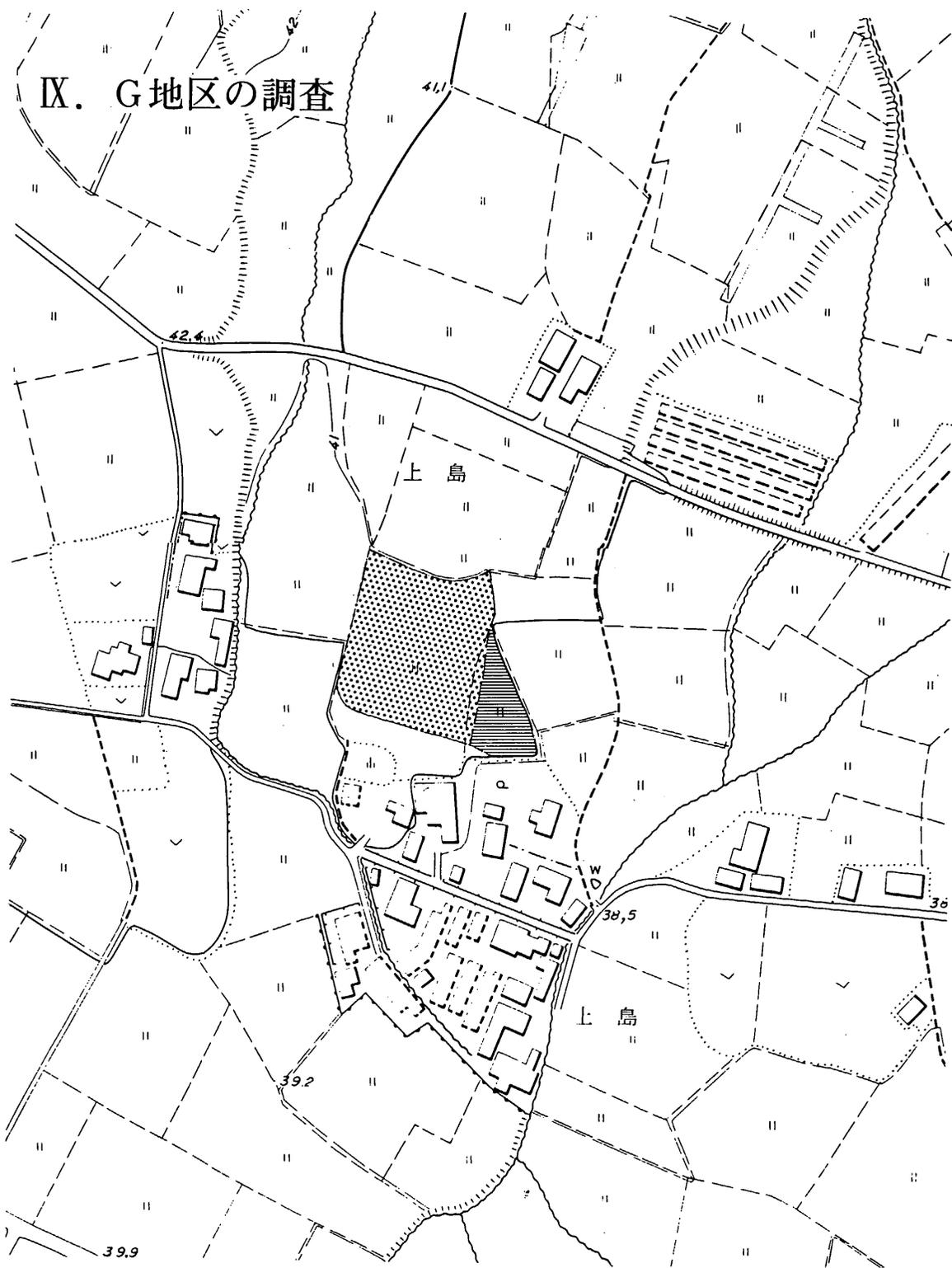
3は砥石で、Ⅱ地点の溝Ⅰの底部より出土した。一端部から中央部にかけてやや折損するが、現存全長25.4cm・幅4.6cm・厚さ3.5cmをはかる大形品である。形態は柱状をなし、砥面は基本的に四面有する。最も幅の広い主要な砥面は中央部にかけてわずかに凹む。一端近くには主要な砥面に並行して、両側面からの回転技法によって二孔を穿つ。

この孔は紐を通すためのものと考えられ、この砥石は携帯用の提砥かと推定される。石材は暗灰色細粒砂岩である。



第106図 F地区出土石器実測図(2/3)

Ⅸ. G地区の調査



- 昭和56年度発掘調査地域
- 昭和57年度発掘調査地域

(縮尺1/2,500)

G地区の調査

1 調査の概要

G地区は圃場整備地域の南側中央に位置する。

発掘調査は昭和56年度、同57年度の2ヶ年度にわたり、切り土が計画されている大字牛島の集落の北側約4,000㎡を発掘調査した。昭和56年度は切土予定部分の東側約700㎡の発掘調査と昭和57年度発掘調査予定地域の一部約1800㎡の表土を剝土すると共に、残りの部分についてもトレンチを設定し、遺構の密度を確認した。昭和57年度は前年度に引き続き、残りの切土部分を発掘調査した。この結果、竪穴式住居跡71軒、貯蔵穴1基、井戸1基、円形周溝1基、溝5条、集石遺構3基、その他土壌、ピットを多数確認した。

2 遺構

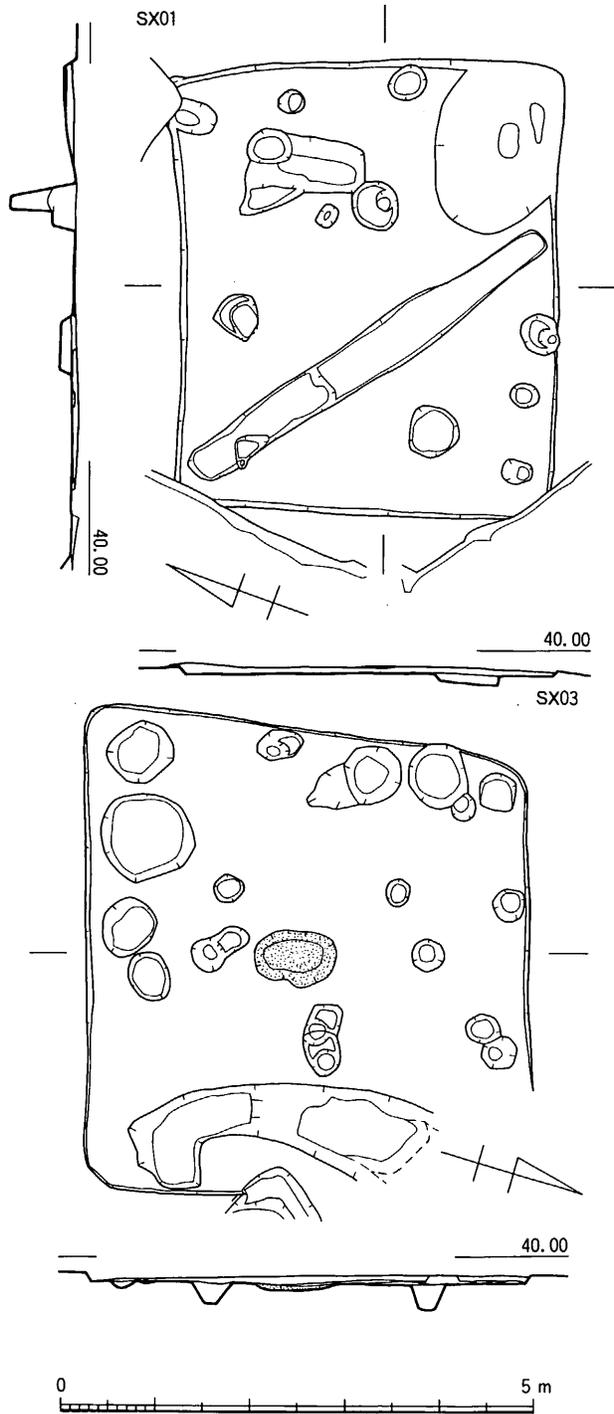
竪穴式住居跡 (SX)

71軒の住居跡のうち方形、または長方形プランを呈すものは69軒で、残りの2軒が円形プランを呈す。方形プランを呈す住居跡のうち24軒はベッド状遺構（内側に短い張り出しをもつものも含む）をもち、さらにそのうちの6軒は土を盛って作ったもので、残りは削り出しによるものである。前者のベッド状遺構はさらに2タイプに分けることができ、一つはベッド状遺構を作る部分の前部の地山を残し、壁側のみを掘り窪め、そこに土を入れるもので（SX17・35・53・54北側・66）。もう一つはベッド状遺構全体を新しい土で作るものである（SX60・61）。

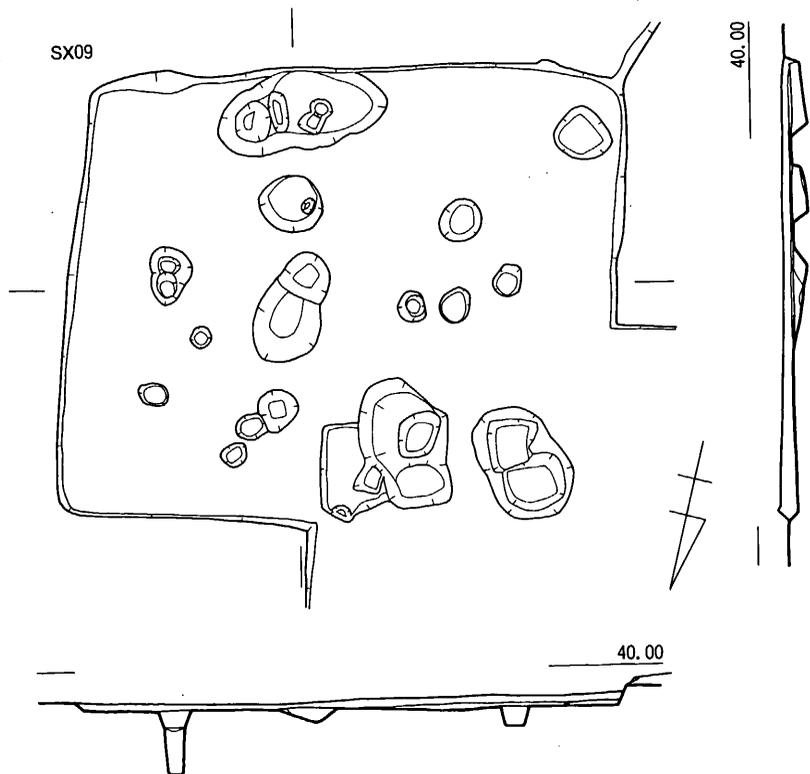
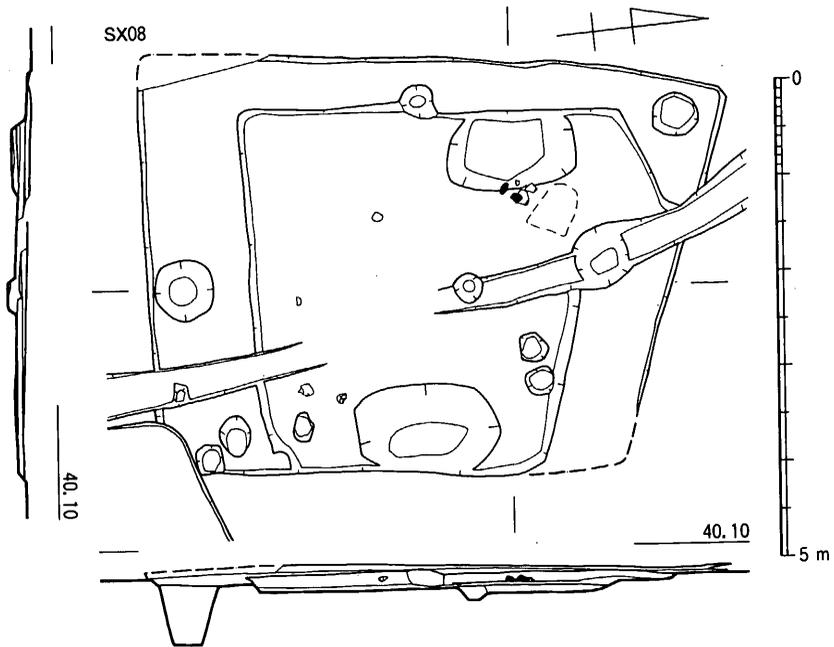
円形プランを呈す住居跡はいずれも残りが極めて悪く、明瞭さを欠く。SX74は北半の壁がすでに失われているが、壁の回りに柱穴がめぐり、その中に4本の支柱穴がある。SX19は壁もほとんど残っておらず、遺構検出の際にやっとプランを確認できた程度である。

貯蔵穴 (SC)

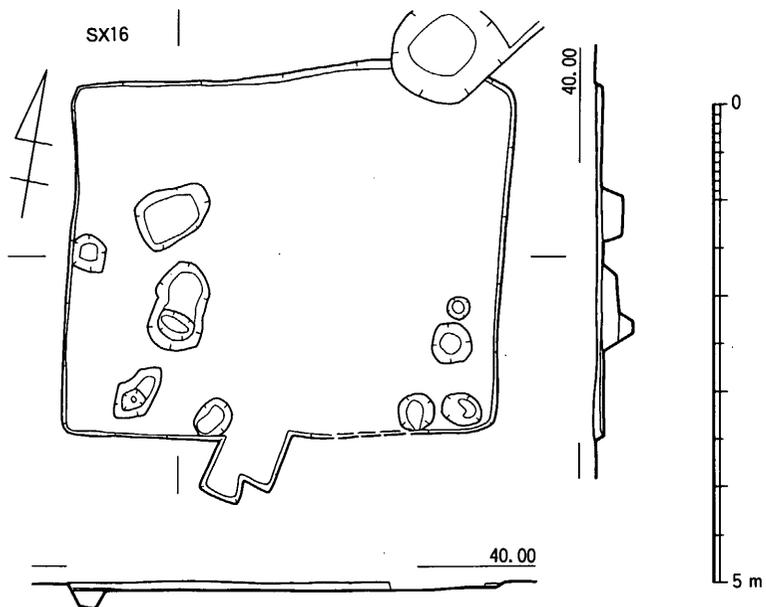
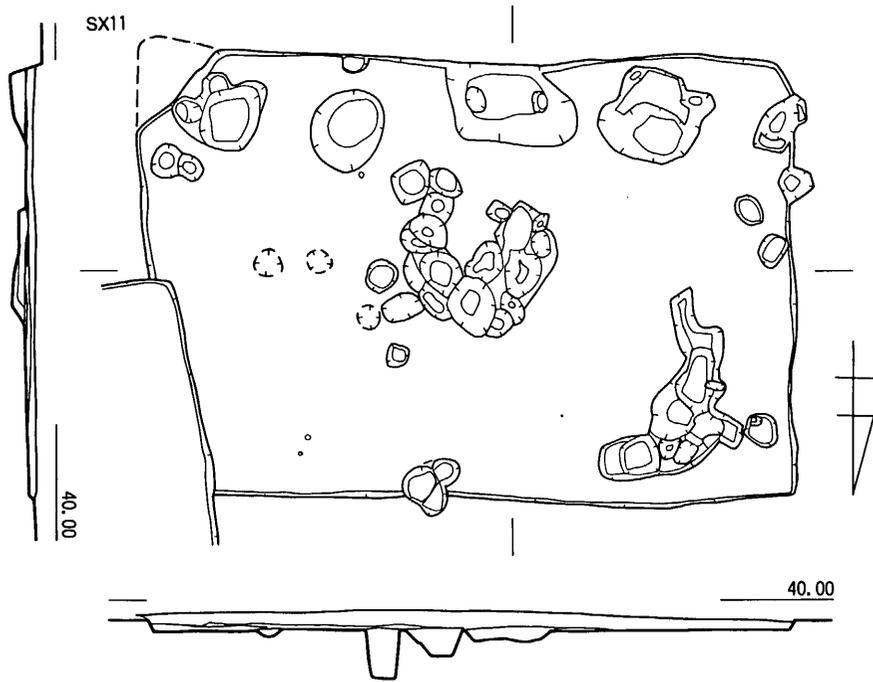
調査区南西隅で検出された。SC1は径2.7～3.1mを測り、深さ47～77cmほどが残る。



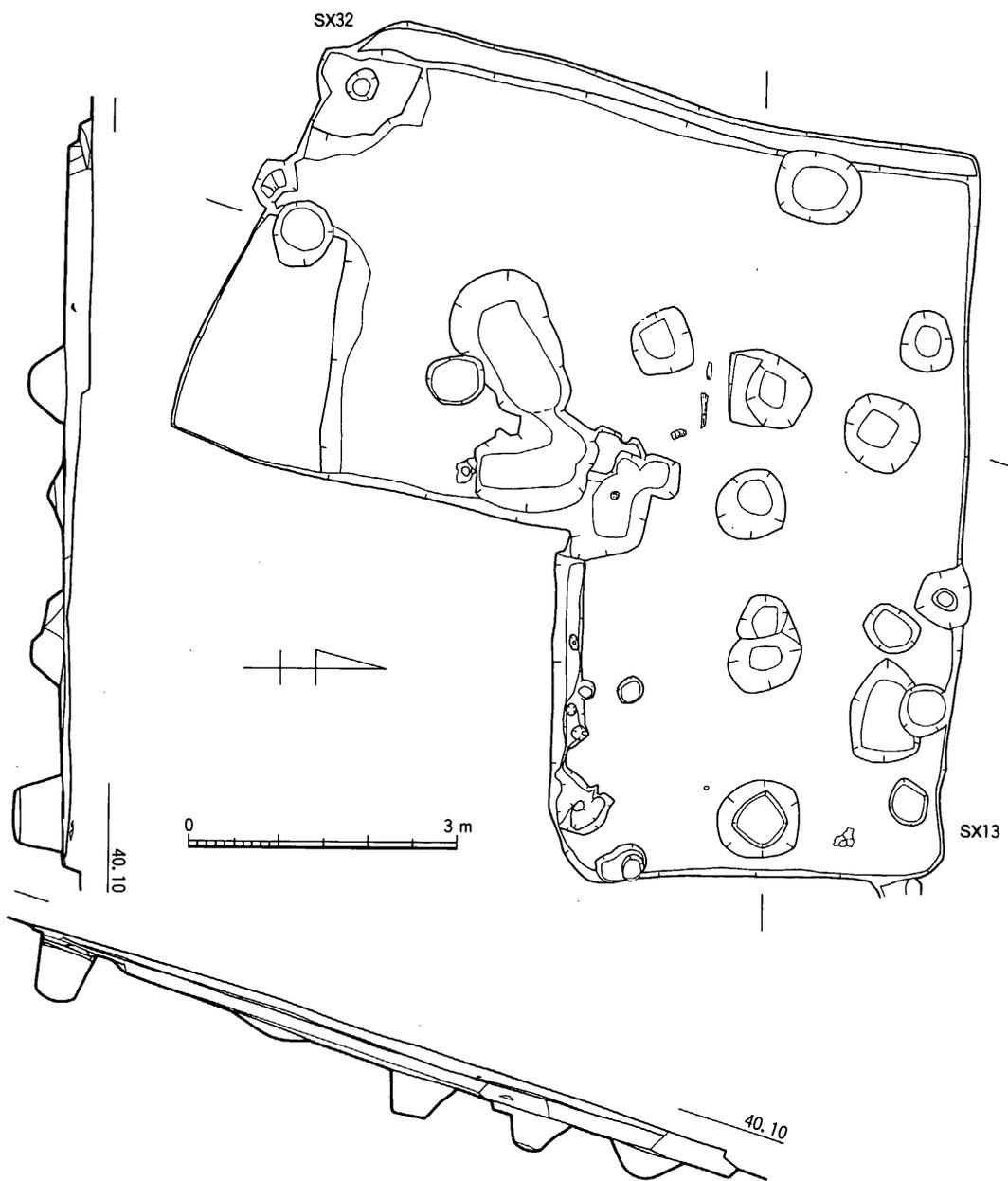
第107图 G地区 SX01・03实测图 (1/80)



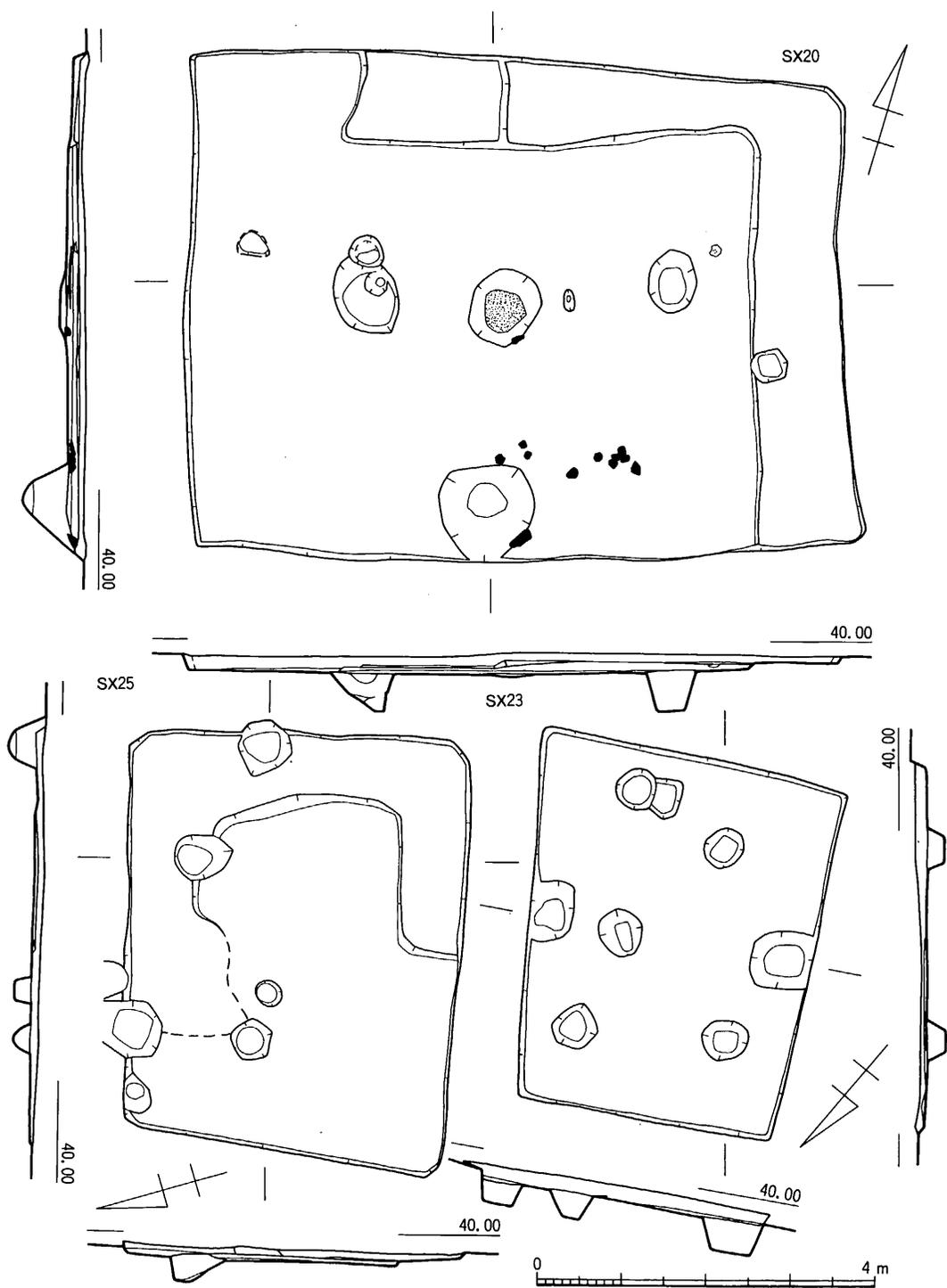
第108图 G地区 SX08·09实测图 (1/80)



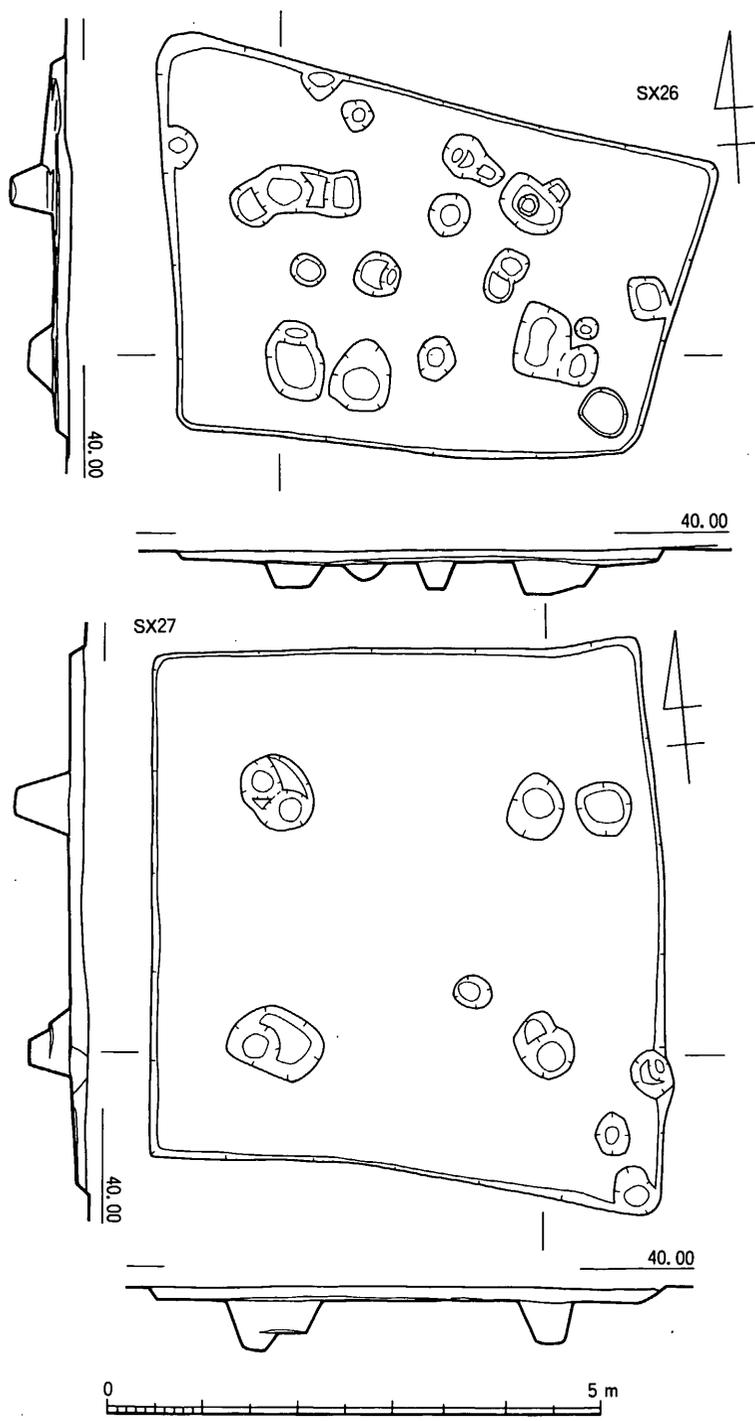
第109图 G地区 SX11・16实测图 (1/80)



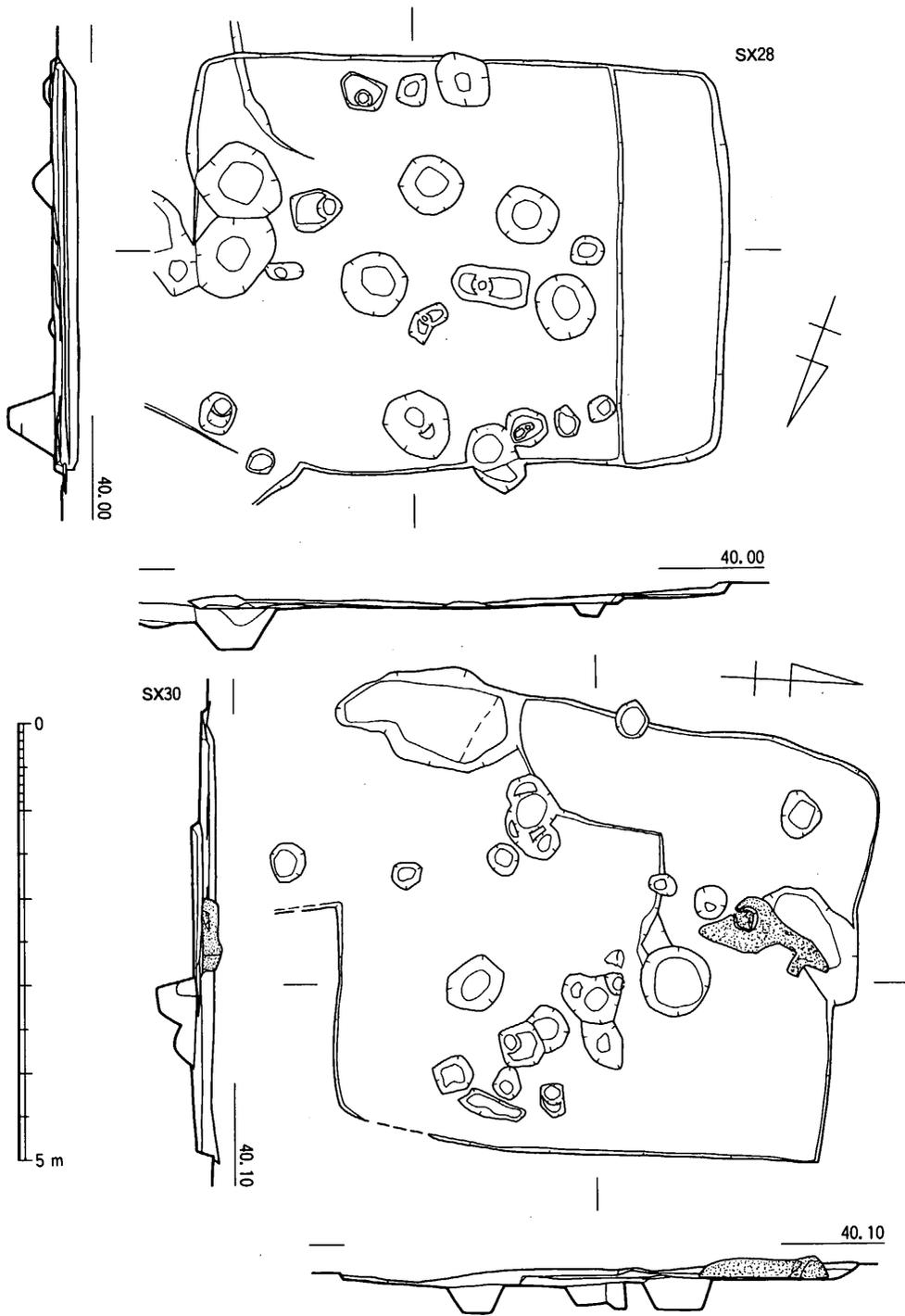
第110図 G地区 SX13・32実測図 (1/80)



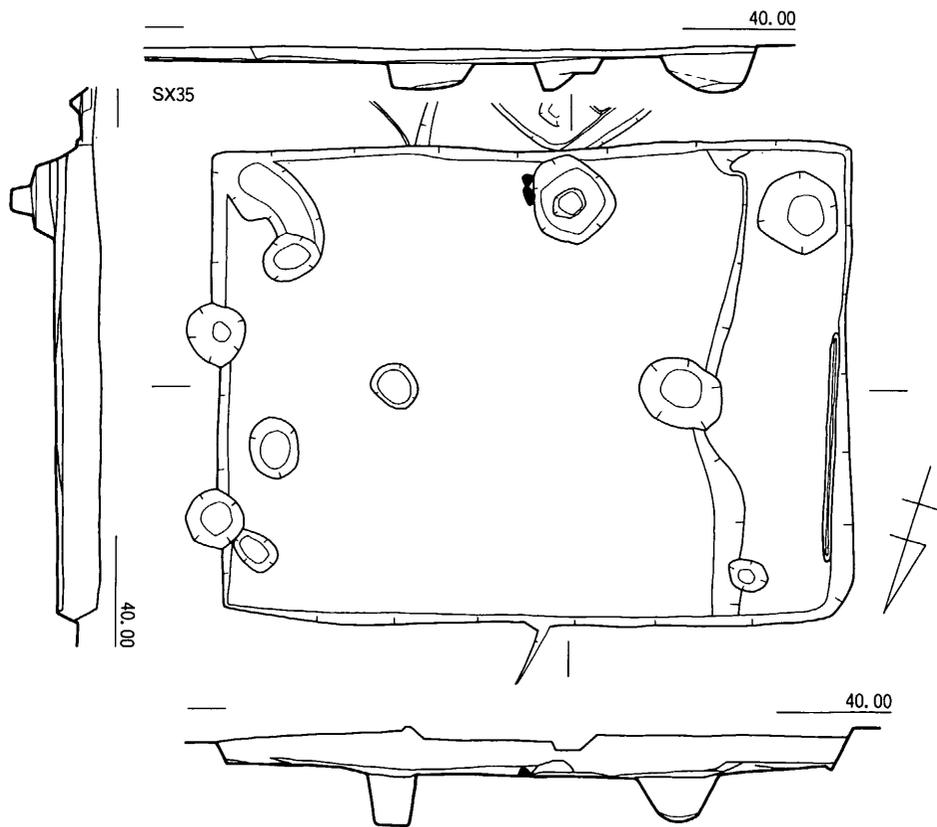
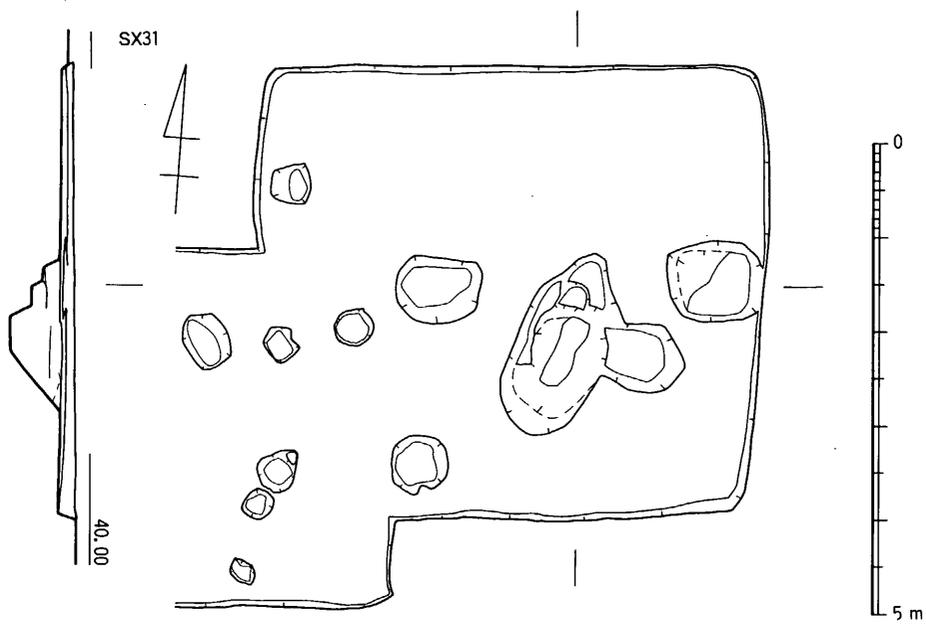
第111図 G地区 SX20・23・25実測図 (1/80)



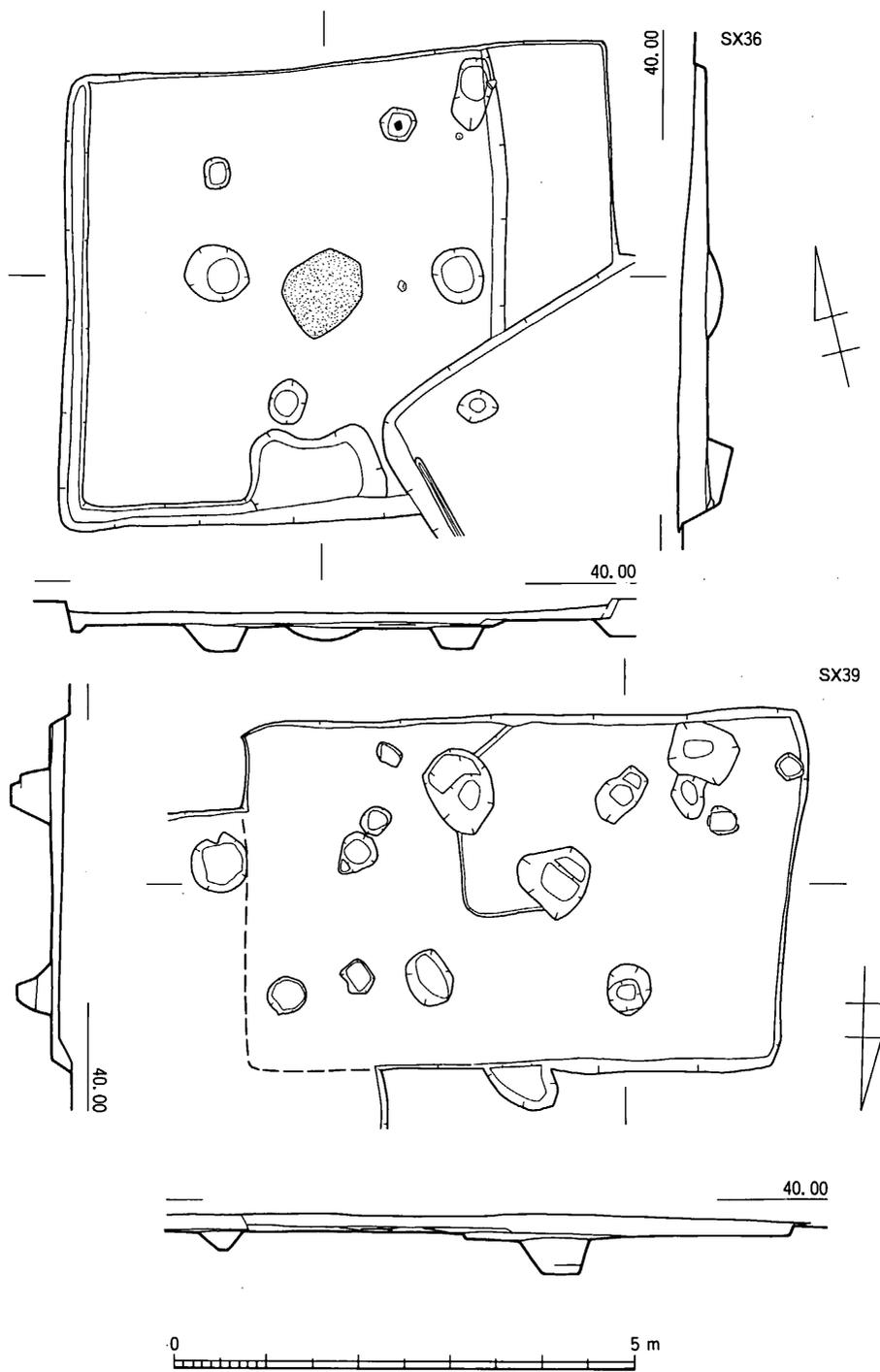
第112図 G地区 SX26・27実測図 (1/80)



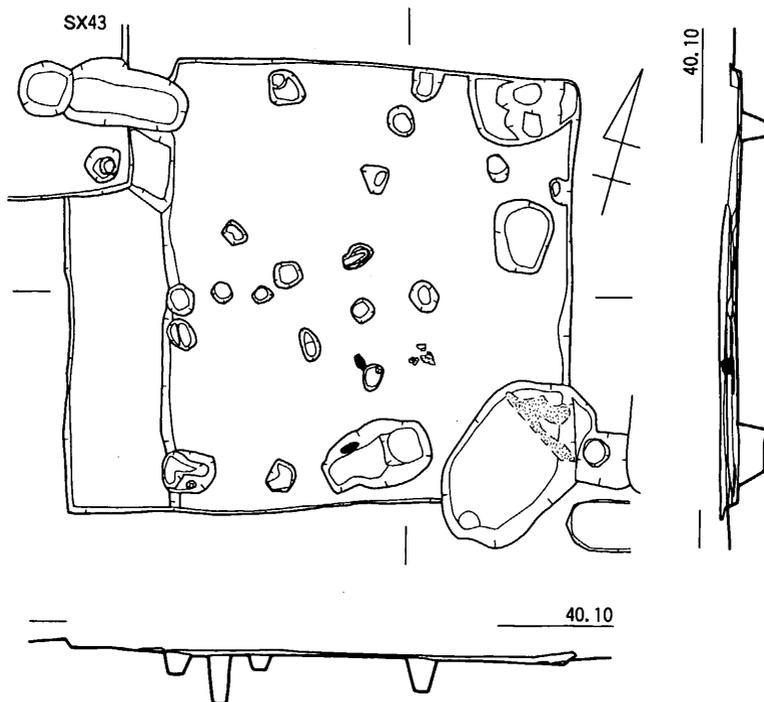
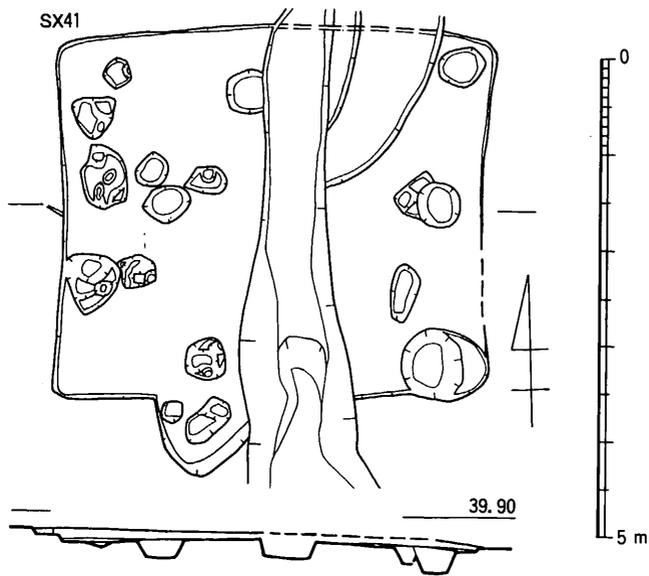
第113图 G地区 SX28·30实测图 (1/80)



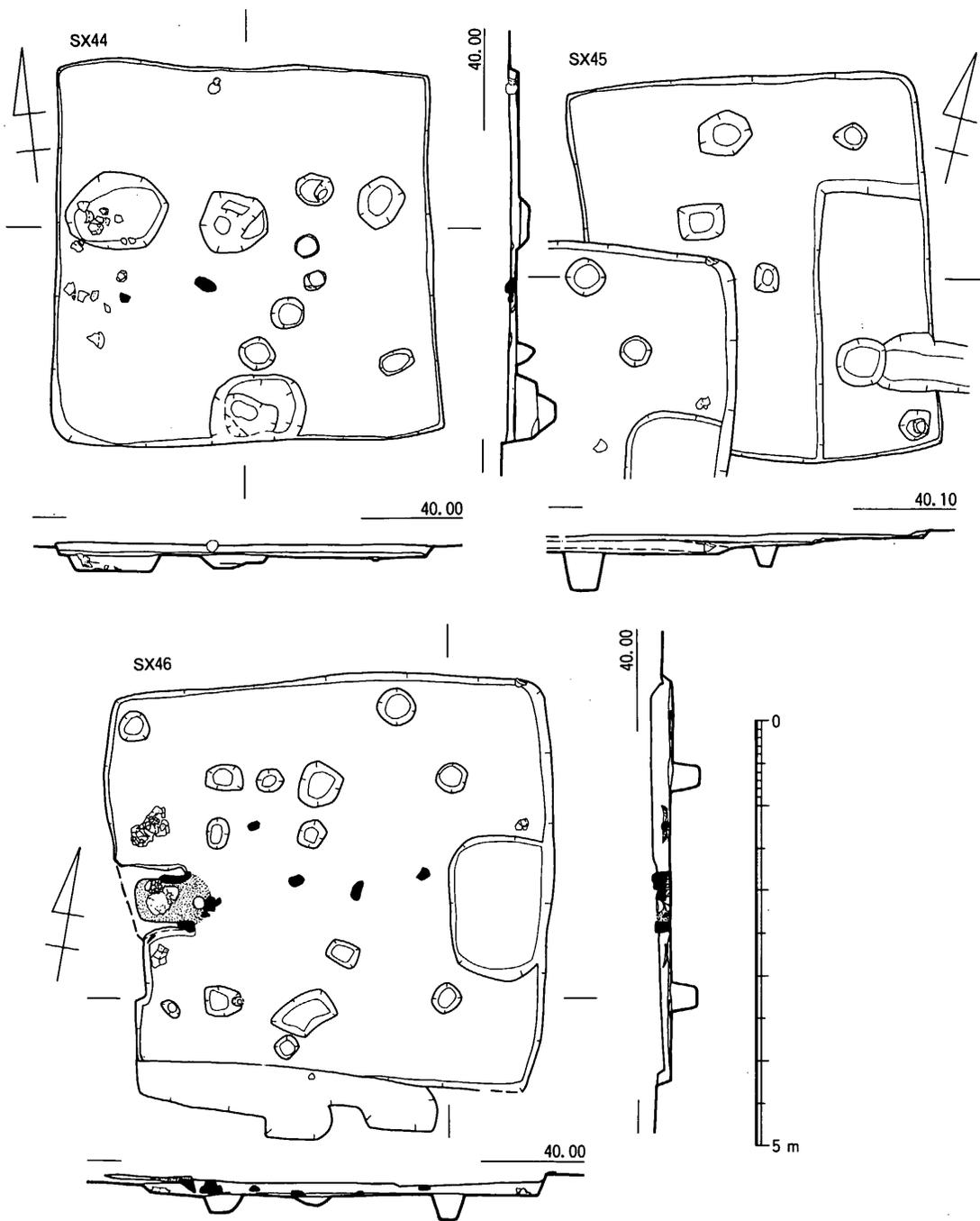
第114図 G地区 SX31・35実測図 (1/80)



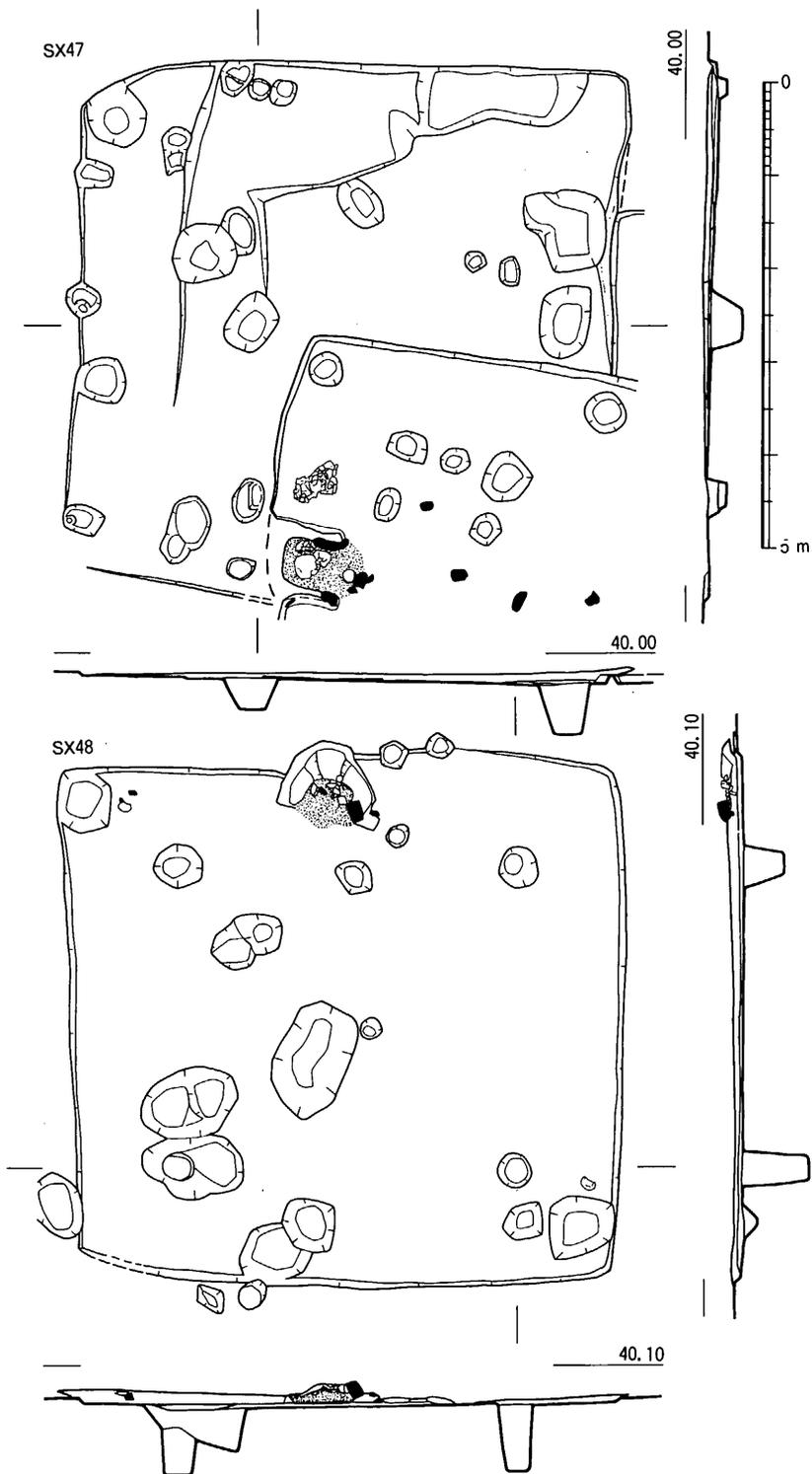
第115図 G地区 SX36・39実測図 (1/80)



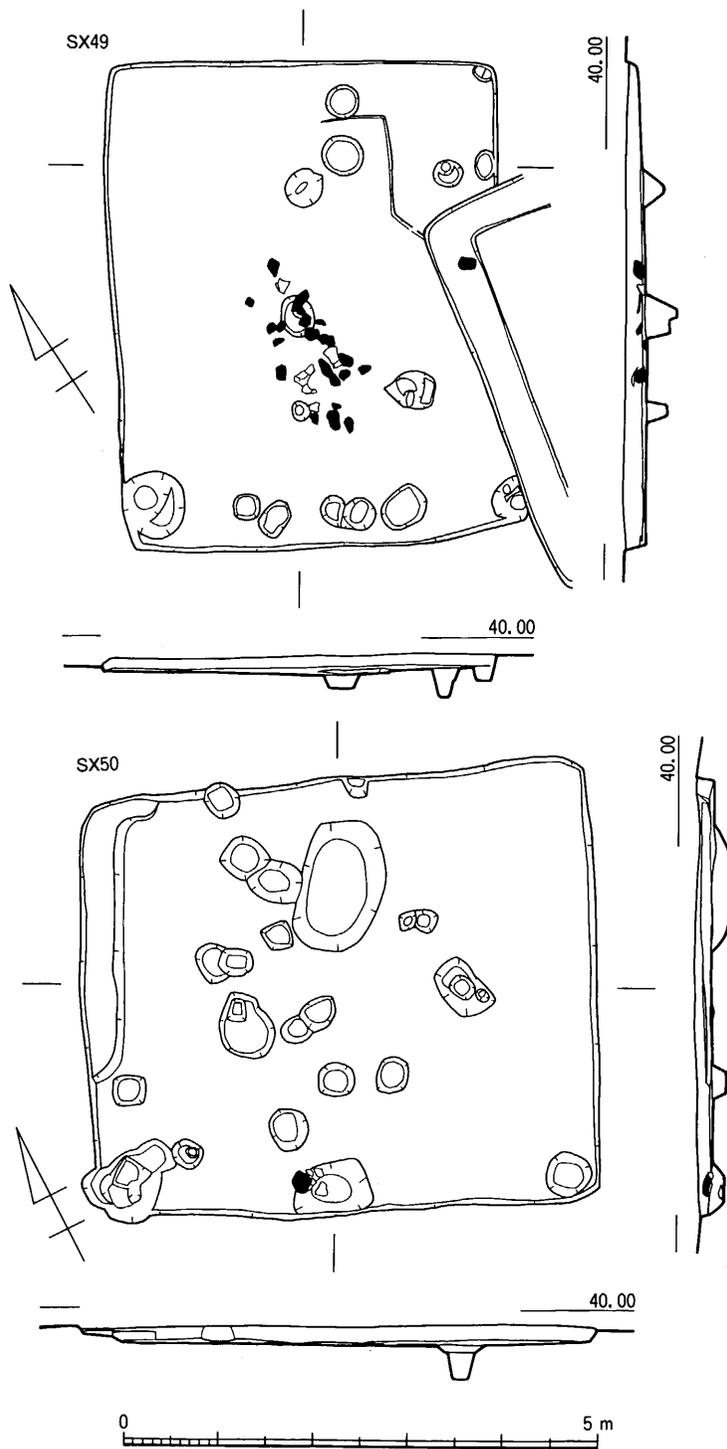
第116图 G地区 SX41・43实测图 (1/80)



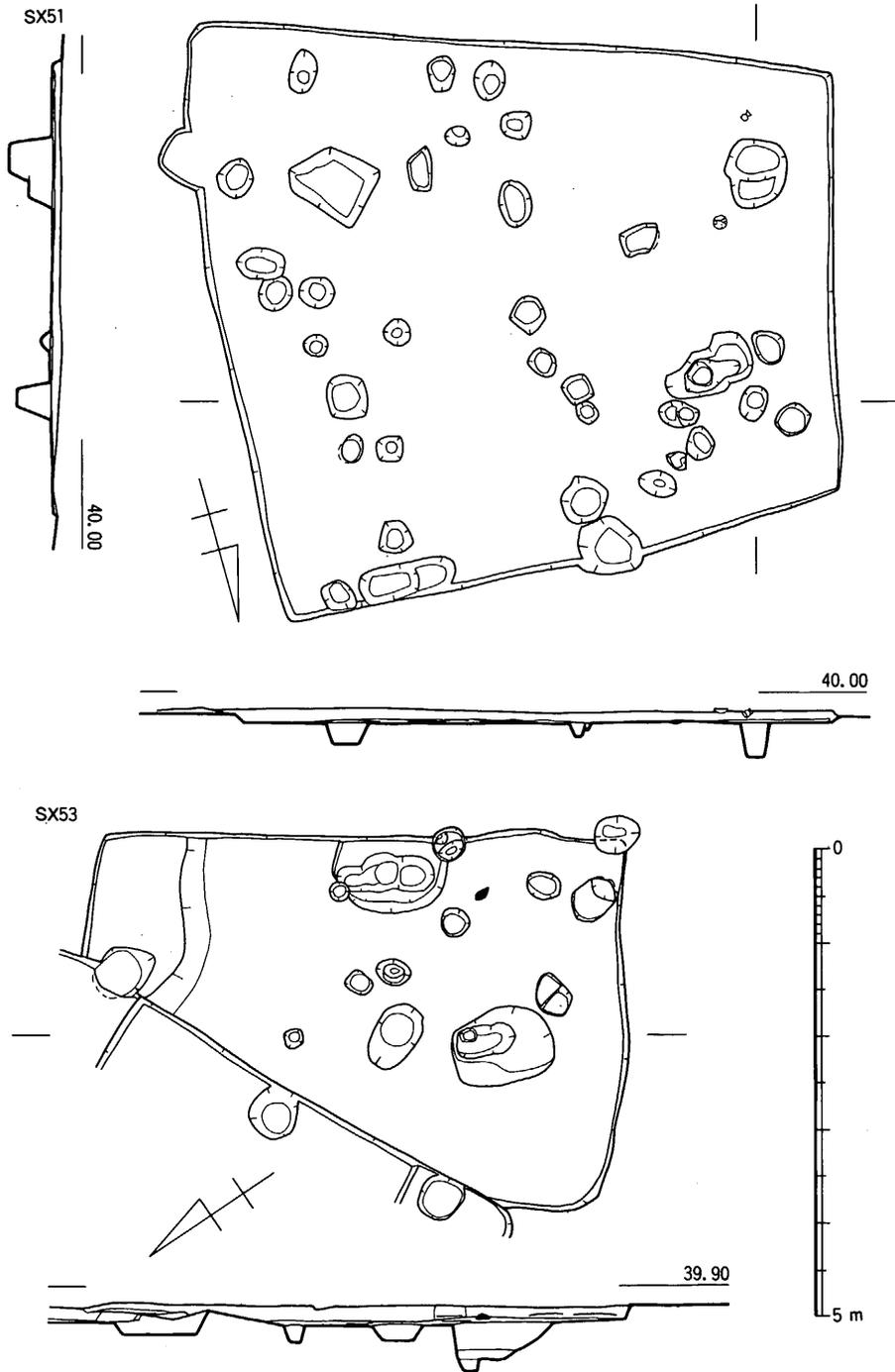
第117图 G地区 SX44~46实测图 (1/80)



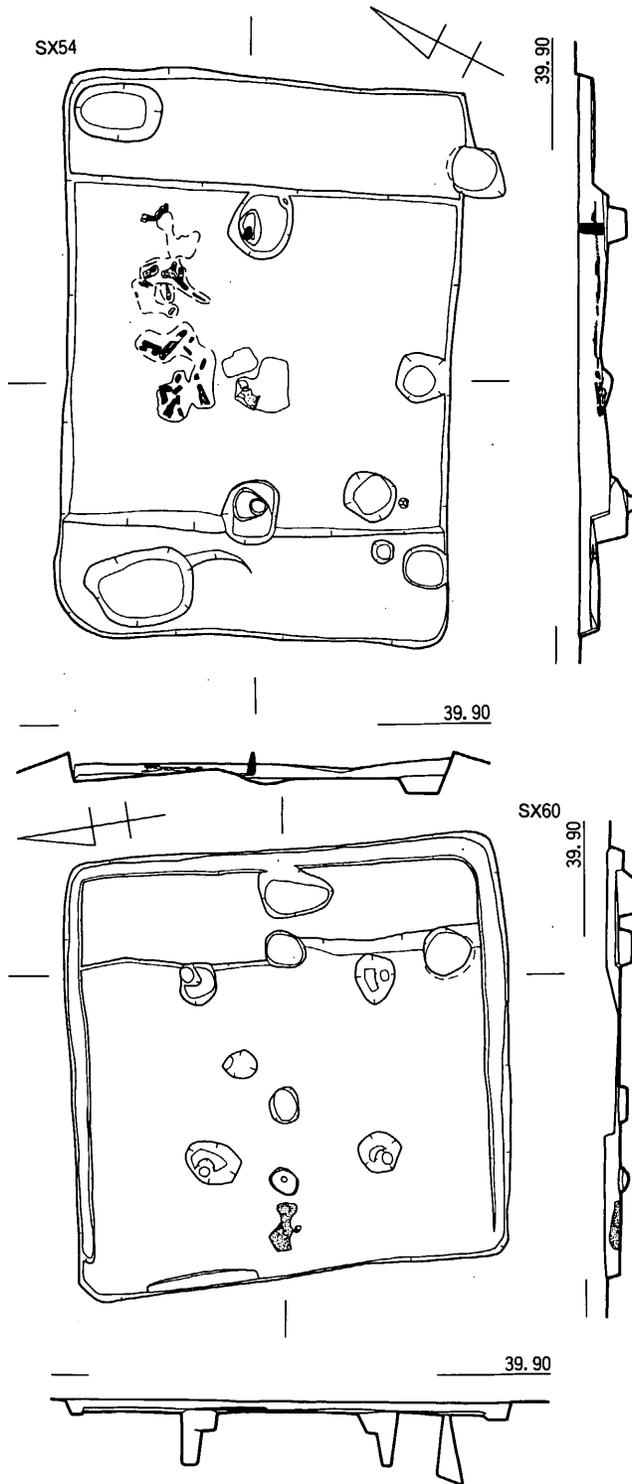
第118图 G地区 SX47·48实测图 (1/80)



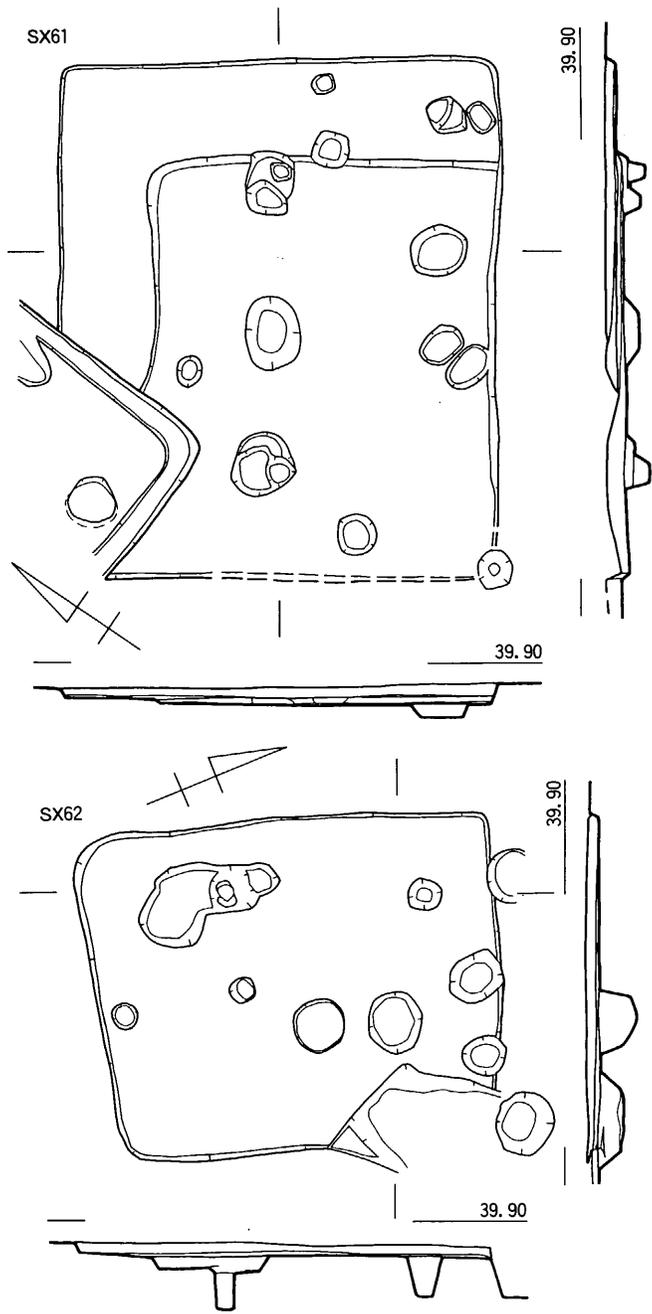
第119図 G地区 SX49・50実測図 (1/80)



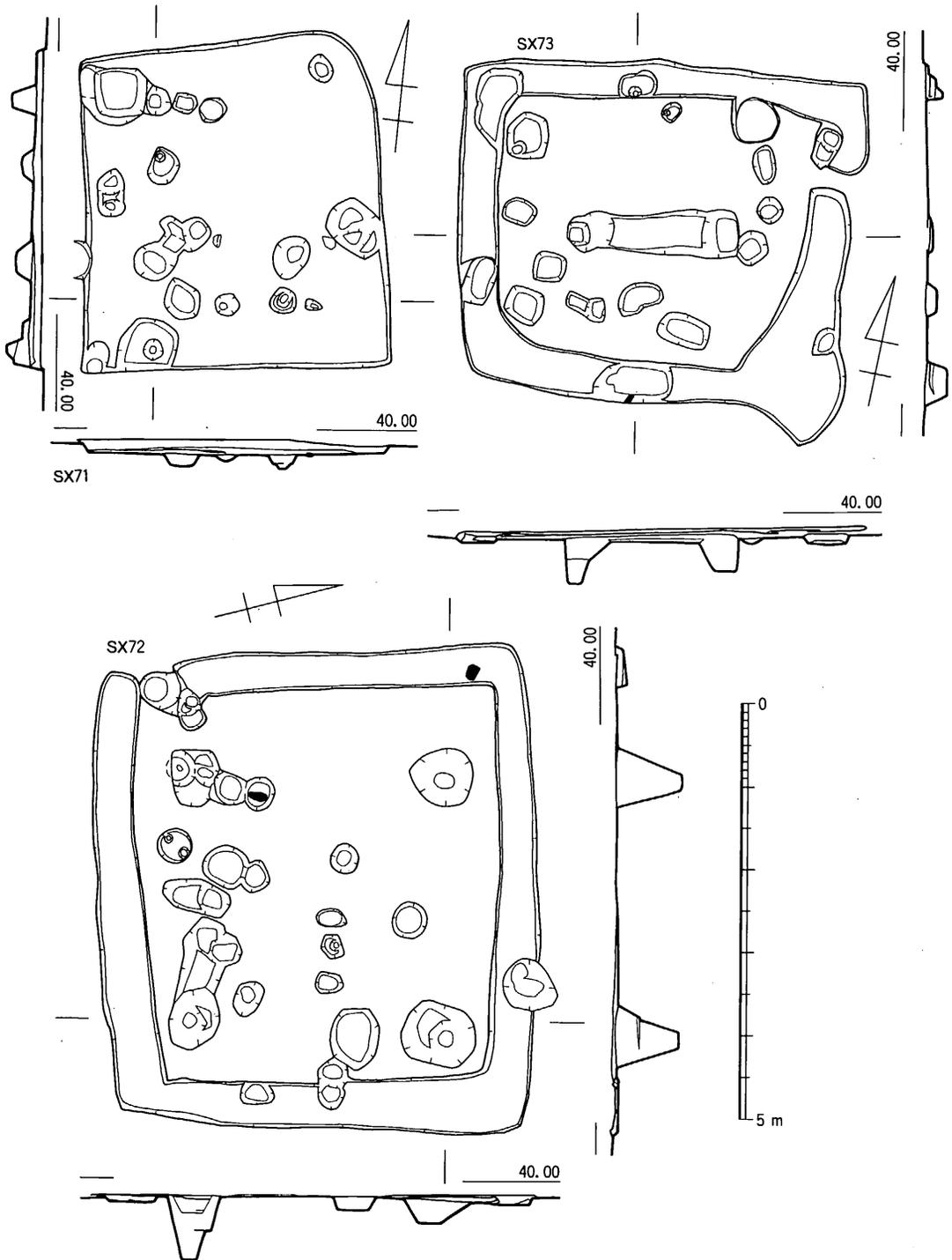
第120图 G地区 SX51·53实测图 (1/80)



第121图 G地区 SX54・60实测图 (1/80)



第122图 G地区 SX61・62实测图 (1/80)



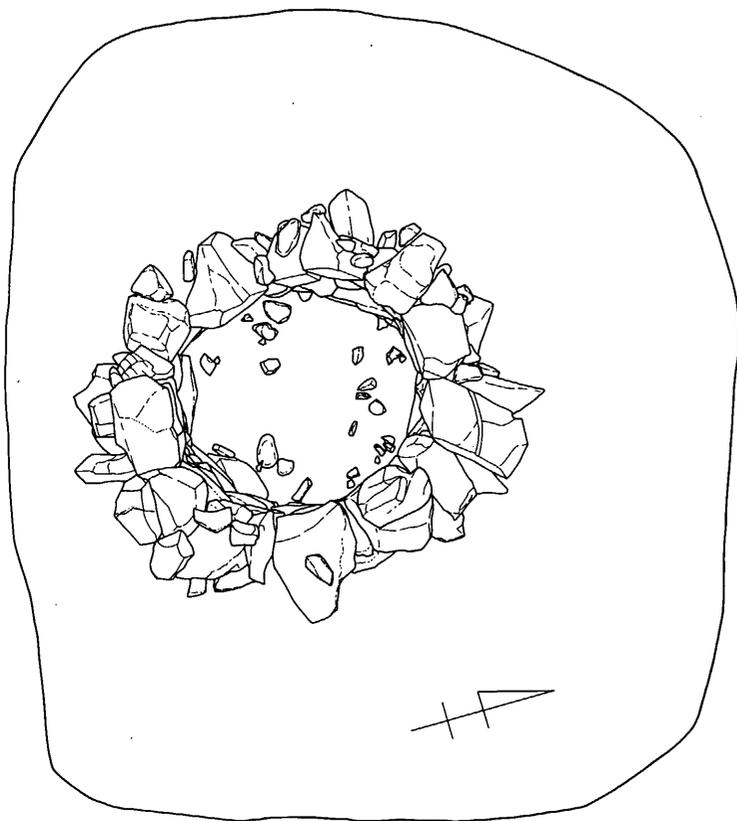
第123図 G地区 SX71~73実測図 (1/80)

表12-1 G地区竪穴式住居跡要説

番号	挿図 番号	図版 番号	平面形	規 模 (m)	主柱穴	切り合い関係	備 考
01	107		方 形	4.9×4.3		SE1・SM5←○→P56	
02			方 形				東側コーナーが遺存
03	107		方 形	5.2×4.8	2		中央に86×60cm、深さ7cmの炉。北側隅部にピット(P20)。
04			方 形				
05			方 形			SM5←○	
06			方 形				欠番
07			方 形				壁面のみが遺存
08	108		長方形	6.2×4.4		SX3・SX30・SM1←○	3方にベッド、床面東、西端に土壇
09	108	100	方 形	5.8×4.9	2	SX10←○→SX38	
10			方 形	4.8×4.4		SX30←○→SX10・11	
11	109	101	長方形	7.0×4.7			
12							欠番
13	110	101	長方形	7.5×5.5		○→SX32	2方にベッド。
14							欠番
15		102	方 形				北側コーナーのみ調査。他は調査対象区域外。
16	109	102	方 形	4.4×3.8		○→SX17	
17		103	方 形	5.2×5.0		SX16←○→SX18	2方にベッド。
18			方 形	5.0×?		○→SX17・SX35	
19			円 形				遺存度が極めて低い
20	111	103	方 形	7.8×6.0	2	○→SX21	2方にベッド。中央に92×78cm、深さ6.5cmの炉。
21			方 形	4.3×		SX20←○	
22							欠番
23	111	104	方 形	4.4×3.4			
24			方 形				東側コーナーのみが遺存
25	111	104	方 形	5.0×4.0			3方にベッド。
26	112	105	方 形	5.1×4.0			
27	112	105	方 形	5.8×5.4	4		
28	113		方 形	5.7×4.7	2	SX28←SX33・SX34	1方にベッド。
29		106	方 形	3.7×			
30	113	106	方 形	6.0×5.1	2	SX10←○→SX8	北壁部にピットがあり、東半縁に焼土が残る
31	114	107	方 形	5.4×4.8		SX39←○	
32	110	107	方 形	4.5×不明	2	SX13←○	北壁に側溝。
33			方 形	4.4×3.9		SX28←○	東側にベッド。両側に焼土が残る。
34			方 形	4.1×		SX13・SX28・SX32←○	
35	114	108	方 形	6.6×5.1	2	○→SX19・18・36	1方にベッド。
36	115		方 形	6.0×5.0	2	SX35←○	1方にベッド。ほぼ中央に90×78cm、深さ15cmの炉。西壁-南壁一部に側溝
37							欠番

表12-2 G地区竪穴式住居跡要説

38			方形	5.1×	2	SX9←○	
39	115	107	長方形	6.1×3.9		○←SX39	
40			方形	3.9×		M←○	ベッドを有す
41	116	109	方形	4.4×3.8		○←SH1	
42			方形				東側コーナーが残る
43	116	109	方形	5.3×4.5	2	SX45←○	1方にベッド
44	117	110	方形	4.4×4.4			南・西壁の中央に土壌
45	117	110	方形	4.5×4.5		SX46・SX47←○←SX43	1方にベッド。
46	117	111	方形	4.9×4.8	4	○←SX45・SX47	西壁中央にカマド。東中央に土壌
47	118	111	方形	6.8×5.8		SX46←○←SX45	1方にベッド。
48	118	112	方形	5.8×5.7	4		北壁中央にカマド。
49	119	112	方形	5.2×4.1	2	SX72←○	1方にベッド
50	119	113	方形	5.5×4.6			1方にベッド
51	120	113	方形	6.5×5.5			
52		114	方形	6.0×			2方にベッド。東壁～東北コーナーは調査。他は区域外。
53	120	115	方形	4.7×4.0		SX54←○←SX55	1方にベッド。
54	121	114	方形	5.9×4.0	2	○←SX53・SX54・SX56・SX57	2方にベッド。中央に56×56cm、深さ10cmの炉、床に炭化材が残る。
55		115	方形	5.9×4.2		SX53・SX54←○	1方にベッド。
56		115	方形	5.2×		SX54←○←SX56・SX57	2方にベッド
57		115	方形	5.4×		SX54・SX56←○←SX58	1方にベッド有
58			方形			SX57←○	南側コーナーのみを検出
59		116	方形	3.9×3.3		SX62←○←SX61・SX63	
60	121	116	方形	4.7×4.5		○←SX61・SX63・SX68	1方にベッド。北東南壁に沿って側溝。
61	122	116	方形	5.5×4.6	2	SX59・SX60←○←SX63	2方にベッド。中央に7.8×5.8cm、深さ10cmの炉
62	122	116	方形	4.4×3.5		○←SX59・SX63・SX64・SX65	
63		116	方形	4.7×3.8		SX59・60・62←○←SX63・64・65	1方にベッド。
64		116	方形	2.9		SX62←○←SX65・67	
65		116	方形			SX63・64・66←○←SX67	
66		116	方形			SX63←○←SX66	1方にベッド。住居跡西側は調査区外
67		116	方形	3.5×		SX64・65←○←SX56	
68		116	方形			SX60・SM5←○	東側コーナーのみ調査、他は区域外。
69			方形	5.8×		SD10・11←○	
70		116	方形				北側コーナーは調査、他は削平され不明?
71	123	117	方形	3.7×3.3			
72	123	117	方形	5.9×5.2	4	○←SX49	床面は削平
73	123	118	方形	4.7×4.1	2		床面は削平
74			円形	5.7×5.5		SX41←○	



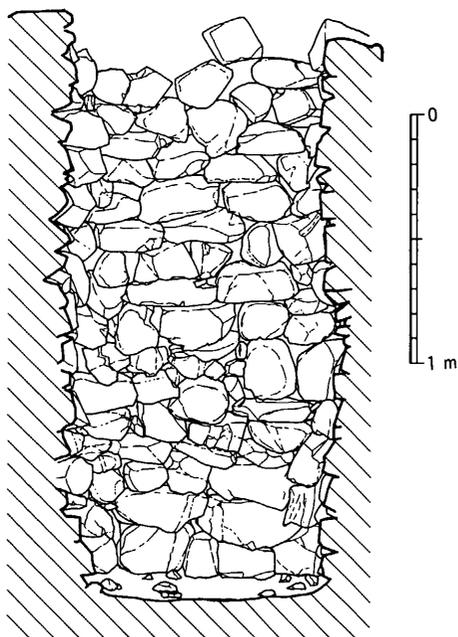
井戸 (SE)

石組の井戸で、2.9×3.3mの隅丸方形のプランの掘り方の中に径1mほどの井戸を組み上げる。残存する部分の深さは約2.2m、底は砂である。

円形周溝 (SJ)

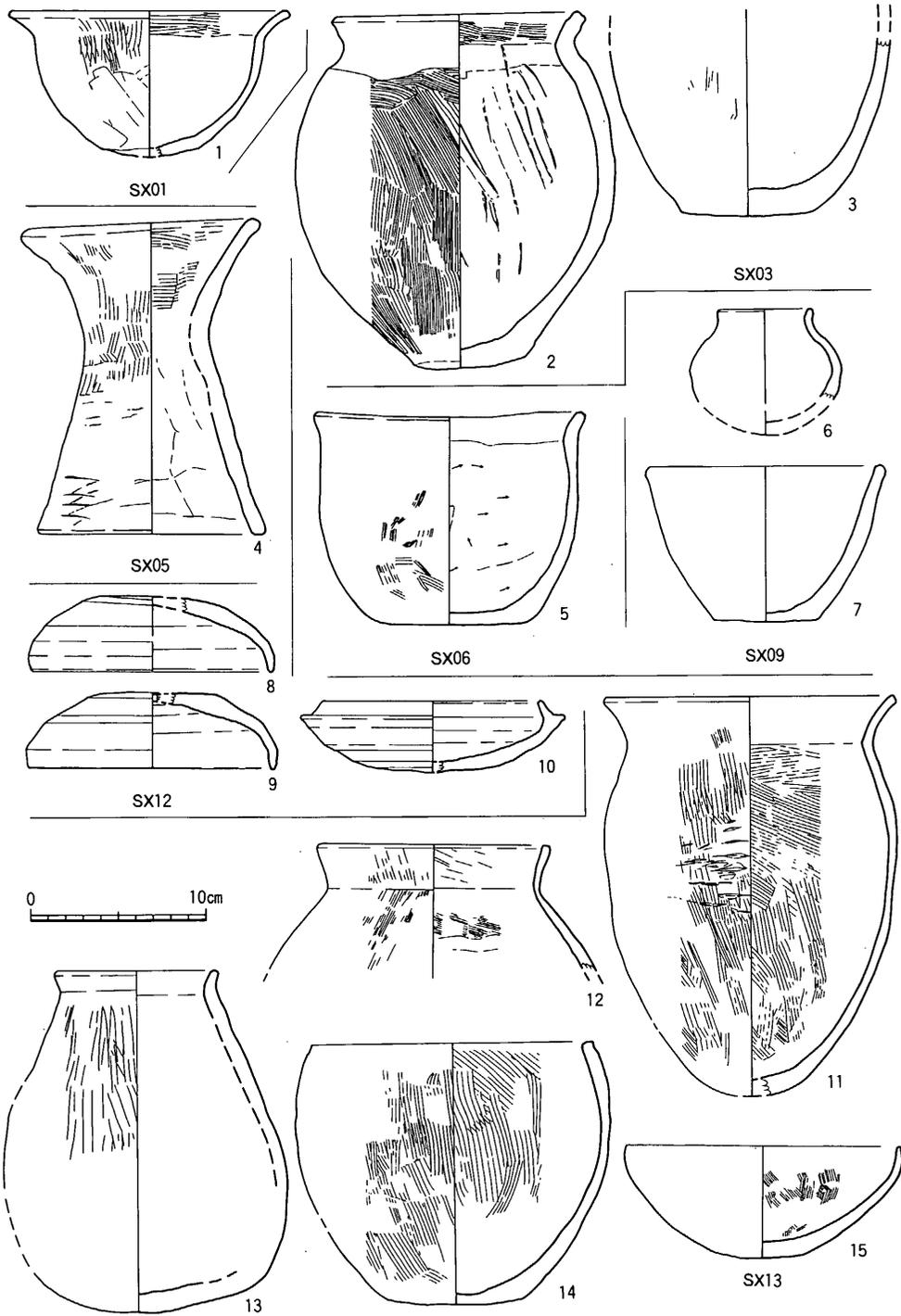
調査区の北東部で検出されたもので、SX41、および SM 4 に切られる。直径5.5mほどの円形の周溝で、その内側には2個のピットが認められるのみである。

40.00

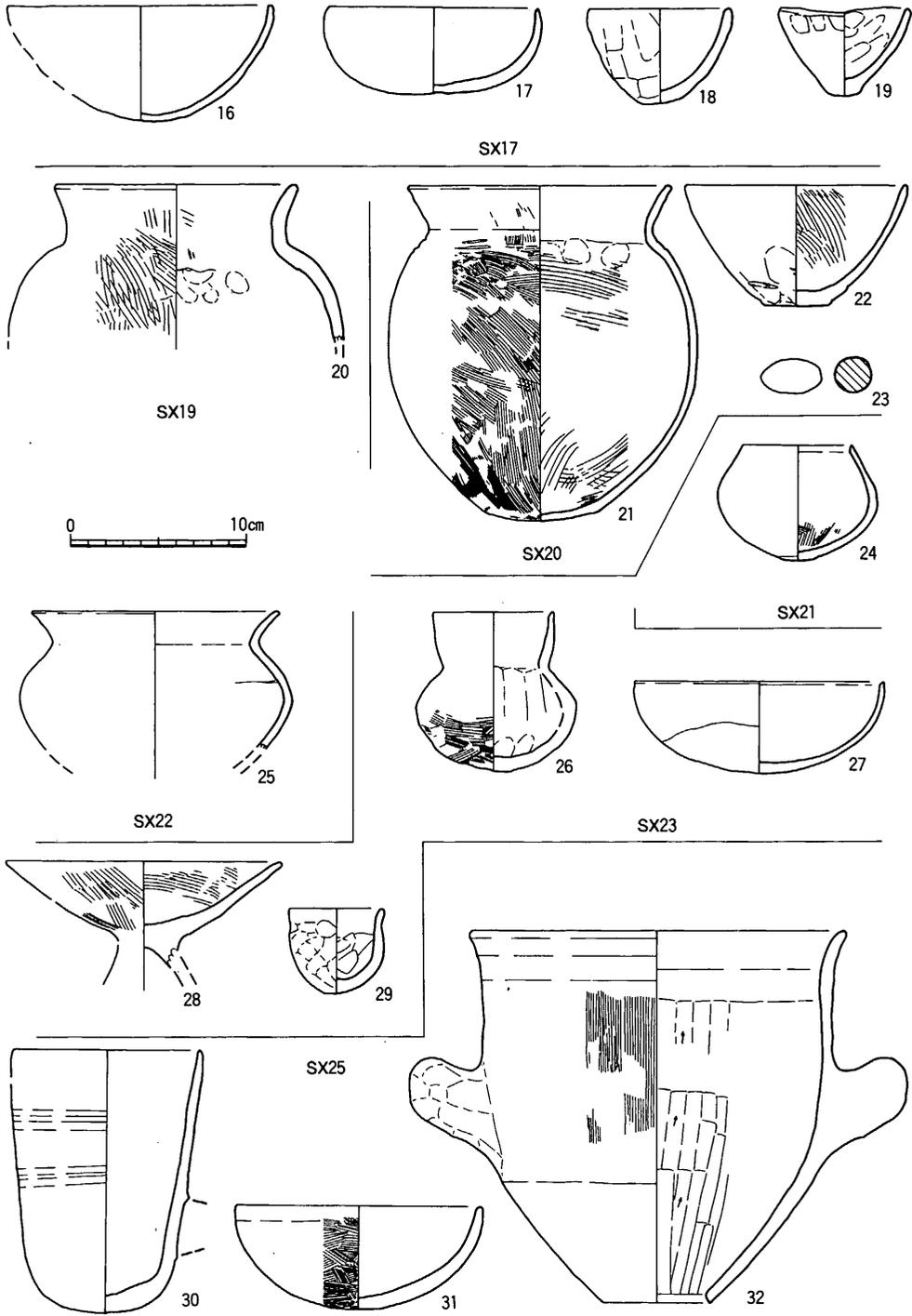


第124図 G地区 SE01実測図 (1/30)

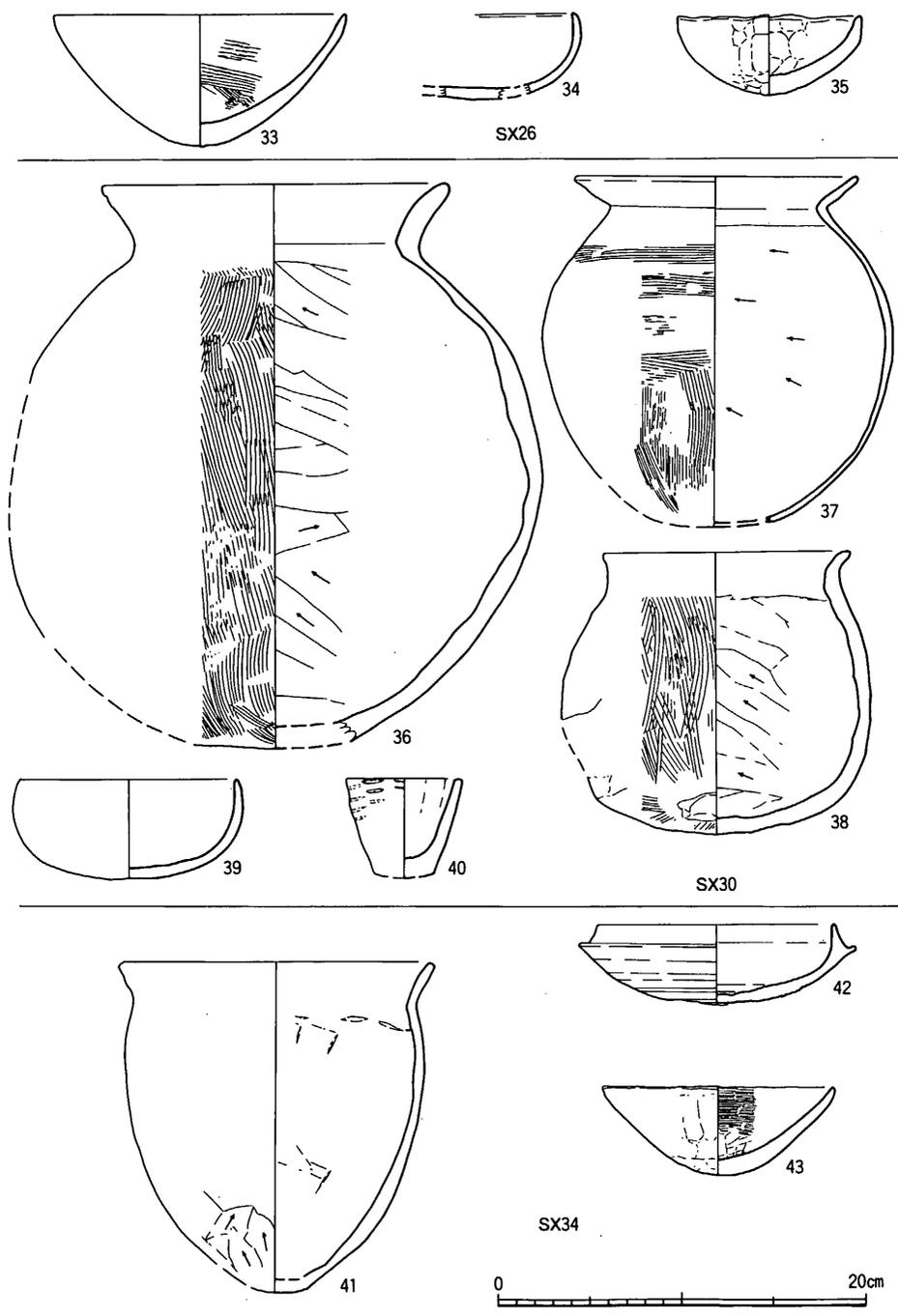
3 出土遺物



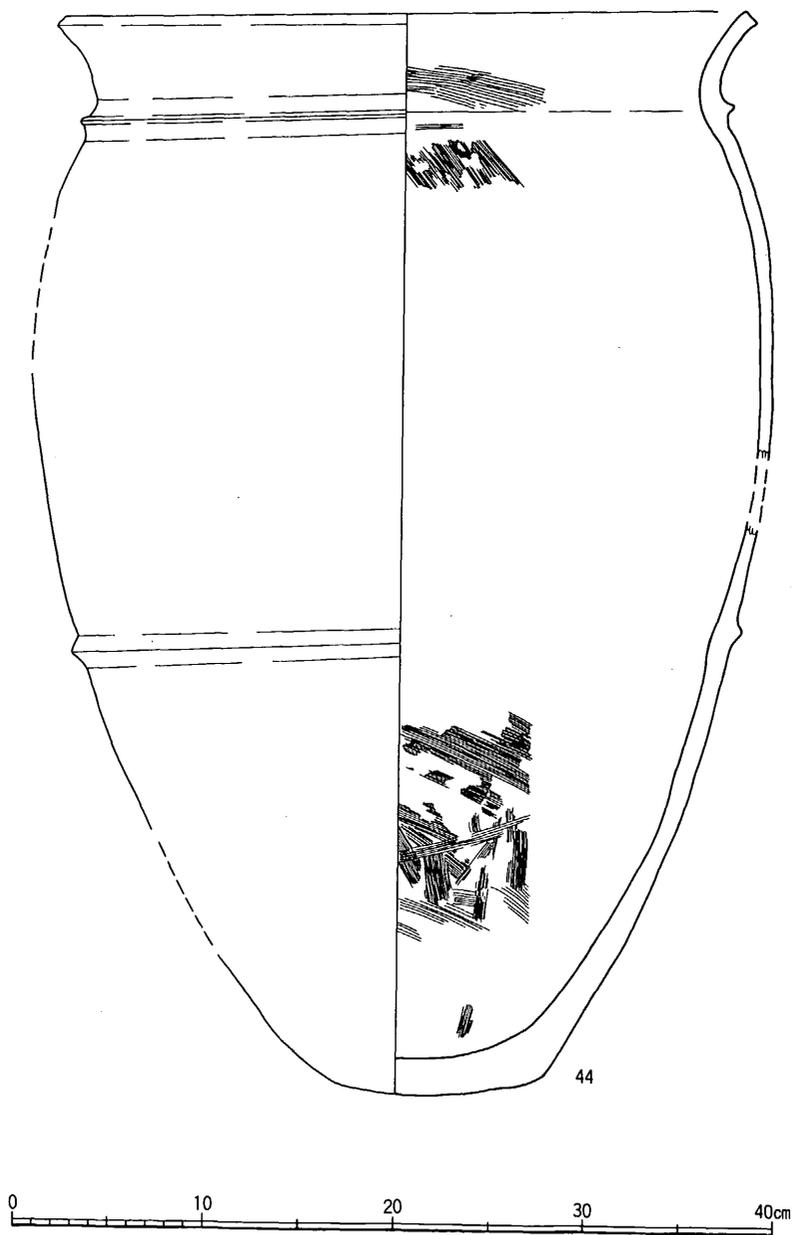
第125图 G地区 SX01·03·05·06·09·12·13出土土器实测图 (1/4)



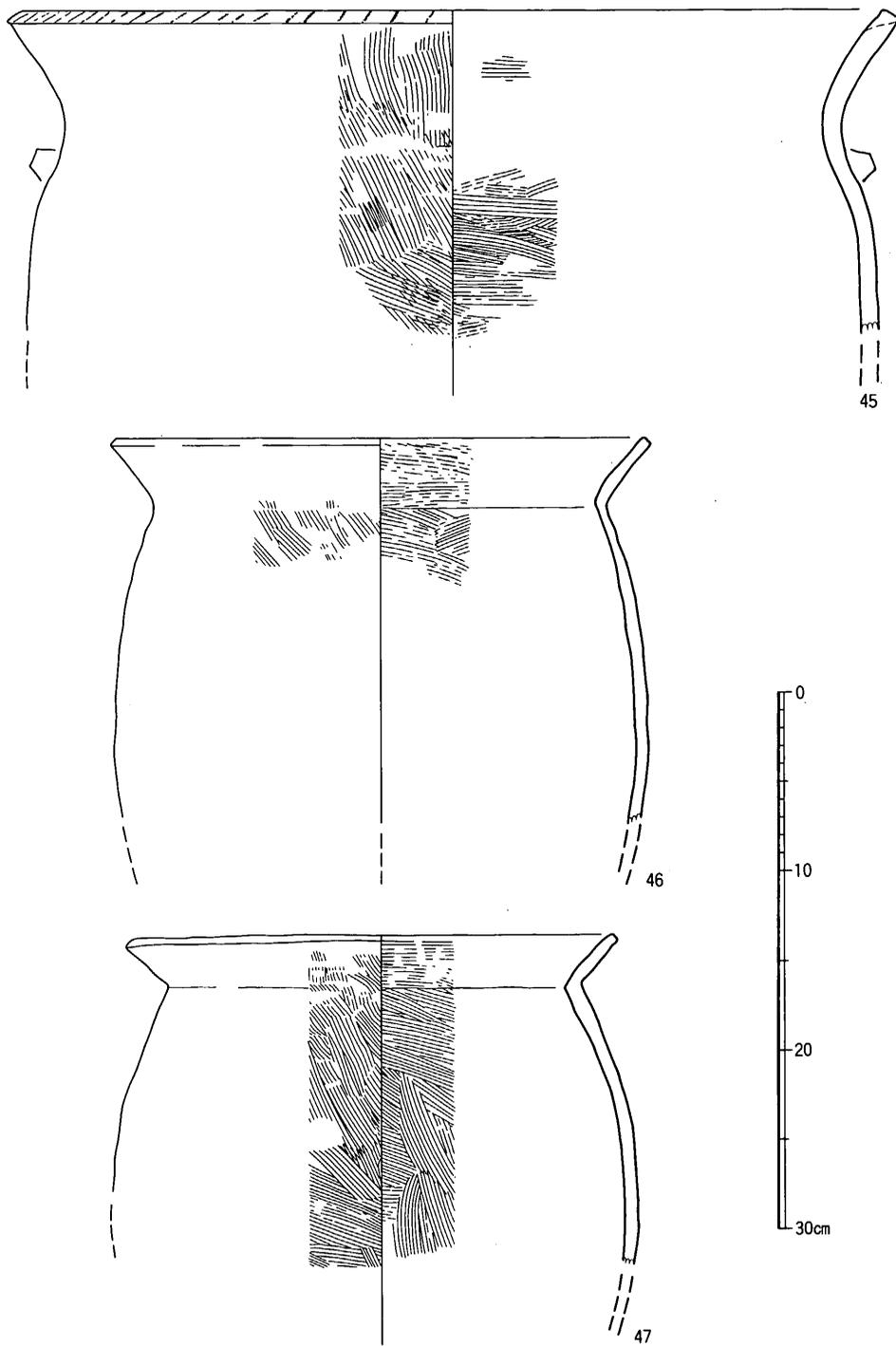
第126图 G地区 SX17·19~23·25出土土器实测图 (1/4)



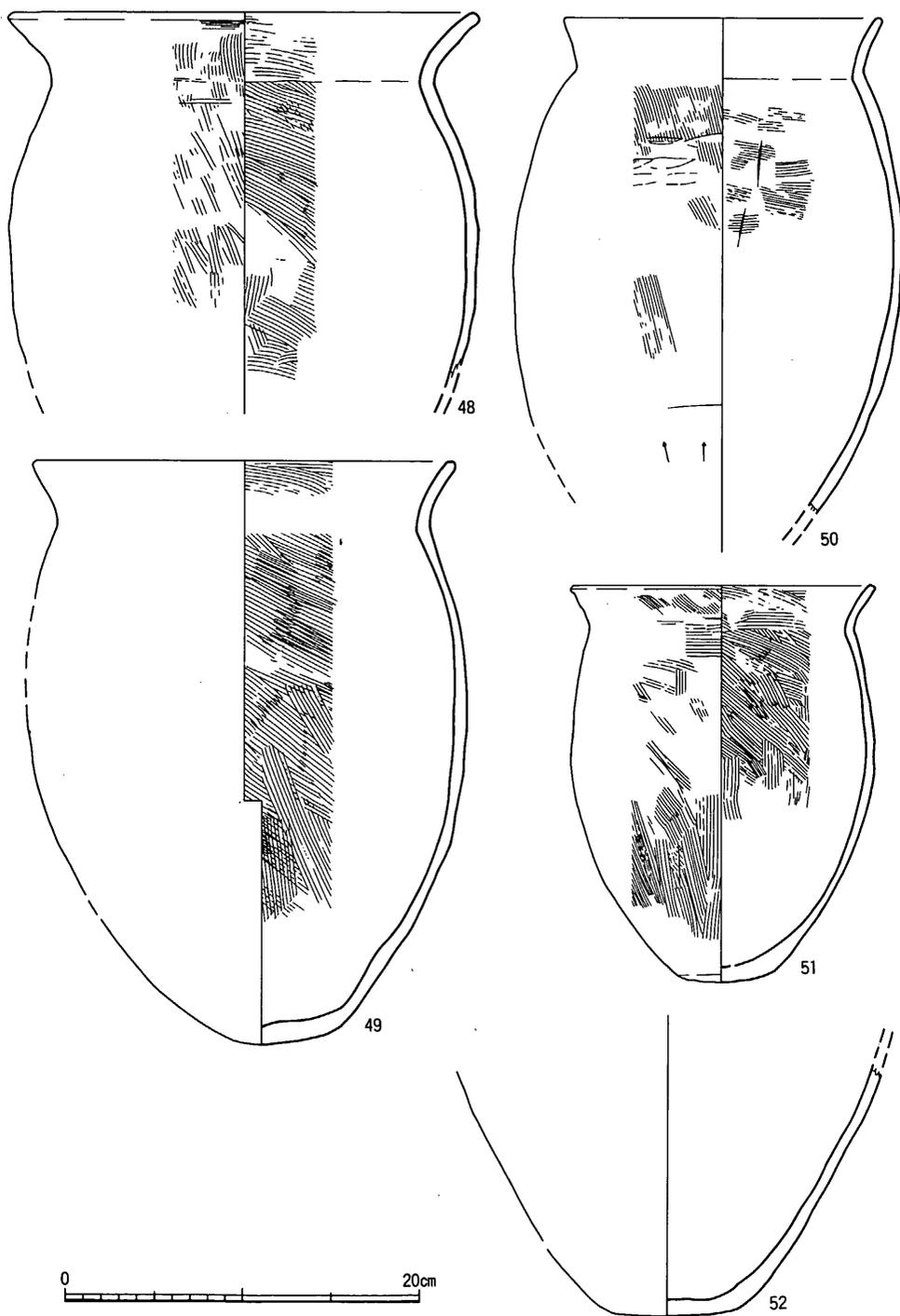
第127图 G地区 SX26·30·34出土土器实测图 (1/4)



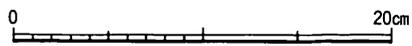
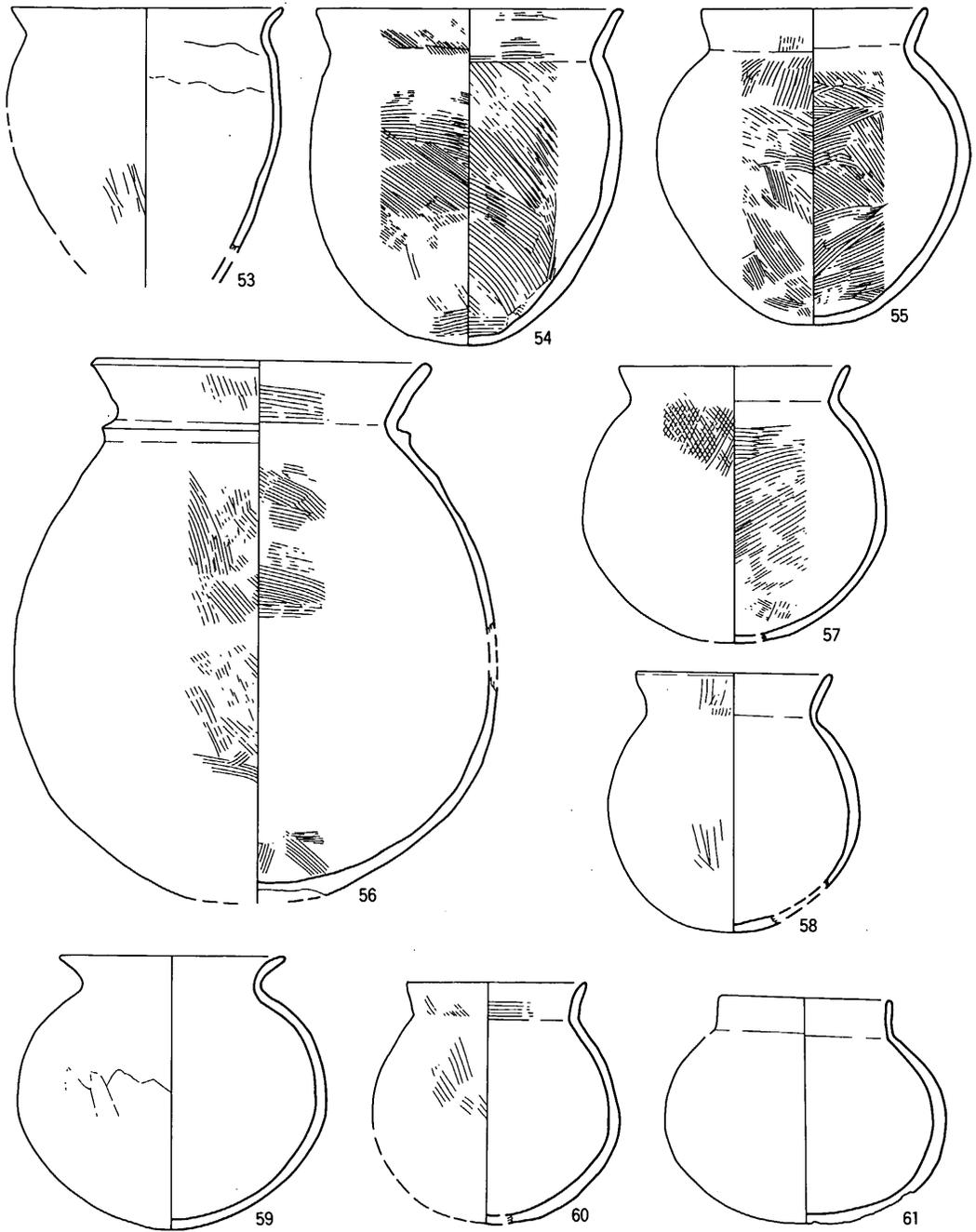
第128图 G地区 SX35出土土器实测图 (1/4)



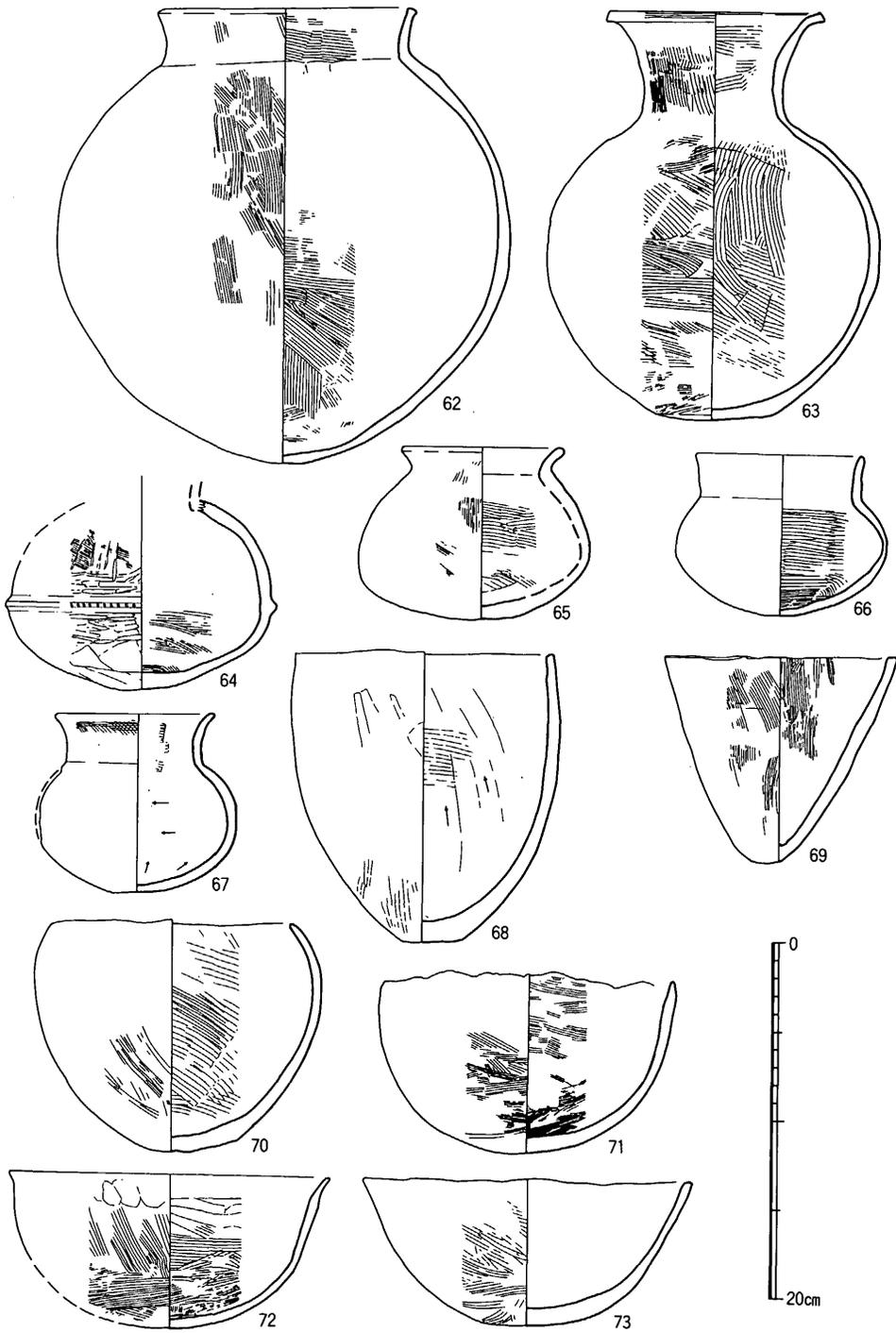
第129图 G地区 SX35出土土器实测图 (1/4)



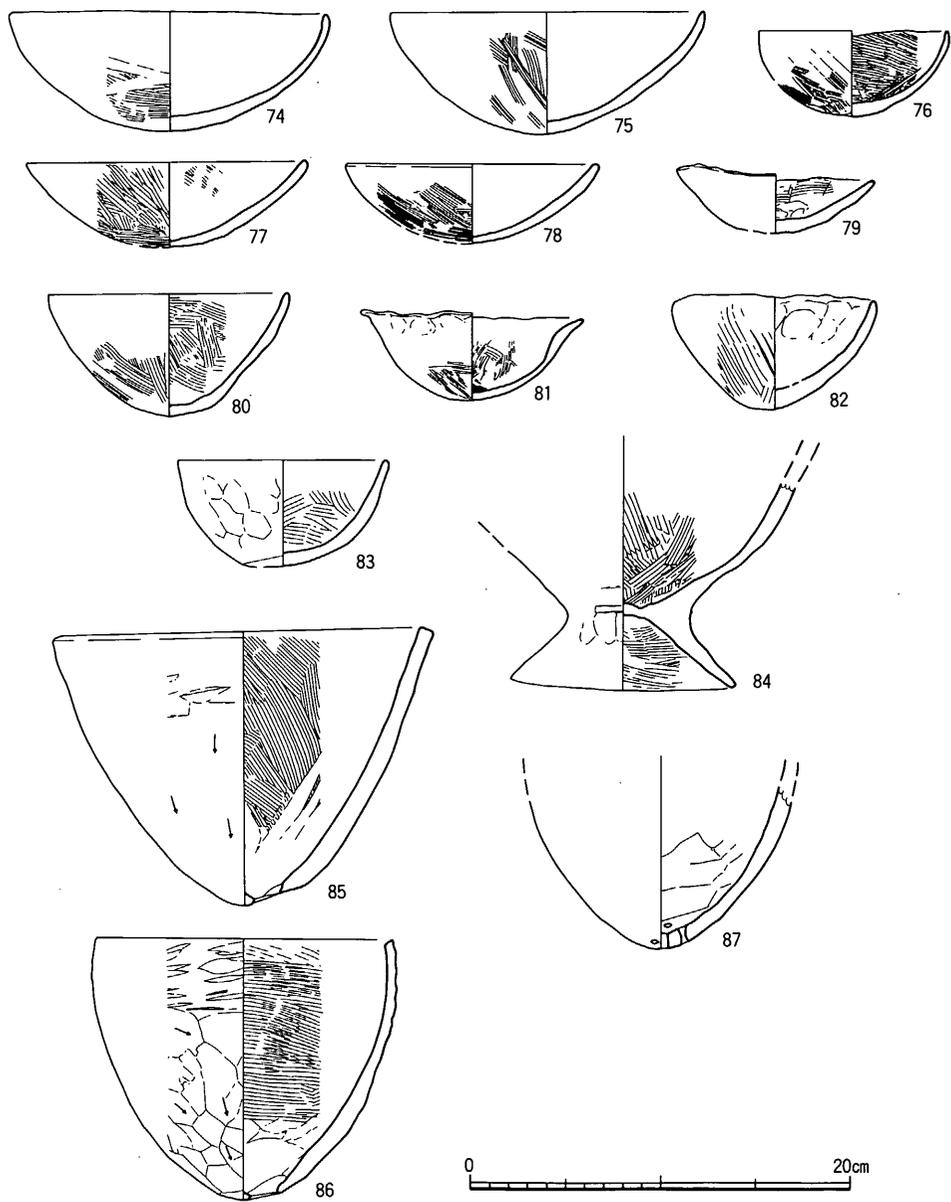
第130图 G地区 SX35出土土器实测图 (1/4)



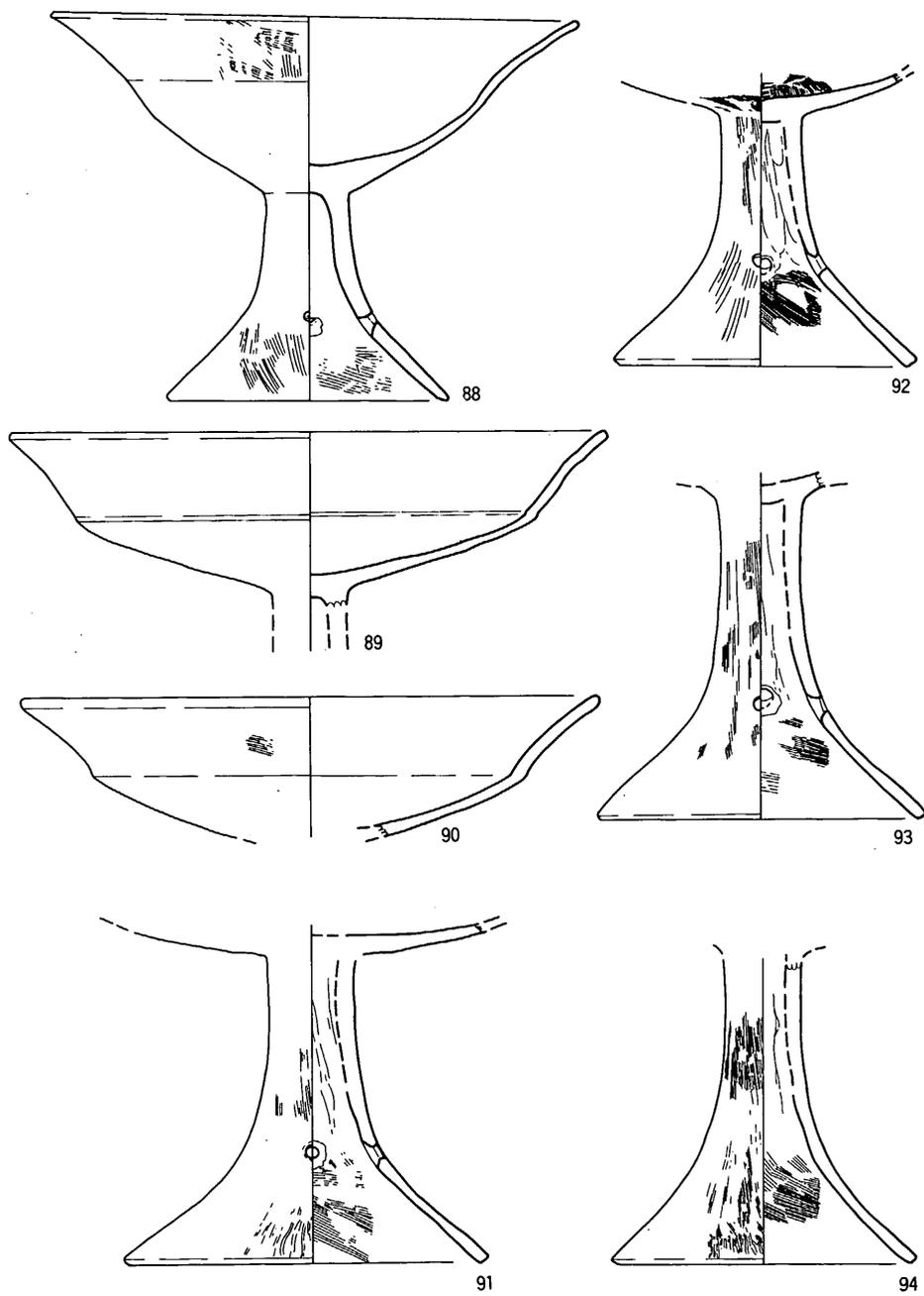
第131图 G地区 SX35出土土器实测图 (1/4)



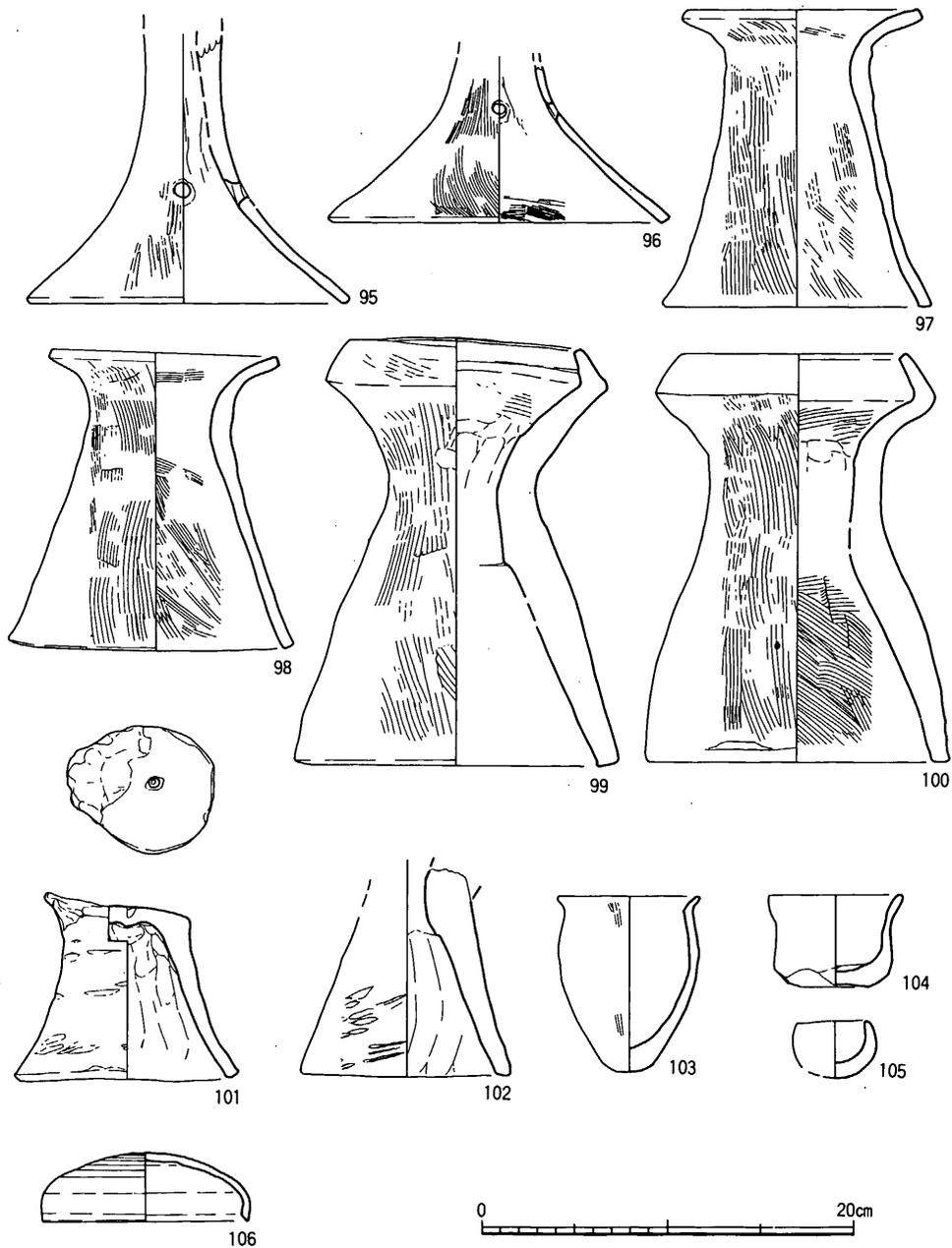
第132图 G地区 SX35出土土器实测图 (1/4)



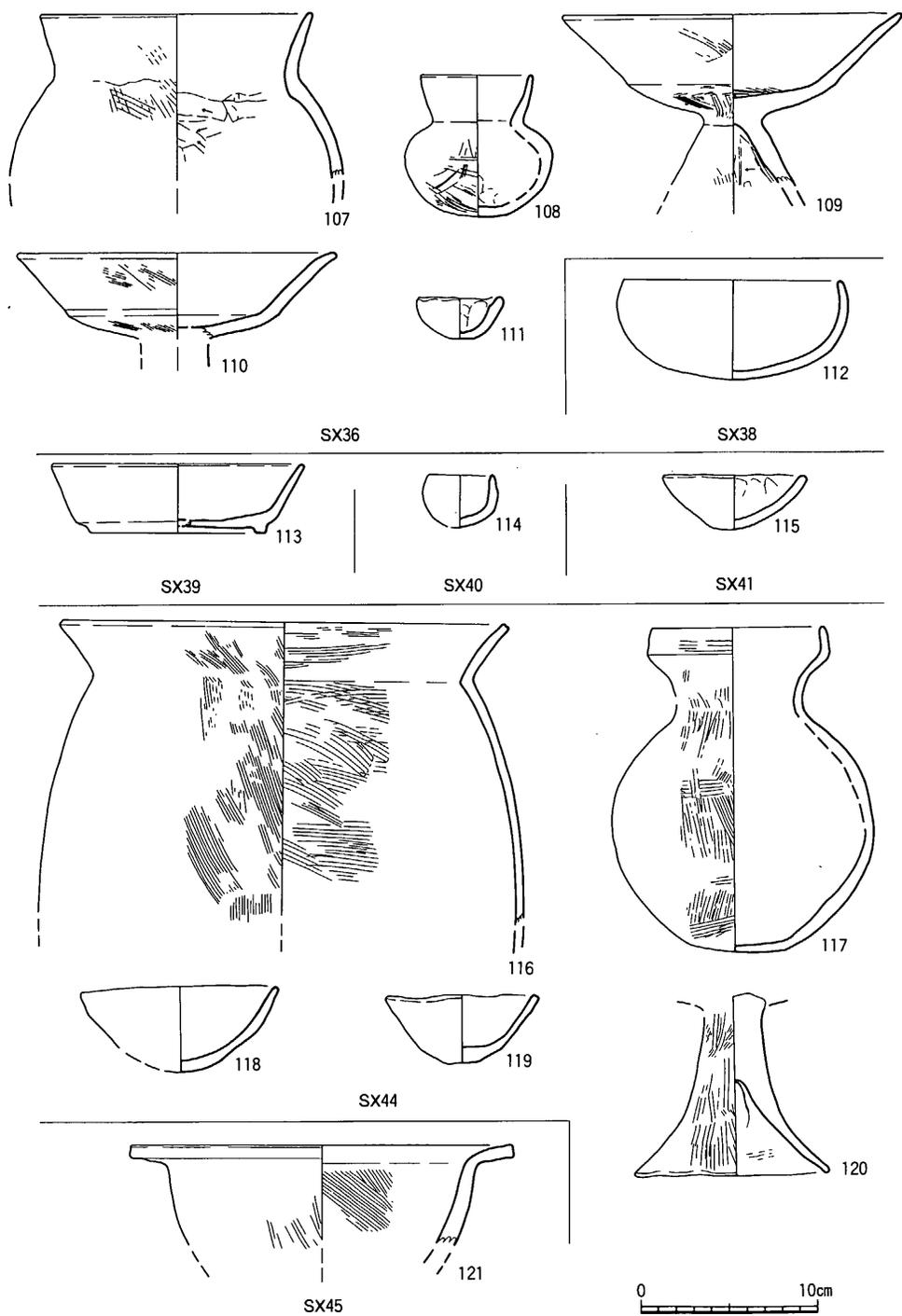
第133图 G地区 SX35出土土器实测图 (1/4)



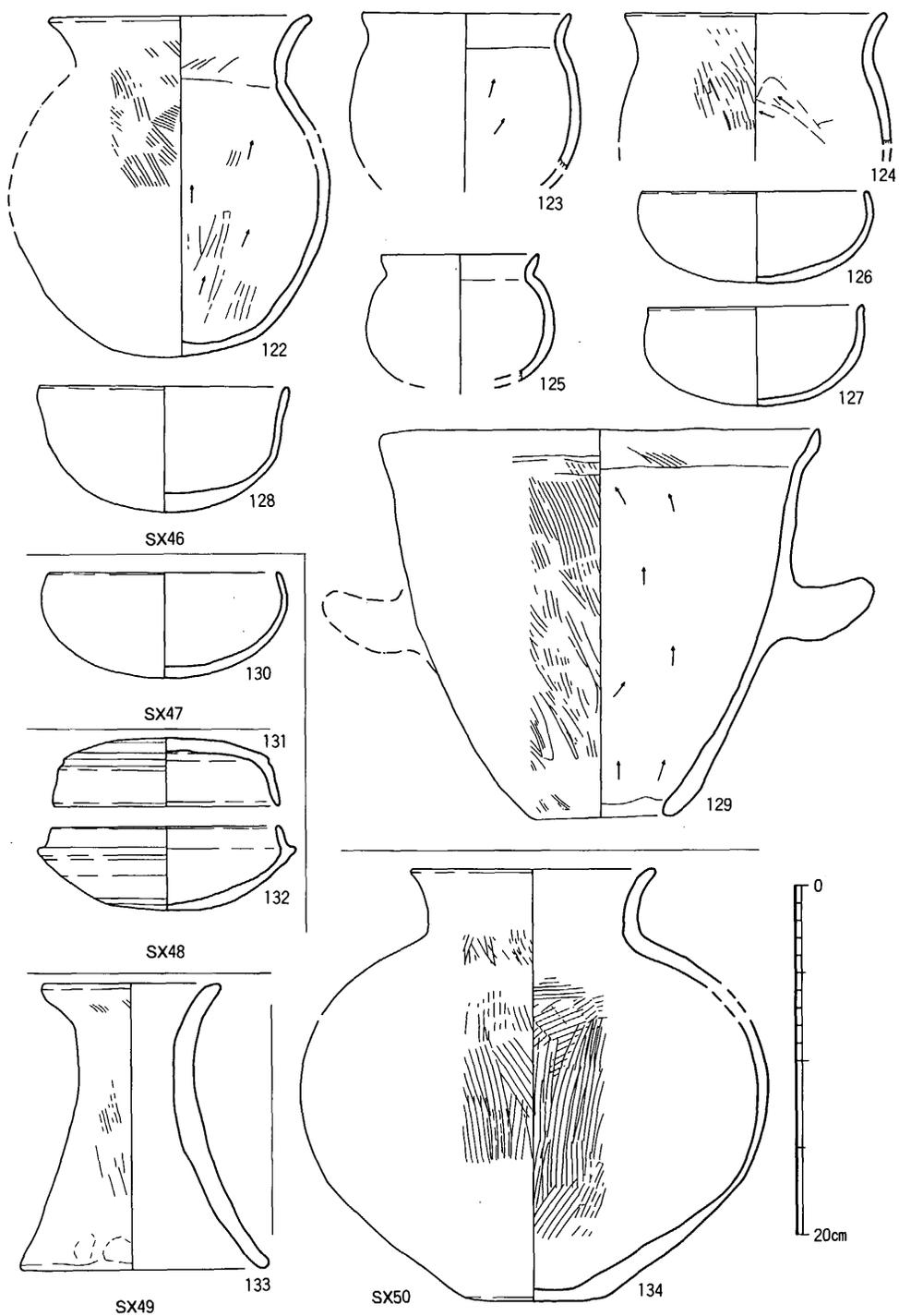
第134图 G地区 SX35出土土器实测图 (1/4)



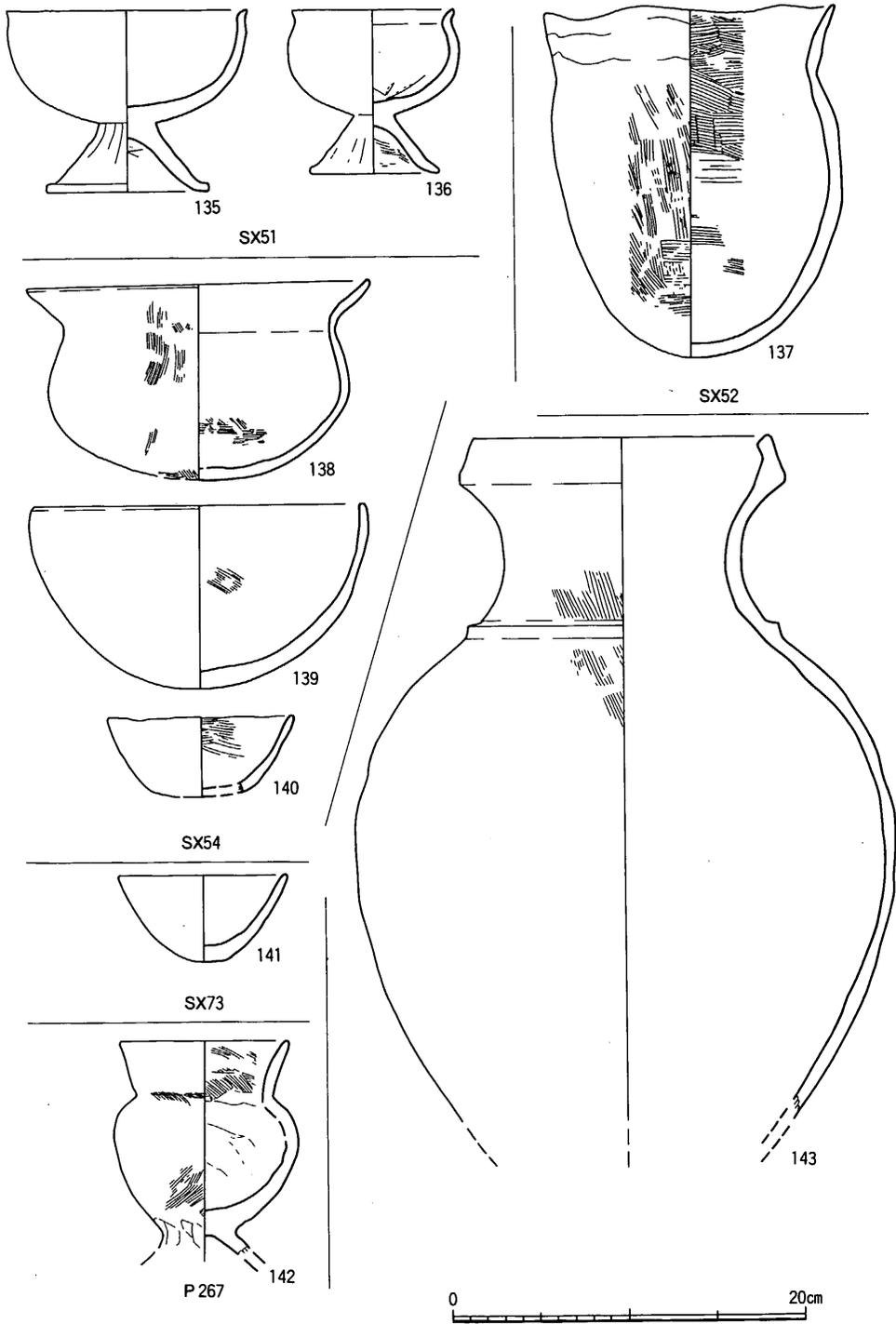
第135图 G地区 SX35出土土器实测图 (1/4)



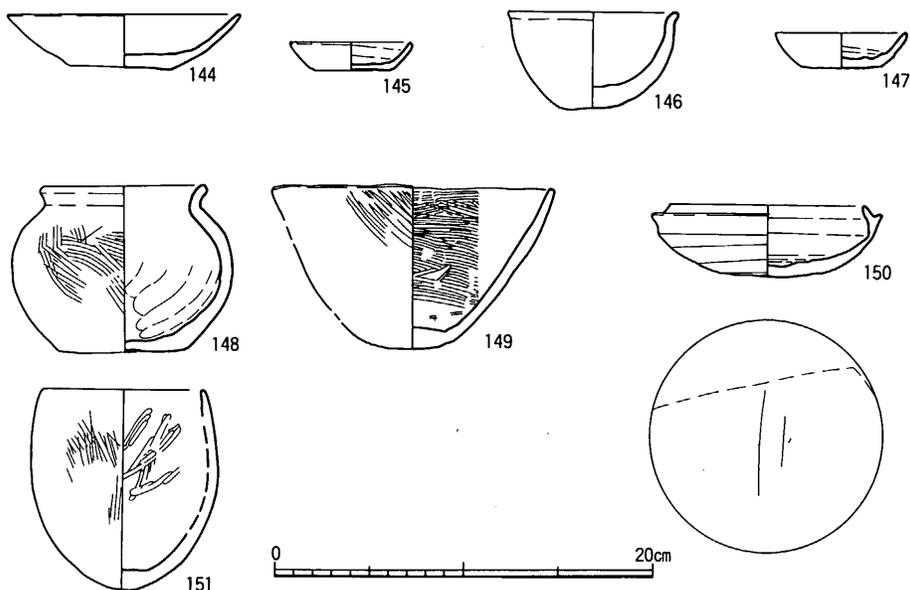
第136图 G地区 SX36·38~41·44·45出土土器实测图(1/4)



第137图 G地区 SX46~50出土土器实测图 (1/4)



第138図 G地区 SX51・52・54・73・ピット出土土器実測図 (1/4)



第139図 G地区 SM・SE・表土出土土器実測図 (1/4)

表13-1 G地区出土土器要説

番号	器種	法量(cm)	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
1	鉢	口径 16.0	淡黄褐色	微砂粒をごく少量含む	口縁部 ヨコナデ 体部上位 ハケメ 体部中位下 ヘラケズリ	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体部下 ヘラケズリ後ナデ	
2	壺	口径 14.4 器高 20.2	黄褐色	微砂粒を多量に含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ 底部 ナデ	口縁部 ヨコナデ 頸部直下より胴部中位 ヘラケズリ 胴部 ヘラケズリ後ナデ 底部 ナデ	胴部上位・中位にスス付着。
3	壺	底径 7.5	黄茶褐色	微砂粒を多量に含む	体部中部 ハケメ 体部下位 ヘラケズリ後ナデ 底部 ナデ	体部 ナデ 底部 同心円状のハケメ	底部は少々歪つてである為、最長径7.8cm、最短径7.4cmを測る。
4	器台	受部径 13.7 器高 17.8 脚幅径 13.0	赤茶褐色	微砂粒をやや多く含む	受部 ハケメ後部分的にナデ 胴部上位 ハケメ 胴部下位 タタキ後ナデ 脚幅部 タタキ	受部 ハケメ 胴部 磨滅 脚幅部 ヘラケズリ	
5	鉢	口径 15.4 器高 11.9 底径 7.4	黄褐色	微砂粒を多量に含む	全体 磨滅(胴部に一部ハケメが残る)	口縁部 磨滅 口頸部直下より胴部 ヘラケズリ 底部 ヘラケズリ	
6	壺	口径 5.4	青灰色	微砂粒をやや多く含む	口唇部 ヨコナデ 口頸部 ヨコナデ後ナデ 胴部 ナデ	口頸部 ヨコナデ 体部 ナデ	須恵器
7	鉢	口径 13.6 器高 8.9 底径 5.9	赤茶褐色	微砂粒をやや多く含む	口縁部 磨滅 体部 ヘラケズリ(ナデ状) 底部 ヘラケズリ(ナデ状)	口縁部 磨滅 体部 ヘラケズリ(ナデ状) 底部 ヘラケズリ(ナデ状)	
8	坏蓋	口径 13.9 器高 4.3	黄褐色	1mm大の砂粒を多量に含む	口縁部 ヨコナデ 体部 回転ヘラケズリ 天井部 回転ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部下位 ヨコナデ 天井部 ヨコナデ後ナデ	赤焼き

表13-2 G地区出土土器要説

9	坏蓋	口径 14.1 器高 4.3	淡黄褐色	1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部下位 ヨコナデ 天井部 回転ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部下位 ヨコナデ 天井部 ヨコナデ後ナデ	天井部にヘラ記号 赤焼
10	坏身	口径 12.2 器高 4.1	淡青灰色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 受部 ヨコナデ 体部下位 ヨコナデ 天井部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部上位 ヨコナデ 天井部 ヨコナデ後ナデ	須惠器
11	壺	口径 16.5 胴最大径16.6	暗褐色	微砂粒を含む	口頸部 ヨコナデ 胴部上・中位 タタキ後ハケメ 胴部下位 ハケメ後ナデ 底部 ハケメ後ナデ	口縁部 ヨコナデ 頸部直下より胴部 ハケメ後ナデ 底部 ハケメ後ナデ	
12	壺	口径 13.2	黄褐色	微砂粒を少し含む	口唇部 ヨコナデ 口頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部上位下 ハケメ	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ後ヨコナデ 口頸部下 1.5cm ナデ 胴部上位 ハケメ 胴部中位 ヘラケズリ	
13	壺	口径 9.2 器高 19.5	赤褐色	微砂粒を多量に含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部上・中位 ハケメ 胴部下位 磨滅 底部 磨滅	口縁部 ヨコナデ 頸部直下より胴部上位 ナデ 胴部下位 ヘラケズリ 底部 ヘラケズリ後ナデ	
14	鉢	口径 16.0 器高 14.9	暗褐色	1mm大の砂粒を多量に含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ 底部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ 底部 ナデ	
15	鉢	口径 15.6 器高 6.4	淡黄褐色	微砂粒を多量に含む	口縁部 ヨコナデ 体部 磨滅 底部 磨滅	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ 底部 ハケメ後ナデ	
16	鉢	口径 15.0 器高 6.6	淡茶褐色	1mm大の砂粒を多量に含む	口縁部 ヨコナデ 体部 磨滅 底部 磨滅	口縁部 磨滅 体部 磨滅 底部 磨滅	
17	鉢	口径 12.0 器高 4.9	淡赤褐色	微砂粒を多く含む	全 面 磨滅	全 面 磨滅	
18	鉢	口径 8.1 器高 5.4	淡茶褐色	微砂粒を多く含む	全 面 ナデ(指頭痕)	全 面 ナデ	
19	鉢	口径 7.2 器高 5.0	淡黄褐色	微砂粒を多量に含む	口縁部 ナデ(指頭痕) 体部 ナデ 底部 ナデ	全 面 ナデ	
20	壺	口径 13.8	黄褐色	1mm大の砂粒を少し含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケ目後ヨコナデ 頸部直下より胴部 ヘラケズリ	口縁、胴部の一部にスス付着。
21	壺	口径 15.0 器高 13.9	淡赤褐色	微砂粒を多く含む	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ後ヨコナデ 頸部直下2cm タタキ後ハケメ後ヨコナデ 胴部上位 タタキ後ハケメ 胴部中・下位 ハケメ 底部 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 頸部直下2cm ハケメ後ナデ 胴部 ハケメ 底部 ハケメ後ナデ	
22	鉢	口径 12.6 器高 6.8 底径 3.6	淡赤褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部上位 タタキ後ヨコナデ 体部下位 ヘラケズリ 底部 ヘラケズリ	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ 体部 ハケメ 底部 ハケメ	
23	投弾	全長 3.5 全幅 2.1 全高 2.0	赤褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む			
24	無頸壺	口径 3.1 器高 6.5 最大径 9.0	淡黄褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 磨滅	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 ハケメ	
25	壺	口径 14.0	黄褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 磨滅	口縁部 ヨコナデ 頸部 磨滅 底部 磨滅	
26	小型丸底壺	口径 6.9 器高 9.0	暗褐色	微砂粒を多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ 底部 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 頸部直下より胴部 ナデ(指頭痕) 底部 ナデ(指頭痕)	

表13-3 G地区出土土器要説

27	鉢	口径 14.1 器高 5.2	淡黄褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ後ナデ 底部 ヘラケズリ後ナデ	口縁部 ヨコナデ 体部上位 ヨコナデ 体部下位 磨滅 底部 磨滅	
28	高坏	口径 15.6	淡赤褐色	微砂粒をやや多く含む	坏 口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体部 ハケメ 屈曲部 ハケメ後ヨコナデ 底部 ハケメ 脚筒部上位 ナデ	坏 口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体部 ハケメ 底部 ハケメ 脚筒底部 ナデ	内面は二次焼成を受けもろい。
29	手づくね	口径 5.3 器高 4.8	赤褐色	微砂粒を含む	全 面 ナデ(指頭痕)	全 面 ナデ(指頭痕)	
30	コップ型土器	口径 11.8 器高 14.9	赤褐色	1mm大の砂粒を若干含む	全 面 磨滅 底部 ハケメ残	全 面 磨滅	
31	鉢	口径 14.0 器高 5.8	明茶褐色	微砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ 底部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ 底部 ヘラケズリ後ナデ	
32	瓶	口径 21.3 器高 21.0	明茶褐色	2mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部上位 ハケメ 把手 ナデ 体部下位 磨滅	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ	底部に径6cmの開孔1。
33	鉢	口径 16.0 器高 7.2	黄褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	全 面 磨滅	口縁部 磨滅 体部 ハケメ 底部 ハケメ	
34	鉢		淡赤褐色	微砂粒を少し含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ(ナデ状) 底部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ミガキ 底部 ナデ	内外面に黒色塗料(うるし?)が塗られる。
35	手づくね	口径 10.1 器高 4.3	暗茶灰色	微砂粒を多く含む	全 面 ナデ(指頭痕)	全 面 ナデ(指頭痕)	
36		口径 19.0 器高 31.0	暗灰色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 頸部直下より胴部 ヘラケズリ	
37	壺	口径 15.4 胴最大径18.8	灰白色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部上位 2cm巾でハケメを1周めぐらす 胴部上位 ヨコハケメ 胴部下位 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 頸部直下1.5cmより胴部 ヘラケズリ	胴部下位にコグ付着。
38	壺	口径 13.4 器高 15.6 胴最大径16.8	黄褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケメ 底部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラケズリ 底部 ヘラケズリ	外面胴部下位は赤変し器面剝離が著しい。
39	鉢	口径 12.0 器高 5.5	暗茶褐色	緻密	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 ナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 ナデ	
40	鉢	口径 6.2	淡赤褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 タタキ 体部上位 タタキ 体部下位 ナデ 底部 ナデ	全 面 ナデ(指頭痕)	
41	壺	口径 17.2 器高 13.2 胴最大径16.3	赤褐色	1mm大の砂粒を少し含む	口頸部 ヨコナデ 胴部上・中位 ヘラケズリ(ナデ状) 胴部下位 ヘラケズリ 底部 ヘラケズリ	口頸部 ヨコナデ 頸部直下より胴部 ヘラケズリ(ナデ状)後ナデ 底部 ヘラケズリ(ナデ状)後ナデ	
42	坏身	口径 13.0 器高 4.4	白黄色	微砂粒を中量含む	口縁部 ヨコナデ 受部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 天井部 ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 天井部 ヨコナデ後ナデ	須恵器(生焼?)
43	鉢	口径 12.5 器高 4.9	暗茶灰色	微砂粒を多く含む	口唇部 ナデ 体部 ナデ(指頭痕) 底部 ナデ	口唇部 ナデ 体部 ハケメ 底部 ヘラケズリ(ナデ状)	外面底部にワラ痕が認められる。
44	壺	口径 37.1 器高 56.6 胴最大径39.4	暗茶褐色	微砂粒を中量含むが密	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ後ヨコナデ 頸部 凸帯貼付後ヨコナデ 胴部 タタキ後ハケメ 中位に凸帯貼付後ヨコナデ 底部 ハケメ後ナデ	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ後ヨコナデ 頸部 ハケメ 頸部直下より胴部 ハケメ 底部 ナデ 後ナデ	

表13-4 G地区出土土器要説

45	甕	口径 49.6	黄褐色	1mm大の砂粒を少し含む	口唇部 ヨコナデ 口頸部 ハケメ 胴部上位 ハケメ	口唇部 ヨコナデ 口頸部 ハケメ後ナデ 胴部 ハケメ	頸部下1cm位の位置に凸帯がつくと思われる。
46	甕	口径 30.0	黄褐色	1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 頸部直下より胴部 ハケメ	口唇部 ヨコナデ 口頸部 ハケメ 胴部 ハケメ	
47	甕	口径 28.4 胴最大径29.3	黄褐色	1mm大の砂粒を多く含む	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ後ヨコナデ 頸部直下より胴部 ハケメ	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ後ヨコナデ 頸部直下より胴部 ハケメ	
48	甕	口径 26.4 胴最大径26.4	黄褐色	1mm大の砂粒を少量含む	口頸部 ハケメ 胴部上位・中位 ハケメ 胴部下位 ヘラケズリ	口頸部 ハケメ 胴部 ハケメ	
49	甕	口径 23.8 器高 32.7 胴最大径25.0	黄褐色	1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 頸部直下より胴部 ハケメ 後タタキ 底部 ハケメ後タタキ	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ 頸部 ヨコナデ 頸部直下より胴部上位中位 ハケメ 胴部下位 ナデ 底部 ナデ	口縁部より胴部下位にスス附着。胴部下位・底部は赤変する。
50	甕	口径 18.0 胴最大径22.0	黄褐色	1mm大の砂粒を少量含む	口縁部 ヨコナデ 頸部直下より胴部上位 タ タキ後ハケ 胴部下位 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 頸部直下より胴部 ハケメ 後ナデ	全面にスス附着。
51	甕	口径 17.2 器高 22.3 胴最大径17.2	黄褐色	1mm大の砂粒を多く含む	口頸部 ハケメ 胴部上位 ヘラケズリ 胴部下位 ハケメ 底部 ハケメ	口頸部 ハケメ 胴部上位 ハケメ 胴部下位 ナデ 底部 ナデ	胴部中位にわずかにススが附着。
52	甕	底径 7.0	赤褐色	1mm大の砂粒を多く含む	胴部 磨滅 底部 磨滅	胴部 磨滅(ハケメ痕が残) 底部 磨滅	
53	甕	口径 15.4 胴最大径15.6	黒褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 頸部直下1.5cmより胴部上 位 ハケメ 胴部中位・下位 ヘラケズ リ	
54	甕	口径 17.4 器高 19.2 胴最大径17.7	淡赤褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口頸部 ハケメ 胴部上位 ハケメ 胴部下位 ハケメ後ヘラケ ズリ 底部 ハケメ後ヘラケズ リ	全 面 ハケメ	
55	甕	口径 12.8 器高 18.0 胴最大径17.7	赤褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 頸部 ハケメ 胴部 ハケメ 底部 ハケメ	口頸部 ヨコナデ 頸部直下より胴部 ハケメ 底部ハケメ	胴部 中位にわずかにススが附着。
56	甕	口径 19.4 胴最大径27.7	黄褐色	1mm大の砂粒を多く含む	口唇部 ヨコナデ 口縁部 ハケメ 頸部 貼付凸帯 胴部 ハケメ 底部 ハケメ	口唇部 ヨコナデ 口頸部 ハケメ 胴部 ハケメ 底部 ハケメ	胴部下位に丹が残る。
57	壺	口径 13.0 胴最大径17.2	黄褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ヨコナデ 頸部直下より胴部上位 格 子状のハケメ 胴部下位 磨滅	口頸部 ヨコナデ 頸部直下1.5cmより胴部 ハケメ	
58	壺	口径 11.1 器高 14.7 胴最大径14.2	赤褐色	0.5mm大の砂粒を多量に含む	口唇部 ヨコナデ 口頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 磨滅(一部にハケ メ残) 底部 磨滅	口頸部 ヨコナデ 頸部直下より胴部 磨滅 底部 磨滅	
59	壺	口径 12.8 器高 15.6 胴最大径17.5	淡赤褐色	1mm大の砂粒を少量含む	口頸部 ヨコナデ 胴部上位 ハケメ後ナデ 胴部下位 ヘラケズリ 底部 ヘラケズ	口頸部 ヨコナデ 胴部 ナデ 底部 ナデ	
60	壺	口径 10.2 胴最大径14.0	淡赤褐色	1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ハケメ 胴部上位 ハケメ 胴部下位 磨滅 底部 磨滅	口縁部 ハケメ 頸部直下より胴部 ナデ 底部 ナデ	胴部中位にわずかにススが附着。

表13-5 G地区出土土器要説

61	壺	口径 9.8 器高 12.9 胴最大径15.9	暗黄褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口頸部 ヨコナデ 胴部 ヘラケズリ(ナデ状) 底部 ヘラケズリ)ナデ状)	口縁部 ヨコナデ 頸部直下より胴部 ヘラケズリ(ナデ状) 底部 ヘラケズリ(ナデ状)	
62	壺	口径 14.4 器高 25.7 最大径 25.4	黄褐色	1~2mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ハケメ 頸部 ナデ 胴部 ハケメ 胴部下位下 磨滅	口縁部 ハケメ 胴部上半部 ハケメ後丁寧 頸部 ナデ 胴部下半部 ハケメ 底部 ハケメ後ナデ	外面 底部を除く全面にスス付着
63	壺	口径 12.2 器高 23 最大径 12.2	赤褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ハケメ 口縁上位 ヨコナデ 口縁部 ハケメ 頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 口縁中位 ハケメ 頸部 ヨコナデ 胴部 ハケメ 胴部下位下 ハケメ後ナデ 指頭痕	
64	壺	最大径 15.2	黄褐色	微砂粒を若干含む	胴部上位 ハケメ後ミガキ 胴部中位 ミガキ 胴部下位下 ヘラケズリ	胴部 ハケメ後ナデ	外面 胴部中位に刻み目凸帯
65	壺	口径 9.1 器高 9.7	淡黄褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 磨滅(ハケメ残) 底部 ナデ	頸部部 ヨコナデ 胴部上位 ナデ(指頭痕残) 胴部中位 ハケメ 胴部下位下 ハケメ後ナデ	
66	壺	口径 9.4 器高 9	淡赤褐色	1~3mm大の砂粒を少し含む	全 面 磨滅	口縁部 磨滅 胴部 ハケメ	
67	壺	口径 8.9 器高 10	淡黄褐色	1mm大の砂粒をやや含む	口縁部 ハケメ後ナデ(磨滅) 胴部 ハケメ後ナデ(磨滅) 胴部下位下 ヘラケズリ	口頸部 ハケメ後ナデ 胴部 ヘラケズリ	
68	鉢	口径 14.4 器高 16.3	明黄褐色	1~2mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ナデ 体部 ハケメ(部分的にナデ状ヘラケズリ)	口縁部 ハケメ後ナデ 体部 ヘラケズリ(体部中位ヘラケズリ後ハケメ) 底部 ナデ	
69	鉢	口径 13 器高 11.5	黄褐色	0.5~1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ナデ 体部 ハケメ後ナデ 底部 ナデ	口縁部 ハケメ 体部上半部 ハケメ後ナデ 体部下半部 ナデ	
70	鉢	口径 13.6 器高 13	黄褐色	0.5~1mm大の砂粒を中量含む	口縁部 ナデ 体部上半部 ナデ 体部下半部 雑なハケメ 底部 ナデ	口縁部 ハケメ 体部 ハケメ 底部 ナデ	
71	鉢	口径 16.3 器高 10.1	淡黄褐色 ~ 黄褐色	0.5~1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ナデ 体部 ハケメ 底部 ナデ	口縁部 ハケメ後ナデ 体部 ハケメ	
72	鉢	口径 18.9 器高 8.8	淡黒褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 指頭痕 体部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 体部上位 ナデ 体部中位下 ハケメ	
73	鉢	口径 18.4 器高 8.3	淡赤褐色	1~2mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ナデ 体部 ハケメ	全 面 ナデ	
74	鉢	口径 16.8 器高 6.3	黄褐色	1~2mm大の砂粒を少し含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ(部分的にナデ状ヘラケズリ)	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	外面 底部を除く全面にスス付着 外面 底部赤変
75	鉢	口径 16.6 器高 6.4	黄褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ後ナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ後ナデ	
76	鉢	口径 10 器高 4.6	淡黒褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ナデ 体部 ハケメ後ナデ 体部下位 ハケメ 底部 ヘラケズリ	全 面 ハケメ	
77	鉢	口径 14.8 器高 4.5	赤褐色	1~2mm大の砂粒を多く含む	全 面 ハケメ	全 面 ハケメ後ヘラケズリ(ナデ状)	
78	鉢	口径 13.4 器高 4.2	赤褐色	0.5~1mm大の砂粒を中量含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ	

表13-6 G地区出土土器要説

79	鉢	口径 10.5 器高 3.2	淡赤褐色	微砂粒を多く含む	全 面 ナデ(指頭痕)	口縁部 ハケメ 体部上半部 ハケメ 体部下半部 ナデ(指頭痕)	
80	鉢	口径 12.6 器高 6.5	赤褐色	1~2mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ナデ 体部上位 ナデ 体部 ハケメ 底部 ナデ	口縁部 ハケメ 体部 ハケメ 底部 ナデ	
81	鉢	口径 11.7 器高 4.6	淡赤褐色	0.5~1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 ヨコナデ(指頭痕) 体部上位 ナデ 体部 ハケメ後ナデ	口縁部 ナデ後ヨコナデ 体部 ハケメ後ナデ	
82	鉢	口径 10.8 器高 5.9	赤褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ナデ 体部 ハケメ	口縁部 指頭痕 体部上半部 ナデ(指頭痕) 体部下半部 ナデ	
83	鉢	口径 11 器高 5.6	淡黒灰色	1mm大の砂粒を少し含む	口縁部 ナデ(指頭痕) 体部 ナデ(指頭痕) 底部 粗いヘラケズリ	口縁部 ナデ 体部 ハケメ	
84	脚台(壺)	脚裾径 11.8	黄褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	胴部下位 ハケ(ナデ状) 脚部上位 指頭痕 脚部 ナデ	胴部下位 ハケメ 底部 ハケメ 脚部 ハケメ	
85	瓶形土器	口径 20 器高 14.6	淡赤褐色	1~2mm大の砂粒を多量に含む	口縁部 ヘラケズリ(ナデ状) 体部上位 ヘラケズリ(ナデ状) 体部中位下 ヘラケズリ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体部上半部 ハケメ 体部下半部 ハケメ後ナデ	穿孔 1
86	瓶形土器	口径 16 器高 13.9	赤褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 タタキ 体部上位 タタキ 体部中位下 ヘラケズリ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体部 ハケメ 体部下位 ナデ	穿孔 1
87	瓶形土器		淡黄褐色	微砂粒を若干含む	体部 ハケメ後ヨコナデ	体部 ヘラケズリ	穿孔 径8mm 1 径4mm 3/6
88	高坏	口径 28 脚裾径 15 器高 20.6	黄褐色	1~2mm大の砂粒を多く含む	坏 口縁部 ハケメ後暗文(放射状) 体部 ハケメ後暗文(放射状) 底部 磨滅 脚筒部 磨滅 脚裾部 ハケメ	坏 口縁部 磨滅 体部 磨滅 脚筒部 ナデ 脚裾部 ハケメ(磨滅)	穿孔 2
89	高坏	口径 31.7	淡赤褐色	1~2mm大の砂粒をやや多く含む	全 面 磨滅(底部僅かにハケメ残)	全 面 磨滅	
90	高坏	口径 30.8	淡赤褐色	微砂粒を中量含む	全 面 磨滅	全 面 磨滅	
91	高坏	脚裾径 19.4	黄褐色	微砂粒を多く含む	坏 底部 磨滅(ハケメ残) 脚筒部 磨滅 裾部 暗文	坏 底部 磨滅 脚筒部 磨滅 裾部 ナデ	穿孔 1/2
92	高坏	脚裾径 16	黄褐色	微砂粒を多く含む	全 面 磨滅(部分的にハケメ残)	坏 底部 ハケメ 脚筒部 しぼり目、ナデ 裾部 ハケメ 裾端部 ハケメ後ヨコナデ	穿孔 2
93	高坏	脚裾径 17.4	黄褐色	微砂粒を中量含む	全 面 磨滅(部分的にハケメ残)	坏 底部 磨滅 脚筒部 しぼり目、ナデ 裾部 磨滅(ハケメ残)	穿孔 2
94	高坏	脚裾径 16.1	黄褐色	0.5mm大の砂粒を少し含む	脚筒部 ハケメ 脚裾部 ハケメ後ミガキ	脚筒部 しぼり目、ナデ 脚裾部 ハケメ	穿孔 0/2
95	高坏	脚裾径 17.3	黄褐色	微砂粒を多く含む	脚筒部 磨滅 脚裾部 暗文	脚筒部 しぼり目、ナデ 脚裾部 ナデ	穿孔 1/2
96	高坏	脚裾径 18.2	淡赤褐色	微砂粒を多量に含む	全 面 磨滅(ハケメ残)	脚筒部 しぼり目 脚裾部 磨滅(ハケメ残)	

表13-7 G地区出土土器要説

97	器台	受部径 13 脚裾径 14.4 器高 16	黄褐色	1mm大の砂粒を多く含む	受部 ハケメ 受部 下位 ヨコナデ 胴部 ハケメ 裾部 ハケメ	受部 ハケメ 受部 下位 ヨコナデ 胴部 ハケメ後タタキ 裾部 ハケメ	
98	器台	受部径 12 脚裾径 15.8 器高 16.3	黄褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	全 面 ハケメ	受部口縁部 ヨコナデ 受部 胴部 ハケメ 裾部 ハケメ	
99	器台	受部径 12.4 脚裾径 17.3 器高 23.1	黄褐色	1mm大の砂粒を多く含む	受部口縁部 ハケメ後ヨコナデ 受部 胴部 ハケメ 裾部 ハケメ 裾端部 ヨコナデ	受部口縁部 ヨコナデ 受部上半部 ハケメ後ヨコナデ 受部下半部 ナデ(指頭痕残) 胴部 ナデ 裾部 ヨコナデ	
100	器台	受部径 11.8 脚裾径 16.3 器高 22	淡赤褐色	1~2mm大の砂粒をやや多く含む	受部口縁部 ハケメ後ヨコナデ 受部 胴部 ハケメ 裾部 ハケメ	受部口縁部 ハケメ後ヨコナデ 胴部上半部 ナデ(指頭痕残) 胴部下半部 ハケメ 裾部 ハケメ	
101	支脚	受部径 7.8 脚裾径 12 器高 9.4	淡黄褐色	0.5~1mm大の砂粒を多量に含む	受部 ナデ 脚部 タタキ 脚裾部 ヨコナデ	受部 ナデ 脚部 ナデ 脚裾部 ヨコナデ	
102	支脚	脚裾径 11.2	淡赤褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	全 面 タタキ後ナデ	全 面 ナデ	
103	手づくね	口径 7.8 器高 9.5	淡黒褐色	1mm大の砂粒を少し含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ後ナデ	全 面 ヨコナデ	
104	手づくね	口径 7.2 器高 5	淡黄褐色	1mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ナデ 体部 ヘラケズリ(ナデ状)	口縁部 ナデ 体部 ヘラケズリ	
105	手づくね	口径 4 器高 3.1	赤褐色	1mm大の砂粒を少し含む	全 面 ナデ	全 面 ナデ	
106	坏蓋	口径 11.1 器高 3.7	淡青灰色	0.5mm大の砂粒を少し含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 天井部 回転ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 天井部 中心から4cmヨコナデ後雑なナデ	須恵器
107	壺	口径 15.4	淡赤褐色	0.5~1mm大の砂粒を中量含む	口頸部 ハケメ後ヨコナデ 胴部 ハケメ(一部ヘラケズリ)	口頸部 ヨコナデ 胴部 ヘラケズリ	外面全体スス付着
108	壺	口径 6.4 器高 8.1	淡赤褐色	0.5~1mm大の砂粒を中量含む	口頸部 ヨコナデ 胴部上位 ハケメ後ナデ 胴部 ハケメ 底部 ナデ	口縁部 ヨコナデ 胴部 ナデ 底部 指頭痕	
109	高坏	口径 19.3	薄茶褐色	1mm大の砂粒を少し含む	坏 口縁部 ヨコナデ 体部 ハケメ後ヨコナデ 底部 ハケメ 脚筒部 ナデ(ハケメ残)	坏 口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 ハケメ 脚筒部 ヘラケズリ	
110	高坏	口径 18.1	赤褐色	微砂粒を多量に含む	全 面 ハケメ後ヨコナデ	全 面 磨滅	
111	手づくね	口径 4.9 器高 2.3	淡赤褐色	微砂粒を多量に含む	全 面 ナデ	内 面 ナデ(指頭痕残)	
112	鉢	口径 12.4 器高 5.7	赤褐色	微砂粒を中量含む	口縁部 ヨコナデ 体部 磨滅(一部ミガキ残)	口縁部 ミガキ 体部 磨滅	
113	坏身	口径 14.3 底径 10 器高 5	青灰色	微砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 中心から2cmナデ	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ 底部 ヨコナデ後雑なナデ	須恵器
114	手づくね	口径 3.8 器高 3	黄褐色	微砂粒を多く含む	全 面 磨滅	全 面 磨滅	
115	鉢	口径 8.1 器高 3.1	淡赤褐色	1~1.5mm大の砂粒を多く含む	全 面 ナデ	全 面 ナデ(指頭痕残)	

表13-8 G地区出土土器要説

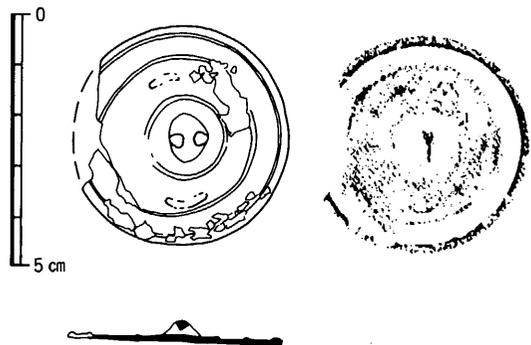
116	壺	口径 25.4	黄褐色	0.5~1mm大の砂粒を多量に含む	口唇部 口縁部 胴部	ハケメ後ヨコナデ ハケメ ハケメ	口唇部 口縁部 胴部	ハケメ後ヨコナデ ハケメ ハケメ	外面全体にスス付着
117	壺	口径 9.6 器高 18.5	黄褐色	1~2mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 頸部 胴部	磨滅(ハケメ) ハケメ後ヨコナデ ハケメ	口縁部 胴部	ナデ ナデ	
118	鉢	口径 11.1 器高 4.9	淡赤褐色	1mm大の砂粒を少し含む	全 面	ナデ	全 面	ナデ	
119	鉢	口径 8.7 器高 3.8	淡黒灰色	0.5~1mm大の砂粒を多く含む	全 面	ナデ	全 面	ナデ	
120	高坏	脚裾径 11	薄茶黄褐色	微砂粒を多く含む	全 面	ハケメ	脚 筒部 裾部	ナデ、しぼり目 ハケメ後ヨコナデ	
121	鉢	口径 21.8	暗褐色	0.5~1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 体部	ヨコナデ 磨滅(ハケメ残)	口縁部 体部	ヨコナデ ハケメ	
122	壺	口径 15 器高 19.7	暗褐色	1mm大の砂粒を少し含む	口縁部 胴部	ハケメ後ヨコナデ ハケメ	口縁部 胴部	ヨコナデ 粗いハケメ後ヘラケズリ	外面 胴部赤変
123	壺	口径 12	黄褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 頸部	ヨコナデ 磨滅(僅かにハケメ残)	口縁部 胴部	ヨコナデ ヘラケズリ	
124	壺	口径 15	黄褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 頸部 胴部	ハケメ後ヨコナデ ハケメ	口縁部 頸部 胴部	ヨコナデ ナデ ヘラケズリ	
125	壺	口径 9	黄褐色	1mm大の砂粒を少し含む	全 面	磨滅	全 面	磨滅	
126	鉢	口径 13.1 器高 5.2	赤褐色	微砂粒を多量に含む	口縁部 体部	ヨコナデ 磨滅	口縁部 体部	ヨコナデ 磨滅(ナデ)	
127	鉢	口径 12.4 器高 5.8	暗褐色	微砂粒を多く含む	口縁部 体部	ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ	口縁部 体部	ヨコナデ ナデ	
128	鉢	口径 14.4 器高 12.3	淡黄褐色	0.5~1mm大の砂粒を多量に含む	全 面	磨滅	全 面	磨滅	
129	甌	口径 25.2 器高 22.4	黄褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 体部 把手	ヨコナデ ハケメ ナデ	口縁部 体部	ハケメ後ヨコナデ ヘラケズリ	底部に径7cmの開孔
130	鉢	口径 13.2 器高 6.1	淡赤褐色	微砂粒を中量含む	全 面	磨滅	全 面	磨滅	
131	坏蓋	口径 13 器高 3.9	薄茶黄褐色	0.5mm大の砂粒を中量含む	口縁部 天井部	ヨコナデ 回転ヘラケズリ	口縁部 天井部	ヨコナデ 回転ヘラケズリ	須恵器
132	坏身	口径 13.1 器高 4.8	淡青灰色	微砂粒を多く含む	口縁部 体部 底部	ヨコナデ ヨコナデ 回転ヘラケズリ	口縁部 体部 底部	ヨコナデ 中心より6cmヨコ ナデ後や雑なナデ ヨコナデ後雑なナデ	須恵器 内面 底部にヘラ記号
133	器台	受部径 10.3 脚裾径 14.2 器高 16.4	黄褐色 ~ 赤褐色	1~2mm大の砂粒を多量に含む	受 部 胴 部 裾 部	磨滅(ハケメ残) 磨滅(ハケメ残) 磨滅(指頭痕)	受 部 胴 部 裾 部	ナデ ナデ 磨滅	
134	壺	口径 14 器高 26.8	淡赤褐色	1mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 胴部 胴部下位	ヨコナデ ハケメ 磨滅	口縁部 胴部 胴部中位	磨滅 ヨコナデ ハケメ	
135	鉢 (脚台付)	口径 9.2 器高 10.2 脚裾径 9.2	暗褐色	微砂粒を含む	口縁部 体部 脚部 脚裾部	磨滅 磨滅(ヘラケズリ) 丁寧なヘラケズリ ヨコナデ	口縁部 体部 脚部 脚裾部	磨滅 ナデ ハケメ ヨコナデ	外面 体部下位、脚部にスス付着
136	鉢 (脚台付)	口径 9.2 器高 9.2 脚裾径 9.2	赤褐色	微砂粒を含む	口縁部 体部 脚部	ナデ ナデ ヘラケズリ(ナデ状)	口縁部 体部 脚部	ナデ ナデ(ヘラ当り痕) ハケメ	内面 脚裾部に黒色塗料(漆?)が残る
137	壺	口径 16.5 器高 19.9	暗褐色	1mm大の砂粒を少し含む	口縁部 胴部 底部	ナデ ハケメ 磨滅(ハケメ残)	口縁部 胴部 胴部下半部	ハケメ ハケメ ハケメ後ナデ	
138	鉢	口径 19.4 器高 11.2	黄褐色	1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 体部 底部	磨滅(ハケメ残) 磨滅(ハケメ残) ハケメ	口縁部 体部 底部	磨滅 ハケメ後ナデ ナデ	

表13-9 G地区出土土器要説

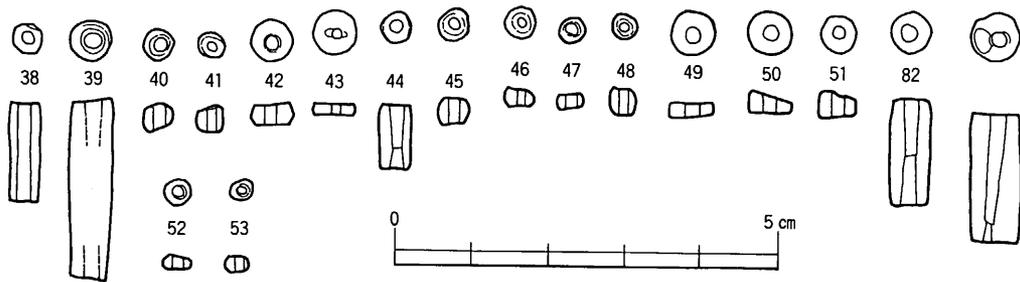
139	鉢	口径 19 器高 10.3	淡黄褐色	0.5~1mm大の砂粒を多く含む	全 面 磨 減	全 面 磨 減	
140	鉢	口径 10.6	淡黄褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多く含む	全 面 磨 減	口縁部 ハケメ 体 部 ハケメ 体部下位 ナデ	
141	鉢	口径 9.6 器高 4.9	淡黄褐色 ~ 暗褐色	1~2mm大の砂粒を多く含む	全 面 磨 減	全 面 磨 減	
142	壺 (脚台付)	口径 9.6	黄褐色	1mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 胴 部 ハケメ くびれ部 指頭痕 脚 部 ヨコナデ	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 胴 部 ナデ 底 部 ナデ 脚部底 ナデ	外面 口縁部、胴部上 位にスス附着 外面 胴部中位下赤変
143	壺	口径 17.2	淡赤褐色	1~2mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部 磨減 頸 部 ハケメ 胴 部 磨減 (部分的にハケメ残)	口頸部 磨減 胴 部 磨減	
144	坏	口径 12.3 底径 5.5 器高 2.8	黄褐色	1mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 体 部 ヨコナデ 底 部 糸切り	全 面 ヨコナデ	
145	皿	口径 6.5 底径 4.2 器高 1.5	黄赤褐色	微砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 体 部 ヨコナデ 底 部 糸切り	全 面 ヨコナデ	
146	鉢	口径 9 器高 5.1	暗褐色	1mm大の砂粒を若干含む	口縁部 ヨコナデ 体部上半部 ヨコナデ 体部下半部 磨減	口縁部 ヨコナデ 体 部 ナデ	
147	皿	口径 7 器高 1.9	黄褐色	微砂粒を含む	口縁部 ヨコナデ 体 部 ヨコナデ 底 部 糸切り	全 面 ヨコナデ	
148	壺	口径 8.8 器高 8.8	淡茶褐色	1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ヨコナデ 頸 部 ハケメ後ヨコナデ 胴 部 ハケメ 胴部下位下 ナデ	口頸部 ヨコナデ 胴 部 ナデ	
149	鉢	口径 15 器高 8.5	黄褐色	1~2mm大の砂粒を多く含む	口縁部 タタキ後ナデ 体部上位 タタキ後ナデ 体 部 ヘラケズリ 底 部 ナデ	口縁部 ハケメ 体 部 ハケメ 底 部 ナデ	
150	坏身	口径 10.3 器高 3.8	暗灰色	微砂粒をやや多く含む	口縁部 ヨコナデ 体 部 ヨコナデ 底 部 回転ヘラケズリ	口縁部 ヨコナデ 体 部 ヨコナデ 底 部 中心より3.5cmナ デ	須恵器 外面 底部にヘラ記号
151	壺	口径 8.6 器高 10.6	黄褐色 ~ 暗褐色	微砂粒、1mm大の砂粒を多く含む	口縁部 ハケメ後ヨコナデ 体部上半部 ハケメ 体部下半部 ハケメ後ナデ	口縁部 ヨコナデ 体 部 ミガキ 体部下位下 ナデ	

紡製鏡 (第140図)

SX32の西側壁近くから出土したものである。径4.4cmを測り、縁の厚さは1.8mmで、全体にやや反る。銅質、鋳上りともに不良で鈕は中心をややはずれる。背面には凸部が二重にめぐり、その間に2~3ヶ所の弧状の浮文が認められる。



第140図 G地区出土紡製鏡実測図 (2/3)



第141図 G地区出土玉類実測図 (1/1)

表14-1 G地区出土玉類計測表

(単位: mm)

No	出土遺跡	径	厚(長)	孔径	種別	色	材質	備考
72	G SX 10	5.95	16.10	2.20	管玉	淡緑色	ヘキギョク	
73	G SX 10	4.40	3.20	1.30	小玉	藍色	ガラス	
74	G SX 11	5.00	3.70	1.65	〃	〃	〃	
75	G SX 12	4.00	2.55	1.20	〃	〃	〃	
76	G SX 12	3.60	2.30	1.50	〃	淡青色	〃	
77	G SX 12	3.70	1.70	1.10	〃	青色	〃	
78	G SX 12	6.80	3.85	1.30	白玉	—	滑石	
79	G SX 17	3.05	1.80	0.90	小玉	濁黄緑色	ガラス	
80	G SX 17	2.60	1.85	0.55	〃	〃	〃	
81	G SX 17	4.45	2.90	0.65	〃	藍色	〃	破片½
82	G SX 20	5.60	13.65	1.65	管玉	深緑色	ヘキギョク	
83	G SX 23	—	—	—	小玉	明青色	ガラス	小破片
84	G SX 24	4.05	2.95	1.25	〃	淡青色	〃	P-①
85	G SX 25	3.55	2.30	0.65	〃	〃	〃	
86	G SX 26	4.45	2.25	1.65	〃	〃	〃	上層
87	G SX 26	3.85	2.60	1.30	〃	明青色	〃	
88	G SX 26	5.50	3.55	1.65	白玉	—	滑石	
89	G SX 31	2.85	1.85	0.80	小玉	明藍色	ガラス	
90	G SX 31	5.70	4.15	1.35	〃	〃	〃	上層
91	G SX 31	4.50	3.10	1.20	〃	藍色	〃	
92	G SX 31	4.65	2.90	1.55	〃	淡青色	〃	
93	G SX 31	—	2.70	—	〃	暗藍色	〃	
94	G SX 32	4.50	2.60	1.30	〃	淡青色	〃	
95	G SX 32	3.35	2.10	0.95	〃	〃	〃	
96	G SX 32	3.05	2.90	0.70	〃	明青色	〃	
97	G SX 32	2.85	3.35	1.15	〃	〃	〃	
44	G SX 35	4.20	8.90	1.80	管玉	深緑色	ヘキギョク	
45	G SX 35	3.30	3.35	1.10	小玉	明青色	ガラス	
46	G SX 35	4.00	2.35	1.00	〃	藍色	〃	
47	G SX 35	3.20	1.95	1.30	〃	明青色	〃	
48	G SX 35	3.10	3.25	0.80	小玉	深藍色	ガラス	
49	G SX 35	5.75	1.95	1.80	白玉	—	滑石	
50	G SX 35	6.05	3.00	1.75	〃	—	〃	
51	G SX 35	5.05	3.55	1.55	〃	—	〃	
52	G SX 35	3.50	1.95	0.90	小玉	淡緑色	ガラス	
53	G SX 35	3.10	2.10	0.85	〃	明青色	〃	

表14-2 G地区出土玉類計測表

(単位: mm)

No.	出土遺跡	径	厚(長)	孔径	種別	色	材質	備考
98	G SX 36	6.55	16.90	0.600~ 2.00	管玉	深緑色	ヘキギョク	
99	G SX 36	5.10	3.30	1.25	小玉	淡青色	ガラス	
100	G SX 36	3.65	3.40	1.10	〃	明青色	〃	
101	G SX 36	3.50	2.50	0.75	〃	藍色	〃	
102	G SX 36	3.75	2.35	1.15	〃	〃	〃	
103	G SX 36	—	3.10	—	〃	〃	〃	破片1/2
104	G SX 36	3.20	2.25	1.00	〃	明青色	〃	上層
105	G SX 36	—	2.75	—	〃	暗藍色	〃	破片1/2
106	G SX 46	6.30	2.50	1.50	白玉	—	滑石	
107	G SX 46	6.30	2.65	1.75	〃	—	〃	
108	G SX 48	5.10	1.70	1.55	〃	—	〃	
109	G SX 48	—	—	—	〃	—	〃	破片1/2
110	G SX 50	3.35	2.70	0.90	小玉	暗藍色	ガラス	
111	G SX 50	4.75	3.45	1.05	〃	〃	〃	
112	G SX 50	3.80	2.75	0.95	〃	〃	〃	
113	G SX 50	3.50	1.80	0.80	〃	明藍色	〃	
114	G SX 50	3.70	2.80	1.20	〃	藍色	〃	
115	G SX 50	4.00	2.80	1.00	〃	〃	〃	南側土器東側
116	G SX 50	4.60	2.10	1.55	〃	淡青色	〃	西側ベルト中心部
117	G SX 50	2.85	3.00	0.80	〃	〃	〃	床面
118	G SX 50	4.15	3.75	1.40	〃	〃	〃	
119	G SX 51	4.45	2.20	1.80	白玉	—	滑石	
120	G SX 51	4.00	3.50	1.15	小玉	藍色	ガラス	(f)
121	G SX 51	5.15	2.60	1.40	白玉	—	滑石	
122	G SX 52	3.95	2.80	1.25	〃	—	〃	
123	G SX 52	4.30	2.70	1.20	小玉	明青色	ガラス	
124	G SX 52	3.10	2.60	0.80	〃	〃	〃	
125	G SX 52	2.95	1.95	0.80	〃	淡青色	〃	
126	G SX 52	3.40	1.60	1.65	〃	〃	〃	両端カット
127	G SX 52	3.10	3.90	1.05	〃	〃	〃	〃
128	G SX 52	3.15	1.95	1.15	〃	藍色	〃	
129	G SX 52	3.85	2.45	1.20	〃	暗藍色	〃	
130	G SX 52	5.30	2.20	1.60	白玉	—	滑石	
131	G SX 52	4.75	1.45	1.40	〃	—	〃	
132	G SX 53	3.15	2.15	0.95	小玉	暗藍色	ガラス	
133	G SX 53	3.95	2.30	1.20	〃	〃	〃	
134	G SX 53	5.25	3.00	1.85	〃	藍色	〃	
135	G SX 54	3.65	2.10	1.25	〃	淡緑色	〃	
136	G SX 54	4.20	3.10	1.45	小玉	藍色	〃	床上部
137	G SX 54	3.35	2.10	1.20	〃	淡緑色	〃	ベット上
138	G SX 54	4.10	2.30	1.15	〃	藍色	〃	
139	G SX 56	4.60	3.30	1.10	〃	淡青色	〃	
140	G SX 56	2.95	1.60	0.85	〃	〃	〃	
141	G SX 59	—	3.80	—	〃	〃	〃	焼土内・破片1/2
142	G SX 59	—	3.80	—	〃	〃	〃	破片1/2
143	G SX 59	5.30	2.45	1.65	〃	明藍色	〃	
144	G SX 59	4.95	1.95	1.50	白玉	—	滑石	焼土内
38	G SX 60	3.60	13.15	1.45	管玉	淡緑色	ヘキギョク	側面2ヶ所欠損
39	G SX 60	6.00	23.80	2.15	〃	〃	〃	
40	G SX 60	3.10	3.55	0.95	小玉	明青色	ガラス	

表14-3 G地区出土玉類計測表

(単位:mm)

No.	出土遺跡	径	厚(長)	孔径	種別	色	材質	備考
41	G SX 60	3.65	3.20	1.10	〃	暗藍色	〃	
42	G SX 60	5.30	3.15	2.10	白玉	—	滑石	
43	G SX 60	5.80	1.85	1.35	〃	—	〃	
145	G SX 63	4.70	3.15	1.80	〃	—	〃	
146	G P-78	4.05	2.00	1.55	小玉	明青色	ガラス	
147	G P-106	3.50	2.15	0.90	〃	藍色	〃	
148	G P-117	—	—	—	管玉	深緑色	ヘキョク	破片
149	G P-148	5.95	—	3.25	管玉?	茶褐色	?	
150	G P-148	7.60	4.20	2.10	小玉	暗濃藍色	ガラス	
151	G P-148	5.10	—	—	練玉?	黒色	?	
152	G P-159	4.35	10.75	1.10	管玉	白緑色	ヘキョク	風化顕しい
153	G P-164	2.80	2.10	0.50	小玉	明青色	ガラス	
154	G P-171	2.30	1.20	0.75	〃	淡緑色	〃	
155	G P-273	9.75	7.80	2.00	白玉	—	滑石	
156	G 表採	5.25	2.25	2.10	〃	—	〃	
157	G 表採	2.25	1.80	0.50	小玉	青色	ガラス	
158	G 表採	8.10	5.40	1.25	〃	濃藍色	〃	
159	G 表土	2.80	1.80	0.50	〃	淡青色	〃	破片 $\frac{1}{4}$
160	G 表土	2.95	2.05	0.75	〃	明青色	〃	
161	G 表土	6.15	2.00	1.35	白玉	—	滑石	一部欠損
162	G 表土	6.15	1.10	1.30	〃	—	〃	
163	G 表採	2.80	1.55	0.80	小玉	藍色	ガラス	

石器 (第142図)

1～7は石庖丁である。1はSX57から出土し一側端部がわずかに欠損するが全長10.1cm・幅3.6cm・厚さ0.6cmのほぼ完形品である。背部は外湾し、端部が平面をなす。孔は上位にあり両面からの回転穿孔で、未貫孔も2つある。刃部は不均整で外湾する。石材は赤紫色凝灰質砂岩である。2はSX56から出土し、幅5.2cm・厚さ0.5cmの折損品である。背部は直線で端部が平面をなす。孔は上位にあり、孔間が狭い。刃部は円弧を描く。石材は淡灰色粘板岩である。3はSX36から出土し、幅4.1cm・厚さ0.6cmの折損品である。背部は両側がやや下がり、端部は薄い。孔は両面からの回転穿孔である。最大厚部は中厚部下位にある。石材は淡灰色細粒砂岩である。4はSX59から出土し、現存幅5.5cm・厚さ0.45cmの折損品である。背部は直線で、端部が平面をなす。孔は上位にあり、回転穿孔である。石材は緑泥片岩である。5はSX50出土の折損品で、幅4.9cm・厚さ0.55cmである。背部は直線をなし、孔は回転穿孔で、未貫孔が2つある。石材は緑泥片岩である。6はSX61から出土した折損品で、現存幅3.9cm・厚さ0.45cmである。平面形態は直線刃半月形、背端部はほぼ平面をなす。孔は中位近くにあり、両面からの回転穿孔である。刃部は両面からやや不均等に研削する。石材は淡灰色細粒砂岩である。7はSX28より出土した。一側部の小片で、背部は外湾する。石材は砂質片岩である。

8・9・12・13は砥石である。8はSX35から出土した。小片で基本的に柱状をなすと考えられる。石材は淡灰色凝灰質細粒砂岩である。9はSX31から出土した。幅1.4cm・厚さ0.8cm

と小形で、細くなった中央部から折損する。砥面は四面あるが、主要な砥面は一面のみである。石材は淡灰色細粒砂岩である。12はSX52から出土した。折損品であるが、現存長15.7cm・幅3.4cm・厚さ3.0cmの中形品である。柱状をなし、砥面は三面有する。石材は暗灰色細粒砂岩である。13はSX01から出土した。全長28.5cm・幅11.4cm・厚さ3.5cmをはかる大形の完形品である。形態は板状をなし、砥面は基本的に四面ある。石材は淡緑灰色の細粒砂岩である。

10は紡錘車で、Ⅱ地点のSX30から出土した。残存度50%の折損品である。径4.1cm・厚さ1.1cm・孔径0.8cmである。断面形態は台形をなし、側縁部は幅0.5cm前後で上下に削りだす。上下面は平坦面をなし、孔は両面からの回転穿孔か。石材は滑石である。

11はⅠ地点のP56より出土した、器種不明の石器である。折損品であるが復元径約8cmで中央部に径約2.3cmの孔を有する。孔は両面からの回転穿孔であるが、片面は狭く、他の面は広い。最大厚は1.7cmで孔のすぐ上面にあり、周縁部へと両面から研削し刃部をつくりだす。形態は環状石斧に類似する。石材は滑石片岩である。

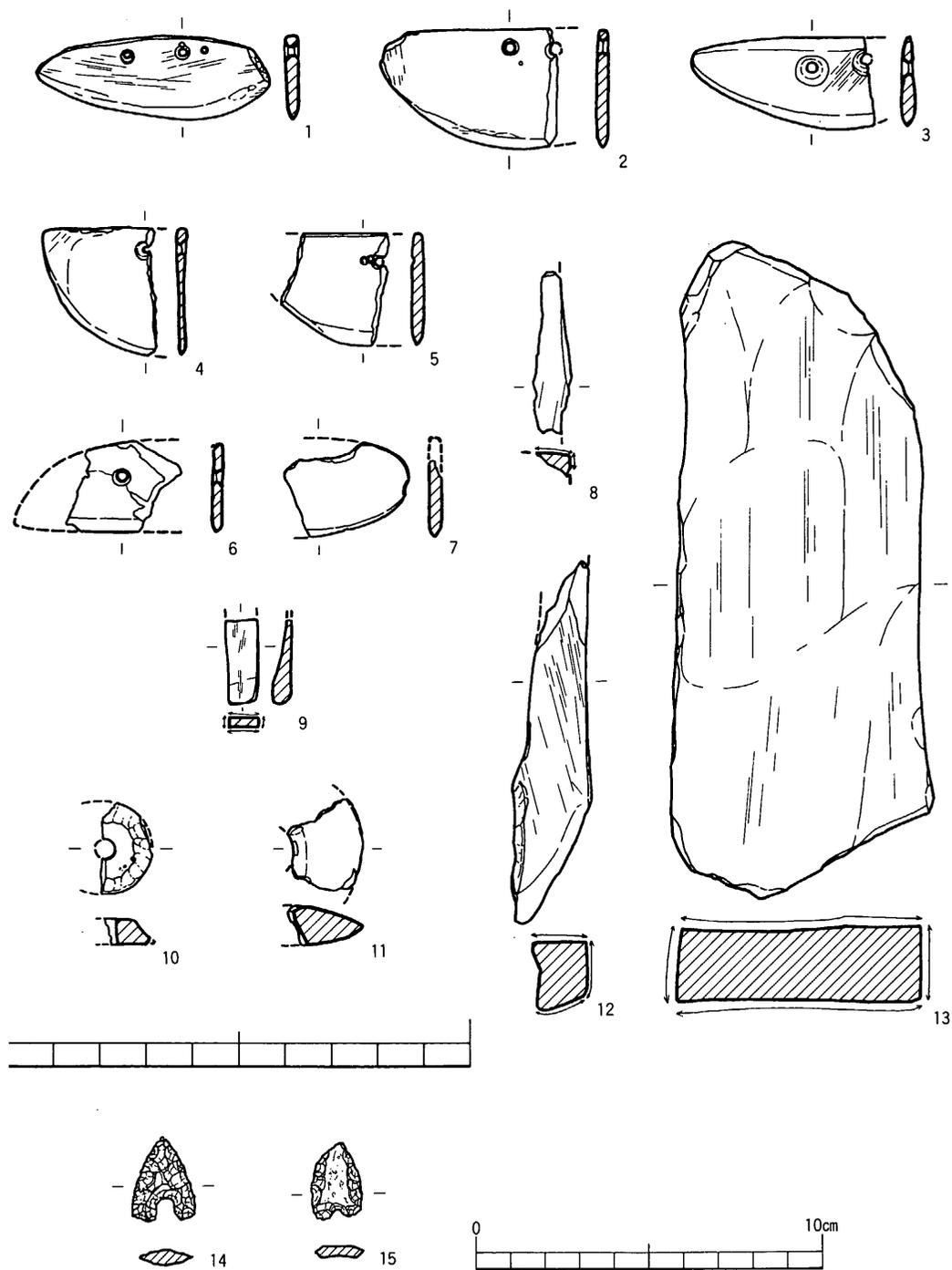
14・15は打製石鏃である。14はSX32から出土した。全長2.4cm・幅1.8cm・厚さ0.45cmのほぼ完形品で、基部に深い抉入を施す。石材はサヌカイトである。15は表採品で、全長2.2cm、幅1.4cm・厚さ0.35cmの完形品である。一面には自然面が大きく残り、基部には小さい抉入を施す。石材は腰岳産かと考えられる黒曜石である。

土製品 (第143図)

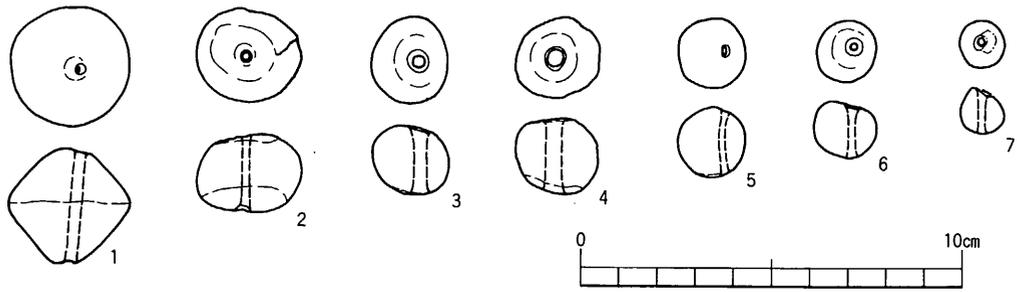
1～7はすべて土玉ないしは土錘と考えられ、すべてほぼ完形品である。1はⅠ地点のSX01から出土した。長さ3.1cm・径3.2cm・孔径0.3cmのソロバン玉形をなす。2はSP110から出土しており、長さ2.1cm・径2.7cm・孔径0.2cmで、やや扁平である。3はP292から出土しており、長さ1.8cm・径2.3cm・孔径0.35cmである。4はSP110から出土しており、長さ2.0cm・径2.3cm・孔径0.45cmである。5はⅡ地点のSX47から出土し、長さ1.85cm・径1.9cmのほぼ球形をなし、孔は長方形の断面形をなし長辺が0.2cmである。6はSX47から出土しており、長さ1.5cm・径1.65cm・孔径0.2cmである。7はSX12から出土し、長さ1.2cm・径1.3cmのほぼ球形に近く、小形で、孔径0.2cmである。

鉄器 (挿図144)

1は溝4出土の手鎌である。刃部は部分的に弧を描き遺存は良好。長さ8.4cm、刃部幅3.3cm、厚さ5mmを測る。2はP-66出土の無茎の鉄鏃で全長5.9cm、身幅2.3cm、厚さ3mmを測り、わたくりの部分に木質が残る。3は完形の鉈で、刃部は鏃を持たず断面三日月状を呈する。住居址17出土である。4は半分以上欠失した非常に小形の手鎌である。現存長2.8cm、刃部幅1.8cm、厚さ2mmを測る。住居址28出土。5は住居址52出土の鉈で、柄基部を欠損。鏃は持たず断面三日月状を呈する。6は住居址60出土の袋状鉄斧である。遺存は良好で全長5.4cm、刃幅2.5cm、

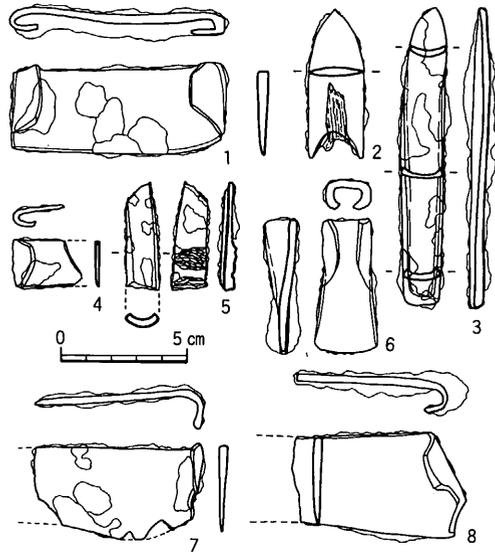


第142図 G地区出土石器実測図 (縮尺は1~13が1/3、14・15が1/2)



第143図 G地区出土土製品実測図 (1/2)

袋部1.8cmを測る。刃部は撥形を呈する。7は52トレンチ出土の手鎌で一方の袋部を欠失している。袋部の折り返しは、やや直線的で現存長6.6cm、刃幅3.5cm、厚さ3.5mmを測る。8、住居址10出土の鎌である。鋒部部分を大きく欠失しているが、刃部幅は基部から鋒方向に細くなっていくと思われる。現存長6.8cm、刃部幅3.4cm、厚さ3mmを測る。



第144図 G地区出土鉄器実測図 (1/3)

X ま と め

A地区の調査では、住居跡・掘立柱建物等を検出した。A-I区を中心に調査成果を記述したい。

住居跡は、長方形プランを呈すもので、2軒が検出された。出土した須恵器からして、IV・V期の時期が考えられる。IV区検出の住居跡も同時期のものである。

掘立柱建物は、9棟が確認されたが、建物の方向には斉一性がなく、方向的に比較するといくつかに分けることができる。① SB03・04・06・10、② SB01・07、③ SB05・08の3群で

ある。SB09は②群に近い方向である。いずれもほぼ真北に近い方向を示す。

遺物から観察すると、遺構上面に堆積する暗紫褐色～黒褐色土層に含まれる遺物と柱穴掘り方内より検出された遺物は型式的には、それほどの時期差はみられず、須恵器編年ではV・VI期に属するものが主体となっており、掘立柱建物はこの時期が比定されよう。

また、A-I区はこのような建物群の遺存する遺跡の一部で、その広がりもかなり広いものであるが、建物の規模や時期と現地名が吉木（蘆木から転じたものか、隣接する現大字名に「阿志岐」がある。）ということから、当A地区が、西海道の駅家の一つである「蘆城駅家」の跡ではなかろうかと考えられる。

B地区は、庄内式土器の新しい段階から布留式土器の範中に収まる古式土師器を伴う住居跡を主体とする遺跡である。中でもSX02には大量の土器が投棄されていた。D地区は布留式土器から5世紀前半に至る住居跡で、SX05からは須恵器を模して作られた土師器の甕が出土し、SX19からは古式須恵器が出土している。SX23は布留式の高坏と在地系の高坏が伴出し、56（土器番号）は畿内でみられるタイプのものである。また、A地区よりは小規模であるが奈良時代の掘立柱建物及び土壌が検出された。E地区は、D地区とほぼ同時期に営まれていたと思われる住居跡が検出された。F地区は、FⅡ区で弥生時代後期の土器が多く含まれる溝を検出した。ほか、FⅢ区の住居跡は遺物が少なく明瞭でないが、E・D地区の住居跡とほぼ同時期の住居跡と推定される。G地区は、住居跡が集中しており、弥生時代後期からピークを弥生時代終末に迎え、5世紀前半までみられるほか、古墳時代後期以降の住居跡もみられる。B地区では在地系の土器が極めて少ないのに対し、G地区の在地系の土器を中心とする遺構のあり方、また、D・E・F地区の状況を見ると、古墳時代前期の変化が早急な事がうかがえる。しかし、いまだ遺物・遺構について十分な検討ができておらず、C地区（古式須恵器と土師器が共伴する住居跡等）の調査報告と伴に後編にゆずりたい。

御笠地区小字集成図

解 説

御笠地区小字集成図 凡例

1. はじめに
2. 字の区画について
3. 御笠の由来と蘆城駅家
4. ホノケについて
5. 御笠地区小字地名表

御笠地区小字集成図 凡例

1. この図は、御笠地区圃場整備事業対象地およびその周辺の小字・ホノケを集成したものである。
2. 原図は「筑紫野市都市計画図」（1：2500、昭和45年7月測図、同53年1月修正）を使用し、2分の1に縮尺した。
3. 圃場整備対象区域内の字区画は、「御笠地区県営圃場整備事業従前図」（1：2000）と「筑紫野市字名一覧表」（昭和52年6月）を対照し作図した。
4. 大字吉木・原については、国土調査に基づく地籍集成図と字名一覧表を対照して作図した。
5. 大字天山・牛島・永岡については、字図集成図（1：2000、昭和58年9月、筑紫野市税務課資産税係）をもとに作図した。
6. 大字阿志岐・天山の山林については、地籍図等からの作図が困難なため、青柳栄一氏作成の「筑紫野市字図集成図」（1：10000、昭和52年6月）を参考にさせていただいた。
7. 太赤線は、大字界を示す。
8. 細赤線は、小字界を示す。
9. 赤破線は、推定の字界を示す。
ただし、推定にあたっては山林部を除き、字界のいくつかの分岐点を字図集成図、地籍集成図をもとに方位・距離を算定して作成した。
10. アミ部は、ホノケの範囲を示す。
11. 小字集成図の作成及び解説の執筆は、山村淳彦（筑紫野市立歴史民俗資料館）が担当した。

1 はじめに

本市では、昭和46年から12年間にわたって順次小字を廃止してきた。これによって土地に関する行政事務が簡素化されてきたわけであるが、長年呼び親しんできた地名が消え、無味乾燥な番地だけになってしまうことに寂寞の感をいだく人々が多かったことも事実である。

しかしながら、かつて柳田国男が指摘したように「地名の中にはいろいろの過去の史料、他のなんらの記録にも、いまだかつて載せ伝えようとしなかった事実が、間接ながら保管せられている」（『地名の研究』）とするならば、消滅していく小字について記録を作成しておくことは、あながち懐古の趣にとどまるものではあるまい。そこで、御笠地区圃場整備によって耕地の区画が一変した地域とその周辺について小字集成図を作成し、若干の解説等を付して、御笠地区遺跡発掘調査報告書に加えていただくことにした次第である。

2 字の区画について

—

現在に至る大字の区画は、大まかにいえば太閤検地によって形づくられたといえる。

筑前では天正年間に小早川隆景による検地が行なわれたが、これは各村の^{ましだし}指出によったものであり、実際の測量は行なわれていないといわれている。その後、文禄検地を経て黒田長政の慶長検地によって村域はほぼ確定した。

この村域は近代以降も大きく変わることはなく、明治5年の大区・小区制、11年の郡区町村編成法の実施などによっても村区画を単位として行政区の改変がなされたため、旧来の村界は保たれたのである。そして、同21年4月25日に発布された町村制によって、江戸時代以来の区域を基礎にした村が「大字」（施行は22年4月1日）となったが、これも名称の変更にとどまり、実際上の境界は存続した。

二

小字の区画がどのようにして出来たのかは不明な点が多い。

検地帳には、村をひとまとまりとして耕地一筆ごとに字名・地位・反別・石高・地種・作人名が記され、それをもとに作成された名寄帳にも字名が記されている。小字の変遷を考える上では大変参考になるが、それらを見ると現在伝わっている小字名とはだいぶ異なっていること

がわかる。その範囲を確定することはもはや不可能であるが、近世に幾度かの字の変遷があったことを知りうる。

明治5年正月には「高反別帳」が作成され、これには番地・字名・地位・反別・高・土地所有者の別が記載されている。基本的⁽¹⁾に検地帳のスタイルをとっているが、翌年の地租改正に向けて作成されたものと思われ、壬申戸籍による屋敷地とともに、このとき初めて耕地に番地が付されたと考えられる。ただこの時点では、すべての土地に番地が付されたわけではなく、田畑宅地に限られた。

同21年に「総丈量野取図帳」および字図が作成されたが、野取図帳には旧番地が朱で、新番地が墨で記されている。これまで無番地であった山林原野にも新たに番地を付す必要が生じたため、番地替えされたものであるが、この時点ですべての土地に番地が付されたと考えられる。しかし、番地替えはあったものの、字区域の変更は行なわれていない。

同32年に制定された耕地整理法によって、全国的にみると耕地に係わる土地の区画形状が変わったことは予想されるが、御笠地区ではその変更を受けた形跡は認められない。

なお、土地の区画形状が変わるということには、ふた通りの意味がある。ひとつは土地の現況そのものから変わるということであり、ひとつは、分・合筆により土地台帳・地籍図の上で変わるということである。

土地区画の異動は、戦後にはげしさを増す。昭和22年、地方自治法が制定され、議会の議決を経れば区画の変更が可能となった。また26年制定の国土調査法により、土地所有者の同意があれば、小字区画を変更できるようになった。

本市では、43年から国土調査を継続中であるが、調査の遂行上、着手前に個別的小字の廃止を行っており、細部については以前の区画と異なってくる。その箇所がどう変わったか（土地の異動経歴）を調査することは多くの困難を伴い、時間的な制約もあって、御笠地区大字吉木・原については調査完了後の地籍図をもとに小字集成図を作成した。従って一部（特に大字原字堀浦と石坂）については、細部の異動（目安として田畑・宅地一筆程度）があつていることを明記しておく。

さらに本市では、40年代から始まった大型開発が全市的な小字廃止の必要を惹起させた。すなわち、小字を異にする区画の合筆整理に関する行政事務を、全面的に見直す必要に迫られたのである。その当面の問題は、桜台団地の建設であった。45年に議決され、翌年これに係わる大字常松・永岡・諸田の各一部の小字を廃止した。その後順次廃止され、56年の御笠地区に次いで、翌57年の山口・筑紫地区で市内全域の小字廃止を完了した。

近世以来の小字区画はここに消滅した。大字区域内であれば、かなり自由な合筆が可能となったため、仮に将来、旧小字番地と新番地を付合させていくと、全く異なった区画形状の小字域となる地域が多くなるであろう。小字集成図の作成が急務であると痛感させられる。

なお、小字廃止の理由としては、市建設課から次のような事項が示されている⁽²⁾。

1. 地籍調査による地籍図は、横40cm縦30cmの図面により作成されるため、小字単位の図面ではないので小字の必要性がない。
2. 開発に伴う土地の異動が多いが、小字が異なると隣接地でも合筆ができないので筆数が増加し、土地の区画（筆界）が煩雑となる。
3. 山間部では昔の田・畑と山林・原野部は小字が異なるところが多いが、山林化のため小字界の不明地が多く、同一所有部分については地籍調査による合筆の申出が多いが、上述2のとおり小字が廃止されていないと合筆整理ができない。
4. 土地の公簿である登記簿や、固定資産課税台帳に関係する事務処理は件数が非常に多いため、小字が廃止されると土地に関する行政事務が簡素化される。
5. 小字は小範囲の地名表示で、現在の行政区名（例えば大門、大坪、湯町等）に使用されている字名もあり、また、農地や山林の地名として呼称し親しまれているところもあるが、土地表示の公称として存置しなければならないということではない。

なお、公称は廃止しても通称の使用は差し支えない。

6. 戸籍法による本籍地及び住民基本台帳法による住所の表示は市、大字、地番で記載され、小字名は記載されない。

以下、参考までに土地区画の異動に係わる法令を掲げておくが、もとより体系化されたものではないことをお断わりしておく。

なお、文字は新字体に改めた。

〈1〉地租改正法（抄）

明治6年7月28日

太政官 第272号

今般地租改正ニ付旧来田畑貢納ノ法ハ悉皆相廢シ更ニ地券調査相済次第土地ノ代価ニ隨ヒ百分ノ三ヲ以テ地租ト可相定旨被 抑出候条改正ノ旨趣別紙条例ノ通可相心得且従前官庁並郡村入費等地所ニ課シ取立来候分ハ総テ地価ニ賦課可致尤其金高ハ本税金ノ三ヶ一ヨリ超過スヘカラス候此旨布告候事

（別紙）

地租改正条例

第4章 地租改正ノ上ハ田畑ノ称ヲ廢シ総テ耕地ト相唱其余牧場山林原野等ノ種類ハ其名目ニ寄り何地ト可称事

第5章 家作有之一区ノ地ハ自今総テ宅地ト可相唱事

(別冊)

地方官心得書

第40章 税法改正ニ因リ地価ヲ調理スルハ都テ旧来ノ貢額ニ拘ハラス銘々實際売買スヘキ見込

ノ価左ノ雛形ノ如ク書載シテ進達スヘキ旨村々へ布達スヘシ

雛形

何番 一田何反歩 何之某印

此収獲米何程 但種肥其外諸費ヲモ引去ラス一作又ハ兩毛作トモ総テ其地一歲ノ収獲ヲ算ク可シ

地価何程

何番 一畑何反歩 右同人印

小作人某印

此収獲品何程 但畑ハ麥桑茶藍ノ類總テ其品ノ數量判然タルモノハ悉ク記載スヘク其品柄ニヨリ其量ヲ記シ難キモノハ収利ノ代金ヲ記スヘシ

地価何程

但小作米何程

何番 一屋敷何反歩

地価何程

如此一人別ニ相認一村ノ合計左ノコトク仕訳スヘシ

合何拾何町何反何畝何歩 但米何

地価何萬何千何百何拾何円何拾何錢何厘

内

一田何反歩

地価何程

内

反別何程

此収獲米何程 自作

地価何程

反別何程

此収獲米何程 小作

地価何程

小作米何程

一畑何反歩

地価何程

内

反別何程

此収獲品何程 自作

地価何程

反別何程

小作

此収獲品何程

地価何程

小作金何程

一屋敷何反歩

地価何程

外

一持山何反歩 如此種類ハ持主住居
帳別段ニ仕立ハキ事

地価何程

一林何反歩

地価何程

右ハ今般税法御改正ニ付私共村方銘々持地反別代価等可申上旨御達シニ付私共立会従前隠田切開繩伸ノ類マテ地毎ニ取調箇所落ハ勿論隠歩等一切無御座且取揚米並小作米等聊詐欺ノ儀不奉申上候若心得違ノ儀有之後日相頭ハルヽニ於テハ如何様ノ御処分有之候トモ毛頭申分無御座候依之地主一同調印ヲ以奉申上候以上

何国何郡何村

百姓総代

年号月日 何某印

戸長

何某印

何府知事県令何某殿

〈2〉町村制（抄）

明治21年4月17日

法律第1号

第3条 凡町村ハ従来ノ区域ヲ存シテ之ヲ変更セス但将来其変更ヲ要スルコトアルトキハ此法律ニ準拠ス可シ

第4条 町村ノ廢置分合ヲ要スルトキハ關係アル市町村会及郡参事会ノ意見ヲ聞キ府県参事会之ヲ議決シ内務大臣ノ許可ヲ受ク可シ

町村境界ノ変更ヲ要スルトキハ關係アル町村会及地主ノ意見ヲ聞キ郡参事会之ヲ議決ス其数

郡ニ涉リ若クハ市ノ境界ニ涉ルモノハ府県参事会之ヲ議決ス

町村ノ資力法律上ノ義務ヲ負担スルニ堪ヘス又ハ公益上ノ必要アルトキハ関係者ノ異議ニ拘ハラズ町村ヲ合併シ又ハ其境界ヲ変更スルコトアル可シ

本条ノ処分ニ付其町村ノ財産処分ヲ要スルトキハ併セテ之ヲ議決ス可シ

第5条 町村ノ境界ニ関スル争論ハ郡参事会之ヲ裁決ス其数郡ニ涉リ若クハ市ノ境界ニ涉ルモノハ府県参事会之ヲ裁決ス其郡参事会ノ裁決ニ不服アル者ハ府県参事会ニ訴願シ其府県参事会ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

〈3〉 土地改良に関する法律

明治30年3月30日

法律第39号

政府ノ許可ヲ受ケ土地改良ノ為市町村内ノ土地所有者ノ全部又ハ一部共同シテ其ノ区画形状ヲ変更スルトキハ其ノ変更ニ係ル土地ノ地価ハ現地価ノ合計額ヲ毎筆相当ニ配賦シ之ヲ定ム同一土地所有者ニシテ地続数筆ノ土地ノ区画形状ヲ変更スルトキ亦同シ

〈4〉 耕地整理法（抄）

明治32年3月22日

法律第82号

第1条 本法ニ於テ耕地整理ト称スルハ耕地ノ利用ヲ増進スル目的ヲ以テ其ノ所有者共同シテ土地ノ交換若ハ分合、区画形状ノ変更及道路、畦畔若ハ溝渠ノ変更配置ヲ行フヲ謂フ

第3条 耕地ニシテ特別ノ価値用途アル土地及耕地ニアラサル土地ハ其ノ所有者ノ同意アルニアラサレハ之ヲ整理地区ニ編入スルコトヲ得ス

前項ノ土地ニシテ其ノ所有者ノ同意ナキトキト雖整理ノ施行ニ必要ナルトキハ其ノ全部又ハ一部ヲ整理地区ニ編入スルコトヲ得但シ府県、郡、市町村其ノ他公共団体ノ公用ニ供スル土地、宅地、名勝地、旧跡地、古墳墓地、墳墓地、社寺境内地、鉄道用地及軌道用地ハ此ノ限ニ在ラス

第4条 建物アル宅地又ハ鉄道用地ハ其ノ建物ノ所有者及登記ヲ為シタル第三権利者ノ同意アルニアラサレハ之ヲ整理地区ニ編入スルコトヲ得ス

第13条 整理施行中土地ノ区画形状ノ変更及道路、畦畔若ハ溝渠等ノ変更廃置ハ地目変換又ハ開墾ト看做サス

第20条 整理施行ヲ発起スルニハ左ノ条件ヲ具備スルコトヲ要ス

一 整理地区内ニ於ケル土地所有者ノ三分ノ二以上ノ同意アルコト

二 整理区画内ニ於テ同意者ノ所有スル土地ノ面積整理地区ノ総面積ノ三分ノ二以上ナルコト

三 整理地区内ニ於テ同意者ノ所有スル土地ノ地価額整理地区ノ地価総額ノ三分ノ二以上ナルコト

前項ノ条件ヲ具備シタルトキハ發起人ハ整理施行ヲ發起スル旨ヲ市町村長ニ届出ヘシ

第23条 設計書ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ

- 一 整理ニ因リテ得ヘキ利益
- 二 整理施行ノ方法及順序
- 三 整理地区及之ニ隣接スル土地ノ現形図
- 四 整理予定図
- 五 工事ノ著手及竣成ノ時期
- 六 整理費用及夫役ノ予算

〈5〉 耕地整理法（抄）

明治42年4月13日

法律第30号

第32条 整理施行地ニ以上ノ市町村、大字又ハ字ニ渉ル場合ニ於テ一筆ノ土地ノ区域ハ二以上ノ市町村、大字又ハ字ニ渉リテ之ヲ定ムルコトヲ得ス

〈6〉 地租法（抄）

昭和6年3月31日

法律第28号

第5条 地番ハ市町村、大字、字又ハ之ニ準ズベキ地域ヲ以テ地番区域トシ其ノ区域毎ニ起番シテ之ヲ定ム

第30条 一筆ノ土地ノ一部ガ左ノ各号ノ一ニ該当スルニ至リタルトキハ前条ノ申告ナキ場合ニ於テモ税務署長ハ其ノ土地ヲ分筆ス

- 一 別地目ト為ルトキ
- 二 無租地ガ有租地ト為リ又ハ有租地ガ無租地ト為ルトキ
- 三 所有者ヲ異ニスルトキ
- 四 質権又ハ百年ヨリ長キ存続期間ノ定アル地上権ノ目的ト為ルトキ
- 五 地番区域ヲ異ニスルトキ

第31条 分筆シタル土地ニ付テハ分筆前ノ地番ニ符合ヲ附シテ各筆ノ地番ヲ定ム

- ② 合筆シタル土地ニ付テハ合筆前ノ地番中ノ首位ノモノヲ以テ其ノ地番トス
- ③ 特別ノ事情アルトキハ前二ノ規定ニ拘ラズ適宜ノ地番ヲ定ムルコトヲ得

〈7〉 地方自治法（抄）

昭和22年4月17日

法律第67号

第260条 政令で特別の定をする場合を除く外、市町村の区域内の町若しくは字の区域をあらたに画し若しくはこれを廃止し、又は町若しくは字の区域若しくはその名称を変更しようとするときは、市町村長が当該市町村の議会の議決を経てこれを定め、都道府県知事に届け出なければならない。

〈8〉 国土調査法（抄）

昭和26年6月1日

法律第180号

第32条 地方公共団体又は土地改良区等は、第五条第四項〔主務大臣による国土調査としての指定〕若しくは第六条第三項〔都道府県知事による国土調査としての指定〕の規定により指定を受け、又は第六条の三第二項〔事業計画〕の規定により定められた事業計画に基づいて地籍調査を行うために土地の分割又は合併があったものとして調査を行う必要がある場合において、当該土地の所有者がこれに同意するときは、分割又は合併があったものとして調査を行うことができる。

土地区画の異動に関しては、以上の外、土地改良法（昭24 法律第195号）、都市計画法（大8 法律第36号）、土地区画整理法（昭29 法律119号）、道路法（昭27 法律第180号）、国土総合開発法（昭25 法律第205号）、不動産登記法（明32 法律第24号）等が関連してくると思われるが、紙幅の都合で割愛する。

註

- (1) 太宰府萩尾文書「御笠郡国分村高反別帳」。
- (2) 筑紫野市建設課国土調査係「地籍（国土）調査実施地の小字の廃止について」昭和55年12月。

〔付記〕

これまで述べてきたことは、「御笠地区小字集成図」の作成、及び今後他地区の調査のために一応知っておかねばならない基礎的なことを筆者なりに整理したものである。法律や国土調査の実務には縁遠い者であるゆえ、認識不足や考え違いも多々あろうかと恐れる。これからの職務遂行のなかでより確実なものとしてゆきたい。

なお、この項をまとめるにあたって筑紫野市建設課国土調査係長 高原健氏、同税務課資産税係長 行武敏雄氏をはじめ、各課員の方々にいろいろと御教示をいただいた。記して謝意を表したい。

3 御笠の由来と蘆城駅家

本報告書の遺跡名となっている「御笠地区」は旧御笠村の村名及び村域の名ごりとして便宜上用いられているものであり、公的な行政区画として存在するものではない⁽¹⁾。その御笠村は、明治22年4月1日の町村制の実施で旧袖須原村・香園村・本道寺村・大石村・原村・吉木村・阿志岐村・天山村・牛島村の9村合併により成立したものであるが、村名選定の理由は「御笠村ハ古昔ノ郷名ニシテ、合併村ハ殊ニ御笠山ノ麓ヲ圍繞シタレバ、其名称ヲ採、新村名トス⁽²⁾」というものであり、律令国家の国郡里制によって置かれた御笠郷を強く意識したものであった。

御笠の名が古く神功皇后伝説に由来するものであることは周知知られているが⁽³⁾、郷の範囲を確定するに足る根拠は乏しく、宝満川に沿って条里地割が残る阿志岐あたりというものが通説となっている⁽⁴⁾。

ところで、阿志岐の地で想起されるのは、令制の「蘆城駅家」である。この駅家は太宰府から米ノ山峠を越え、田河道の各駅家に通ずる第一番目のそれにあたるが、その名は『令義解』や『延喜式』には見えず、ただ『万葉集』に納められた神亀・天平年間の9首の歌によるのみ、その存在を看取し得るのである⁽⁵⁾。

駅家が駅伝制に基づき、中央集権制確立の目的で設置されたものであることはいままでもないが、この蘆城駅家は交通制度上の駅としてよりも、むしろ好景の地にあって太宰府官人たちの宴の場としての性格が強かった⁽⁶⁾。その所在地については、すでに江戸時代から関心もたれており、貝原益軒は『筑前国統風土記』のなかで「宰府の南にあり。蘆城の驛とて、むかし宰府より都へ行馬次の宿なり。蘆城より米の山と云所を通りしとなん」と述べているものの、所在地の比定は避けている。青柳種信は『筑前国統風土記拾遺』で「万葉集」や「宗祇紀行」にふれ、往時を偲びながらも「驛家の跡は今さだかならず」と結んでいる。その後、諸説が出され、遠賀郡芦屋町⁽⁷⁾、筑紫野市大字阿志岐⁽⁸⁾、同大字天山字鞭掛⁽⁹⁾、同大字大石⁽¹⁰⁾などに当てる説が代表的なものとなっているが、いまだ確定するには至っていない。

ところが、昭和53年に筑紫野市教育委員会が実施した発掘調査で、御笠地区遺跡A地区と称する大字吉木の水田下から、奈良時代のものと推定される一連の掘立柱建物群が発見された。この遺跡は、舌状の微高地上にあり、周囲は試掘調査の結果、川の氾濫原であることが確認されている。現在、宝満川は遺跡の西側を流れているが、往古は洪水のたびに水路が変化し、周辺に水湿地を形成していたらしく、遺跡の北側には吉原（＝蘆原）の小字が広がり、さらにその北には岸原、西側には水洗・上の川原、東南側にはホノケとして西川原・下川原の地名が残っている。

さて、この遺跡は何であるのか、それを確定しうる資料は残念ながら検出されなかった。しかし、建物の規模、遺物の量や質から見ても蘆城駅家として遜色のあるものではない。調査内容の詳細は本編に譲るとしても、遺構の中心となる孫庇付掘立柱建物の建築年代は、この遺構に切られた竪穴住居から7世紀後半の遺物が出土していることから、それより新しいことが窺え、この掘立柱建物に伴う須恵器・土師器の多くは8世紀代に比定される。

孫庇付掘立柱建物の所在地は、大字吉木字唐木1918番地の1にあたり、「三反畝町」の俗称で呼ばれる水田である。畝町とは田の一区画をさす語であるが、この田を含んでA地区の遺跡範囲とほぼ重なる字唐木1907～1911・1913-1・1917-1～1920-2・1923～1924、字瀬戸口1858～1861・1864～1865（昭和54年3月現在）の一带に「カワゴデン」のホノケが残っている。地元の古老にたずねても、それが何を意味するのか最早伝承は跡絶えているが、遺跡の範囲とほぼ一致することは、何らかの関係を示唆するものと考えておきたい。

註

- (1) 昭和30年3月1日、本市の前身である筑紫野町が、二日市町・山口村・御笠村・筑紫村・山家村の合併により成立した経緯から、現在でもそれぞれ旧村を意識した呼び名として用いられることがある。
- (2) 「明治22年町村合併調書」802頁——（『福岡県史資料』第2輯、福岡県、1933）。
- (3) 『日本書紀』上（日本古典文学体系）332頁——「且荷持田村荷持、此をば能登利と云ふ。に、羽白熊鷲といふ者有り。其の爲人、強く健し。亦身に翼有りて、能く飛びて高く翔る。是を以って、皇命に従はず。毎に人民を略を盗む。戊子に、皇后、熊鷲を撃たむと欲して、櫃日宮より松峽宮に遷りたまふ。時に、飄風忽に起りて、御笠墮風されぬ。故、時人、其の處を號けて御笠と曰ふ。」。
- (4) 日野尚志「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」77頁——（『佐賀大学教育学部研究論文集』第24集（I）、1976）。

なお、『日本書紀』（日本古典文学大系）332頁 注12では、太宰府町水城のあたりとしている。

- (5) 『万葉集』（日本古典文学大系）——第1巻 264、269頁。第2巻 315、316頁。

五年戊辰、大宰小貳石川足人朝臣の遷任するに、筑前国蘆城驛家に餞する歌三首

549 天地の神も助けよ草枕旅ゆく君が家に至るまで

550 大船の思ひたのみし君が去なばわれは恋ひなむ直に逢ふまでに

551 大和路の島の浦廻に寄する波間も無けむわが恋ひまくは

右の三首は、作者未だ詳らかならず。

大宰帥大伴卿、大納言に任けられて京に臨入むとする時に、府の官人等、卿を筑前国の蘆城驛家に餞する歌四首

568 み崎廻の荒磯に寄する五百重波立ちても居てもわが思へる君

右一首、筑前掾門部連石足

569 韓人の衣染むとふ紫の情に染みて思ほゆるかも

570 大和へに君が立つ日の近づけば野に立つ鹿も響みてそ鳴く

右二首、大典麻田連陽春

571 月夜よし河音清けしいざここに行くも去かぬも遊びて帰かむ

右一首、防人佑大伴四綱

大宰の諸卿大夫と官人等と筑前国の蘆城驛家に宴する歌二首

1530 女郎花秋萩まじる蘆城野は今日を始めて萬代に見む

1531 珠匣蘆城の川を今日見ては萬代までに忘れぬやも

右の二首は、作者詳らかならず

- (6) 近藤典二「蘆城の驛家考」78頁——（『筑紫野の地方史』、葦書房、1984）。
- (7) 久保山善映「太宰府を中心としたる王朝時代西海道の一驛路に就いて」27頁——（『筑紫史談』60、1933）。
- (8) 近藤典二「蘆城驛家の位置」（『饑川』第7輯、1954。同氏前掲書に所収）。
このほか所在地を阿志岐にあてる説は伊藤常足『太宰管内志』をはじめ、吉田東伍『大日本地名辞書』、野々口永三郎「王朝時代西海道驛路の一部及び其二三驛に就て（下）」25頁——（『筑紫史談』63、1934）などがあり、有力説となっている。
- (9) 藤井甚太郎「王代筑紫驛路雑考」（『筑紫史談』4、1915）。
- (10) 高橋誠一「筑前国」19～20頁——（藤岡謙三郎編『古代日本の交通路』Ⅳ、大明堂 所収、1979）。

4 ホノケについて

ホノケとは、小字のなかの一区画をさす呼び名である。小字をすなわちホノケと呼ぶこともあるが、ここでは前者の意で用いる。

いわゆる地元民の間に伝承されてきた土地の俗称であり、公的に用いられるものではない。従って公文書は勿論、字図等にも記されていないのが普通である。番地制定以前は生活上の必要性から、田畑・宅地をはじめ相当数のホノケがあったと思われるが、現在では跡絶えたものも多く、数えるほどしか残っていない。

ここでは、別添地図の範囲内で目立ったホノケについて書き留めておこう。

〈1〉カワゴデン

大字吉木字唐木に残るホノケである。この地名は、「明治15年字小名調」⁽¹⁾で少なくとも県内には他に見出せないことから、あまり普遍性を持つものではないことがわかる。ちなみに同書から類似した地名を拾い出してみると、「カワゴ石」⁽²⁾がある。

久留米市高良山にある国指定史跡神籠石⁽³⁾の列石内に馬蹄石と呼ばれる石があり、「高良記」ではこれを神籠石と記している。恐らく磐座であり、県内各所に残るカワゴ石の地名は、この神籠石が転訛したものと考えられる。

本市大字吉木にも高良神社があり、周辺にはコウラ・カハラの小字やホノケが散見されることから、カワゴデンはカワゴ石から派生した地名として同社に関係があり、いわば宮田であったことを伝えるものとも考えられる。

しかし、ここではカワゴデンが他に見えない地名であるという観点から、一応カワゴ石とは別の地名と考え、異なった解釈を加えておきたい。

カワゴは、カワゴ石の地名にも充てられている革籠（皮子）が語源と思われる。皮でまわりを張り包んだ箱のことであるが、ここでは『今昔物語集』などにみえる皮子馬^{かわごうま}が転訛したものと考えたい。デンは田・殿が考えられるが、地名の上では混用されていることが多く、殿には館の文字を充ててテンと読ませている例もある⁽⁴⁾。すなわち、カワゴデンは皮子田（殿）であり、皮子馬の飼育にあてる田、あるいはその馬を備える施設の意を伝える地名と考えられよう⁽⁵⁾。音の上から推考すると「川御殿（館）」なども考えられるかもしれない。

カワゴデンの範囲が、御笠地区遺跡A地区の奈良時代の建物群の所在地とほぼ重なることは先にも述べた。慶長以前、吉木と阿志岐は一村であったこと⁽⁶⁾や、中世以降この地には記録に残るような建造物は存在しないことなどを勘案し、往古の蘆城駅家が長い時代を経て、カワゴデンというホノケとして形骸化しながらも、歴史的記憶として伝承されてきたものと考えておき

たい。

〈2〉コウラ

大字吉木字一木に高良神社がある。祭神は武内宿禰ほか3神であるが、鎮座の年は詳でない。この社の裏手をコウラ（小浦）と呼んでいる。旧境内の広がりを示すものと思われる。

〈3〉サヤノカミ

大字吉木字松本と吉原にまたがる地に、サヤノカミと呼ぶホノケがある。松本の田の中にサヤノカミ（塞の神）を祭る小塚があり、これがホノケの発生となったものと考えられる。

〈4〉クリタ

大字吉木字栗田の一軒の屋敷地に残るホノケである。鬼木家の本家で屋号ともなっており、小字のひとつの起源を示唆するものである。

〈5〉イマヤシキ

大字吉木字六度に残る。六度の東隣には今屋敷の小字があるが、その地域からははずれている。屋敷という地名はもともとその地域の草分けとなるイエ、あるいはその地域の代表的な建物・敷地に名付けられたものと考えられるが、ここでもホノケとしてのイマヤシキのなかで、さらに特定の屋敷地をヤシキと呼ぶ伝承が残っている。

〈6〉マトイシ

大字吉木字土穴の農免道路東側の田の中の^{マトイシ}的石と呼ばれる畳2枚ほどの偏平な岩が立っており、その周囲約8000㎡に同名のホノケが残っている。この岩には、戦国時代の岩屋城攻防戦にまつわる伝説が残されている。すなわち、岩屋城主高橋紹運の砦である龍ヶ城に柴田小左右衛門という強弓で有名な武士がおり、大字大石の行事原から日々、この岩を的にして弓術の腕をみがいていたというのである。

的石は、昭和53年の圃場整備で一端倒れたが、その後、若干位置が変わったものの再建され、現在は石の上面が60～70cmほど見えている。

〈7〉ヒワタシ

大字阿志岐字ワナレ木の川淵に残る。すぐ南には日渡の小字があり、当地に限らず広く県内に分布する地名である。

もと、この川淵に小さな杜がありそこをヒワタシと称していたらしく、宗教的な意味を持つ地名と考えられる。

〈8〉東南冠者

大字天山258番地一筆に小字として残っている。「御笠村土地台帳」によって異動経歴をたどってみると、昭和8年3月9日に10町1反2畝歩が旧天山村から御笠村有の原野として登記されている。それ以前は不明であるが、この小字は「明治15年字小名調」には見えず、恐らく明治22年の町村制実施の折、国有地が編入されて新たに名付けられたものであろう。昭和10年、

県行造林されて現在の山林となった。

なお、この字名は宮地獄中腹にある徐福伝説の「童男どうなん非女かんによ船ふな繫つな石ざいし」に由来している。

註

- (1) 「明治15年字小名調」『福岡県史資料』 第6～10掲 1933。
- (2) 同書によると次のものがある。
旧穂波郡桂川村土師……………カワコ石
旧生波郡山春村三春……………川籠石
旧企救郡曾根村下曾根……………皮子石
旧上毛郡西吉富村安雲……………カワコ石
旧 同 友枝村東上……………皮籠石
- (3) 山中耕作氏（西南学院大学）の御教示による。
- (4) 『前掲書』第6掲——611頁 鞍手郡直方直方町の項に、御館山（現直方市御館山）がある。
- (5) 革籠田を一般的に解釈すると、革籠を買うあるいは作る費用を捻出する田、という意味になるが、この地名が他に見えない以上、一般的解釈は不相当と考える。
- (6) 『筑前国続風土記拾遺』阿志岐村の項に、「往昔より慶長の比までハ阿志岐吉木一村なりしかあしといふ名をあしといふ名を忘わすれて後に別村となれり」とある。

5. 御笠地区小字地名表

大字	字	番地	大字	字	番地	
原	古賀	1~81	吉木	入道原	1192~1226	
	谷川	82~165		平原	1227~1251	
	ミイ田	166~228-5		帽子形	1252-1~1350-2	
	ミス夕	229-1~301		裏畑	1351~1503-69	
	下原	302~419		鷹取	1504~1566	
	中村	420-1~504		田代	1567~1598-2	
	山崎	505~532		一木	1599~1636-2	
	焼石	533~671		久保田	1637-1~1647-4	
	楠原	672-1~711-6		キシ田	1648~1674-2	
	石坂	713-1~743		走り折	1675-1~1688-3	
	堀浦	744~817-2		平口原	1689-1~1725-6	
	山小川	818~857		東坂部	1726-1~1742	
	野添	858-1~904-3		地藏田	1743-1~1763-2	
	吉木	生姜谷の1		1~61	松本	1764~1797-2
		尺ヶ浦		62~125-7	吉原	1798~1828
		片山		126-1~151-2	瀬戸口	1829~1870-4
		生姜谷の2		152~159-2	桜木	1871-1~1895-2
		六度		160-1~236	唐木	1896-1~1929-4
		今屋敷		237~280	一本木	1930-1~1955-3
		吉木畑		281~365	中村崎	1956-1~1963-4
大谷		366-1~605-83	土穴	1964-1~2057		
鳥越		606~655	手島	2058-1~2068		
広畑		656~732-2	大坂	2069-1~2137-7		
山の口		733-1~753	釘	2138-1~2188-2		
笹栗		754~782-2	下の谷	2189-1~2224		
柿の元		783~810-2	岩本	2225-1~2373-4		
風来		811~844	栗田	2374~2406-8		
堀切		845-1~860	水洗	2407-1~2421		
長谷		862~883	上の川原	2422-1~2430-2		
引地		884~952-2	池田	2431-1~2478-4		
清水		953~995-2	塚口	2479~2556-16		
吉木田		996-1~1008-6	西坂部	2557-1~2592-4		
宮の脇		1009~1063-4	福ヶ坂	2593-1~2667		
倉谷	1064-1~1158	四郎五郎	2668~2709			
先の原	1159~1191-6	阿志岐	星隈	1-1~78-2		

大字	字	番地	大字	字	番地
阿志岐	代	79~187	牛島	宮崎	41-1~79
	片山	188~218-5		道の前	80-1~113
	天神給	219-1~239-2		石崎	114~129
	小坂	240~273-2		元村	130~201
	釘	275-1~307-3		浦田	202-1~233
	明賀	308-1~374-2		藪の下	234-1~262-2
	四反田	375-1~392		五反田	263-1~274-2
	返り	393-1~424-2		土穴	275-1~310
	宮の前	425-1~440		小松	311-1~327
	大谷	441-1~572		宮の前	328-1~371
	梅ヶ谷	578-1~668		坊主牟田	373~388
	杉谷	669~778-2		塔の尾	389~472-8 474-1~476-2
	宮崎	779-1~984			
	原	985~1118-2			
	シメノグチ	1119-1~1202-3		天山	久保山
	脇道	1203~1341	峰古野		1-1~39
	七力	1342~1511	上鞭掛		43-1~87-3
	坂の下	1512-1~1531-2	鞭掛		88~129
	下川原	1533~1571	不老給		130-1~172
	上島	1572~1629-2	芋ヶ谷		173-1~216
	一丁原	1630-1~1726	山畑		217~257
	向原	1727~1808-2	東南冠者		258
	沼	1809~1866-4	浦の谷		259~275
	野入	1867-1~2015-4	内畑		276~320
	ナタ田	2016-1~2050-7	日焼		321~344-2
	上川原	2051-1~2100	長田町		345-1~362-5
	カウヤ	2101-1~2139-3	古河		363-1~384
	日渡	2140-1~2189-7	上河原		385~388
	ワナレ木	2190-1~2225-6	学入		389~414-3
	ナラ町	2226-1~2332-7	曲り		415-1~451-2
	松本	2333-1~2367-6	西崎		452~494
	六本松	2368-1~2412	下鞭掛		495-1~587-3
	柚ノ木	2420-1~2550	中鞭掛	588-1~697-3	
牛島	川原	1-1~30-3			
	江入	31-1~40-4			

- この地名表は、「筑紫野市字名一覧表」（市税務課、昭和52年6月1日）から抜粋したものである。
- 小字集成図の範囲外になる御笠地区の大字柚須原、香園、本道寺、大石については除外した。

御笠地区遺跡

筑紫野市文化財調査報告書第15集

—本文編—

昭和61年3月31日

発行 筑紫野市教育委員会

筑紫野市大字二日市753-1

印刷 瞬報社写真印刷株式会社

福岡市中央区天神5丁目4-15